



ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>



ひょうご伝説紀行

「語り継がれる村・人・習俗」

ひょうごに伝わる伝説の数々を
その地を訪れ、物語にふれ、歴史を感じていただきます。

001	「藤無山」 アメノヒボコと伊和大神の国争い	2
002	「たつの」のはじまり 相撲の神様、野見宿禰	11
003	「二人の皇子と根日女」 恋と勇気の話	18
004	「性空上人」 天女舞い降りる書写山の桜	28
005	「陰陽師」 こけ地蔵と呪いの文字	38
006	「道真の旅」 梅の香と、歌と、人のやさしさと	48
007	「昆陽池の鮒」 薬師如来の導き 「えいがしま」 エイと一緒に祈りをする	57
008	「すりこぎかくしの雪」 弘法大師の優しさ 「独鈷の滝の大蛇」 弘法大師が大蛇を封じる	68
009	「粉喰い坂（こくい坂）」 義経ひとときの休息	80
010	「弁慶の鏡井戸」 弁慶若き日の破天荒な大暴れ 「弁慶岩」 怪力無双弁慶の化け物退治	87
011	「和泉式部と桑の木」 和泉式部と村人、ふれあいの物語	98
012	「法道仙人の鉢」 空飛ぶ鉢と米俵 「梶原の大銀杏」 不思議な玉から育った銀杏	107
013	「松王丸」 清盛の夢と神戸の海に沈んだ少年	120
014	「白滝姫」 泉に降る栗の花	131
015	「ひれ墓（ひれはか）」 悠久の流れを見下ろす墓	143
016	「石の寝屋」 明石の海に眠る真珠を求めて	152
017	「小野豆の隠里」 茄子作らず・鶏飼わず	161
018	「不思議な壺の流れ子」 大坪村の地名伝説	169
019	「鹿が壺」 伊佐々王と不思議な穴の物語	174
020	「夢野」 夢占いの結末は・・・	169
021	「処女塚」 万葉集にも残る悲恋伝説	188
022	「鼻の助太郎」 いにしへの超ラッキー男	198
	参考情報	209

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

藤無山

アメノヒボコと伊和大神の国争い



伝説 藤無山

アメノヒボコと伊和大神の国争い

紀行 アメノヒボコと伊和大神の足跡

- ・「伊和大神」の名前
- ・伊和大神とアメノヒボコ
- ・出石神社
- ・出石城
- ・御出石神社
- ・藤無山

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

藤無山

アメノヒボコと伊和大神の国争い

アメノヒボコは、とおいとおい昔、新羅（しらぎ）という国からわたって来ました。

日本に着いたアメノヒボコは、難波（なにわ=現在の大阪）に入ろうとしましたが、そこにいた神々が、どうしても許してくれません。そこでアメノヒボコは、住むところをさがして播磨国（はりまのくに）にやって来たのです。

播磨国へやって来たアメノヒボコは、住む場所をさがしましたが、そのころ播磨国にいた伊和大神（いわのおおかみ）という神様は、とつぜん異国の人がやって来たものですから、「ここはわたしの国ですから、よそへ行ってください」と断りました。ところがアメノヒボコは、剣で海の水をかき回して大きなうずをつくり、そこへ船をならべて一夜を過ごし、立ち去る気配がありません。その勢いに、伊和大神はおどろきました。

「これはぐずぐずしていたら、国を取られてしまう。はやく土地をおさえてしまおう。」

大神は、大急ぎで川をさかのぼって行きました。そのとちゅう、ある丘の上で食事をしたのですが、あわてていたので、ごはん粒をたくさんこぼしてしまいました。そこで、その丘を粒丘（いいぼのおか）と呼ぶようになったのが、現在の揖保（いぼ）という地名のはじまりです。

一方のアメノヒボコも、大神と同じように川をさかのぼって行きました。二人は、現在の宍粟市（しろうし）あたりで山や谷を取り合ったので、このあたりの谷は、ずいぶん曲がってしまったそうです。さらに二人は福崎町（ふくさきちょう）のあたりでも、軍勢を出して戦ったといいます。

二人の争いは、なかなか勝負がつきませんでした。

「このままではまわりの者が困るだけだ。」

そこで二人は、こんなふうに話し合いました。

「高い山の上から三本ずつ黒葛（くろかずら）を投げて、落ちた場所をそれぞれがおさめる国にしようじゃないか。」

二人はさっそく、但馬国（たじまのくに）と播磨国の境にある藤無山（ふじなしやま）という山のでっぺんにのぼりました。そこでおたがいに、三本ずつ黒葛を取りました。それを足に乗せて飛ばすのです。

二人は、黒葛を足の上に乗せると、えいっとばかりに足をふりました。

「さて、黒葛はどこまで飛んだか。」と確かめてみると、

「おう、私のは三本とも出石（いずし）に落ちている。」とアメノヒボコがさげびました。

「わしの黒葛は、ひとつは城崎（きのさき）、ひとつは八鹿（ようか）に落ちているが、あとのひとつは・・・。」

伊和大神がさがしていると、「やあ、あんな所に落ちている。」とアメノヒボコが指さしました。

黒葛は反対側、播磨国の宍粟郡（しろうぐん）に落ちていたのです。アメノヒボコの黒葛がたくさん但馬に落ちていたので、アメノヒボコは但馬国を、伊和大神は播磨国をおさめることにして、二人は別れてゆきました。

ある本では、二人とも本当は藤のつるがほしかったのですが、一本も見つからなかったのが、この山が藤無山と呼ばれるようになったと伝えられています。

その後アメノヒボコは但馬国で、伊和大神は播磨国で、それぞれに国造りをしました。アメノヒボコは、亡くなると神様として祭られました。それが現在の出石神社のはじまりだということです。

紀行「アメノヒボコと伊和大神の足跡」

「伊和大神」の名前

『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』の中には、伊和大神（いわのおおかみ）の記述がいくつかある。記述にはややばらつきがあって、「伊和大神」と記述される場合、「大汝命（おおなむちのみこと）」あるいは「葦原志許乎命（あしはらしこおのみこと）」と記述される場合がある。また「大汝命」は、記紀では「大国主命（おおくにぬしのみこと）」と同じとされているので、同じ神が三つか四つの名で呼ばれていることになる。

この神様の名前についていくつかの説があるのは承知しているが、混乱を避けるため、『播磨国風土記』でほかの名前が用いられている場合でも、伝説紀行の中では「伊和大神」で統一しておきたい。



伊和神社(拝殿)

伊和大神とアメノヒボコ



伊和神社(拝殿)

『播磨国風土記』の讃容（佐用）郡（さよぐん）の項では、伊和大神は「賛用比賣命（さよひめのみこと）」との国占めに負けて立ち去っているから、大神自身、もともと播磨（はりま）にいた神ではなかったのかもしれない。普通は、『播磨国風土記』にも登場する、伊和君（いわのみみ）の一族が奉じた神であったとされている。

一方のアメノヒボコも、新羅（しらぎ）から渡来した人である。ここで取り上げる余裕がないのは残念だが、アメノヒボコ自身の出自についても、『古事記（こじき）』には不思議な話が伝わっている。つまり播磨にとっては、どちらも外来の人（神）であったということだろう。

風土記の記述からは、伊和大神のほうに先に播磨にいたように読めるが、後からやって来たアメノヒボコとの国占め争いは、相当激しいものとして描かれている。結局その争いをおさめたのは、山頂から黒葛（くろかずら）を投げるという一種の神占であったようで、これも古代におこなわれた「争いをおさめる方法」を象徴しているのかもしれない。

この二人の足跡は、摂・播国境に近い神戸市西区から、宍粟郡（しろうぐん）・神崎郡（かんざきぐん）を中心とした播磨、但馬（たじま）の出石郡（いずしぐん）、という広い範囲に散らばっていて、一度に巡るのは難しそうである。播磨、但馬と地域を決めて訪ねてみてはどうだろうか。



ともる灯



早朝の境内



北側の参道から



拝殿の鶴



東側の参道



古墳群の丘

アメノヒボコと出石神社



出石神社(鳥居)



出石神社(桜門)



出石神社(拝殿)

アメノヒボコは但馬国を得た後、豊岡（とよおか）周辺を中心とした円山川（まるやまがわ）流域を開拓したらしい。そして亡くなった後は、出石神社（いずしじんじゃ）の祭神として祭られることになった。

但馬一宮の出石神社は、出石町宮内にある。この場所は出石町の中心部よりも少し北にあたり、此隅山（このすみやま）からのびる尾根が出石川の右岸に至り、左岸にも山が迫って、懐のような地形になっている。神社はその奥の一段高い場所に建っている。

このあたりから下流は、たいへん洪水が多い場所である。2004年におきた豊岡市の大水害は記憶に新しいところだが、出石神社のあたりを発掘してみると、低湿地にたまる粘土や腐植物層と、洪水でたまった砂の層が厚く積み重なっている所が多い。

そんな場所であるから、古代、この地を開拓した人々は、非常な苦勞を強いられたことだろう。『出石神社由来記』には、アメノヒボコが「瀬戸の岩戸」を切り開いて、湖だった豊岡周辺を耕地にしたと記されているという。そのアメノヒボコは、神となって今も自分が開拓した平野をにらんでいるのだ。

この出石神社から1kmほど北へ行った所に、出石古代体験館がある。出石町内で発掘されたさまざまな資料が展示され、体験もできるから、古代史に関心がある人は訪ねてみるとよいだろう。



出石古代学習館

出石城



出石城(全景)

但馬の小京都とも呼ばれる出石には、ほかにも訪ねたい文化財が少なくない。町の南にある有子山（ありこやま）の裾には、出石城がある。江戸時代初期に築かれた城で、それ以前は背後の山頂に城があった。

城の下を流れる川にかかった橋を渡り、山腹に設けられた階段を登って本丸跡に立つと、出石の城下町と、その傍を流れる出石川までの素晴らしい景観を一望できる。左右からゆるやかにのびる尾根が、瓦屋根の並ぶ小さな町並みを箱庭のように縁取っている。



感応殿



本丸跡から



城下の町並み

御出石神社

御出石神社（みいずしじんじゃ）を訪ねたのは、もう夕暮れに近い時間だった。但東町（たんとうちょう）に近い桐野（きりの）の集落に、杉の巨樹に囲まれてひっそりとたたずむ宮がある。この神社には『古事記』の神話に語られた出石乙女が祭られている。兄弟二人の神から求婚されたという乙女は、アメノヒボコとも無縁ではないようだ。



御出石神社(本殿と拝殿)

うら若い乙女には、少し寂しすぎるような場所だけれど、通る人もいない参道から、夕空に浮かぶ影絵のような宮を眺めていると、はるかな時の流れがいつそう身に迫って感じられた。



御出石神社(参道)

藤無山

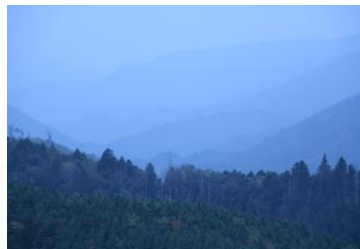


藤無山

播・但国境にある藤無山（ふじなしやま）は、標高1139.2m。今回はいくつかある登山路のうち、北の大屋町（おおやちょう）側を選択した。若杉峠（わかすとうげ）東の大屋スキー場奥から車で入れるため、登坂距離が短くてすむからである。林道（2006年の取材時は建設中）の途中で車を停めて、尾根筋までのスギやヒノキが植林された急坂を、息を切らせながら20分ほど登ることになる。

そこから先は、ゆるやかに起伏する尾根筋を歩く。左右は植林地がほとんどだが、所々にブナやミズナラが残る道である。植林された木はどれも、根元のあたりで大きく曲がっていて、積雪の厳しさがわかる。

尾根筋からの眺望は、思いのほか開けなかった。天候のせいもあったろうが、南側は北播磨の盆地が山間からかすかに望める程度である。北の但馬側も、蘇武岳（そふだけ）、妙見山（みょうけんさん）、鉢伏山（はちぶせやま）など「兵庫の屋根」と呼ばれる山々が連なり、伝説にあるように出石までを見通すことはできない。伝説の神様たちは、いったいどんな景色を見たのだろうか。



尾根からの眺望(播磨方面)



尾根からの眺望(但馬方面)

用語解説

【アメノヒボコ】あめのひぼこ

天日槍・天日矛とも書く。またアメノヒボコノミコトともいう。

記紀や『播磨国風土記』などに記された伝説上の人物。新羅の王子で、妻の阿加留比売（あかるひめ）を追って日本に来たという。その後、越前、近江、丹波などを経て但馬に定着し、その地を開拓したとされている。出石神社の祭神。

【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

【出石神社】いずしじんじゃ

豊岡市出石町宮内に所在する式内社（しきないしゃ）。但馬国の一宮（いちのみや）。アメノヒボコを祭神とし、アメノヒボコが新羅よりもたらした八種神宝（やくさのかんだから）を祭る。

【伊和大神】いわのおおかみ

宍粟市一宮町の伊和神社の祭神。大己貴神（おおなむちのかみ）、大国主神（おおくにぬしのかみ）、大名持御魂神（おおなもちみたまのかみ）とも呼ばれ、『播磨国風土記』では、葦原志許乎命（あしはらしこおのみこと）とも記されている。

播磨国の「国造り」をおこなった神とされており、渡来人（神）のアメノヒボコ（天日槍・天日矛とも書く）との土地争いが伝えられている。

風土記には、宍粟郡から飾磨郡の伊和里（いわのさと）へ移り住んだ、伊和君（いわのきみ）という古代豪族の名が見えることから、この伊和氏が祖先を神格化した神と考えられている。

なお、伊和神社の社叢（しゃそう）は、「兵庫の貴重な景観」Bランクに選定されている。

【伊和氏】いわし

『播磨国風土記』に、「伊和君」として記される古代豪族。『播磨国風土記』によれば、もと宍粟郡の石作里（いしづくりのさと）を本拠とし、飾磨郡の伊和里（いわのさと）に移り住んだとされる。伊和大神を奉じ、これを祭る伊和神社は、宍粟市一宮町に所在する。

【瀬戸の岩戸の開削】せとのいわとのかいさく

『出石神社由来記』による伝承。かつて入江、あるいは潟のような状況であった豊岡平野を、瀬戸の岩戸（現在の豊岡市来日岳（くるひだけ）付近とされる）を開削することによって排水し、耕地として開拓したという内容である。

【出石城】いずしじょう

豊岡市出石町に所在する城跡。天正2（1574）年に、山名氏によって有子山山頂に築かれた有子山城を端緒とする。天正8（1580）年に、有子山城は羽柴秀吉の但馬攻撃により落城した。慶長8（1604）年、小出吉英により有子山山麓に築かれた平山城が、現在の出石城跡である。本丸と二の丸を山腹に、三の丸を平地に配する梯郭式（ていかくしき）の城で、山頂の城へとつながる。

小出氏の後は、松平氏、仙石氏と続き幕末に至った。明治元年にすべての建物が取り壊された。

【御出石神社】みいずしじんじゃ

豊岡市出石町桐野にある式内社（しきないしゃ）。アメノヒボコと出石乙女が祭られている。出石乙女は『古事記』において、八種神宝（やくさのかんだから、アメノヒボコが新羅からもたらした宝物）を神とした「伊豆志之八前大神」の娘とされる。多くの神に求婚されたがこれを退けて、春山之霞壮士（はるやまのかすみおとこ）と結ばれるという伝説が語られている。

【藤無山】ふじなしやま

宍粟市と養父市の境界をなす山地にある山。標高は1139.2m。若杉峠の東にある、大屋スキー場から尾根筋に登るルートが比較的平易だが、ルートによっては難路も多い、熟達者向きの山である。尾根筋付近は植林地となっている。

【伊和中山古墳群】いわなかやまこふんぐん

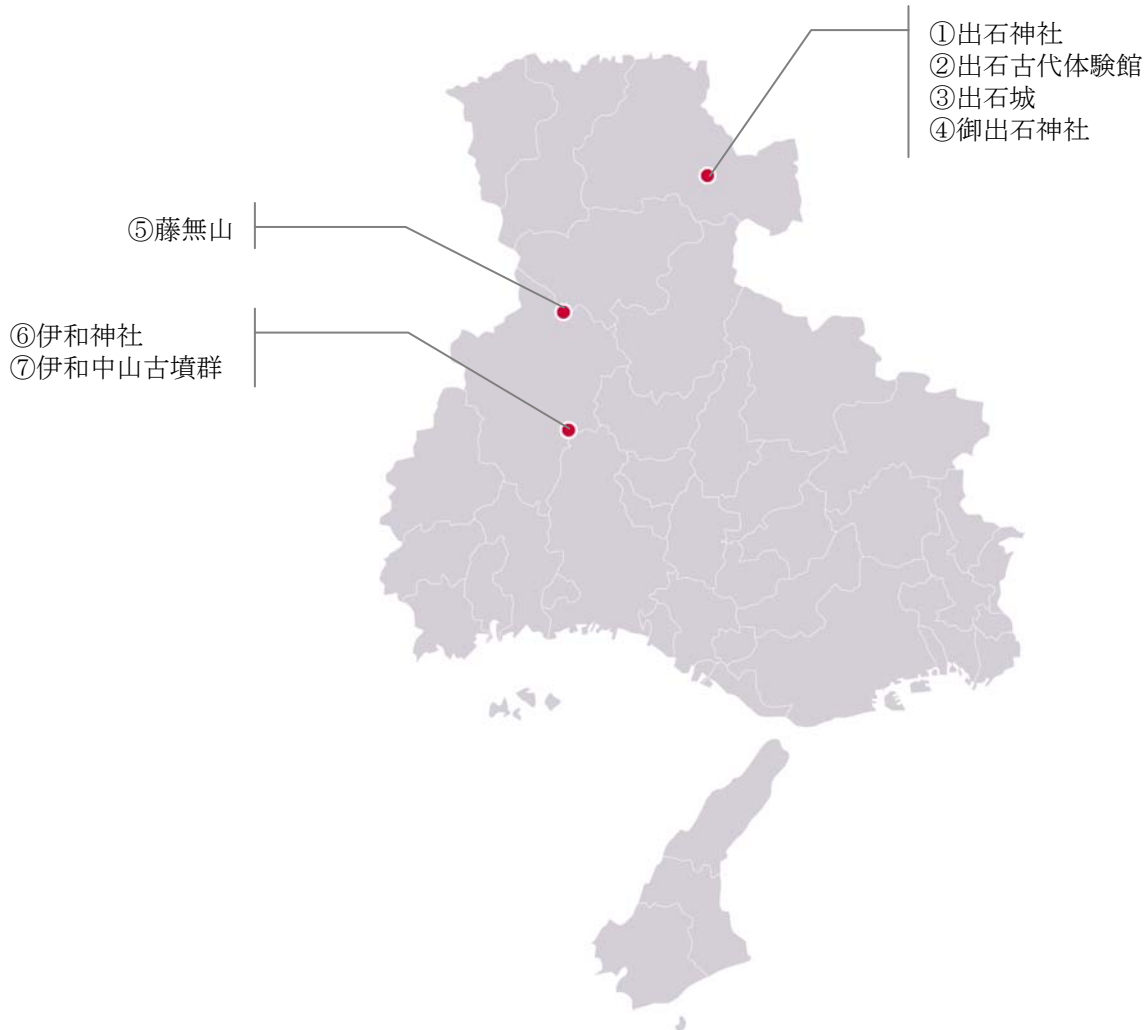
宍粟市一宮町伊和に所在する、古墳時代前期～後期の古墳群。伊和神社の南東にある丘陵上に、前方後円墳1基を含む16基の古墳が確認されており、うち1号墳と2号墳の発掘調査がおこなわれている。

古墳群中最大の1号墳は、全長62mをはかる前方後円墳で、竪穴式（たてあなしき）石室内に全長5mの木棺を埋葬していた。副葬品には国産の方格（ほうかく）T字鏡、環頭大刀（かんとうち）、剣、鉄鏃（てつぞく）、鉄槍（てつそう）、鉄斧（てつぷ）、玉類がある。揖保川上流域における古墳時代史を研究する上で重要な古墳群である。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	出石町史第三卷(資料編I)	1987	出石町史編集委員会	出石町
	新訂増補国史大系 日本書紀前篇	1981	黒板勝美	吉川弘文館
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県史 考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	風土記の考古学2 播磨国風土記の巻	1994	櫃本誠一編	同成社
	伊和神社御由緒略記 ※参拝者用資料		伊和神社	伊和神社

所在地リスト



①出石神社	豊岡市出石町宮内99
②出石古代体験館	豊岡市出石町袴狭380-1
③出石城	豊岡市出石町内町
④御出石神社	豊岡市出石町桐野986
⑤藤無山	養父市大屋町と宍粟市一宮町境界
⑥伊和神社	宍粟市一宮町須行名（すぎょうめ）
⑦伊和中山古墳群	宍粟市一宮町伊和上へ中山・中野

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

「たつの」のはじまり

相撲の神様、野見宿禰



伝説 「たつの」のはじまり
相撲の神様、野見宿禰

紀行 野見宿禰墓
・揖保川と龍野
・野見宿禰墓
・土師神社
・龍野城

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

「たつの」のはじまり 相撲の神様、野見宿禰

今から2000年近く昔の話です。そのころ、出雲国（いずものくに＝現在の島根県東部）に、野見宿禰（のみのすくね）という人がいました。野見宿禰は、たいへん力の強い人でしたが、学問にすぐれた、かしこい人もありました。

そのころ、大和国（やまとのくに＝現在の奈良県）には、当麻蹴速（たいまのけはや）というこれもたいへん強い人がいました。相撲（すもう）をとると、蹴速にかなう人はいません。

「日本でおれにかなうやつはいないだろう。」

蹴速はそう言ってじまんしていました。

「だれか蹴速と相撲がとれる者はいないか。」


そのころ国をおさめていた垂仁天皇（すいにんてんのう）がたずねますと、家来のひとりが答えました。

「出雲国に、野見宿禰という強い人がいるそうです。」

そこで天皇は、野見宿禰を大和国に招いて、当麻蹴速と相撲をとらせることにしました。二人とも力いっぱい戦い、宿禰は、みごとに蹴速をたおしました。垂仁天皇はたいへん喜び、野見宿禰は領地をもらって、天皇につかえることになりました。

そのころまでは、天皇のようなえらい人が死ぬと古墳という大きな墓を造り、まわりに家来たちを生きたままうめていたといわれています。

宿禰は、「いくらえらい人のためでも、人を生きうめにして殺すのはよくありません」と言って、そのかわりに粘土で作った埴輪（はにわ）をおくように、天皇にすすめました。そこで、それからは古墳を造るときに、人や家や馬の形をした埴輪をならべるようになったと言われています。古墳のまわりの埴輪を、知っている人も多いでしょう。



さて、こうしてかつやくした宿禰ですが、やがてふるさとの出雲へ帰ることになりました。ところがそのとちゅう、播磨国（はりまのくに）まで来たところで、重い病気にかかってしまいました。土地の人たちは、手厚く看病しましたがそのかいもなく、宿禰は亡くなってしまったのです。

宿禰が立派な人であることをよく知っていた人々は、とても悲しみました。揖保川（いぼがわ）の河原から山の上まで、村人たちが一列にならんで、手から手へ、石をわたして運び、宿禰のために立派な墓を造りました。野原にたくさんの人が立ちならんで働いたので、その場所は「立野（たちの）」と呼ばれ、それが現在の「たつの（龍野）」のはじまりだということです。

その後野見宿禰の子孫は、はにわや土器をつくる「土師氏（はじし）」としてかつやくしました。

紀行「野見宿禰墓」

揖保川と龍野

龍野（たつの）は播磨（はりま）の小京都とも呼ばれる。県道姫路上郡線（ひめじかみごおりせん）をたどり揖保川（いぼがわ）の流れを西に渡って、まず目に入るのは、古い龍野の町並みの北に並ぶ鶏籠山（けいろうざん）と的場山（まとばさん）であろう。「兵庫の貴重な景観」Bランクに選ばれている鶏籠山は、美しい山容とともに、その麓にある龍野城で知られている。そうめんや醤油、童謡「赤とんぼ」などで有名なこの町が、野見宿禰（のみのすくね）と深いつながりがあることを知ったのは、『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』からであった。

『播磨国風土記』の成立は、文章の表記方法から713年～715年ころとされている。野見宿禰の物語は、奈良時代に入って間もないこのころすでに伝説と化していたようだから、当時の人にとっても「かなり昔の話」という感覚だったのだろう。

野見宿禰墓



参道の長い階段

的場山のふもとに整備された公園から、山腹を巻くように続くなだらかな山道を登ると、10分ほどで野見宿禰墓の下に着く。そこからは、石積みの長い階段を登らねばならない。息を切らして上り詰めた場所が、野見宿禰墓と言われる古墳である。古墳の前には、鳥居と石作りの扉があり、周囲には山道が巡っていて一回りすることができる。この山道が古墳の形を忠実になぞっているならば、野見宿禰墓は円墳ということになりそうだ。古墳の背後からのびる道は、的場山への登山道である。

鳥居と石の扉で、正面からは古墳の様子を見ることはできないが、背後からは少しその中をうかがうことができる。正面が嚴重に閉ざされていて、古墳の中に入るのははばかれるので、端の方に少しだけ登って見てみたが、シダが茂った墳丘には特に変わった所はなく、埋葬施設を想像する手がかりもなかった。



野見宿禰墓の正面

実際、この古墳は調査されていないから、築造年代や埋葬施設は不明である。ただひとつ確かなのは、この古墳が龍野の平野をにらんで築かれていることであろう。墳丘からは、東～南東に大きく視界が開けていて、揖保川の流れを眼下に、その東に広がる市街を一望できる。そんなことから、「揖保川の石を手渡しで運んだ」という伝説もできたのだろうか。



墓からの眺望



石の扉の紋

古墳と相撲をめぐって播磨には、もうひとつ興味深いことがある。6～7世紀の古墳からみつかることがある「装飾付須恵器（そうしょくつきすえき）」と呼ばれる土器である。これは須恵器の壺などに人や動物などの小さな像をつけて、当時のいろいろな情景を作ったものだが、その中に相撲を表した小像がつけられたものがあるのだ。少なくとも古墳時代後期の播磨では、相撲がおこなわれており、それは古墳を築いた墓の主たちにとって大切な行事だったことは確からしい。野見宿禰、相撲、装飾付須恵器。これらはどんな出自をもち、どんなふうに関係しているのだろうか。

相撲の神様である野見宿禰の、墓に設けられた玉垣は力士が寄進したもので、名力士や、今も襲名されている行事などの名前が刻まれている。



装飾付須恵器の小像 力士と行事
（小野市勝手野古墳群出土・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所提供）

土師神社



土師神社の参堂

揖西町（いっさいちょう）の土師神社（はじじんじゃ）のあるあたりが、風土記に記された「桑原里（くわばらのさと）」である。現在は新興住宅地となって、日下部里の面影を探すことも難しいが、かつては水田が広がる中にぽつぽつと丘陵が散在する景観が広がっていたことだろう。

小高い丘に建つ土師神社は、野見宿禰を祭神として祭っている。土師氏は野見宿禰を祖先と仰ぐ氏族で、古墳の造営や埴輪・土器などの生産をおこなった集団である。土師神社がある場所の大字は土師、小字は梶ヶ谷（かじがたに）といわれる。梶ヶ谷は「鍛冶（かじ）」に通じるのであろうか。この場所の小字名が、いつの時代のことをあらわしたものはわからないが、土器作りや鍛冶がいずれも古墳時代の先端産業だったという事実は、さまざまな想像を膨らませるのに十分である。



土師神社拝殿



土師神社拝殿

龍野城

龍野の町並みを見下ろす鶏籠山のふもとに、龍野城がある。この城は16世紀の初めに赤松氏（あかまつし）によって築城され、幾度もの変遷を経て、脇坂氏（わきさかし）でその歴史を閉じている。白壁の塀に沿って城跡へ続く石畳を登ると、正面が復元された本丸へ向かう櫓門（やぐらもん）、右手には龍野歴史文化資料館がある。背後の鶏籠山頂は、詰の丸とも呼ばれる戦国期の山城だが、江戸時代に使われることはなかった。現在の本丸には、復元された櫓や御殿が建つ。

城跡の北西からは、鶏籠山山頂へ登る山道が整備されている。

城跡の南西、龍野小学校のそばを通る道に面して、家老門が残されている。龍野藩の家老屋敷の門と伝えられる重厚な門で、たつの市の文化財に指定されている。この付近では、小学校のプールを囲む塀も、白壁、瓦葺（かわらぶ）きに造られていて、城下町の景観が保たれているのは訪ねる者にとって本当にうれしいことである。

家老門あたりから見る城跡は美しい。背後の緑に白壁が映える。春には桜が彩りを添えてくれるそうで、ここに住んでいる人たちがうらやましくもある。

龍野城近辺
(日本真景・播磨・垂水名所図帖)

龍野城の遠景



龍野城



龍野城



龍野城と鶏籠山



家老門

他にも、龍野の市街には近世～近・現代の歴史をとどめる場所が多い。時には伝説の旅から少し離れて、町中に残る歴史的な場所や風景を探してみるのも楽しいのではないだろうか。

用語解説

【野見宿禰】のみのすくね

『日本書紀』に登場する人物。相撲の神。出雲国（いずものくに）出身で、天穗日命（あめのほひのみこと、またはアメノヒボコノミコト）の14世の子孫と伝えられる。垂仁（すいにん）天皇の命により、当麻蹴速（たいまのけはや）と相撲をとり、互いに蹴り合い腰を踏み折って勝った。その後、大和国当麻の地を与えられ、朝廷に仕えたという。

『日本書紀』によると垂仁天皇の皇后の葬儀の時、殉死に替えて埴輪を案出し、土師臣（はじのおみ）の姓を与えられたとされるが、考古学的にはこうした埴輪起源伝説は誤りである。土師氏は代々天皇の葬儀を司り、後に姓を大江や菅原などに改めた（菅原道真は野見宿禰の子孫ということになる）。

『播磨国風土記』では、播磨国の立野（兵庫県たつの市）で病により死去し、その地に埋葬されたとする。

【垂仁天皇】すいにんてんのう

第11代の天皇。記紀によれば、丹波から日葉酢媛（ひばすひめ）を迎えて皇后としたという。日葉酢媛が亡くなった時、野見宿禰（のみのすくね）の進言に従い、殉死に替えて土で作った人形を置いたとされる。埴輪の起源説話として著名。また『古事記』では、石棺作りや土器・埴輪作りの部民を定めたとしている。このほか、相撲の起源説話、天日槍（あめのひぼこ）渡来、田道間守（たじまもり）の伝説などが知られる。153歳まで生きたとされるなど、伝説的要素が強く、史実性は確かではない。

【装飾付須恵器】そうしょくつきすえき

古墳時代後期に見られる須恵器の一種。大型の壺（つぼ）、高坏（たかつき）、器台などに、ミニチュアの壺や人物・鳥・動物などの小像をつけたもの。ミニチュアの壺を多数つけたものは、「子持須恵器」と呼ばれることもある。

【龍野城】たつのじょう

たつの市龍野町にある城跡。別名朝霧城。16世紀初頭、赤松村秀によって、鶏籠山山頂に築かれた山城に始まる。天正5（1577）年に、城主赤松広英が羽柴秀吉に降伏して赤松氏の支配は終わった。

江戸時代初め、本多政朝が龍野藩主となり、鶏籠山山麓に城を移した。その後、藩主は小笠原氏、岡部氏、京極氏と変わり、1672年に脇坂氏が入って幕末まで藩主をつとめた。

【土師氏】はじし

古代の豪族。姓（かばね）は臣（おみ）であったが、後に連（むらじ）、次いで宿禰（すくね）となった。アメノヒボコの14世孫である野見宿禰（のみのすくね）を始祖とし、土師部を率いて土器（土師器）、埴輪の製作や、天皇の葬儀に従事した。奈良時代以降、土師氏から菅原氏、秋篠氏、大枝（大江）氏などが分かれた。

【埴輪】はにわ

古墳に立て並べた、日本固有の焼物。岩手県から鹿児島県にかけて分布する。古語で土あるいは粘土を意味する「ハニ」に通ずる。筒状の円筒埴輪と、人をはじめさまざまな器物や動物をかたどった形象埴輪とがある。

起源は円筒埴輪の方が古く、弥生時代末に埋葬儀礼に用いられていた器台と壺（つぼ）が祖形である。形象埴輪は古墳時代前期後半頃から登場することから、野見宿禰を埴輪の始祖とする『日本書紀』の伝承は事実と相違する。

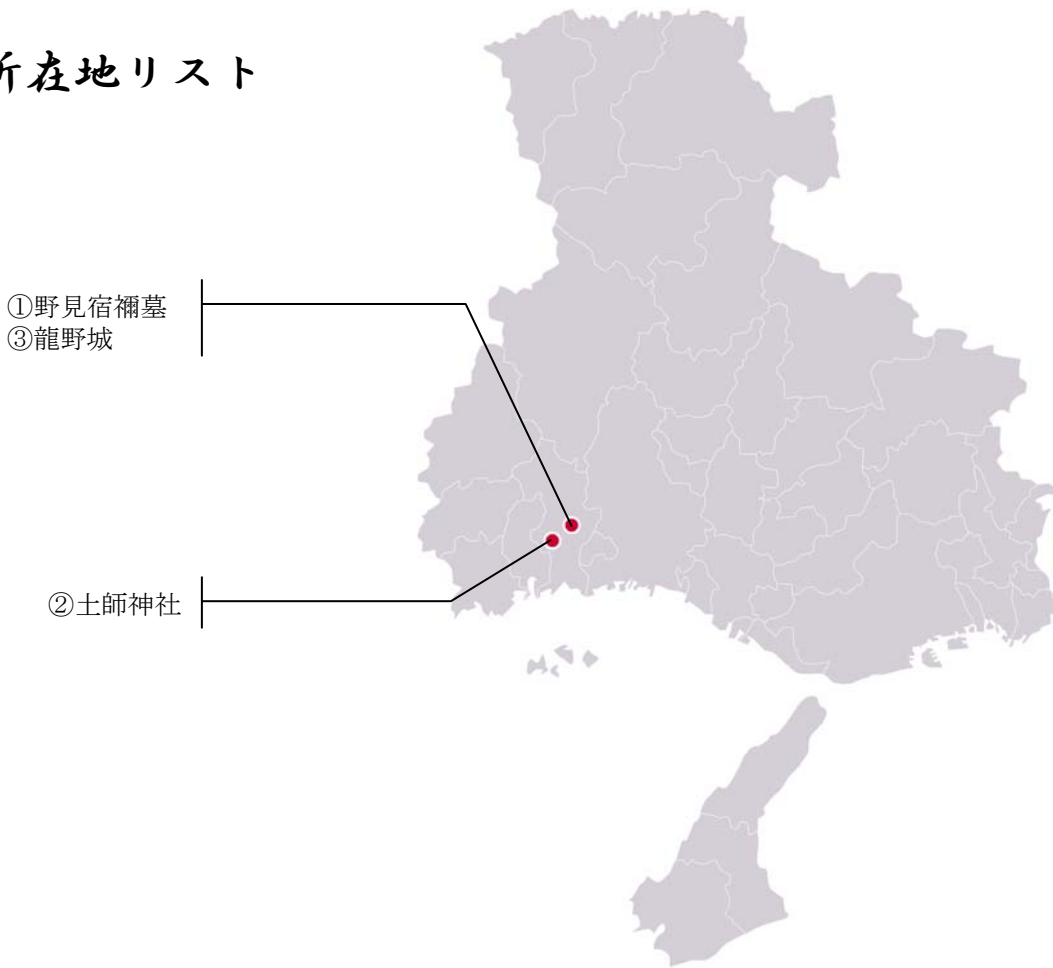
【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩 3. 西播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	増補改訂国史大系 日本書紀前篇 ※垂仁天皇7年の条・同32年の条	1981	黒板勝美編	吉川弘文館
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



①野見宿禰墓	たつの市龍野町北龍野
②土師神社	たつの市揖西町土師
③龍野城	たつの市龍野町

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

二人の皇子と根日女 恋と勇気の物語



伝説 二人の皇子と根日女
恋と勇気の物語

紀行 志染の里から玉丘へ

- ・志染の里の風景
- ・志染の石室
- ・志染周辺の文化財
- ・根日女の里
- ・山伏峠
- ・玉丘古墳群

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

二人の皇子と根日女 恋と勇気の物語

今から1500年ほど昔、大和国（やまとのくに＝現在の奈良県）では、天皇のあとつぎをめぐる争いが起こりました。政治をにぎった雄略天皇（ゆうりゃくてんのう）は、競争相手だった市辺王（いちべおう）を殺してしまいます。市辺王の二人の子どもは、播磨国（はりまのくに）までのがれて、現在の三木市（みきし）にあった志染村（しじみむら）の窟屋（いわや）に、かくれ住むことになったのです。

二人の名は、兄が「億計皇子（をけおうじ）」、弟が「弘計皇子（おけおうじ）」といました。そしてふたりは身分をかくし、志染村の長であった細目（いとみ）の屋敷で、働くようになりました。

そんなある日、皇子たちは、ひとりの娘にめぐり会いました。娘の名は根日女（ねひめ）といました。一目見るなり、二人は、美しくてやさしい根日女を好きになりました。けれどもおたがいにゆずりあって、なかなか言い出せません。根日女は、二人が皇子だなどとは夢にも思いませんでしたが、りりしい皇子たちを好ましく思いました。けれども二人ともすばらしい男性です。どちらかを選ぶこともできないまま、日々は過ぎていったのでした。

やがて雄略天皇が亡くなり、その後を清寧天皇（せいねいてんのう）がつぎました。

そんなある年、細目の家では、新しく建てた館を祝う宴（うたげ）がもよおされることになりました。そこには、播磨国にある朝廷（ちょうてい）の領地を見回りに来ていた、山部連小楯（やまべのむらじおだて）も来合わせていました。

やがて宴が始まると、細目はふたりの皇子に命じて、神様をお祭りする灯火（ともしび）をつけさせ、さらに、新築のお祝いの歌を歌うように命じたのです。こういうことは、身分の低い者の仕事でした。二人はしばらくの間ゆずりあっていましたが、やがて弟の弘計皇子がつと立ち上がると、高らかに祝いの歌を歌い始めました。

そしてお祝いの歌が終わると、皇子は勇気をふりしぼってさらに歌を続けたのです。

「たらちし、吉備（きび）のまがねの、狭鋏（さぐわ）持ち、田打つなす。手打て子ら、吾（あ）れは舞（ま）いせむ（吉備の国の鉄で作った鋏（くわ）をもって、田を耕すように、さあみんな手を打て、私はおどろう）。」

そしてさらに続けた歌に、人々はとび上がるほどおどろきました。

「淡海（おうみ）は水たまる国、倭（やまと）は青垣、山投（やまと）にましし、市辺の天皇が、御足末（みあなすえ）、奴（やつこ）らま（近江は水の豊かな国、大和は山に囲まれた国、私たちは、その大和におられた市辺の天皇の子なのですよ）。」

あまりのおどろきに、人々は屋敷を走り出て地面にひれふしました。大和から来ていた山部連小楯は、この歌を聞いて大いに喜びました。

「母君は食事めし上がらず、夜も寝られないほどなげき悲しんで、この皇子たちの行方（ゆくえ）をさがしていらっしゃったのです。」

こうして二人の皇子は、晴れて都へ戻ることができました。

都へ戻ってからも、二人は根日女のことを忘れませんでした。けれども都で大切なまつりごとをしなければならぬ二人には、根日女を訪ねる時間はなかったのです。

そうして時は流れ、年が経ち、とうとう根日女は亡くなってしまいました。それを聞いた二人の皇子は深く悲しみ、使者をつかわしてこんなふうに命令しました。

「一日中、日がよく当たる場所にお墓をつくってください。根日女のなきがらを納めたら、そのお墓をきれいな玉でかざりましょう。」

やがて大きな墓がつくられ、根日女はほうむられました。村人たちは、玉でかざられて美しくかがやく墓を「玉丘（たまおか）」と呼んで、いつまでも根日女のことを語り伝えたということです。

その後二人の皇子は、天皇の位を継ぐことになりました。その時、兄の皇子は、「おまえが勇気を出して歌ってくれたから、都へ戻れたのだよ」と、弟に位をゆずり、3年後、弟が病気で亡くなってからその座につきました。

若い日々を苦勞のうちにすごした二人は、ともに立派な政治をおこなったので、その時代には争い事などひとつも起きなかったそうです。

紀行「志染の里から玉丘へ」

志染の里の風景

神戸市西区押部谷町（おしべだにちょう）。古くからの村や田園風景と、新興住宅とが入りまじった町を通り抜け、クヌギやコナラが育つ丘を北へ登る道を行くと、やがて、神戸市北区から三田（さんだ）方面と、三木市御坂（みきしみさか）方面への分岐に至る。最近整備されて、道幅が3倍にもなった御坂への道へと左折してしばらく進むと、長い下り坂になる。それを下りきった所に流れる川が、志染川（しじみがわ）である。

少し前までは、緑濃い里山が連なり、桜のころには「春の女神」とたたえられるギフチョウが舞っていたこのあたりも、高速道路が通り、道が整備され、広大な防災公園が造成されて、景観は急速に変わりつつある。

その里の一角に、1500年以上も前の伝説を伝える窟屋（いわや）—志染の石室—が、往古から変わらないまま残されている。

志染の石室



旧道に立つ道標

御坂の交差点から志染川を渡って、少し南へ道に戻ると、幅広い道の左手に細い旧道が分岐する。その旧道を少し登ると、トタン張りの小屋の角に、草に埋もれるように「志染の石室道」と彫られた道標が建っている。左へ折れて村の中を通る細い道を東へ向かうと300mほどで駐車場があり、そこから谷沿いに整備された山道を歩くと石室へと導かれる。



道標



志染の石室道

石室は、谷に面したがけの下にある。高さ5～6mほどのがけの下1/3ほどが深くえぐられて、幅の広い洞窟（どうくつ）のようになっている。がけは、拳よりも小さい石が集まった「礫岩（れきがん）」でできていて、水がぼとぼと落ちているから、おそらく長い年月の間に、わき水による侵食や崩落でできたのだろう。

石室の前には玉垣があり、その中に小さな祠が祭られている。脇にはたくさんの石仏が、訪れる人を見つめている。石室の中をのぞいてみると、深さの知れない水がたまっている。二人の皇子もこれでは暮らせないだろうから、伝説ができた奈良時代以前には、少なくとも現在のような水たまりはなかったに違いない。



志染の石室

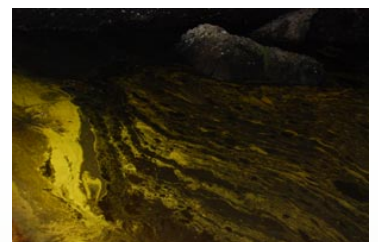


志染の石室

この水は冬から春にかけての時期、不思議な現象をおこすことがある。「窟屋（いわや）の金水」と呼ばれる現象である。水面が金色に輝くというこの現象は、ヒカリモという小さな藻によっておこるのだが、ごく限られた場所でしか見られない。志染の石室では久しく絶えていたそうであるが、2002年頃から、再び見られるようになった。生物と環境の微妙なバランスでできる、不思議な光景である。



石室には湧き水がたまっている



金水現象(2007年2月21日撮影)

志染周辺の文化財

志染周辺には文化財が多い。その中からいくつか、興味深いものをたどってみよう。

■伽耶院



仁王門



二天門



伽耶院境内



本堂



多宝塔



白稲荷

石室から、志染川を挟んだ対岸にのびる山には、修験道（しゅげんどう）の名刹（めいさつ）、伽耶院（がやいん）がある。山陽道三木東インターチェンジができて、すっかり人工的な景観になったあたりを少し北へと抜け、細い流れに沿って東の山ふところへと入ってゆくと、ほどなく仁王門が見えてくる。仁王様は、豊臣秀吉（とよとみひでよし）の兵火で焼け残ったものと聞かすが、頭部も足もなく、ひどく傷んでいる。

仁王門の脇を抜けてさらに奥へと進むと、あたりには深山のような雰囲気が漂い始め、すぐに「二天堂」と呼ばれる門が見える。門をくぐり、木々に覆われた階段を登ると、そこが伽耶院の本堂である。

落ち着いた瓦葺（かわらぶ）きの本堂の前には、ひときわ太いモミの木が2本、天を指している。本堂は、密教寺院の建築様式を踏んでいるということだが、あたりは、それに似つかわしい静寂に包まれている。本堂の東には多宝塔が優美な姿を見せ、少し奥まって、三坂明神社（みさかみょうじんじゃ）が祭られている。かつては修験道の寺院としてにぎわい、数多くの堂坊を連ねていたそうだけれど、今の静かなたたずまいからは想像も及ばない。

多宝塔の脇に、たくさんの石うすを積みあげた、「白稲荷」という小さな祠があった。これには「昔、このあたりの田は、水が流れ出るのを止めるため、あぜの水口（みなくち）に石うすを置いていた。ところがある干ばつの年、狐（きつね）が老人に化けて村中の田から全ての石うすを取り去り、水を平等に分けた。これを見て恥じた村人たちは全ての石うすをここに奉納した。」という伝説があるという。

■三木城



三木城遠景



美囊川と三木城の夕景

志染川に沿って西へ行くと、三木の市街地に至る。その中心にあるのが、三木城跡の上の丸公園である。元は市街地部分も広く城郭（じょうかく）に含まれていたが、現在は本丸部分だけが残って、公園となっている。本丸の下には、今も古い町並みの雰囲気を残す道があるから、ゆっくり歩いてみれば、何か新しい発見があるかもしれない。城の下を流れる美囊川（みのうがわ）のほとりも、心地よい散歩道になっている。

秀吉と、毛利方についての別所長治（べっしょながはる）との攻防戦は2年近くの間続くが、頼みとしていた支城が次々に落ち、毛利氏による兵糧（へいりょう）の運搬も押さえられるに及び、別所長治は城兵の命と引き替えに切腹して、ようやく戦いは終わった。長治は今も三木の人々に愛され、毎年5月には「別所公春祭」がおこなわれているそうである。



別所長治辞世歌碑

根日女の里

根日女（ねひめ）の里は、志染の西にある賀毛郡（かもぐん）である。上鴨（かみがも）、下鴨（しもがも）、三重、檜原（ならはら）、起勢（きせ）、端鹿（はじか）、穂積（ほづみ）、雲潤（うるみ）、河内（かわち）、川合（かわい）という十の里名が『播磨国風土記』に見えるが、これらは現在の加西市（かさいし）から加東市（かとうし）にかけての地域に当たる。これらの里を治めていたのが、根日女の父、許麻（こま）だったのだろう。

根日女が住んだのは玉野の村と記されているから、玉丘古墳（たまおかこふん）がある場所の少し東に当たる。志染からは、直線で25kmほど離れているだろうか。玉野も玉丘も、現在は豊かな田園風景が広がる所である。里の西には玉丘古墳群、北西には山伏峠の石棺仏があって、このあたりが古墳時代に栄えたことがよくわかる。

山伏峠



山伏峠

玉野の交差点の、南西にある丘陵の頂上付近が山伏峠（やまぶしとうげ）である。現在の県道ができる前は、この丘陵の上を通る道が街道だったようだが、今はサイクリングコースになっている。

坂道を登ると、竹やぶと雑木に囲まれて3基の石仏が建っていた。どれも石棺の蓋（ふた）の内側に阿弥陀仏を刻んだもので、手前に建つ巨大な家形石棺（いえがたせっかん）の蓋に刻まれたものと、いちばん奥にある長持形石棺の蓋に刻んだものは、県指定の文化財である。

今となっては、これらの石棺がどの古墳から掘り出されたものかわからない。無傷のまま発掘されていたら、どれほどの成果があっただろうと思うけれど、その一方で、いかにも所を得たという風情の石仏を見ていると、失われたものと残されたものと、どちらに価値があるのかわからなくなってくる。

石の表面に目を近づけると、鑿（のみ）の跡が残っているのがわかる。古墳時代のものと中世のもの、500年以上離れた石工の鑿跡が重なっているはずである。



家型石棺に彫られた像

長持形石棺に彫られた像

玉丘古墳群



玉丘古墳を望む

田園風景が広がる中に小山のような姿を見せるのが、古墳群の中核、玉丘古墳である。周囲を取り巻く濠（ほり）には、蓮（はす）が茂り、花が咲き競う夏を思わせる。濠に沿った小径をたどることもできるが、森に覆われた古墳には、「玉で飾られた」という伝説をしのばせる所はない。墳丘には、葺石があったことがわかっているから、それが遠目には玉のように見えたのだろうか。光沢のある河原石ならば、そんなこともあったのではないかとも思えるが、それも空想の域を出ない。伝説はどこまでも夢の中の存在である。



玉丘古墳

古墳群は公園として整備されている。その中には、石室や石棺が復元移築されたものもあるから、古墳の構造を学ぶには格好の場所である。



説明板

用語解説

【顕宗天皇】けんぞうてんのう

第23代の天皇。『日本書紀』によれば、在位は485～487年。名は弘計（おけ）。父の市辺押磐皇子（いちべのおしはおうじ）が、雄略天皇に殺されたために、兄の億計（をけ）とともに播磨に逃れ、雄略天皇の死後に名乗り出て即位したという。

【仁賢天皇】にんけんてんのう

第24代の天皇。『日本書紀』によれば、在位は488～498年。名は億計（をけ）。父の市辺押磐皇子（いちべのおしはおうじ）皇子が、雄略天皇に殺されたために、弟の弘計（おけ）とともに播磨に逃れ、雄略天皇の死後に名乗り出て弟に次いで即位したという。

【石棺仏】せっかんぶつ

石棺の部材を利用して作られた石仏。石棺の蓋（ふた）のような板状の石材をそのまま利用して、浮き彫りで石仏をあらわしたものが多い。加古川市、高砂市、小野市、加西市など、加古川流域西部に多く分布する。13～16世紀に製作されたものが多いと考えられている。

【長持形石棺・家形石棺】ながもちがたせっかん・いえがたせっかん

長持形石棺は、古墳時代中期に盛行した石棺。底石の上に側石と小口石をはめ込み、かまぼこ形の蓋（ふた）をのせる。蓋石の各辺や側石の両端に1～2個の突起（縄かけ突起）を作り出す。加古川下流の竜山（たつやま）に産する石材で作られた例が多く、近畿地方中央部の大型古墳の埋葬施設に使用されているため、「王者の石棺」とされる。

家形石棺は古墳時代中期に始まり、後期に普及する石棺の一種。蓋の頂上部が平坦で、そこから側面に向かって屋根状の広い斜面となる。棺身とあわせて家の形を連想させることから命名された。蓋の長辺に2個、短辺に1個の突起（縄かけ突起）を持つものが典型的である。棺身には、くり抜き式と組み合わせ式とが見られる。

播磨地域で見られる長持形石棺・家形石棺は、いずれも竜山石（あるいは類同の高室・長などの石材）を用いたものである。

【埴輪】はにわ

古墳に立て並べた、日本固有の焼物。岩手県から鹿児島県にかけて分布する。古語で土あるいは粘土を意味する「ハニ」に通ずる。筒状の円筒埴輪と、人をはじめさまざまな器物や動物をかたどった形象埴輪とがある。

起源は円筒埴輪の方が古く、弥生時代末に埋葬儀礼に用いられていた器台と壺（つぼ）が祖形である。形象埴輪は古墳時代前期後半頃から登場することから、野見宿禰を埴輪の始祖とする『日本書紀』の伝承は事実と相違する。

【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

【根日女】ねひめ

根日女命（ねひめのみこと）ともいう。『播磨国風土記』などによれば、根日女は国造許麻（くにのみやつここま）の娘で、億計皇子（をけおうじ）、弘計皇子（おけおうじ）の二人から求婚され、承諾したものの、皇子たちが譲り合って結局めとらなかつたため、やがて年老いて死んだ。それを哀れんだ皇子たちは、山部小楯（やまべのおだて）を遣わして墓を造り、玉で墓を飾ったのでその墓を玉丘と呼び、墓がある場所を玉野と呼ぶようになったと伝えている。現在加西市にある玉丘古墳が、この玉丘の墓にあたるものとされている。

根日女が実在の人物か否かを判断する資料はないが、根日女の父が国造許麻と記されることから、大和政権と播磨の豪族の関係を象徴的に示す伝説の一つとも考えられている。

【玉丘古墳】たまおかこふん

加西市玉丘町に所在する、古墳時代中期の前方後円墳。古墳時代中～後期の、38基以上の古墳からなる玉丘古墳群の中核的古墳で、全長107mをはかり、周囲に馬蹄形の濠（ほり）を巡らせている。

埋葬施設は古くに破壊されているが、後円部に長持形石棺の破片が散乱していることから、石室などを設けない石棺直葬と考えられる。刀剣、玉類などの出土が伝えられるが、今は所在不明である。周濠（しゅうごう）からは円筒埴輪のほかに、家形、鳥形、壺形（つぼがた）などの形象埴輪が出土している。

加古川中流域最大の古墳で、畿内政権と密接な関係をもつ王墓と考えられる。

【光り藻】ひかりも

淡水産の微細藻類で、不等毛植物門、黄金色藻綱に属する。水面に浮かんだ部分が光を反射して黄金色に輝く。生活史の1段階で、水をはじく性質をもつ脚をのぼすため、この時期に体が水面に浮かぶ。国内で初めて発見された千葉県竹岡では、国の天然記念物に指定されている。

【伽耶院】がやいん

三木市志染に所在する天台系寺院。元は修験宗（しゅげんしゅう）に属する。山号は大谷山。縁起によれば、大化元（645）年に、法道仙人が山中の清水から毘沙門天の像を得て、孝徳天皇の勅により伽藍（がらん）を造営したのが始まりとされるが、正確な創建時期は明らかではない。歴代天皇の勅願所として保護された。

中世には、熊野詣でと修験道の隆盛を受けて栄え、全盛時には七堂伽藍130坊を有する大寺院となった。天正8（1580）年、羽柴秀吉による三木城攻めの際に兵火を受けて全山が焼失したが、その後、諸国大名の寄進などにより再建された。

本堂は、慶長15（1610）年再建という伝もあるが、解体修理時の所見などから正保3（1646）年ごろの再建とされている。堂内に、本尊の毘沙門天立像を安置する。また多宝塔は正保5（1648）年に再建されたもので、ともに重要文化財に指定されている。

このほか、鎮寺社として建てられた三坂明神社も、重要文化財に指定されている。

本尊は木造毘沙門天立像。正確な年代は不明であるが、像の様式から平安時代後期～末の作と考えられている。

【志染の石室】しじみのせきしつ

志染の窟屋（しじみのいわや）ともいうことがある。

三木市志染に所在する、自然の岩盤が浸食されてできた岩陰。『播磨国風土記』などでは、父市辺押盤皇子（いちべのおしはおうじ）を大泊瀬皇子（雄略天皇）に殺され、都を逃げのびた億計（をけ）、弘計（おけ）の二皇子が隠れ住んだ場所と伝えている。のちに弟の弘計が23代顕宗天皇、兄の億計が24代仁賢天皇となった。

現在、窟屋内にはわき水がたまっているが、ここに淡水性藻類の光り藻が発生することがあり、その際には水が金色に輝くことから、「窟屋の金水」と呼ばれている。

【三木城】みきじょう

三木市上の丸町に所在する、室町時代～江戸時代初期の平山城跡。

中世の東播磨を支配した別所氏が、守護の赤松氏からこの地を与えられて築城した。戦国期には浦上氏、尼子氏、三好氏などの攻撃を受け、落城と回復を経験した。その後別所氏は勢力を拡大して自立していったが、毛利氏と結んで織田信長に背いたため、天正6（1578）年から2年に渡って織田方の羽柴秀吉による攻撃を受け、天正8（1580）年に落城。

秀吉との戦いは「三木合戦」と呼ばれ、別所長治との間で激しい攻防戦があったが、特に補給路を断つ兵糧攻めは、俗に「三木の干殺し」と言われるほど悲惨なものだったという。この結果、長治は城兵の命と引き替えに切腹し、別所氏は滅びた。

本来の城郭は現在の三木市街地部分も含むものであったが、本丸周辺だけが上の丸公園として残っており、別所長治の辞世「今はただ うらみもあらし 諸人の いのちにかはる 我身とおもへば」の歌碑が建てられている。

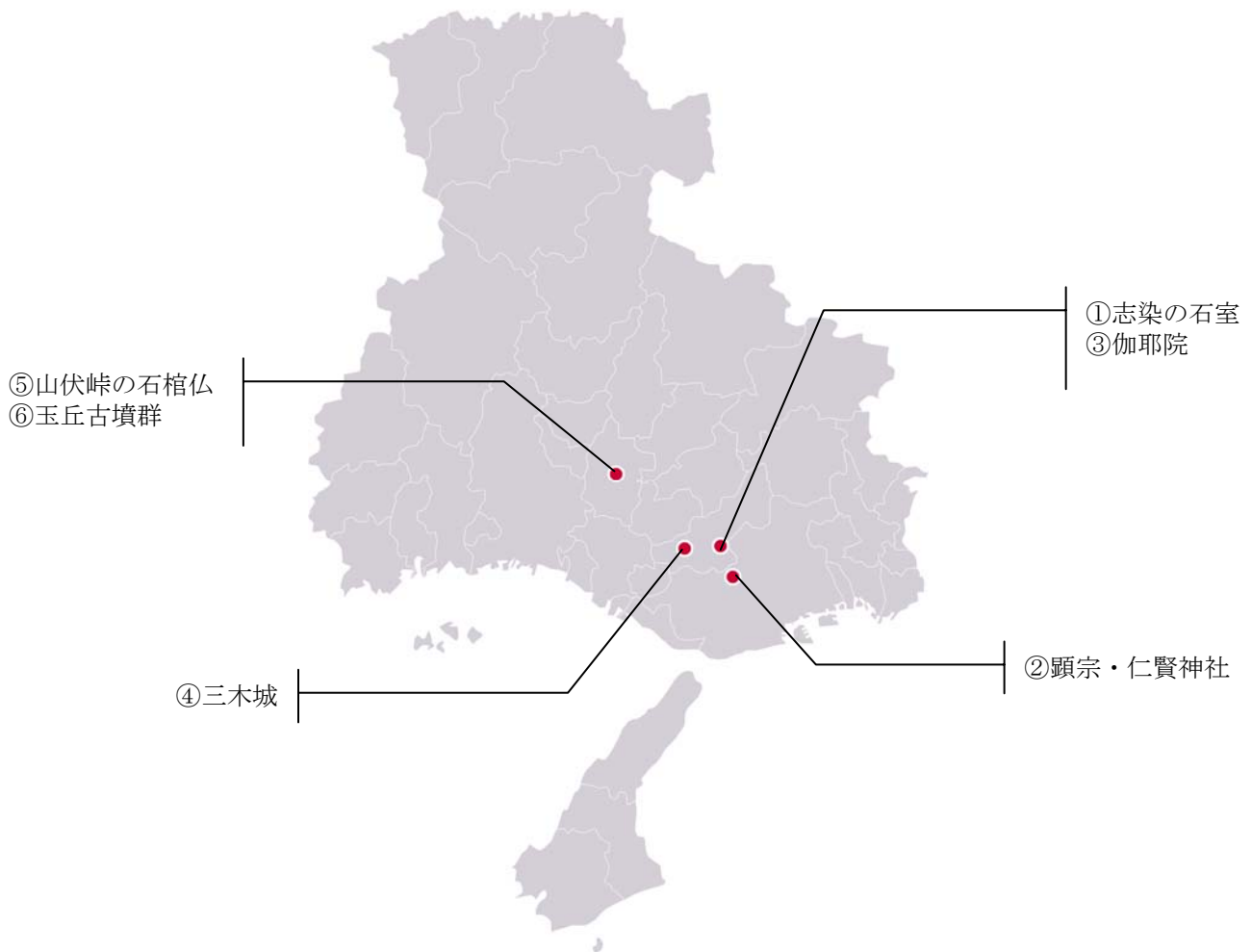
【ギフチョウ】ぎふちょう

アゲハチョウ科に属するチョウ。年に一度、4月に現れ、その美しさから「春の女神」と称えられる。播磨地域では、幼虫はミヤコアオイ・ヒメカンアオイなどを食べて育つ。食草の関係から、播磨地域では、里山の雑木林が主な生息地となっていたが、開発による生息地の破壊と、雑木林の放置による荒廃で減少しつつある。環境省絶滅危惧種Ⅱ類、兵庫県レッドデータブックBランク。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩 2. 東播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	新訂増補国史大系 日本書紀前篇	1981	黒板勝美	吉川弘文館
	神戸の伝説散歩	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター

所在地リスト



①志染の石室	三木市志染町御坂
②顕宗・仁賢神社	神戸市西区押部谷町木津538付近
③伽耶院	三木市志染町大谷410
④三木城	三木市上の丸町
⑤山伏峠の石棺仏	加西市玉野町山伏峠
⑥玉丘古墳群	加西市玉丘町水塚91ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

性空上人

天女舞い降りる書写山の桜



伝説 性空上人
天女舞い降りる書写山の桜

紀行 円教寺と弥勒寺
・書写山円教寺
・弥勒寺

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

性空上人

天女舞い降りる書写山の桜

性空上人（しょうくうしょうにん）は、橘家（たちばなけ）という名門貴族の子として京の都で生まれました。そして生まれたときから、仏様に守られた一生を約束するような伝説に包まれていました。

性空の母には、すでに何人かの子がいましたが、どの子もひどい難産でした。そこで性空を身ごもったとき、流産させてしまおうと毒を飲んだのですが、流産しなかったばかりか、不思議に安産であったといえます。

生まれた赤子は、左手をしっかりとにぎりしめていました。不審に思った両親が開いてみると、にぎられていたのはなんと一本の針だったのです。針が糸を導くように、この子は人々を導くようになるにちがいない。この話を伝え聞いた人は、赤ん坊は普賢菩薩（ふげんぼさつ）の生まれ変わりにちがいないと、うわさしあうのでした。

赤子は仲太小太郎（ちゅうたこたろう）と名付けられましたが、成長するにつれ、その才は目をみはるものになってゆきました。十歳になった時には、早くも藤原大納言（ふじわらのだいなごん）の若君の勉強相手として仕えるようになっていました。

ある日仲太小太郎は、大納言家の家宝のすずりを手にとってながめていて、割ってしまいます。若君は友をかばおうと、父の大納言に「割ったのは私です」と申し出ました。それを聞いて怒った大納言は、息子の首を打ってしまったのです。

仲太小太郎は、自分のせいで友の命が失われたことに、ひどく打ちのめされました。若君をとむらうために出家しようと考えましたが、息子が貴族として高い位に進むことを望んでいた小太郎の母は、なかなか許してくれません。しかしある夜、母の夢に文殊菩薩（もんじゅぼさつ）があらわれます。

「早く、そなたの子を出家させよ。」

文殊菩薩のお告げに、母もようやくそれを認め、小太郎は性空と名乗って仏に仕える身となったのでした。

九州へわたった性空は、霧島山（きりしまやま）にこもって修行を続けました。性空が庵（いおり）にこもって読経（どきょう）の日々を送っていると、いつのまにか窓の下に、三枚の餅（もち）が置かれています。それを食べるとたいそうおいしかったのですが、不思議なことに何日たっても腹が減りません。こうして性空は、法華経（ほけきょう）を極めたといえます。

さらに背振山（せふりやま）に移って修行を続けるころになると、性空には二人の童子がつき従うようになりました。童子は乙丸（おとまる）、若丸（わかまる）といい、乙丸は不動明王（ふどうみょうおう）の、若丸は毘沙門天（びしゃもんてん）の化身（けしん）だったと言います。童子たちは、性空が何も言わずともその心を察し、性空とともに経を読みました。

こうして30年近い修行を終えた性空は、京へ上る道を選びます。

京への道をたどる性空の上には、紫色に光る雲が道を示すように流れていました。ところが、播磨路（はりまじ）に入ると、その雲が一つの山の上にとどまって動きません。そこで性空がその山へと分け入ってみると、一人の老僧に出会いました。

「この山は書写山（しょしゃざん）という山で、釈迦（しゃか）が教えを説いた天竺（てんじく）の、靈鷲山（りょうじゅせん）の土が納められている。この山に住めば、人の六根は仏と同じようにすみわたるだろう。」そう告げると、老僧はたちまち文殊菩薩の姿となって消えたのでした。

性空は京へ上るのをやめ、書写山に住みました。六根が清浄（しょうじょう）となった性空は、世間の欲を捨て、そまつな庵でただひたすら法華経を唱えて過ごしました。書写山にある桜の木には、毎年花のころになると、天女さえまい降りたといえます。やがて性空は、この桜に如意輪観音像（にょいりんかんのんぞう）をほり、その像を納めるお堂を建てました。これが、現在の円教寺摩尼殿（えんぎょうじまにでん）となったのです。

性空には、さらにさまざまな伝説が生まれます。それを一つ一つ取り上げることはとてもできませんが、いくつかを紹介（しょうかい）しましょう。

ひとつ目のお話。鍋（なべ）の中でふつつつ煮られている豆と、ぱちぱちと燃やされる豆殻（まめがら）の音が、こんなふうに聞こえたそうです。

「他人でもないお前が、私を煮るなんてひどいじゃないか。」

「私だって好きでやっているわけじゃないよ。焼かれる身だってつらいのだ。」

ふたつ目のお話。性空と親しかった僧たちは、何も言わないのにほしかった品をおくられておどろくことがしばしばだったと言います。ある僧はよい紙をおくられ、またある僧は沐浴（もくよく）をする湯釜（ゆがま）をおくられて、おどろくと同時に性空が心を読む力に感じ入ったそうです。

年を経るとともに性空の名は高まり、位の高い貴族や、中宮（ちゅうぐう＝天皇の夫人）彰子（しょうし）といった人々が、書写山を訪れるようになりました。しかし性空は、人が訪れるほどに身を引くようになり、ついに書写山の北に庵を造ってこもってしまいます。

花山法皇（かざんほうおう）が説法を聞くために性空を訪れたのは、そんな時でした。この時、花山法皇は一人の絵師を連れていました。絵師はとなりの部屋で、さきほど会った性空の顔を思い出しながら描いていたのですが、そのさなか、とつぜん地震がおこります。はげしいゆれに思わず落としそうになった筆先から、性空の絵姿にひとしづくの墨（すみ）が落ちました。しかし後になってよくよく見ると、その墨のあとは、絵師が見忘れていた性空のほくろと同じ場所についていたということです。

数多くの伝説に包まれて、性空は98歳で、その長い一生を終えました。

紀行「円教寺と弥勒寺」

書写山円教寺

書写山円教寺（しょしゃざんえんぎょうじ）は、姫路市街の北西にある。夢前川（ゆめさきがわ）と菅生川（すごうがわ）に挟まれて、南北にのびる尾根の南端にある山頂は、標高371m。ふもとからロープウェイに乗り、播磨灘（はりまなだ）を遠望しながらゆくと、数分で山上駅に到着する。兵庫県のレッドデータブックで、「貴重な自然景観」にあげられている山は、緑が濃く、季節ごとに美しい姿を見せてくれる。



摩尼殿

書写山
(日本真景・播磨・垂水名所図帖)円教寺
(播州名所巡覧図絵)

円教寺(摂播記)



山門



摩尼殿(縁)

山上駅からは参道を歩く。近畿自然歩道の一部でもある参道は、木々の香りが心地よい。途中に分岐があつて、どちらへ進んでもかまわないのだけれど、左は整備されたバスも通る道なので、足が辛くなければ右の道を行くことにしたい。道に沿って、西国三十三か所の観音像が立ち、やがて仁王門を経て摩尼殿（まにでん）前へと導かれる。

摩尼殿は壮麗な建物である。現在の建物は、昭和初期に再建されたものだが、創建は平安時代である。伝説では、この場所に桜の木があつて、そこへ天人が舞い降りて礼拝していたのを見た性空上人（しょうくうしょうにん）が、桜に如意輪観音像（によいりんかんのんぞう）を彫り、像を安置する堂を築いたのが始まりとされている。

かつてあつた建物が、大正時代に全焼したのは残念の極みだが、半ば山の斜面にかかつて建てられた現在の堂も、前庭の広場に植えられたモミジの木と相まって、絵のような風景を見せてくれる。この摩尼殿には、重要文化財の四天王像が祭られている。

弁慶のお手玉石
(護法石)弁慶のお手玉石
(護法石)

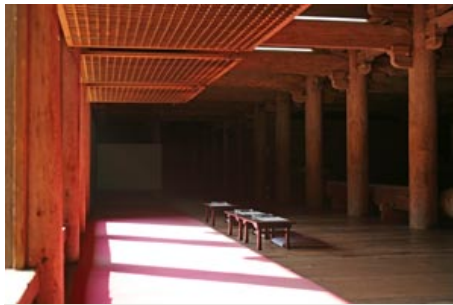
鬼面



鬼追い



食堂から見る大講堂



食堂の内部



食堂の内部

摩尼殿のわきを通って奥へと進むと、5分ほどで大講堂、食堂（じきどう）、常行堂の三堂が並ぶ広場に出る。三堂ともに重要文化財。壮麗な摩尼殿とは趣を異にし、明るくて質素だが重厚な印象。映画『ラストサムライ』（2003年）の撮影に使われた場所である。

大講堂には、釈迦如来像（しゃかにょらいぞう）、文殊（もんじゅ）・普賢（ふげん）の二菩薩像（ぼさつぞう）、常行堂には阿弥陀如来像（あみだにょらいぞう）があって、いずれも重要文化財に指定されている。

食堂の二階では、さまざまな歴史資料や寺宝の展示が見られる。それ以上に、建物を一巡りする葺戸（しとみど）が並んだ腰縁（こしえん）の簡素な風情は、一見するだけの価値がある。



弁慶の机



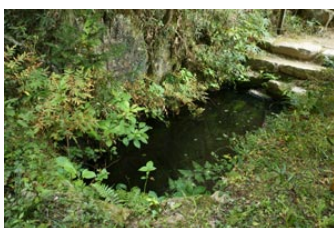
葺戸を上げる



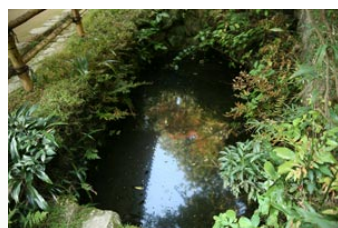
開山堂

そこから歩くこと数分で奥の院まで行けるから、「奥の院」という言葉にしり込みせず、ぜひ訪ねてほしい。三堂があった明るい空間とはうってかわって、しっとりとした空気の中に落ち着いたお堂が並んでいる。

豊かな森に包まれた書写山が、性空上人が過ごしたころと異なるのは、訪れる人の多さと山から望む町の景色だけである。



弁慶の鏡井戸



弁慶の鏡井戸



奥の院



弁慶の学問所(護法堂拝殿)

弥勒寺



説明板



石の橋

弥勒寺（みろくじ）は、書写山の北約5kmの夢前町寺（ゆめさきちょうてら）にある。性空上人が、書写山からさらに隠れ住んだ寺だけに、より山深い里にぼつんと建つ、小さな寺である。

夢前川の谷をさかのぼり、中世の山城として有名な置塩城跡（おきしおじょうせき）がある城山のふもとで、道を西へと入って行くと、やがて左手に小さな石造りの橋がかかり、その先にのびる参道が見える。

白壁の塀に挟まれた参道をゆっくり上って、門を入ると、質素な本堂と丁寧に手入れされた庭であった。そこにたたずんでいると、木々のざわめきや鳥の声の他には、何も聞こえない。今よりももっと何もなかったころ、性空上人はここでどんなことを考えたのだろう。



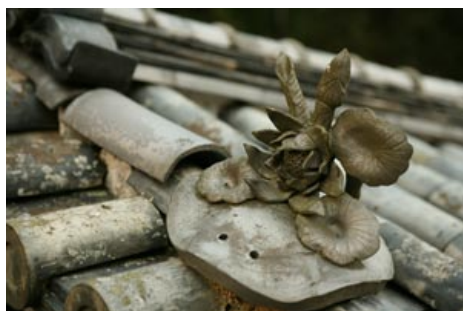
弥勒寺開山堂



弥勒寺本堂



弥勒寺本堂は、室町時代に守護の赤松義則（あかまつよしのり）によって建てられたもので、本尊として平安時代の弥勒菩薩像（みろくぼさつぞう）を祭っている。ともに重要文化財であるが、このほかに性空上人が自ら彫ったという、木造の地藏像が安置されているという。性空上人の出生の話とも重なって、このお地藏様は子安地藏様（こやすじぞうさま）として信仰が厚いそうである。2007年のお正月には、この像が1000年ぶりに公開されるというニュースがあったが、わずか3日間の公開だったのでご覧になった方は多くないだろう。いつかまた、公開されることがあれば、是非お参りしたいものである。



蓮華



鳥

性空上人の生涯からは、権力や栄達といった世俗を嫌い、その臭いに敏感だったということがよくわかる。けれども伝説のように、たとえば法皇や中宮というような高い地位にある人であっても、真に仏の道を尋ねたい人に対しては、胸襟（きょうきん）を開き、懇切に接した人であったことも確かなようだ。高ぶらず、人におもねることもなく、ただ淡々と、一心に仏道をおこなった人なのだろう。その生涯を思うとき、現代の私たちの生き方をかえりみずにはいられない。

用語解説

【書写山円教寺】しよしゃざんえんぎょうじ

姫路市書写にある天台宗の寺院。書写山と号する。康保3（996）年、性空上人が開基。

伝説によれば性空は、九州で修行して法華経を修めた後、瑞雲（ずいうん）に導かれて書写山に庵（いおり）を結んだとされる。

10世紀後半に、国司藤原季孝（ふじわらのすえたか）の寄進により法華堂が建設されて以降、堂宇の造営が盛んとなり、講堂、常行堂などの諸堂が建立された。翌年、円教寺の寺号をもって花山法皇の勅願寺となった。その後は、平清盛による一切経の施入、後白河法皇の参籠、後醍醐天皇の行幸など、天皇、貴族の手厚い保護を受けた。1331年には落雷によって堂宇の大半を焼失したが、守護の赤松氏の保護の下に復興に努めて再興した。

現在、円教寺の国指定文化財は下の通り。

<重要文化財>

（建造物）

大講堂・鐘楼・金剛堂・食堂・常行堂（常行堂、中門及び楽屋、舞台からなる）

護法堂（乙天社及び若天社）2棟・壽量院

（仏像）

木造釈迦如来及び両脇侍（わきじ）像

木造四天王立像

木造阿弥陀如来坐像（常行堂本尊）

【兵庫県レッドデータブック】ひょうごけんれつどでーたぶっく

兵庫県の健康生活部環境局自然環境保全課が編集した、県下において保全・保護の重要度が高い環境、生物を選定・収録した報告書。2003年に改訂版が刊行されている。選定されているのは、動植物種、植物群落、地形、地質、自然景観で、それぞれ基準を設定して重要度別に区分されている。

【通宝山弥勒寺】つうほうざんみろくじ

姫路市夢前町にある、天台宗の寺院。書写山円教寺の奥の院とも呼ばれ、密接な関係がある。長保2（1000）年に、性空が隠棲（いんせい）して草庵（そうあん）を結んだのが始まりとされる。その後、花山法皇（かざんほうおう）が行幸し、播磨国司に命じて諸堂を建立させたという。

14世紀後半に、赤松義則が建立した本堂と、本尊の弥勒菩薩および両脇侍像（わきじぞう、平安時代）は、国指定重要文化財。

【性空】しょうくう

平安時代中期の天台宗の僧（？～1007年）。九州の霧島山や背振山で修行の後、播磨の書写山に入り円教寺を開いた。花山法皇（かざんほうおう）の2度にわたる行幸をはじめ、多数の支持者を得た。晩年は、姫路市夢前町に弥勒寺を建てて隠棲（いんせい）した。

【法皇】ほうおう

正式には太上法皇という。太上天皇（天皇の位を譲った人。略して上皇という）が出家した場合の称。

【中宮】ちゅうぐう

広義には、皇后、皇太后（先代の天皇の後）、太皇太后（先々代の天皇の後）の三者の総称。内裏の中央の宮に住むことからつけられた呼び名である。狭義には、平安時代以降一人の天皇に対し複数の后が立てられたとき、最初に立てられた后（正規の皇后）以外のものを指す。歴史用語では、狭義の意味に用いられることが多い。

【守護】しゅご

鎌倉・室町幕府で、国単位に置かれた職。初期には惣追捕使（そうついでし）と呼ばれた。明確な制度として成立するのは、源頼朝が挙兵した直後（1180）に、有力御家人を東国諸国の守護人に任じてからである。

守護は一国内の軍政を担当し、大番催促（おおばんさいそく：京、鎌倉の警護）、謀反人の追捕、殺害人の追捕を基本的権限とした。これを大犯三箇条（たいぼんさんかじょう）という。南北朝期になると、守護はその任国に対する権限を強め、守護大名へと変質していった。

【赤松氏】あかまつし

中世播磨の豪族。赤松は佐用荘内の地名。赤松則村（円心）が足利尊氏に属し、新田義貞との戦いに勝利して守護に任じられた。後には備前、美作の守護にもなり、幕府の四職（ししき、室町時代の武家の家格。三管・四職と総称する。三管とは管領に任じられる、斯波（しば）、細川、畠山の三家、四職とは侍所頭人に任じられる、赤松、一色、山名、京極の四家をいう）として室町幕府の重臣となった。

しかし1441年に赤松満祐（あかまつみつすけ）が將軍足利義教を殺し、幕府軍の攻撃を受けて一族は没落した（嘉吉（かきつ）の乱）。その後赤松政則が再興したが、家臣であった浦上氏、宇喜多氏に領国を奪われ、さらには関ヶ原の戦いで西軍に属した赤松則房が戦死。一族は断絶した。

赤松義則（1358～1427）は、室町時代の武将。赤松満祐は義則の嫡男、政則は玄孫にあたる。

【六根】ろっこん

仏教で用いられる言葉。人の感覚や意識を生みだして、さまざまな欲望や迷いを起こさせるものになる六つの器官のこと。眼（げん）・耳（に）・鼻（び）・舌（ぜつ）・身（しん）・意（い）をいう。眼・耳・鼻・舌・身が外部からの刺激を感じ、それによって意が生じる。六根から生じる迷いを断てば、清らかな身になることができるとされ、これを「六根清浄（ろっこんしょうじょう）」という。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
歴史・文化等	兵庫県大百科事典（上・下）	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	はりま伝説散歩	2002	橋川真一	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



①円教寺	姫路市書写2968
②弥勒寺	姫路市夢前町寺

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

陰陽師

こけ地蔵と呪いの文字



伝説 陰陽師

こけ地蔵と呪いの文字

紀行 陰陽師 ～晴明と道満～

- ・道満屋敷とこけ地蔵
- ・セイメイさん
- ・道満塚・晴明塚
- ・慶明寺の碑

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

陰陽師

こけ地蔵と呪いの文字

加古川市（かこがわし）の天下原（あまがはら）に、「こけ地蔵」というお地蔵様があります。前へかたむいて、今にも倒れそうなこのお地蔵様には、こんな話が伝わっていました。

1200年ほど昔にさかのぼります。平安時代の中ごろ、都の貴族たちは呪（のろ）いや怨霊（おんりょう）、たたりなどを、心から恐れていました。藤原氏（ふじわらし）の陰謀（いんぼう）で、はるか大宰府（だざいふ）に流されて亡くなった、菅原道真（すがわらのみちざね）のたたりはことに有名です。そんな時代に、陰陽師（おんみょうじ）は、天文や暦（こよみ）を見きわめ、吉凶を占い、神仏にいのって病気を治し、怨霊を祓（はら）うことなどを仕事にしていました。

しかし時には人を呪い、時には呪殺（じゅさつ）する——それができると信じられていましたから——ことさえおこなう陰陽師もいたのです。

数多い陰陽師たちの中でも、特に有名なのが安倍晴明（あべのせいめい）と、その競争相手だった芦屋道満（あしやどうまん）でした。

道満は、現在の加古川市の岸のあたりに生まれました。その一生はなぞに包まれています。陰陽師として一流の術を身につけていたことは確かなようです。道満の屋敷にある井戸からは、毎夜式神（しきがみ）の火の玉が飛び出し、田畑や野をこえて飛んでゆくのが見られたといいます。村人たちはそれを「道満さんの一つ火」と呼びました。一つ火は、天下原までやってくると、そこの地蔵にぶつかって消えるのでした。そのたびにたおれたお地蔵様を村人たちが起こしていましたので、いつしか「こけ地蔵」と呼ばれるようになったのでした。

やがて道満は、そのうでを見こまれて、京の都で貴族たちのために術を使うようになりました。それがやがて、大事件をまき起こします。

御堂関白道長（みどうかんぱくみちなが）は、都の中に建てた法成寺（ほうじょうじ）に、毎日のように参拝していました。あるとき、いつものように牛車（ぎっしゃ）から降りて、寺の門をくぐろうとすると、いつもかわいがって連れてくる犬が道長の前に立ちふさがり、どうしても退こうとしません。無理に入ろうとすると、衣（ころも）のすそをくわえて、ぐいぐいと引っ張ります。

「これはどうしたことだろう。」

道長は、さっそく名高い陰陽師、安倍晴明を呼びにやりました。

やってきた晴明は、占いを立てると静かに言いました。

「だれかが道長様を呪い殺そうとして、道の下に呪いの品をうめています。もし、この上を通っていたら、大変なことになるところでした。犬は不思議な力を持っているから、道長様にお知らせしようとしたのでしよう。」

「いったいどこにうめられているかわかるか。」

「もちろん、たやすいことです。」

晴明が示した場所をほらせてみると、二枚の皿を合わせて、黄色いこよりで十文字にしぼったものが出てきました。開けてみると、中には何も入っていません。ただ、真っ赤な呪いの文字がひとつ、書かれていただけでした。

「私以外にこの術を知っているのは、道満法師だけです。問いただしてみましよう。」

晴明は一枚の紙を取り出すと、鳥の姿に折って呪文（じゅもん）をとええました。紙はたちまち白い鷺（さぎ）となって空へまいあがります。鷺はひとすじに飛んで、一軒の古い家へと飛び込みました。

家の中にいた道満法師はとらえられて、道長の前へ引き出されました。

「いったいだれにたのまれたのだ。」

道長の問いに、道満はごう然と答えました。

「左大臣の藤原顕光（ふじわらのあきみつ）様に頼まれたのですよ。」

左大臣顕光は同じ藤原氏の一族ですが、道長の競争相手です。道長は烈火（れっか）のように怒りましたが、道満法師ほどの術を心得た陰陽師を殺せば、どれほどのたたりがあるかわかりません。道満法師は死罪をまぬかれました。二度とこのような術を使わないよう命ぜられて、道満は、生まれ故郷の播磨（はりま）へ追放されました。

その後の道満がどうなったのか、くわしいことはわかりません。佐用郡（さようぐん）に移り住み、そこで亡くなったと『峰相記（みねあいき）』は伝えています。そしてその子孫は播磨一円に散らばって、占いや薬作りをしたともいいます。

紀行「陰陽師 ～清明と道満～」

陰陽師（おんみょうじ）という言葉が、世間に知れ渡ったのは、やはり夢枕獏の小説と、岡野玲子の漫画の影響によるものであろう。これに映画やテレビドラマが拍車をかけたことは疑いない。不思議な呪術（じゅじゅつ）を駆使し、怪異を退治するという、あたかも超能力者のように描かれている陰陽師だが、たたりや呪（のろ）いが実際にあると信じられていた時代のことである。

その陰陽師の中でも、スーパースターになったのが安倍清明（あべのせいめい）である。呪術の達人、式神を駆使する彼は、並びなき陰陽師として女性に人気絶大で、京都の清明神社は、もうでる人が絶えないという。

しかしその清明の伝説が、いくつも播磨（はりま）に残っているのはなぜだろう。清明は摂津（せつつ）の阿倍野（あべの）で生まれた人で、墓所は京都の嵯峨（さが）にある。播磨との接点は、彼が播磨守に任ぜられたことだろうけれど、実際に播磨で暮らしたわけではない。それでも神戸市西区から加古川市（かこがわし）、佐用町（さようちょう）と、彼の伝説が伝わる場所が点在している。

その播磨を根城にしていたのが、清明のライバル、芦屋道満（あしやどうまん）である。「正義の味方」というイメージが定着した清明に対し、道満は悪役だ。道満は道長暗殺を請け負ったが、その呪法を清明に見破られて播磨へ追放されてしまう。

道満屋敷とこけ地蔵



正岸寺

道満法師は加古川の岸村で生まれたと言われ、その屋敷は、加古川市の正岸寺（しょうがんじ）にあったとされている。JRの宝殿駅（ほうでんえき）から、加古川バイパスの高架をくぐって北へ7～800m行くと、南西方向にのびて、村の中を通る細い道がある。そこを100mほど入った所に、正岸寺がある。

境内の前は保育園になっていて、屋敷跡の面影は知るすべもないが、『播磨鑑（はりまかがみ）』などによると、かつては五畝（せ）ほどの屋敷地があったらしい。また、屋敷の傍らには井戸があったということだが、これも埋められてしまって、どこであったか今はわからない。



こけ地蔵



こけ地蔵

正岸寺境内の西側には、道満法師を祭る祠（ほこら）があった。中には、道満法師の位牌（いはい）と小像があり、今も大切に祭られている。祠の扉を開いて顔を拝ませてもらったら、少し彩色のはげ落ちた道満法師が、むっとしたような表情で前方をにらんでいた。

この屋敷跡から、直線距離で2.5kmほど東へ行った所にあるのが、こけ地蔵である。西側から平荘湖（へいそうこ）へと上る道の途中にあるが、目立たないのでよく注意していないと見落としてしまうだろう。すぐそばにあるたこ焼き屋を目印にするとよい。

お地蔵様は、本当にこけそうである。30度くらいは前に倒れていて、正面から顔を拝もうとすると、しゃがみこまなくてはならない。石棺のふたの内側に刻まれたお地蔵様である。石棺としてはかなり大きなものだけれど、どの場合もそうであるように、どここの古墳から掘り出されたものかはわからない。この場合には、すぐそばに平荘湖古墳群があるから、そこから持ってきた可能性があるとは思うが。

今ももうでる人がずいぶんいるようで、お地蔵様の前には、花やおさい銭だけでなく、小さな人形なども手向けられていた。



芦屋道満の像と位牌



道満の像

セイメイさん



セイメイさん



セイメイさんの顔

加古川には、清明に関する場所もある。加古川線の厄神駅（やくじんえき）に近い「セイメイさん」である。厄神駅から南へ200mほどの道のそばにあるが、質素なお堂だから地元の方に尋ねないと、わからないかもしれない。

お堂の中には、凝灰岩に彫られたごく素朴な仏像が祭られている。厄神駅を作るときに掘り出されたというが、どうやらこれも石棺のふたに刻まれたものようだ。仏像を彫り慣れた人の手になるものではなさそうで、どんな人が作ったのか気になるところである。

どんな病気も治してくれる、霊験あらたかなセイメイさんを、地元の人たちは大切に守っている。

道満塚・清明塚



道満塚



道満塚宝篋印塔

その道満と清明が、佐用町で仲良く祭られている。西播磨天台がある大撫山（おおなでやま）の北に位置する、大木谷（おおきだに）の村である。道満は都を追放された後、この付近に住んだともいう。東播磨よりもずっと懐が深い里山に囲まれた、静かな村は棚田の風景がとても美しく、日本の棚田100選にも選ばれている。

その大木谷は二またに分かれていて、東が大木谷甲、西が乙である。清明塚は大木谷甲に、道満塚は乙にそれぞれ祭られているが、道満にしてみれば、こんな所でまで甲乙をつけられるのかと、歯がみしているかもしれない。お互いの塚の間に尾根がのびていて、見通すことができないのが、せめてもの救いであろうか。



大木谷甲の棚田



清明塚



道満塚から見た山並みと棚田



道満塚に集められた五輪塔



清明塚宝篋印塔



塔の梵字

どちらの塚へも、案内の看板があるから迷う心配はない。西の大木谷乙への道をしばらく行くと、右手に細く急な坂道があらわれるから、そのまま登ってゆくと道満塚へ導かれる。明るい尾根の頂上には、方形の壇があって、その中心に宝篋印塔（ほうきょういんとう）が立っている。一方の清明塚は、分岐から東の道をゆくとすぐである。こちら道満塚同様、宝篋印塔が立っているが、その奥にお堂があって、小さな厨子（ずし）に入れられた仏像や記帳用のノートが置かれている。

それにしても、いったいなぜこの場所に、二人が祭られるようになったのだろう。そして、どうして互いが見えないように祭られたのだろう。謎は多い。

慶明寺の碑



晴明自筆の碑



晴明自筆の碑



梵字の碑文

国道175号線の玉津北交差点から東へ300mほど入った、神戸市西区平野町にある慶明寺（けいめいじ）には、晴明自筆と伝える石碑がある。自然石の一面に、梵字（ぼんじ）が彫られているが、風化が進んで、肉眼ではほとんど判読できないまでになっている。この石の下には、なぜかわからないが、鎌倉時代の悪党「花岡太郎」が封じられているという。時代も何もあったものではないが、それだけ晴明がスターだったということなのだろう。

県下で道満や晴明の伝説を伝える場所は、他にもいくつかあるそうだ。不思議な陰陽道へのあこがれは、今も昔も変わらないということだろうか。ひとつずつ探して訪ねれば、式神くらい飛ばせるようになるかもしれない。

用語解説

【陰陽師】おんみょうじ（おんようじ）

律令国家で、中務省（なかつかさしょう）所管の陰陽寮に置かれた職員。天文、暦の算定、吉凶の占いをおこなう呪術師。陰陽道は、中世には貴族から武士へと広がったが、室町時代末ごろにはしだいに衰え、民間で占いや祈祷（きとう）、薬の製造などをするようになった。

【安倍晴明】あべのせいめい

平安時代中期の陰陽師（921～1005）。後に陰陽道を司る土御門家（つちみかどけ）の祖。賀茂忠行・保憲父子に陰陽・推算の術を学んで、式神を使い、天文を解する陰陽家となったという。事変を予知し、芦屋道満による藤原道長呪殺を防いだ逸話が伝えられている。

【芦屋道満】あしやどうまん

蘆屋道満とも記述する。

平安時代中期の僧、陰陽師（生没年不詳）。道摩法師（どうまほうし）とも呼ばれる。道摩家は陰陽道の名家である。江戸時代の地誌『播磨鑑（はりまかがみ）』では、播磨国岸村（加古川市西神吉町岸）の出身とする。安倍晴明の好敵手とされ、『宇治拾遺物語（うじしゅういものがたり）』によれば、藤原道長を呪殺しようとして安倍晴明に看破され、捕らえられて播磨へ追放されたという。

【畝】せ

日本古来の面積の単位。1畝は、約100平方メートル。

【石棺仏】せっかんぶつ

石棺の部材を利用して作られた石仏。石棺の蓋（ふた）のような板状の石材をそのまま利用して、浮き彫りで石仏をあらわしたものが多い。加古川市、高砂市、小野市、加西市など、加古川流域西部に多く分布する。13～16世紀に製作されたものが多いと考えられている。

【宇治拾遺物語】うじしゅういものがたり

鎌倉時代初めごろに編集された物語集。編者、正確な成立年代は不明。全15巻からなる。仏教的な説話、舌切りすずめ、わらしべ長者のような民話など、さまざまな伝承を収録しており、民俗学的にも重要な資料である。

【平荘湖古墳群】へいそうここふんぐん

加古川市平荘町の人造湖である平荘湖とその周辺に分布する古墳群。平荘湖のために約50基が水没した。最も古い古墳は、5世紀後半にさかのぼるが、大部分の古墳は6～7世紀に築造されたものである。平荘湖古墳群の中には、百濟系といわれる初期の須恵器を出土した池尻2号墳、金銅製（こんどうせい）の馬具、金糸などを出土した池尻15号墳、金製垂飾付（たれかざりつき）耳飾を出土したカンス塚古墳など、注目される古墳も多い。

【宝篋印塔】ほうきょういんとう

本来は「宝篋印陀羅尼經（ほうきょういんだらにきょう）」を納めるための塔。日本では平安時代末ごろから作られるようになり、鎌倉時代中ごろからはその役割が、墓碑や供養塔に変化していった。多くの場合石塔である。

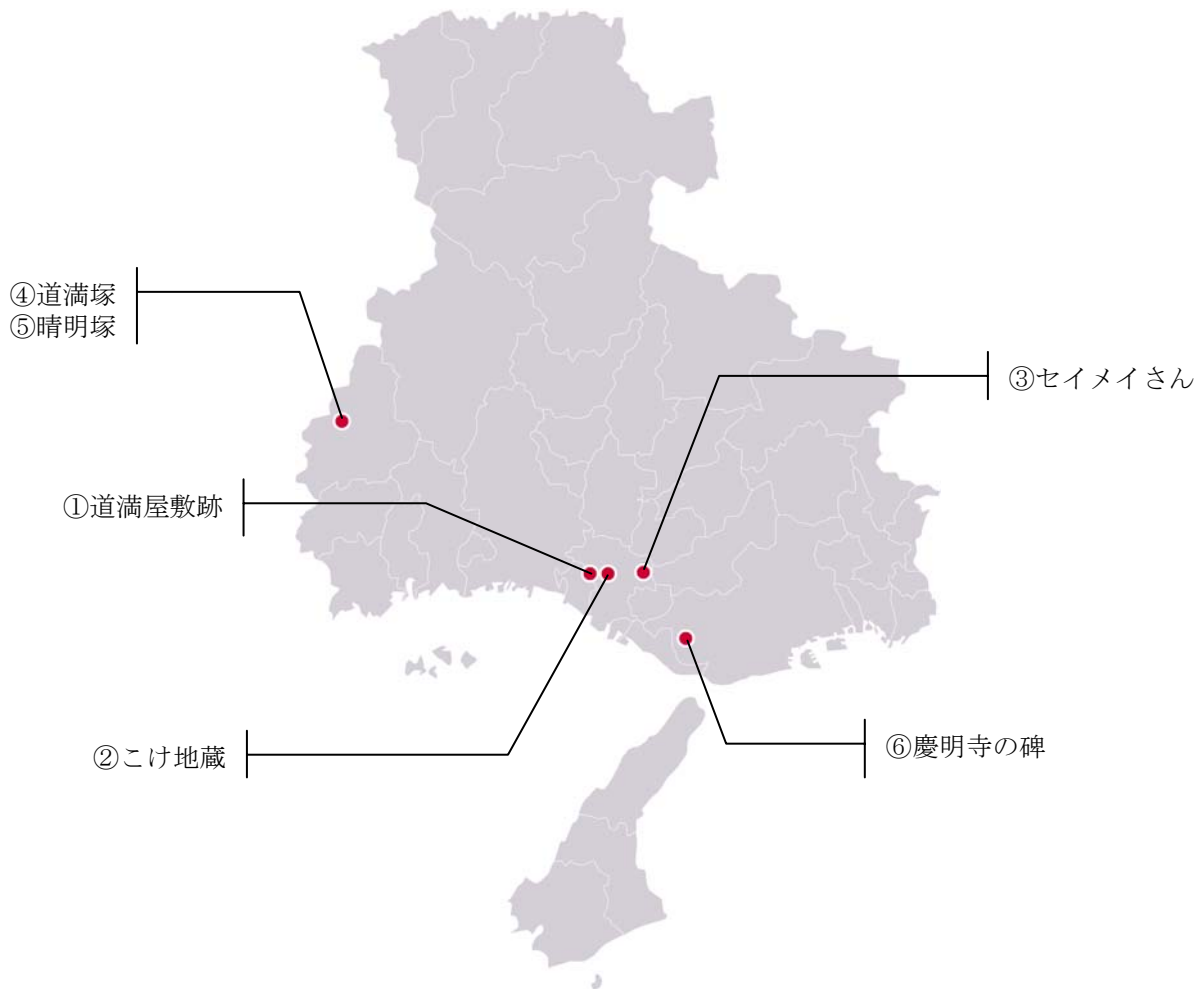
【悪党】あくとう

本来は「悪者」を意味するが、日本史では、鎌倉時代末期から室町時代初めにかけて活動した、荘園領主（貴族）、幕府などに抵抗する、独立性をもった在地の集団（武士）をさす。悪党は中央政府から見た、「荘園を侵して荘園領主や政権に反抗する者」の呼び名である。鎌倉幕府打倒の戦いで知られる、河内国の楠木正成も悪党である。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
歴史・文化等	佐用町史 中巻	1980	佐用町史編さん委員会	佐用町
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



①道満屋敷跡	加古川市西神吉町岸 (正岸寺)
②こけ地蔵	加古川市東神吉町天下原
③セイメイさん	加古川市上荘町国包
④道満塚	佐用町乙大木谷
⑤晴明塚	佐用町甲大木谷
⑥慶明寺の碑	神戸市西区平野町慶明97 慶明寺前

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第2刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

道真の旅

梅の香と、歌と、人のやさしさと



伝説 道真の旅

梅の香と、歌と、人のやさしさと

紀行 道真の旅

- ・菅原道真
- ・長洲天満神社
- ・匂いの梅と板宿天満宮・網敷天満宮
- ・播磨路の道真

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

道真の旅

梅の香と、歌と、人のやさしさと

菅原道真（すがわらのみちざね）は、今から1150年ほど昔、平安時代の人です。学問にたいへんすぐれた人で、「天神様（てんじんさま）」といえは知っている人も多いでしょう。道真は、その学問を認められて右大臣という高い位につきましたが、それをこころよく思わなかった藤原氏の陰謀（いんぼう）にあい、九州の大宰府（だざいふ）へ送られて、その地で亡くなってしまいました。

道真が亡くなった後で、人々はそのたたりを恐れて、神様として祭るようになりました。これが現在の天神様なのです。「学問の神様」として、天神様は全国各地でまつられています。

道真は、山陽道（さんようどう）で大宰府に下ったそうですが、摂津（せつつ）には道真が船で旅をしたというお話が残っています。そのころの船は、櫂（かい）でこぐか、帆（ほ）に風を受けて進むしかありませんでした。ですから一度に長い航海をすることがむずかしく、所々の港に立ち寄りながらの旅だったようです。

■ねぎ作らず・鶏飼わず

道真が大宰府に下るとちゅう、長洲（ながす）というところで潮待ちをすることになりました。長洲は、現在の尼崎市（あまがさきし）内にあたります。道真が、「ここはどこか」と村人にたずねたので、村人が「ここは長洲と申します」と申し上げたところ、「大宰府に流される身が、しばらくとどまる場所もやはり『ながす』というのか」となげいて、次のような歌をよみました。

人知れず おつる涙（なみだ）は 津の国の 長洲と見えて 袖（そで）ぞ朽（く）ちぬる

これを聞いた村人たちは、心から道真を気の毒に思いました。あたりに育っていた木や草までもがしおれてしまって、道真の悲運に同情したのですが、川上から流れてきたねぎだけはしおれずにしゃんとしていましたので、村の人はにくらしく思って、それ以来、長洲の村ではねぎを作らなくなったということです。

いよいよ道真が出航する日が明日に迫り、一番鶏（いちばんどり）の声を合図に出航と決まりました。その夜、道真をよく思っていない者が、鶏小屋のとまり木になっている竹に、熱い湯を流しました。鶏（にわとり）は、足をあたためられ、もう夜が明けたのかとかんちがいして、高く鳴いたのです。

夜明けにはまだ早かったのですが、一番鶏が時を告げたので、道真たちの船はしかたなく出航してゆきました。後になって、村人たちは鶏がかんちがいして鳴いたことを知り、その後、鶏を飼うことをやめてしまったということです。

■板宿の飛び松

長洲を出発した道真たちは、よい風を待つために和田岬（わだみさき）に立ち寄りました。上陸してみると、どこからともなく花の香りがただよってきます。

「これは、なんとすばらしい梅の香りだ。いったいどこにさいているのだろう。」

花の香りにさそわれるように、道真が歩いてゆくと、荇藻川（かるもがわ）が海に注ぐあたりにかかる真野の継橋（つぎはし）のたもとに、一本の梅がたくさんの花をつけているのでした。

風寒み 雪にまがへて 咲く花の 袖にぞうつれ 匂（にお）ふ梅が香

道真はさらに西へと道をたどります。そのうちふっと、都の屋敷に残してきた木々のことを思い出しました。道真は、庭の木々の中でも、梅、桜と松をとりわけかわいがっていたのです。道真が九州へ流されると決まったとき、桜の木は悲しんでかれてしまいました。また、梅の木は、西へと旅する道真のところへ、東風に乗せてよい香りを送り、なぐさめてくれました。

ところが松の木からは、何も音沙汰（おとさた）がありません。

「梅や桜が、わたしの運命を悲しんでくれているのに、あの松は何とつれないことか。」

道真が思わずなげくと、その言葉が聞こえたかのように、松の木は、京の都から空を飛んで、あっという間に道真のところへやって来たということです。

道真がこの地を去った後も、松の木は残り、やがて天にそびえる大きな木になりました。その姿ははるか遠く、現在の大阪湾のあたりからも望まれ、長い間、船乗りたちのよい目印になったといえます。

現在、荇藻川の梅の木があったあたりは梅ヶ香町（うめがちょう）、道真が休むために板で仮の小屋を作った所は板宿町（いたやどちょう）、松が飛んできた所は飛松町（とびまつちょう）と呼ばれています。

紀行「道真の旅」

菅原道真

毎年受験の時期になると、各地の天神様は祈願に訪れる学生で繁盛する。いかに優れた人だったとはいえ、藤原氏の陰謀のために左遷された晩年を考えると、どうしてこんなに人気があるのかと不思議な気もするが、どちらかという悲運の人をひいきするのが、日本人の気質なのかもしれない。神様に祭り上げられた菅原道真（すがわらのみちざね）も、さぞやあの世で苦笑していることだろう。

道真が右大臣から大宰府に左遷されたのは、延喜元（901）年である。中央政府の中心的地位から、出先機関の次官に落とされたのだから、道真の悲嘆はいかばかりであったろう。そのせいもあってか、大宰府に行つてわずか3年で没している。

兵庫県に残る伝説は、どれも、道真が都から九州へ下る途中の物語である。

長洲天満神社



鳥居



境内



拝殿

長洲天満神社（ながすてんまんじんじゃ）は、尼崎の市街地のまん中にある。長洲という地名からは、河口に開けた浜を想像するけれど、今の海岸線までは5kmほどもあるだろうか。源頼朝（みなもとのよりとも）に追われた義経（よしつね）主従が、西国へ逃れようと船出した大物（だいもつ）は、長洲のすぐ南である。

神社を訪ねたのは早朝であった。隣にはしる道も、まだ車が少ない時間帯であったが、一人、また一人と参拝に訪れる人が、皆熱心に拝んでいるのには驚き、感心させられた。町中の神社だから、神秘的とか荘厳といった形容詞は当たらないが、多くの氏子さんが熱心に守ってこられたのがよくわかり、うらやましいような気もする。

境内の南に、「菅公足洗の池」がある。船から下りた道真が足を洗ったという池だが、今はコンクリートで固められている。

神社から500mほど東の、長洲小学校北門わきには、菅公船つなぎの松跡がある。道真が船をつないだ松の木があったといい、石碑が立っている。元の松は枯れてしまい、今は若い松が植えられている。

説明板

長洲の周辺では、道真の古跡が、今もそれぞれ大切にされている。道真をわずかな時間早立ちさせた鶏を飼わず、道真のためにしおれなかった葱（ねぎ）を作らないなど、心から道真を慕った伝説の心は、大都市として発展してからも消え去ってはいない。



菅公船つなぎの松石碑



説明板



大物主神社



大物主神社



説明板



大物橋跡の石碑

大物主神社と大物橋
(撰津名所図会)

匂いの梅と板宿天満宮・綱敷天満宮

■菅公匂いの梅

菅公匂（にお）いの梅旧跡は、JR兵庫駅と新長田駅のほぼ中間、長田中学校近くにある。現在は石碑だけがその跡を伝えるだけである。伝説どおり、ここから板宿八幡神社（いたやどはちまんじんじゃ）あたりまで歩くとなると相当の距離である。

■板宿八幡神社と天満宮

板宿八幡神社は、板宿駅北西の尾根の上にある。板宿駅から妙法寺川に沿って、坂道を500mほど上り、そこからさらに住宅街の細い道を上った尾根の上に神社がある。境内の一角に小さな宮があって、この中にかつて境内にあった飛松の株が残されている。境内からの眺望は素晴らしく、晴れて澄んだ日なら大阪の山まで見えそうだ。この飛松が、若々しい葉をつけていたころには、船人たちの目印になったというもうなずける。



板宿八幡神社



板宿八幡神社の拝殿



飛松天神社



飛松天神社



ここでも目につくのは、合格祈願の絵馬である。生真面目なものから、いかにも現代風のものまで、道真さんへのお願いはひきもきらない。



■綱敷天満宮

板宿八幡宮の南西2km少しの所には、綱敷天満宮（つなしきてんまぐう）がある。ほぼ同じ故事を伝える綱敷天満宮は福岡県にもあるので、上陸した道真に、漁師が綱を敷いて座を作ったという話は、広く語られていたのかもしれない。

社殿は新しい町中の天満宮だが、参詣（さんけい）に訪れる人は多いようだ。



鳥居から拝殿を見る



拝殿

播磨路の道真

須磨（すま）を経た後、道真は山陽道で西を目指した。太政官の命令は途中の駅家にも発せられていて、乗り継ぎの馬や食料も与えてはならないという、実に厳しいものであった。いかに道真憎しとはいえ、意地の悪い命令である。途中、明石（あかし）の駅に立ち寄った道真は、旧知の駅長に「駅長、時の変改を驚くなかれ。一栄一落、これ春秋。」という漢詩を与えたという。明石の休天神には、菅公腰掛け石があるという。

さらに西には、加古川市（かこがわし）の浜宮天神社（はまのみやてんじんしゃ）、高砂市（たかさごし）の曾根天満宮（そねてんまぐう）、赤穂市（あこうし）の坂越天満宮（さこしてんまぐう）と、山陽道に沿って道真が立ち寄ったという伝承地が連なっている。

用語解説

【菅原道真】すがわらのみちざね

平安時代前期の公卿（くぎょう）、学者（845～903）。菅公（かんこう）と称された。幼少より詩歌に才能を発揮し、33歳で文章博士（もんじょうはかせ、律令政府の官僚養成機関であった大学寮に置かれた教授職）に任じられた。宇多、醍醐両天皇の信任が厚く、当時の「家の格」を越えて昇進し、従二位右大臣にまで任ぜられた。しかし、道真への権力集中を恐れた藤原氏や、中・下級貴族の反発も強くなり、左大臣藤原時平が「斉世親王を立てて皇位を奪おうとしている」と天皇に讒言（ざんげん）したことで、大宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷され、同地で没した。

【天神】てんじん

天神は、本来「天の神」を指し、雷や雨の神として信仰されていた。しかし菅原道真が大宰府で没した後、京都では落雷の災害が頻発し、また醍醐天皇の皇子が次々と亡くなったため、これを道真のたたりと考えた朝廷は、京、大宰府に天満宮を置いて怨霊（おんりょう）を鎮めようとした。これ以降、道真を天神とする信仰が広がり、道真が優れた学者であったことから、学問の神としても信仰されるようになった。

【大宰府】だざいふ

中世以降太宰府とも表記するが、歴史用語としては「大」の字を用いる。

7世紀後半に、九州の筑前国（ちくぜんのかくに）に設置された地方行政機関。外交と防衛を主任務とすると共に、西海道9国（筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、薩摩、大隅）と三島（壱岐、対馬、種子島の行政・司法を所管した。与えられた権限の大きさから、「遠の朝廷（とおのみかど）」とも呼ばれる。

【右大臣】うだいじん

律令政府における最高機関であった太政官の職のひとつ。太政大臣、左大臣に次ぐ地位である（ただし太政大臣は常に置かれるものではなかったため、実質的には第二位の職）。

左大臣を補佐する。菅原道真は899～901年に右大臣をつとめた。

【絵馬】えま

寺社に祈願するとき、および願いがかなってその謝礼をするときに奉納する、絵が描かれた木の板。奈良時代には生きた馬（神馬、しんめ）を奉納していたが、馬を奉納できない者は次第に木や紙、土で作った馬の像で代用するようになり、平安時代から板に描いた馬の絵で代用されるようになった。

【大物】だいもつ

大物浦は古くからの物流の結節点で、海の輸送と川・陸の輸送との変換点であった。海上を運ばれた物資はここで川船に積み替えられて都へ運ばれ、また西国を目指す人々にとっては海の玄関口でもあった。謡曲『舟弁慶』ゆかりの地としても知られている。『平家物語』にも記述がみられ、源頼朝に疑われ都落ちを決意した義経が、西国を目指して船出したのが大物浦であるという。大物浦にある大物主神社（おおものぬしじんじや）には、義経主従が一時身を潜めたという言い伝えが残り、境内には「義経・弁慶隠れ家跡」の碑がある。海上交通の要衝として栄えた大物の地にあるこの神社に、自分たちの航海の安全を祈願したのであろうか。大物浦を出発した義経たちは、祈りもむなしく大風に吹き戻されやがて吉野の地に落ちていく。

今は埋め立てられ、海岸線は当時と比べると、はるか沖合いにある。埋め立てられた場所には、細長く伸びる公園があり、かつての大物浦の姿をしのぶことができる。

【駅家】うまや（単に駅：えき と記すこともある）

律令期に、街道に置かれた駅伝制の施設。30里（約16km）ごとに設けられ、駅長、駅子（えきし）を配置した。厩舎（きゅうしゃ）、宿舎、厨家（くりや、炊事施設）などが設けられて、役人の職務のための旅行などの際、馬を乗り継ぎ、食料などを補給した。街道の格付けによって、準備される馬の数が異なり、山陽道の駅家では20頭を常備することとされていた。

律令政府の変質に伴って平安時代中ごろからは衰退し、しだいに私人経営の宿がこれに替わるようになった。

【太政官】だいじょうかん

律令政府における行政の最高機関。八省を統括して政務全般をつかさどった。太政大臣、左大臣、右大臣、大納言で構成される公卿官（くぎょうかん）による審議を、少納言局、左右の弁官局が事務処理して、八省が実務をおこなうという体制がとられていた。

【山陽道】さんようどう

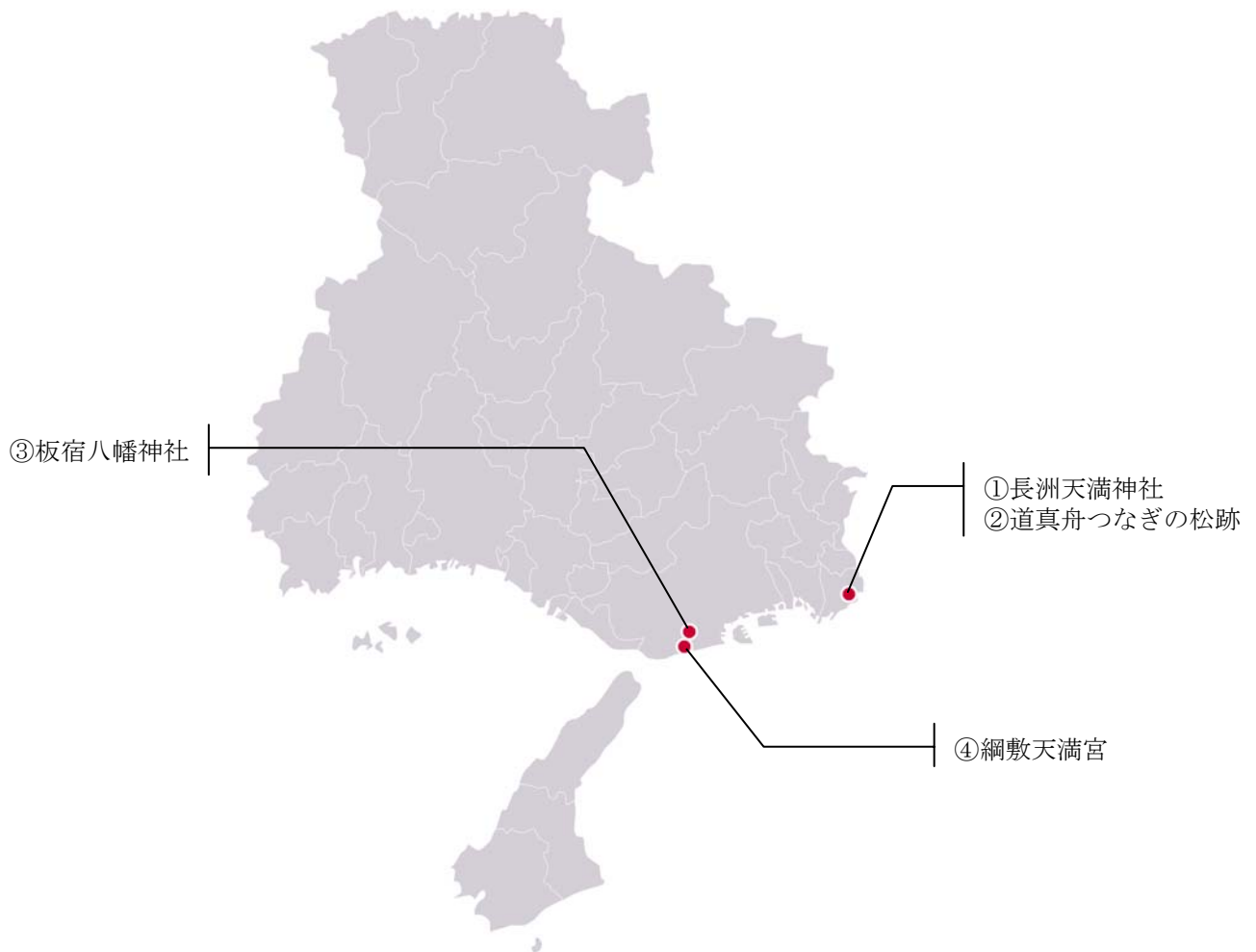
奈良時代に政府によって整備された、平城京から大宰府に至る道。古代では最大規模の街道で、幅6～9mの道路が直線的に設けられていた。平安京に遷都後は、起点が平安京となる。外国の使節が通行することが予想されたため、同様に整備された七街道の中で、唯一の大路に格付けされて最重要視された。途中には56駅が設けられていた。

江戸時代には、古代山陽道を踏襲して西国街道が整備され、現在の国道2号線も一部で重複しながら、これに沿って設けられている。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	尼崎市史 第10巻	1974	渡辺久雄編	尼崎市
	日本伝説大系 第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
歴史・文化等	尼崎市史第10巻	1974	渡辺久雄編	尼崎市
	兵庫のふるさと散歩1. 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	神戸の伝説散歩 ※兵庫ふるさと散歩11	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
	はりま伝説散歩	2002	橋川真一	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



①長洲天満神社	尼崎市長洲本通3-5-1
②道真舟つなぎの松跡	尼崎市長洲東通3-7-1
③板宿八幡神社	神戸市須磨区板宿町3-15-25
④綱敷天満宮	神戸市須磨区天神町2-1-11

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

昆陽池の鮒
薬師如来の導き
えいがしま
エイと一緒に祈りをする



伝説 昆陽池の鮒
薬師如来の導き
えいがしま
エイと一緒に祈りをする

紀行 民衆が敬愛した高僧
・行基
・昆陽池
・昆陽寺
・有馬温泉と温泉寺
・東播磨の行基

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

昆陽池の鮒

薬師如来の導き

1200年以上も昔、まだ、奈良に都があったころのお話です。行基上人（ぎょうきしょうにん）というえらいお坊さんが、日本全国を旅していました。行基上人は、行く先々でため池を造ったり、水路を開いたりして、人々を助けながら仏様の教えを広めていたのです。

ある時、さみしい猪名野（いなの）を歩いていた上人は、道ばたにたおれていた老人に気がついて立ち止まりました。

「もし、どうなさいましたか。」

上人がたずねると、老人は苦しそうに答えました。

「病気を治すのに有馬へ行こおもて、ここまで来たんやけど、体がしんどくなった。もう三日も飯食うとらへん。何ぞ食うもん持ってしめへんか。」

老人をよく見てみると、体中に瘡（かさ）ができて、そこから膿（うみ）が出ているというひどいありさまでした。そこで上人は、旅のお弁当の干し飯（ほしいい）を取り出してやりましたが、老人は、「あかん、あかん。わしゃ生の魚でも食わんと、元気が出えへんわ」と言います。そこで上人は、わざわざ長洲（ながす）の浜まで行って、漁師に魚をわけてもらいました。そして、魚の片身を料理して食べさせてやりました。

上人が残った片身を昆陽池（こやいけ）に投げこむと、不思議なことに魚はそのまま泳ぎ始めて、池の中へ消えてゆきました。昆陽池には、このときの魚の子孫の「片目の鮒（ふな、片目の金魚という伝説もあります）」が、今でも住んでいるということです。

さて、上人は老人を背負って有馬温泉に向かいましたが、そのとちゅう、老人は苦しうに言いました。

「体中のできものが膿（う）んで、ウジがわいて、痛うて、かゆうてたまらんわ。お坊さん、膿をなめて、ウジを吸い取ってくれへんかいな。ほたら少しは治るとおもうんやけど。」

ふつうならとてもできることではありません。けれどもこれを聞いた行基上人は、老人をおろすと、ひどく膿みただれた老人のはだをなめ、ウジを吸い取り始めました。するとどうでしょう。上人がなめたところが、どんどん黄金色にかがやき始めたではありませんか。気がついてみると、老人の姿は、いつの間にか光りかがやく仏様に変わっていたのです。

上人は「あつ」とひれふして、おがみしました。

「私は薬師如来（やくしにょらい）です。上人をためすため病人に姿を変えていましたが、上人の慈悲（じひ）の心はよくわかりました。これから有馬へ行って、病気の人たちを救ってやりなさい。」

こうして行基上人は有馬へ行き、さびれ果てていた温泉をたてなおして、多くの病気の人を助けることになったのです。

行基上人は、このときの薬師如来の姿を像に刻み、お堂を建てて祭りましたが、それが現在の温泉寺のはじまりだということです。また別の伝説では、薬師如来を祭る寺を建てようと考えた行基上人が、東に向かって木の葉を投げ、それが落ちたところに建てたのが昆陽寺（こんようじ）だとも伝えています。

えいがしま

エイと一緒に祈りをする

昔、難波（なにわ＝現在の大阪）から瀬戸内（せとうち）の海を通る航路は、とても大切な海の道でした。ふだんはおだやかに見える瀬戸内海（せとないかい）ですが、たくさんの島や浅瀬がありますし、明石海峡（あかしあききょう）のように潮の流れが速いところもあるので、風や波がはげしいときにはたいへんあぶなくなるのでした。

そこで行基上人は、安全に航海できるようにするために、摂津国（せつつのくに）から播磨国（はりまのくに）にかけて、五つの港を築いたと言われています。明石の魚住の泊（うおずみのとまり）の工事は、大変な難工事でした。特に冬の間は、西風が強くふき、播磨灘（はりまなだ）の荒波が打ち寄せます。行基上人が工事を始めると、上人の徳をしたってあたりの村から次々に人が集まってきました。工事は何年もかかり、なかなかはかどりませんでした。何百人、何千人もの人々が、海の底をさらって深くし、ていぼうを築き、長い間かかってようやく港が完成しました。

港の完成を祝って、上人が仏様においのりをしていると、大きなエイが泳いできて、海の中からいっしょにいのったということです。そこで村人たちは、このエイに酒をふるまって帰ってもらいました。それ以来、この地を「エイが向かう島」、江井ヶ島（えいがしま）と呼ぶようになったということです。

その後、魚住の泊は風や波のためにたびたびこわれましたが、多くの人の手によって修理されて、今の江井ヶ島港に受けつがれています。港のそばには、行基上人が開いた長楽寺（ちょうらくじ）があって、上人が刻んだという石のお地藏様が残されているそうです。

紀行「民衆が敬愛した高僧」

行基

行基（ぎょうき）は大仏建立にも尽力した、奈良時代の高僧である。単に高い位についたということではなく、行基自身が生涯の多くを民衆の間に置き、人々のために尽くしたことが、彼が「菩薩（ぼさつ）」とまでたたえられ、敬愛される理由である。行基の高徳は広く語り継がれて、いろいろな伝説を生んだ。その中には、死んだ魚が泳ぎだすといった超自然的な部分もあるけれど、どちらかという、人の病や暮らしに関わるようなものが目につくように思う。

実際に民衆の間で生き、人を救った行基なればこそ、こうした伝説が数多く生まれたのだろう。人が身近にすぎれる存在。それこそが行基伝説の姿なのである。

行基伝説の地は多い。この伝説紀行でもどれを選ぶか、ずいぶんと迷った。ここに挙げるものだけでは到底足りないとは思いますが、自分自身の行基を探してみるというのも面白いのではないだろうか。

昆陽池



昆陽池の景観

昆陽池（こやいけ）は行基が天平3年に築造したという、農業用のため池である。伊丹市（いたみし）から池田市にかけての台地は、古くから「猪名の笹原（いなのみささはら）」と呼ばれ、農業用水の不足する地域であったようだ。行基はこの地に昆陽施院（こやせいん）を建てて農民を救済し、また自ら水田を開墾したという。

現在の昆陽池は、かなりの部分が埋め立てられて、かつての半分ほどになったというが、それでもおよそ28haもの面積がある。周囲のかなりの部分は、人工林とはいえ高さ10m近くに育った林に覆われて、住宅が集まる市街地に大きな潤いを与えている。

昆陽池を何より有名にしているのは、渡り鳥であろう。冬場はガン・カモ類を中心に、5000羽を超えるということで、写真を撮影に来る人も多い。池の中に造られた日本列島は、鳥たちのよい休み場となっているらしい。

1300年前に造られた池が、長い時間をかけてよい環境をつくりだし、それが現代の都市に住む人も救っている。池の役割は変わっても、行基の心はみごとに活かされているのではないだろうか。子孫に財産を残すということはこういうことなのだ、水面を眺めながら思わずにはいられなかった。



昆陽池の景観

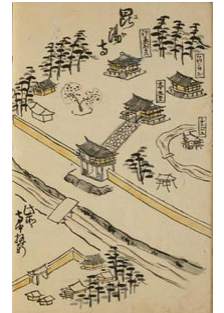
昆陽寺

昆陽寺（こんようじ）は、行基が作った昆陽施院をもとに聖武天皇（しょうむてんのう）が建てた寺で、昆陽池の南1km半ほどの所にある。少し遠回りになるが、池からは「行基上池溝道」をたどるのも良いだろう。わずかではあるが、古い道の雰囲気をとどめる場所も残っている。

国道171号線に面した、朱塗りの堂々とした山門を入ると、落ち着いた境内である。もともとあった伽藍（がらん）は、織田信長（おだのぶなが）が荒木村重（あらかむらしげ）を攻めた際に焼け落ち、現在の建物はいずれも江戸時代に再建されたものだが、山門と観音堂、以前の山門に置かれていたという広目天（こうもくてん）、多聞天像（たもんてんぞう）が県の文化財に指定されている。また寺の本尊は、行基自らが彫ったという薬師如来像（やくしにょらいぞう）である。



昆陽池と昆陽寺(摂津名所図会)



昆陽寺
(摂播記)



昆陽寺の門



本堂



観音堂

昆陽寺の周りには、行基が開いたという井戸や、昆陽の宿跡などもある。西国街道に沿った旧跡を歩くのも、楽しいだろう。

有馬温泉と温泉寺



有馬温泉
(摂津名所図会)



有馬温泉の入り初め
(摂津名所図会)



温泉風景
(摂津名所図会)

有馬温泉は、『日本書紀（にほんしょき）』の舒明紀（じょめいき、7世紀）にも登場するほど、古くから知られた温泉地であったが、その後は衰微していた。その再興につくしたのが行基である。伝説にもあったように行基はここを訪れて、温泉寺を建てた。以来、平安時代末の僧仁西（にんさい）、羽柴秀吉（はしばひでよし）などの尽力によって数度の天災や戦災を越え、現在に至っている。



温泉寺



有馬の町



古い温泉街の風景

温泉寺も、この興亡を経験しながら継続して明治を迎えたが、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）によって堂塔のほとんどが取り壊され、わずかに残された薬師堂を引き継いだのが、現在の寺となったそうである。

潤沢な湯量の温泉源



東播磨の行基

■江井ヶ島



江井ヶ島港



江井ヶ島港

行基の足跡は播磨（はりま）にも多い。明石市（あかしし）には、行基が造った魚住泊（うおずみのとまり）を元に発展した、江井ヶ島港（えいがしまこう）があり、周辺にもゆかりの寺院がある。

江井ヶ島港は、山陽電車江井ヶ島駅の南にある。駅から出て海に向かうと、黒い焼き板の壁の古い酒蔵わきを通り、ほどなく潮の音が聞こえて海岸沿いの道に出会う。その右手が江井ヶ島港である。

海沿いの道は浜の散歩道。海岸沿いに藤江川（ふじえがわ）を渡り、明石川の河口まで続く道である。途中には、「明石原人」発見の地や、ウミガメが産卵する浜などもあり、車は通れないから、散歩やサイクリングの人も多い。この付近は、海から見ると切り立ったがけが続くので、それを見立てて屏風ヶ浦（びょうぶがうら）海岸とも呼ばれている。

その散歩道から少し海岸へ降りた場所に、江井ヶ島の由来を書いた碑が立っている。朝日、夕日を撮影する名所にもなっていて、休日の夕方など、カメラがずらりと並ぶ。

■長楽寺

港を見下ろす高台に村がある。古くからあった村の中の道は、細く入りこんでいて、ちょっとした迷路のようだ。その路地を、地元の人に尋ねながら長楽寺（ちょうらくじ）へたどりついた。

この寺は、行基が刻んだ地蔵尊を祭ったのが始まりとされている。長楽寺の近くには、やはり行基が開基の定善寺（じょうぜんじ）もあって、こちらは行基作の薬師如来が本尊である。

そこから西へ、海岸沿いの道を行くと赤根川（あかねがわ）を渡る。その少し奥まった場所には、三木合戦の際、秀吉に落とされた魚住城跡がある。その先には江井ヶ島の酒蔵が建ち、住吉神社と魚住漁港（うおずみぎょこう）で道は終わる。このあたりの海岸が、『万葉集』にも歌われた名寸隅（なぎすみ）の浜である。



長楽寺



説明板

名寸隅の 舟瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに
藻塩焼きつつ 海人娘子 ありとは聞けど 見に行かむ よしのなければ ますらをの
心はなしに たわや女の 思ひたわみて ためぐり 我れはぞ恋ふる 舟楫をなみ

玉藻刈る 海人娘ども 身に行かむ 舟かちもがも 波高くとも
行きめぐり 見とも飽かめや 名寸隅の 舟瀬の浜に しきる白波

（笠金村（かさのかなむら） 巻6 935～937）

用語解説

【行基】ぎょうき

奈良時代の僧（668～749）。河内国（かわちのくに）出身。父は百済系の渡来人であった。はじめ官大寺で修行したが、後に民間布教をおこなったため律令政府の弾圧を受ける。ため池や水路などのかんがい施設を整備しながら説教をおこない、広く民衆の支持を集めた。東大寺の大仏造営にも協力し、745年には大僧正となった。墓は奈良県生駒市の竹林寺にあり、1235年に金銅製の骨蔵器が発掘されたが、現在はその断片が残されるのみである。

【昆陽池】こやいけ

伊丹市昆陽にあるため池。奈良時代の高僧行基の指導で築造された、「昆陽の大池」である。1972年から都市公園として整備され、現在に至る。面積28.5haの池は、特に冬季の渡り鳥の渡来地として有名である。

【昆陽寺】こんようじ

「こやでら」は通称。

伊丹市にある真言宗の寺院。山号は崑崙山（こんろんさん）。一般には「行基さん」の名で親しまれている。行基が建てた昆陽院（昆陽施院）が元になり、天平5（733）年、聖武天皇の勅願によって建立された。織田信長の兵火にあって16世紀後半に焼失したが、後に再建された。本尊の薬師如来は行基作と伝えられる。

観音堂と朱塗りの山門は県指定文化財。また、山門内に安置されていた持国天、多聞天の像は、平安時代中期の様式をもち、ともに県指定文化財となっている。

【有馬温泉】ありまおんせん

神戸市北区にある温泉。『日本書紀』にもその記録があり、日本最古の温泉のひとつである。

有馬温泉の最古の記録は『日本書紀』で、631年9月に舒明天皇（じょめいてんのう）が行幸して入浴したとある。その後衰微したが、行基が724年に再興。平安時代には白河法皇・後白河法皇も行幸し、『枕草子』にも三名泉としてあげられている。

承徳年間（1097～1099）に山津波の被害を受けるが、建久2（1191）年に大和国吉野河上高原寺（かわかみこうげんじ）の住職仁西上人が再修、薬師如来を守る十二神将になぞらえ12の坊舎を建てた。豊臣秀吉はこの湯が気に入り、夫人を連れてたびたび訪れたという。江戸時代には貝原益軒（かいばらえきけん）が『有馬湯山記（ありまとうざんき）』を記し、湯治場として繁栄した。県内では但馬国の湯嶋（城崎温泉）とともに江戸時代一、二を競う名湯とされた。都から近い事、設備が整っている事、名所やみやげが多い事、湯の種類が多い事などの数々の魅力で、江戸時代から現在まで変わらず観光客をひきつけている。

有馬は、地質学的には活断層「有馬高槻構造線」の西端にあり、断層の亀裂を通して地下深くから温泉水が噴出している構造だとされる。泉源によって泉質が異なり、塩分と鉄分を多く含み褐色を呈する含鉄強食塩泉、ラジウムを含むラジウム泉（ラドン泉）、炭酸を多く含む炭酸泉がある。空気に触れると着色する含鉄強食塩泉を「金泉」、それ以外の透明な温泉を「銀泉」と呼んでいる。温泉の熱源については定説がない。

【温泉寺】おんせんじ

兵庫県神戸市北区にある黄檗宗（おうぼくしゅう）の寺。有馬山と号する。本尊は薬師如来。縁起によれば、724年、行基によって開かれたとされ、仁西を中興の祖とする。

1576年に火災で全山焼失したが北政所によって再建された。その後再び火災にあい、現在の薬師堂は1582年に建立されたものである。明治時代初めの廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）で、豊臣秀吉が有馬大茶会を開催したとされる阿弥陀堂も含め、薬師堂以外の堂塔は全て取り壊された。その後、廃寺となった旧温泉寺の奥の院であった黄檗宗清涼院が寺籍を継いで現代に至る。

【廃仏毀釈】はいぶつきしゃく

排仏毀釈とも書く。明治の初年、政府による神仏分離、神道国教化政策によっておこった、仏教に対する弾圧・排斥運動。1868年の神仏分離令によって、全国各地で神官や国学者などが中心となり、寺院、仏像、仏具などを破壊し、多数の寺院が廃寺となった。1875年に信教の自由が通達されて鎮静化。

【明石原人】あかしげんじん

1931年に古生物学者・考古学者の直良信夫（なおらのぶお）によって、明石市西八木海岸で発見された、ヒトの左寛骨（腰骨）の呼称。実物は1945年に空襲によって焼失した。石膏（せっこう）模型と写真が残されており、戦後、これを研究した東京大学の長谷部言人（はせべことんど）が、北京原人に近い人類と考えて「ニッポナントロプス・アカシエンシス」の名を与えたことから、明石原人と呼ばれるようになった。近年の研究では、現生人類（ホモ＝サピエンス）と同じ特徴をもつとされ、原人説は否定されたため、単に明石人骨と呼ぶことが多い。

【屏風ヶ浦】びょうぶがうら

明石市八木から江井ヶ島に至る約1.4kmの海岸線。海に面して、高さ10mほどのがけ面が続くため、この名がある。

【長楽寺】ちょうらくじ

明石市大久保町江井ヶ島にある寺院。行基の開基とされる。行基の位牌（いはい）、座像や、魚住泊（うおずみのとまり）を築造中に行基が彫ったという地藏像などを伝えている。なお江井ヶ島周辺には、行基が開基と伝える寺院が多く、長楽寺から西の二見港までの間に、定善寺（じょうぜんじ）、薬師院（ボタン寺）、観音寺（行基作という観世音菩薩像）、威徳院などがある。

【江井ヶ島の酒蔵群】えいがしまのさかぐらぐん

江井ヶ島周辺は、17世紀ころから「西灘」とも呼ばれ、酒どころとして知られてきた。これは、東播平野の酒米と、良質の地下水に恵まれたためとされる。現在も、黒い焼き板壁の酒蔵が残り、レンガ造りのウイスキー蒸留所もある。

【魚住城】うおずみじょう

明石市魚住にある、中世の城跡。南北朝時代、赤松長範によって築かれた。天正6（1578）年には、魚住頼治が毛利氏に味方し、別所氏が籠城（ろうじょう）する三木城へ兵糧を運ぶための基地となったが、羽柴秀吉によって妨げられ、成功しなかった。三木城の落城とともに廃絶。1998年の発掘調査によって、堀割（ほりわり）の一部がみつまっている。

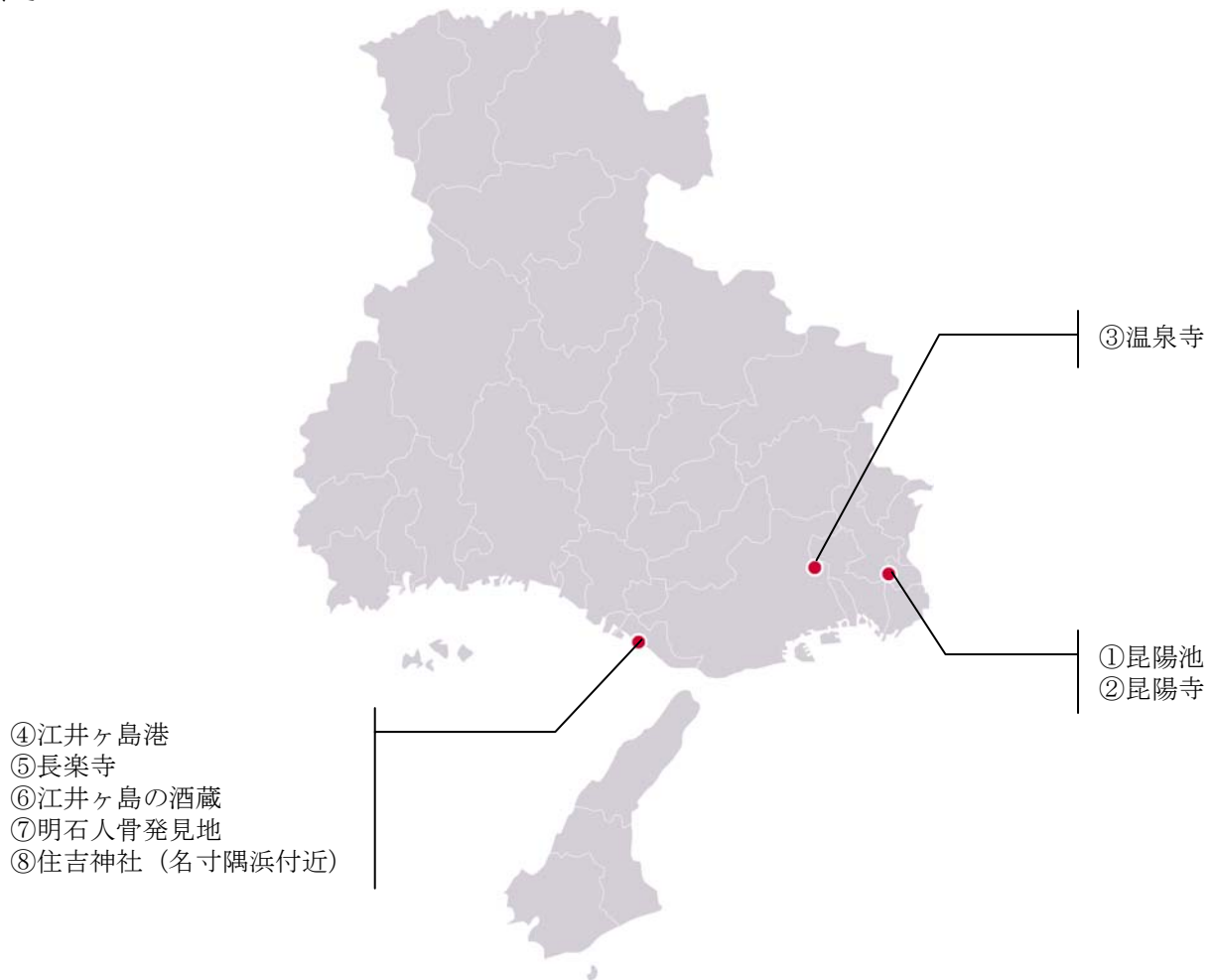
【名寸隅】なぎすみ

万葉集で笠金村（かさのかなむら）が詠んだ浜。明石市大久保町江井ヶ島から、明石市魚住町の住吉神社付近とされている。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	兵庫県大百科事典（上・下）	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



① 昆陽池	伊丹市昆陽池3丁目
② 昆陽寺	伊丹市寺本2-169
③ 温泉寺	神戸市北区有馬町1643
④ 江井ヶ島港	明石市大久保町江井島
⑤ 長楽寺	明石市大久保町江井ヶ島448
⑥ 江井ヶ島の酒蔵	明石市大久保町西島 海岸通り付近
⑦ 明石人骨発見地	明石市大久保町八木字宮西
⑧ 住吉神社 (名寸隅浜付近)	明石市魚住町中尾

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

すりこぎかくしの雪

弘法大師の優しさ

独鈷の滝の大蛇

弘法大師が大蛇を封じる



伝説 すりこぎかくしの雪

弘法大師の優しさ

独鈷の滝の大蛇

弘法大師が大蛇を封じる

紀行 心優しいお大師様

- ・空海と弘法伝説
- ・すりこぎかくしの世界
- ・独鈷の滝と岩瀧寺
- ・水分かれ

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

すりこぎかくしの雪 弘法大師の優しさ

弘法大師（こうぼうだいし）は、真言宗（しんごんしゅう）を開いたお坊さんです。中国で勉強し、学問にすぐれ、たいへん徳の高いお坊さんだったので、多くの人に尊敬され、全国各地にたくさんの伝説が残されています。

但馬（たじま）のお話です。

冷たいみぞれが降り始めた、冬の夕暮れのことでした。ひとりのお坊さんがきたない小さな家の入り口に立って、一晩とめてほしいとたのみました。

お坊さんはとてもつかれていました。手も足も冷たくなって、痛いほどです。お腹もへって、もう一步も歩けませんでした。けれどもどの家も、みすぼらしいお坊さんを泊めてくれません。そしてとうとう最後の、いちばん小さくてきたない家の前に立っていたのです。

「まあまあ、寒かったことだらあなあ。早（はよ）うあがって火にあたんなはれ。何にもないけど、ええ火にやあとたくけえ、ようぬくもってくんなはれ。」

出てきたおばあさんは、親切にこう言ってくれました。

火にあたりながら、お坊さんが見回してみると、家の中には何もありません。とても貧しい暮らしなのがよくわかりました。

お腹がすいたお坊さんをとめてあげようと思ったものの、食べさせてあげるものもなく、おばあさんは途方（とほう）にくれました。どうしたらよいか迷っていましたが、やがて心を決めたように、立ち上がって家から出てゆきました。

体をふらふらさせながら歩く姿を見ると、おばあさんの片方の足は、何と足首から先がなくて、すりこぎのようになっています。

おばあさんはけんめいに歩いて、となりの家ののき先までやってきました。さきほど、お坊さんがとめてほしいと頼んだとき、追いはらうようにしてことわった家です。のきの下には、稲の束がかかっていた。おばあさんはしばらく家の中のようすをうかがっていましたが、やがて手を伸ばして稲をひと束取ると、転がりそうになりながら自分の家にもどってきました。

おばあさんが歩いた後には、すりこぎでついたような足跡がはっきりと残っています。おばあさんが稲をとったことは、すぐにわかってしまうでしょう。

お坊さんがお経を読んでいる声を聞きながら、おばあさんはおかゆをたいて、お坊さんにすすめました。外では、みぞれが雪に変わっていました。雪はやがてお婆さんの足跡をうめ、すっかりわからなくなるほどに積もってゆきました。

この旅のお坊さんは、弘法大師だったのです。弘法大師は、仏様においのりしておばあさんの足跡を雪でかくしてくれたのでした。旧暦（きゅうれき）の11月23日の「寒大師（かんだいし）」の日には、毎年必ず雪が降るそうです。この日の雪のことを、今も「すりこぎかくし」と呼んでいます。

独鈷の滝の大蛇

弘法大師が大蛇を封じる

丹波（たんば）の氷上（ひかみ）というところには、こんなお話が伝わっています。

香良（こうら）の村のおくにある滝に、恐ろしい大蛇（だいじゃ）が住んでいました。滝のまわりは木がうっそうとしげって、昼間でもうす暗くて気味悪いところです。けれども村の人たちが山仕事に行くには、この滝の横を通らなくてはなりませんでした。

いつ大蛇が現れるかわかりませんから、村の人たちはいつもこわい思いをしていました。

「ほんまにこわいのう。いつ大蛇がおそってくるかもしれんで、山へ行くのはいやじゃ。」

「こないだも、山でふっと上を見たら、ひとかかえくらいある大蛇が、松の木に巻きついて赤い舌をぺろぺろさせとったで。思い出してもこわいわ。」

「ほんまにこわいのう。」

昨日はだれかが丸飲みにされたとか、このあいだはだれかが追いかけられたとか、恐ろしい話は広まってゆくいっぽうでした。

ある夜、京の都にいた弘法大師（こうぼうだいし）の夢に、住吉大明神があらわれて、「おまえの力で村の人たちを救ってあげなさい」と告げられました。

そこで大師はさっそく、丹波へとやってきました。

滝つぼへ行ってみると、大明神のお告げの通り、ものすごい大蛇が頭を出して大師をにらみつけ、今にもひと飲みにしようとしています。

「おう、これは村の人もさぞ恐ろしかっただろう。」

弘法大師は滝つぼの前に座ると、さっそくお経をとなえて、一心に仏様にいのり始めました。さすがの大蛇も、お経の力のために、大師におそいかかることができません。三日三晩、大師のとなえるお経が香良の村までひびき、村人たちもこれを聞いて、いつしか一緒においのりを始めるのでした。

四日目の朝、大師は持っていた独鈷（どっこ）を「えいっ」とばかりに、大蛇めがけて投げつけました。すると、人を丸飲みにするほどの大蛇が、みるみるうちに小さくなり、滝つぼの中へ消えていったということです。

その後弘法大師は、天皇にお願いして、滝の近くに岩瀧寺（がんにゅうじ）というお寺を建てました。そして、大蛇を退治できたお礼に、石で不動様の像を作り、祭りました。小さくなった蛇の頭は、お寺の下に池を掘って埋め、そのわきにお堂を建てたそうです。

今でもこのお堂と池は残っていて、「池の中へ石を投げこむと雨が降る」と言い伝えられています。

紀行「心優しいお大師様」

空海と弘法伝説

空海（くうかい）は、平安時代の僧である。唐（とう）へ留学した後、京都の高尾山寺（たかおさんじ）へ入って真言宗を広めるとともに、高野山に金剛峰寺（こんごうぶじ）を建設。さらには東寺（とうじ）を下賜されて、真言宗の根本道場としている。835年に62歳で死去し、921年に醍醐天皇（だいごてんのう）から「弘法大師（こうぼうだいし）」の諡号（しごう）が贈られた。

空海は、単なる「唐へ留学したインテリ」だったわけではない。香川県にある日本最大の農業用ため池、満濃池（まんのういけ）を改修する際には、その責任者として当時の最新技術を駆使した工事を成功させていることを見ても、彼が唐で学んだことの幅広さがわかる。そういう活躍が、いつの間にか人々の間で、伝説を産む元になったのだろうか。

伝説の中には、「空海」という名は出てこない。出てくるのはすべて弘法大師である。死後90年近く経って贈られた名の方が、生前の名よりもはるかに広く語られ、人々の間に定着したのは、どうしてなのだろう。弘法伝説を読むたびに、疑問が浮かぶ。もしかすると民衆にとっては、生きた人としての空海よりも、霊としての弘法大師こそ、信じ求めるものだったのだろうか。

すりこぎかくしの世界

但馬（たじま）は雪深い土地である。一晩に何十センチも積もることも、珍しくはない。雪深い土地であればなおのこと、暮らしには厳しいものがあつただろう。「すりこぎかくし」は、そんな世界に住む貧しい、生まじめな老女の小さな悪事—自分ではなく他人のために働いた行為—を、弘法大師がそっと隠してやるという物語である。お大師様は、貧しくてもまじめな者の味方をしてくれる。そんな素朴な思いが込められた物語なのだ。

但馬には、豊岡市（とよおかし）の東楽寺（とうらくじ）、養父市（やぶし）の日光院（にっこういん）、養父市別宮（べっくう）の大カツラなど、空海にゆかりの場所がいくつかある。しかし伝説が伝わる新温泉町（しんおんせんちょう）内では、「空海開基」の寺をみつけることができなかった。ここでは空海は、文字通り伝説上の「弘法大師」として生きているのだろうか。古いお寺をめぐって、そんなことを考えた。

■相応峰寺

相応峰寺（そうおうぶじ）は、岸田川（きしだがわ）が日本海に注ぐ河口のすぐ東、浜坂町清富（はまさかちょうきよどめ）の観音山（かんのんざん）にある天台宗の寺である。岸田川に沿った心地よい道を海へとたどり、河口の手前で川を東へ渡ると、左手に見える小高い山が観音山。そのすそに、寺の里坊が見える。

この寺は、奈良時代に行基（ぎょうき）が開いたとされる。弘法大師と同じように民衆に慕われ、菩薩（ぼさつ）と呼ばれた行基は、但馬でも同じように人々を救ったのだろう。坊のわきには、眼病や流行病に効くという金水・銀水がわく。

里坊のわきから、山道を登る。道に沿って石仏が並び、登る人を頂上へと導いてくれる。息を切らせながら20分も登ったろうか。ようやく鐘楼の姿が見え、その奥に本堂の円通殿がある。高い杉木立に囲まれた、静かな場所だ。

本堂の裏手からさらに登ると、観音山の山頂である。芝生広場になっている山頂からは、日本海の雄大な景色が180度広がる。はるかに下の岩場に砕ける波頭が見えるが、波音は聞こえない。遠くかすむ海にしばし見とれて、足の疲れも忘れてしまった。

山頂のすぐ下には、高いポールが立つ。毎年ここに大きな鯉のぼりが泳ぐそうなので、いつか是非見てみたいと思う。

■正福寺

湯村温泉のまん中にあるのが、平安時代前期、湯村温泉（ゆむらおんせん）を発見した慈覚大師円仁（じかくだいしえんにん）が開いた正福寺（しょうふくじ）である。国道9号線から離れて春来川（はるきがわ）を渡り、川に沿った細い道を温泉の中心街へ向かうと、その途中に本堂への長い階段があった。



正福寺の境内



本堂



岸田川から見た観音山



相応峰寺



相応峰寺



里坊の石仏



本堂(観音山上)



山上からの眺望



山道の石仏



本堂そばの石像



参道



説明板

日の出直前の時間だというのに、もうゆかた姿の人が道を歩き、足湯に浸っている人もいる。川沿いに上がる湯気が、いかにも温泉場らしい。

階段の上に、堂々とした門がそびえる。本尊は県の文化財に指定されている、平安時代後期の木造不動明王像で、この像は21年ごとに開帳される秘仏である。前回の公開は2004年だったそうだから、次は2025年になるのだろうか。

秘仏は滅多に見ることはかなわないが、境内のまん中にある桜は、毎年花を見せてくれる。この木は、ヤマザクラとキンキマメザクラが自然交雑して生まれたもので、植物学者牧野富太郎（まきのとみたろう）によって発見、命名されたという歴史をもつ。現在のところ兵庫県固有のもののように、正福寺桜の名で親しまれ、町の天然記念物にも指定されている。

独鈷の滝と岩瀧寺



独鈷の滝



独鈷の滝

丹波にも弘法大師の伝説がある。その地のひとつ、氷上町（ひかみちょう）の香良（こうら）を訪ねた。加古川（かこがわ）が佐治川（さじがわ）と名を変える上流部である。

丹波山地の広い谷筋にできあがった、緩やかな斜面に沿って香良の村がある。伝説が伝わる独鈷の滝は、その谷奥、山腹に露頭した荒々しい岩盤を流れ落ちている。道が山すそにかかると周囲は一気に森へと変わり、車から降りると、湿気を含んだ空気が体を包む。独特の、森の香気を含んだ空気である。

そこから山道を詰めてゆくと、間もなく高く切り立つ岩盤が目に入る。ところが激しい水音は聞こえているのに、滝は見えない。不思議に思いながら滝壺の前まで小径を行くと、ようやく、岩の壁の裏側を、えぐるように流れ落ちる滝を目にすることができた。

高くはないけれど、美しい滝だ。流れ落ちる水は、上の方では日の光を浴び、淡い木陰へと落ちてゆく。滝壺の手前にはモミジの木が何本か伸びていて、紅葉の時は、きっと素晴らしいコントラストを見せてくれるに違いない。人を呑むほどの大蛇がいたにしてはつつましい滝壺からは、清らかな水が流れ出していた。



岩瀧寺(本堂)



山門

滝のすぐ下手には、岩瀧寺（がんにゅうじ）がある。

岩瀧寺は、平安時代の初め頃、嵯峨天皇（さがてんのう）が空海に命じて建立した寺だと伝えられている。弘仁年間（809～823）のことだということから、空海が40代のころだろうか。七堂伽藍（しちどうがらん）を備えた大寺だったというが、戦国時代の兵火によって焼失して、かつての伽藍は残っていない。現在の堂は、近世に再建されたものとのことである。



龍

小さいながら風格がある門や、檜皮葺（ひわだぶ）きの本堂が、背後の山や高い木々と相まって、落ち着いた、しかし明るい雰囲気を作っている。滝から境内は紅葉の名所とのことだし、寺の案内にある雪景色は、山水画のような美しさであるが、まだ見る機会がない。

こんな美しい場所に、どうして恐ろしい大蛇の伝説ができ、それが弘法大師と結びついたのだろうか。あるいはそれは、時に人知が及ばないほど猛り狂う水を治めたいという願いが生んだ伝説なのだろうか。

水分かれ



水分かれ

氷上には、もうひとつ水に関わる大切な場所がある。それが水分かれである。加古川は、氷上町に入ると佐治川と名を変え、ちょうどそこで一本の支流が分岐し、東へと向かう。これが高谷川（たかたにがわ）である。高谷川は、まもなく氷上町石生（いそう）の谷ふところへと入ってゆくが、この谷へはもう一本の川—黒井川（くろいがわ）—も源をもっている。

黒井川は高谷川とは反対に、谷を下ると東へ流れ、由良川上流部の竹田川に合流する。つまりこの谷から流れ出た水は、加古川と由良川（ゆらがわ）、瀬戸内海と日本海に流れる二つの川へと注ぐのである。本州の中で最も低高度の中央分水界であるこの地は、古くから「水分かれ（みわかれ）」と呼ばれた。

水分かれの重要性は、単に「最も低い分水界」という地形学的なものだけではない。瀬戸内側から日本海側へと抜けようとする、兵庫県の場合必ず中国山地の峠を越えなくてはならないが、水分かれの谷を経由して加古川から由良川へ抜ける道は、峠越えの必要がないのである。そのため古代から、このルートを通して人と物の交流がおこなわれていたと考えられているのだ。

最近水分かれのあたりは、ずいぶんきれいに整備されて公園となっている。川もコンクリートや石垣で固められて、日本海と瀬戸内海への分岐部分も人工的な流路になってしまった。周辺の桜並木は美しいだろうけれど、これではホタルも住めないだろうと少し残念である。



左瀬戸内海、右日本海・・・

用語解説

【相応峰寺】そうおうぶじ

新温泉町に所在する天台宗の寺院。観世音山と号する。浜坂湾に突き出た岬にある、観音山山頂に本堂、そのふもとに里坊がある。行基が737年に開いたとされる。本堂には平安時代前期の十一面観音立像があり、国重要文化財に指定されている。

【正福寺】しょうふくじ

新温泉町に所在する天台宗の寺院。天竜山と号する。848年に、慈覚大師が湯村温泉を開発した際に創建したと伝えられ、湯村温泉の荒湯を見下ろす高台に建つ。本尊は、平安後期の作とされる不動明王立像で、県指定文化財。境内に、正福寺桜と呼ばれる桜があり、県天然記念物に指定されている。

【正福寺桜】しょうふくじざくら

キンキマメザクラとヤマザクラの自然交配種とされる八重桜で、兵庫県の固有種といわれている。植物学者牧野富太郎により、「*Prunus tajimaensis*」の学名が与えられている。がく片10枚、1つの花に雌しべが2~4本ある珍しい桜で、花と赤い葉が同時に育つため、満開のころは桜の木が真っ赤に見えるという。

【岩瀧寺】がんだりゅうじ

丹波市氷上町にある真言宗の寺院。寺伝によれば、弘仁年間（809~823）に、嵯峨天皇が霊夢にもとづいて、空海をこの地に派し、伽藍（がらん）を整備させたという。16世紀の後半に、兵火によって全山を焼失し、その後領主の別所重治により再興。18世紀以降も、九鬼氏（くきし）らによって堂宇の再興がおこなわれたという。

寺の背後をなす山地には、独鈷の滝、不二の滝と呼ばれる滝があり、特に紅葉の名所として知られる。

【独鈷】どっこ

とっこ、独鈷杵（とっこしよ）ともいう。

密教で用いられる法具、金剛杵（こんごうしよ）の一種。鉄製または銅製で、両端がとがった短い棒状のもの。煩惱をうち砕き、人間本来の仏性をひきだす道具とされている。

【由良川】ゆらがわ

兵庫県・京都府北部を流れる河川。丹波高地の三国岳（標高959m）に発し、北流して、舞鶴市と宮津市の境界をなしつつ若狭湾に注ぐ。兵庫県丹波市からの支流である黒井川は、同市氷上町石生に発するが、加古川水系の高谷川もここから流下する。両川の分水嶺（ぶんすいれい）は標高94.5mで、太平洋側と日本海側を分かつ本州中央分水界では最も標高が低く、古来水分れ（みわかれ）と呼ばれる。宮津市由良は、かつては由良川水運の港として栄えた。

【分水界・分水嶺】ぶんすいかい・ぶんすいれい

雨が、二つ以上の水系へ分かれて流れる境界。通常は山の稜線（りょうせん）が分水界となる。

【醍醐天皇】だいてんのう

第60代の天皇（885～930）。在位は897～930年。藤原時平を左大臣に、菅原道真を右大臣に任じ、天皇親政による積極的政治の運営をして、律令政治が最後の光彩を放つ「延喜の治」を創出した。道真の失脚後は藤原氏の勢力が拡大した。

【空海】くうかい

平安時代前期の僧（774～835）。弘法大師（こうぼうだいし）の諡号（しごう）で知られる、真言宗の開祖。最澄（伝教大師）とともに、奈良仏教から平安仏教への、転換点に位置する。また書道家としても知られ、嵯峨天皇（さがてんのう）・橘逸勢（たちばなのはやなり）とともに「三筆」と呼ばれる。

空海は、讃岐国の豪族佐伯氏の子として、現在の香川県善通寺市に生まれた。15歳で論語、史伝等を学び、18歳で京の大学に入った。20歳ごろから山林での修行に入り、24歳で儒教・道教・仏教の比較思想論でもある『三教指帰（さんきょうしいき）』を著した。

延暦23（804）年、遣唐使留学僧として唐に渡る。804年～806年にかけて、長安の醴泉寺（れいせんじ）、青龍寺などで学んだほか、越州にも滞在して土木技術、薬学などを学んだ。806年に帰国。本来の留学期間20年に対し、実際の在唐はわずか2年であった。

帰国後、東寺（教王護国寺）を賜って真言宗の道場とし、816年には高野山に金剛峰寺を開いて真言宗の興隆につとめた。また私立学校として、綜芸種智院（しゅげいしゅちいん）を開設した。

弘仁12（821）年、満濃池（まんのういけ、香川県にある日本最大の農業用ため池）の改修を指揮して、当時の最新工法を駆使した工事を成功に導いたとされる。

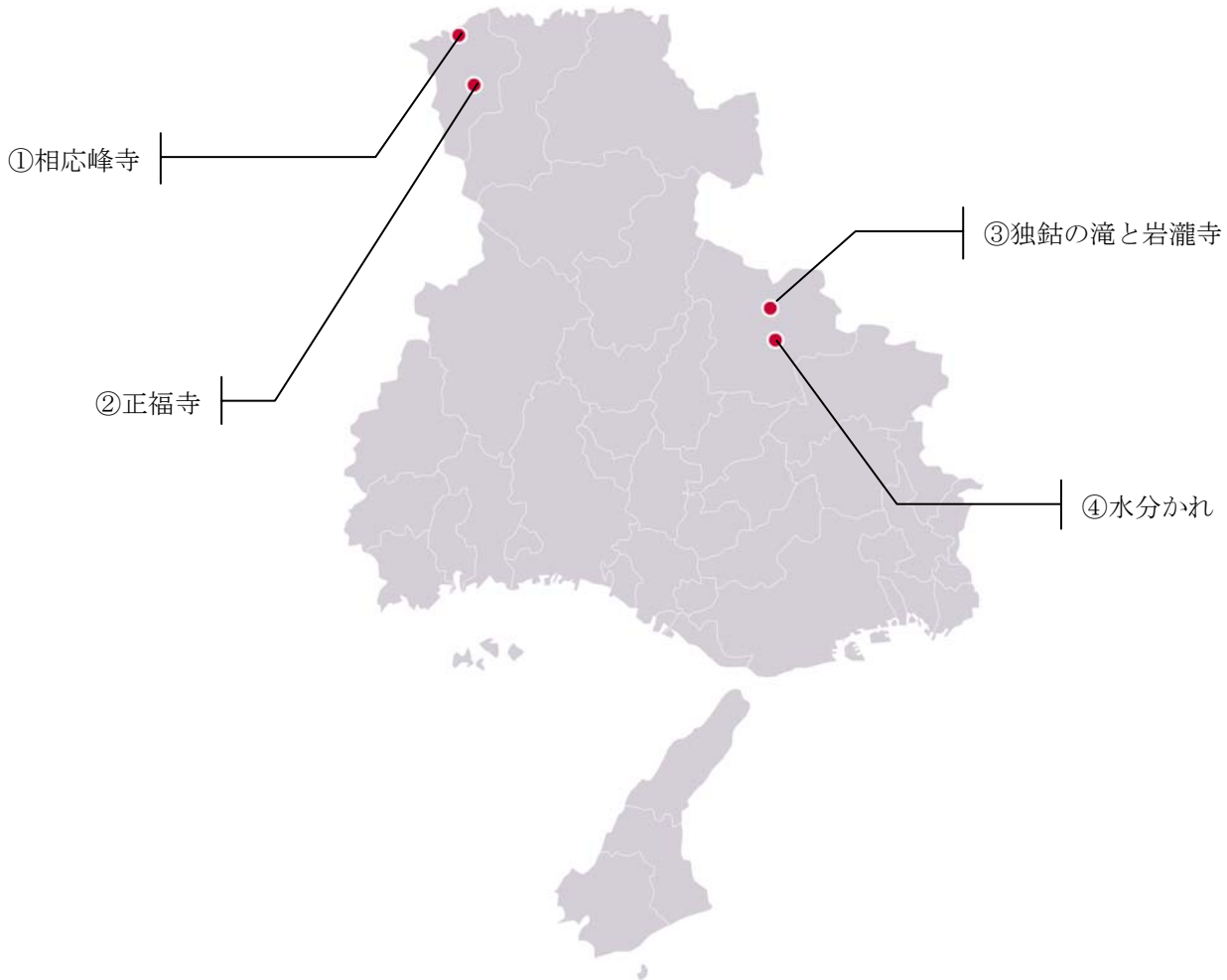
承和2（835）年、高野山で入定（にゅうじょう）。なお真言宗では、空海の入定は死ではなく永遠の禅定に入れたものとしている。

「弘法大師」の諡号は、延喜21（921）年醍醐天皇より贈られたものである。従って、北海道を除く全国に5000以上あるという弘法伝説のほとんどは、空海の歴史的事跡とは関係がない。その成立には、中世に全国を勧進してまわった遊行僧である、高野聖（こうやひじり）の活動も関連しているとされるが、一方で、仏教のみにとどまらない空海の幅広い活動と、それに対する民衆の崇敬が、伝説形成の底辺にあることも確かであろう。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫のふるさと散歩5. 丹波編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	丹波のむかしばなし第1集	1998	丹波のむかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本昔話通観第16巻兵庫	1978	稲田浩二・小沢俊夫編	同朋社
	兵庫のふるさと散歩5. 丹波編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	神戸の伝説散歩 ※兵庫ふるさと散歩11	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター
	日本伝説大系第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
その他	岩瀧寺 ※参拝者用資料	不詳	岩瀧寺	岩瀧寺

所在地リスト



①相応峰寺	新温泉町清富
②正福寺	新温泉町湯174
③独鈷の滝と岩瀧寺	丹波市氷上町香良613-4
④水分かれ	丹波市氷上町石生

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

粉喰い坂（こくい坂）

義経ひとときの休息



伝説 粉喰い坂（こくい坂）

義経ひとときの休息

紀行 こくい坂 ～義経伝説を訪ねる～

- ・こくい坂と亀井ヶ淵
- ・弁慶の重ね石
- ・国位田碑
- ・義経の腰掛け石

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

粉喰い坂（こくい坂） 義経ひとときの休息

1184年、播磨（はりま）は、源氏（げんじ）と平氏（へいし）の戦乱のまっただ中にありました。政治をにぎり、栄華をほしいままにしていた平氏に対して、源氏の一族が兵をあげ、その戦いが激しさを増していたのです。

京の都を捨てた平氏の軍勢は、播磨で態勢を立て直そうとしていました。源氏は、平氏をたおそうと、播磨へ攻めこみます。源義経（みなもとのよしつね）は、その源氏の一軍をひきいていました。

義経の軍勢は、丹波国（たんばのくに）から播磨を経て、山間の道を鶴越（ひよどりごえ）に向かっていました。めざすは一ノ谷にある平氏の陣地です。草深い道をぬって、小野の檜山（かしやま）まで来たとき、山のふもとに一軒の農家がありました。道をたずねようと、義経はその前に馬をとめました。

家から出てきた老女は、山ごえの道をていねいに教えてくれました。そのやさしそうなようすに、義経は思わず馬から降りました。何とはなしに、幼いころ別れたきりの、母のおもかげを見たような気がしたのです。全軍に休息を命じて、義経は、そばにあった大きな石に腰（こし）をおろしました。

「せっかくお休みになりますのに、おん大将に差し上げるようなものもございません。このような粉飯（こめし）でよろしければ、どうぞおめし上がりください。」

老女は、さきほどできたばかりの粉飯を、おわんに入れて差し出しました。

一口食べた義経は、「焼き加減といい塩加減といい何とも言えぬ。これから戦に向かう身には、本当にありがたい、思いもかけない幸せだ」と、たいそう喜びました。

その時です。休んでいた兵士たちの間から、「わあっ」という声があがりました。強弓（ごうきゅう）の使い手で有名な亀井八郎（かめいはちろう）が、「行軍につかれた兵士たちのために、もっと水をあたえたまえ。」と神仏に念じながら山に向かって矢を射たところ、その矢がつきささった場所から、きれいな水がふき出して、みるみるうちに泉となったのです。

「これこそ、神仏のご加護があるしるしだ。このたびの戦は、必ず勝つ。」

兵士たちはみな、大いに勇気を得ました。弁慶（べんけい）も、力試しとばかりに大岩を積み上げてみせたそうです。

義経は立ち上がりました。もてなしのお礼にと、老女へ六畝（せ）の田をあたえ、村の役人には、この田から決して税を取らぬように命じました。そして、ひらりと馬にまたがると、軍勢をひきいて勇ましく檜山の坂を登ってゆきました。

しばらくして、義経の軍勢が、一ノ谷で大勝利をおさめたという知らせが、この村にも届きました。そしていつのころからか、義経が登っていった坂道のことを、「粉喰い坂」と呼ぶようになったということです。

紀行「こくい坂 ～義経伝説を訪ねる～」

兵庫県下には源義経（みなもとのよしつね）や弁慶（べんけい）の伝説が数多く残っている。源平の戦いの舞台になった場所であるから、当然といえば当然なのだが、その背景には、やはり一代の英雄への哀惜の念もあるのだろう。

小野市檜山（かしやま）周辺に残された伝説は、それぞれの場所に伝えられる話が不思議な現実味をおびている。

こくい坂と亀井ヶ淵



こくい坂



こくい坂

こくい坂を訪ねたのは、早朝であった。家々の屋根の向こうに、加古川（かこがわ）にかかる朝もやがゆっくりと流れてゆくのが見える。足下の草は朝露を含んで、靴をぬらした。こくい坂は、神戸電鉄檜山駅の南西500mほどに位置する、檜山の南にある丘を登る坂である。竹やぶと雑木に覆われた丘の斜面に、人ひとりが歩けるほどの細い道が続いている。今ではもう、歩く人も滅多になさそうだが、良く手入れされていた。

とても大軍勢が登れそうには見えないが、現在のように道路が整備される前には、これが三木方面へ抜ける道の一つだったのである。

こくい坂から少し奥まった山すそに、亀井ヶ淵がある。あぜ道を歩いて傍まで行ってみると、直径が2mほどの円い水たまりとなっていた。見たところは、明らかに人工の水だめである。それがどうして「矢で射た場所から水が噴き出した」ことになったのだろうか。

山すそだから、もともと水がわきやすい場所だったのは確かだろう。豊かな水量が、いつしか義経伝説と結びついていったのだろうか。もしこの水だめが義経のころにあったなら、兵士と軍馬のために、うってつけの水場になっただろう。

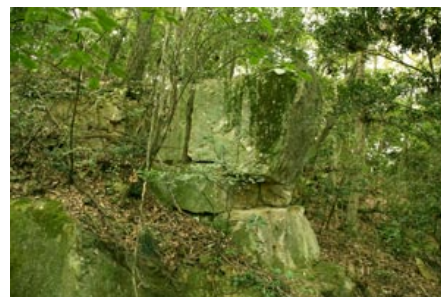
亀井ヶ淵
(説明板)

亀井ヶ淵

弁慶の重ね石

この丘を南西に回り込んだ場所に、弁慶の重ね石がある。山すそに立つ案内の石碑から急な斜面を登ると、雑木林の中に数メートル四方もあるような、巨大な岩があった。丘の骨組みの岩盤が、中腹に顔を出しているのだ。けれど、ちょうどその中ほどに実にうまい具合に水平のきれつが走っていて、まるでそこで積み上げられたかのように見える岩である。

誰でも思わず、「なるほどね」とつぶやくのではないだろうか。もっとも、山を持ち上げようとしたり、怪物を討ち果たしたりした弁慶だから、この程度の岩を重ねるくらいは、朝飯前であっただろうけれど。



弁慶の重ね石

弁慶の重ね石
(説明板)

国位田碑



国位田碑



国位田碑

粉飯（こめし）へのお礼として、義経が老婆に与えた六畝（せ）の田は、江戸時代になるまで免租の田として続いていたというから、それが本当なら400年ほども引き継がれたことになるだろうか。時代が移り、支配者が変わる中で、それほどまで長く続いた理由は何だったのだろうか。

単なる権力者の威光だけでは、とてもそこまでは続くと思えない。村人たちの思いが込められていたからこそ、時代を超えて引き継がれたと思いたい。今はもうその田がどこであったのか知るすべはなく、檜山の村の中には、国位田碑（こくいだのひ）だけが残されている。

義経の腰掛け石



義経の腰掛け石

義経の腰掛け石は、神戸電鉄檜山駅のすぐ傍にある。ちょうどプラットホームの一番北端あたりであるが、そこまで行くには、駅前の旧道を50mほど北に歩き、遠慮しながら民家の庭先を入らなくてはならない。わかりにくい場所だったが、近所の方に尋ねると「ああ、その家をはいるんやで」と教えてもらった。

木立に隠れるように笠（かさ）形の巨石がすわっていて、その前に小さな祠（ほこら）があり、花と線香が供えられていた。

見たところは、古墳の石室を覆う天井石のように見える。かつて檜山には、後期の古墳群があったから、人知れず破壊されてしまったものもあっただろう。その巨石が運ばれないまま残されて、いつしか義経と結びついていったのかもしれないと想像してみた。

檜山に点在する義経伝説の地は、どこもごくさやかな場所である。立派な寺や石造物があるわけではない。けれどもそこに、義経主従への思いを重ねてきた村人たちの歴史が、いつしかその場所を伝説にしていたのではないだろうか。身近にある場所で語り継がれた伝説は、これからも暮らしの中で生き続けてゆくことだろう。



義経の腰掛け石（祠）

義経の腰掛け石
（説明板）

用語解説

【源義経】みなもとのよしつね

平安時代後期の武士（1159～1189）。清和源氏、源義朝（みなもとのよしとも）の九男で、源頼朝、範頼の異母弟にあたる。『平治物語』、『平家物語』、『義経記』などにその生涯が語られるが、記録による裏付けができないものが多い。

頼朝の挙兵とともに参戦し、源義仲追討、平氏追討などに顕著な活躍をしたが、しだいに頼朝と不和となり、平氏滅亡後、頼朝に無断で官位を得たことを契機として対立した。頼朝による追討を受けて、近畿から東北の平泉（岩手県南部）へ逃れ、一時は奥州藤原氏（藤原秀衡、ふじわらのひでひら）の庇護（ひご）を得たが、秀衡の死後、後を継いだ藤原泰衡（ふじわらのやすひら）は頼朝の圧力に抗しきれず、義経を襲撃して自刃させた（衣川の戦い）。

英雄的な活躍と、その後の悲劇的終末から、物語を通じて多くの人の同情を呼び、「判官びいき」といった言葉を生んでいる。

【一ノ谷の戦い】いちのたにのたたかい

寿永3（1184）年に、現在の神戸市西部でおこなわれた源氏と平氏の戦い。この前年に都落ちした平氏は、西国で軍を再編して摂津福原へ進出した。これに対し京都に駐留していた源範頼（みなもとののりより）・義経軍は、後白河上皇による平家追討の宣旨を獲得して京都から福原へ向かい、生田、一ノ谷から大輪田の泊付近に布陣した平氏と戦った。この際、範頼・義経軍は二手に分かれて平家軍を急襲する。物語上有名な、義経による「鶴越（ひよどりご）えの逆落とし」である。戦闘は激戦となったが、平氏は多くの武将を失って四国へ敗走した。

【畝】せ

日本古来の面積の単位。1畝は、約100平方メートル。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	ふるさと伝え語り	1998	小野の歴史を知る会	小野市文化連盟
歴史・文化等	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	おの ふるさと マップ 5 いちばを歩く・・・	2005	小野市教育委員会	小野市教育委員会

所在地リスト



- ①こくい坂と亀井ヶ淵
- ②弁慶の重ね岩
- ③国位田碑
- ④義経の腰掛け石

①こくい坂と亀井ヶ淵	小野市檜山町
②弁慶の重ね岩	小野市檜山町 (県道加古川－小野線東側)
③国位田碑	小野市檜山町 (檜山町公民館横)
④義経の腰掛け石	小野市檜山町 (神戸電鉄檜山駅北西脇)

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

弁慶の鏡井戸

弁慶若き日の破天荒な大暴れ

弁慶岩

怪力無双弁慶の化け物退治



伝説 弁慶の鏡井戸

弁慶若き日の破天荒な大暴れ

弁慶岩

怪力無双弁慶の化け物退治

紀行 弁慶ここにあり ～愛すべきヒーローの伝説～

- ・ 弁慶の人となりと兵庫の弁慶伝説
- ・ 始まりは書写山
- ・ 弁慶地蔵
- ・ 山を運ぼうとした弁慶
- ・ 幻の弁慶岩

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

弁慶の鏡井戸

弁慶若き日の破天荒な大暴れ

弁慶（べんけい）といえば、源義経（みなもとのよしつね）の家来で、剛勇無双（ごうゆうむそう）の人として有名です。一方で、義経と運命を共にした悲運も、多くの人にお生まれ、愛された理由かもしれません。弁慶の伝説は全国各地に残されていますが、とてつもない武勇伝がたくさんあります。そして兵庫県にも、弁慶の伝説は数多く伝えられています。

弁慶は青年時代一時期を、書写山円教寺（しょしゃざんえんぎょうじ）で過ごしました。もとは比叡山（ひえいざん）にいたのですが、どうやらいたずらや悪行が過ぎて、山を追い出されたらしいのです。

書写山にやって来た弁慶は、しばらくの間、修行者として心静かに仏に仕えました。そんなある夏のことです。説法を聞きにやってきた若い僧が、いたずらをしてやろうと、弁慶に酒をすすめました。弁慶はしたたかに飲み、酔いつぶれてねむりこんでしまいます。僧はさっそく、弁慶の顔に墨（すみ）でいたずら書きをしました。

まず右のほおに暴れ馬の絵をかいて、

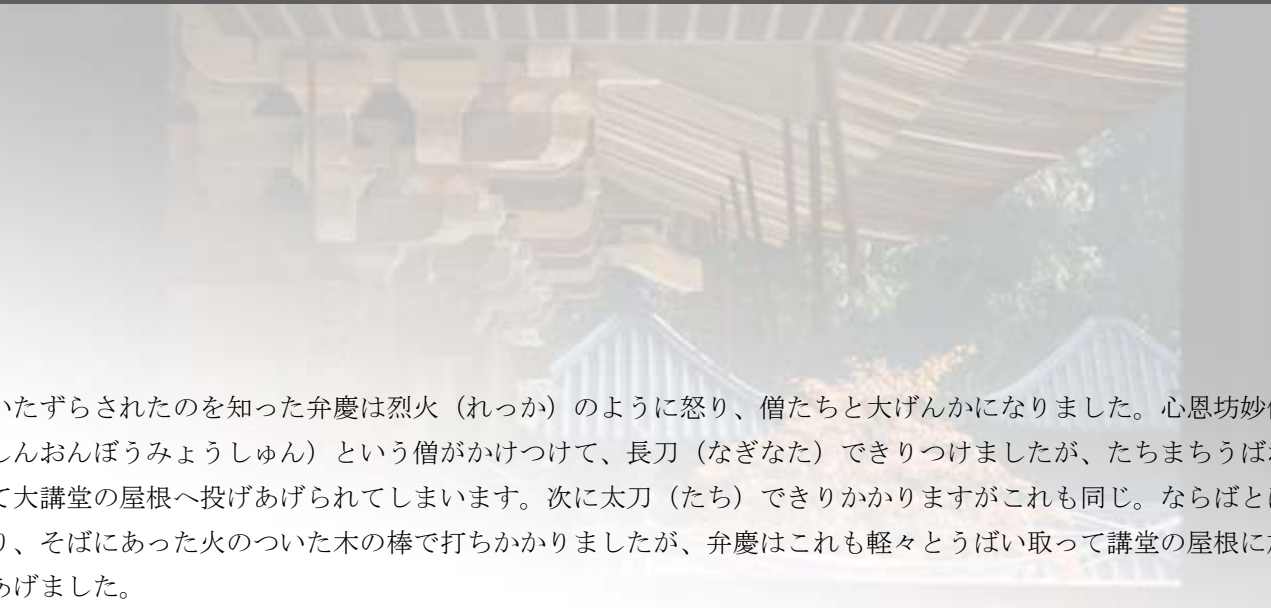
「武蔵坊 荒れたる駒（こま）に さも似たり 拍子をはけて つなぎ止めはや」

左のほおには、平げたの絵をかいて、

「弁慶は 平げたにこそ 似たりけれ 目より鼻緒（はなお）を すけてはかはや」

まわりの僧たちは、これを見て大笑いしました。

その声でようやく目を覚ました弁慶を見て、あたりの者はいっそう笑います。不審に思った弁慶は、食堂から走り出て、とりにあった井戸の水に顔を映して見ました。



いたずらされたのを知った弁慶は烈火（れっか）のように怒り、僧たちと大げんかになりました。心恩坊妙俊（しんおんぼうみょうしゅん）という僧がかけつけて、長刀（なぎなた）できりつけましたが、たちまちうばわれて大講堂の屋根へ投げあげられてしまいます。次に太刀（たち）できりかかりますがこれも同じ。ならばとばかり、そばにあった火のついた木の棒で打ちかかりましたが、弁慶はこれも軽々とうばい取って講堂の屋根に放りあげました。

ついには、取り囲んだ僧たちがどっと打ちかかりましたが、もちろん弁慶の敵ではありません。きりつける者を次から次へとなぎたおし、とうとう五十人余りをきり捨ててしまいます。弁慶のあまりの強さに、残った者はくもの子を散らすようににげてしまいました。

折からの風に、棒に残っていた火はたちまち燃え広がって、またたく間に、大講堂（だいこうどう）、多宝塔（たほうとう）、文殊堂（もんじゅどう）、五重の塔（ごじゅうのとう）などへ広がって、全山は炎に包まれてしまったといいます。

弁慶は、「仏や伽藍（がらん）にはうらみはない。必ず再建しよう」と言い残して去ってゆきました。

その後、朝廷（ちょうてい）の命令で円教寺が再建されたとき、弁慶はふたたび書写山を訪れて、「新しい伽藍ができたのは、農（わし）のご奉公によるものだ。農は悪行を好むから、平家の太刀を千本うばって、比叡山に供えよう」と仏にちかったということです。

それが後に京の都での、義経との出会いにつながることになろうとは、この時、弁慶自身夢にも思っていなかったにちがいありません。

弁慶岩

怪力無双弁慶の化け物退治


但馬（たじま）地方のお話です。

ある夜、真っ暗な道を、ひとりのお百姓さんが家に向かって歩いていました。急ぎ足で帰りたいのですが、あんまり暗いのでそうもゆきません。ようやく前原清水（まえはらしみず）という所まで来たとき、前の方にぼんやりと白いものが見えました。

「むかえに来てくれたのかな」と、喜んで立ち止まっていると、その白いものはどんどん近づいてきます。くらやみにうかびあがったその姿を見て、お百姓さんは腰をぬかしてしまいました。それは、背たけが二メートル以上もある、髪の毛をふりみだした怪物だったのです。

はいつくばったまま、息をつまらせているお百姓さんに気づかなかったのか、怪物はずしん、ずしんと通り過ぎてゆきました。まもなく、「ずずーっ、ずーっ」という音がするので、そっと顔を上げてみると、目の前の川の水がさかさまに流れるほどの勢いで、怪物が水を飲んでいました。

水を飲み終わると、怪物はまた、大きな足音をひびかせながら通り過ぎてゆきました。



お百姓さんはしばらく、こしをぬかしたまま動けませんでした。やがて月がのぼってきたので、ぶるぶるふるえる足で、ころがるように村へかけ込みました。

この話を聞いて、村の人たちはとほうにくれました。なにしろこの道は、山へ草かりに行くための一本道なのです。困り果てた村の人たちは、この怪物を退治してくれるよう、弁慶にたのむことにしました。

弁慶はさっそく、馬に乗ってやってきました。そして怪物が出る道で、仁王立ちに立って待っていました。

日が暮れてしばらくすると、怪物が水を飲みにあられました。待っていた弁慶は、大長刀（おおなぎなた）を風車のようにまわすと、「えいっ」というものすごい気合いとともにきりつけました。確かに手応えがあったと思ったとたん、怪物の姿はけむりのように消えて、あとにはくらやみだけが残っていました。

朝になってみると、そこには昨日までなかった大岩がころがっていました。そのまん中に長刀の傷が二メートルほどもついていて、そこからたくさんの血が流れていました。

怪物は弁慶にきられるとき、岩に化けようとしたのですが、岩になりきるより早く、弁慶の大長刀できられてしまったのでしょう。怪物が化けた大岩は、弁慶岩とよばれ、長い間そこに残っていたそうです。

紀行「弁慶ここにあり ～愛すべきヒーローの伝説～」

弁慶の人となりと兵庫の弁慶伝説

弁慶（べんけい）が実在の人物かどうかという論争が、古くからあったと聞くと、意外な感じがする。生涯、源義経（みなものよしつね）につき従った人物であるのに、実在かどうかを疑われるほど、この人についての記録は少ないのだ。だから、多くの人が知っている弁慶像そのものが、むしろ伝説から生まれたと言っていいのかもしれない。剛勇無双、怪力、破天荒。弁慶の伝説は、そんな話ばかりであるからだ。

しかしその伝説には、彼の人間離れた活躍を描きながらも、どこかちょっと間が抜けていたり、ユーモラスな人物像を語ったりしたものも多い。多くの人が弁慶を語り伝えるたびに、おそらく少しずつ脚色され、あるいは期待を込めて語られることで、「スーパーヒーロー弁慶」ができあがっていったのだろう。

兵庫にもたくさんの弁慶伝説があって、小さなものまで含めると、数えることも難しそうである。その中に、主君義経と出会う前の、若き日の弁慶が語られる伝説があるというのも興味深い。源平合戦の舞台でもあった兵庫県には、より色濃く、義経主従のうわさが語られたためなのだろうか。

始まりは書写山



書写山
(日本真景・播磨・垂水名所図帖)



円教寺
(播州名所巡覧図絵)

弁慶伝説を、弁慶自身の年齢に沿って語るなら、兵庫での始まりは書写山円教寺（しょしゃざんえんぎょうじ）である。若き日の弁慶が、大暴れして全山を焼いたというのは史実ではないが、彼にゆかりの場所や物が、ここに数多く伝えられている。

書写山は、姫路市中心街の北西に位置する。夢前川（ゆめさきがわ）と菅生川（すごうがわ）に挟まれて、南北にのびる山地の南端にある山頂は、標高371m。ふもとからロープウェイに乗り、播磨灘（はりまなだ）を遠望しながら、数分で山上駅に到着する。兵庫県レッドデータブックで、貴重な自然景観にあげられている山は緑濃く、季節ごとに美しい姿を見せてくれる。



摩尼殿

■弁慶石

山上駅からは参道をたどるが、この道は山陽自然歩道でもある。坂は緩やかで息を切らせるようなこともなく、木々の緑や鳥の声を楽しむうちに壮麗な摩尼殿（まにでん）へ導かれる。その摩尼殿前の橋のたもとに、二つの「弁慶のお手玉石」が並んでいる。弁慶がお手玉のかわりに投げ上げて遊んだと言うけれど、抱えることもできないくらいの大石である。まったく弁慶の面目躍如といったところか。もっともこの石には、仏法を守護する乙天（おとてん）、若天（わかてん）という別の伝説もある。



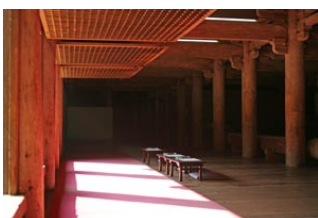
弁慶のお手玉石
(護法石)



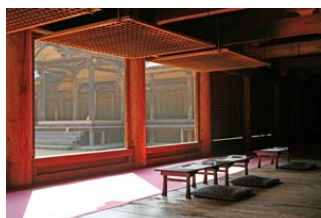
弁慶のお手玉石
(護法石)

■弁慶の鏡井戸と勉強机

摩尼殿からさらに奥へと歩くと、5分ほどで大講堂、常行堂（じょうぎょうどう）、食堂（じきどう）の三堂が並ぶ広場に至る。大講堂と食堂は、室町時代に建立（こんりゅう）された国指定重要文化財である。その食堂と大講堂に挟まれた一角に、弁慶の鏡井戸がある。



食堂の内部



食堂の内部



蔀戸を上げる

長さ3m、幅2mばかりの長方形の石組みがあり、井戸というよりも池といった感じである。少し濁った水が、それでも静かな水面を見せている。



弁慶の鏡井戸



弁慶の鏡井戸



弁慶の机

食堂の上階は展示室になっていて、数多くの仏像や歴史的な品が陳列されており、その中に弁慶の勉強机もある。自然木を縦割りにして脚をつけた、長さ2mほどの机である。伝説では全山丸焼けとなっているのに、何で勉強机が残ったのかなどと野暮な疑問は別として、荒削りな表面や幹の凹凸をそのまま残した縁は、奔放な弁慶のイメージにぴったりである。

■弁慶の学問所

奥の院は、食堂からすぐである。ここに弁慶の学問所といわれる護法堂拝殿（ごほうどうはいでん）がある。先ほど通った三堂の明るさに比べて、性空上人（しょうくうしょうにん）を祭る開山堂（かいさんどう）を中心にしつとりと落ち着いたお堂や社が並んでいる。



弁慶の学問所
(護法堂拝殿)



奥の院

弁慶地蔵

弁慶地蔵は、姫路市別所の旧山陽道に沿った、静かな住宅街にある小さなお堂の中に祭られている。何の用事があったのか、京へでかけた弁慶が書写山に帰る途中、土地の庄屋（しょうや）の娘と知り合い、ここで一夜を共にしたというが、このお地蔵様自身は、天文年間の銘があるから、16世紀の作ということになり、弁慶の顔は見えていないはずである。

英雄が、生涯一度の恋をしたという話は、何だかどこにでもありそうな気がするが、弁慶にはそれがまたよく似合っている。



弁慶地蔵のお堂



お地蔵様



お地蔵様

山を運ぼうとした弁慶



金棒池と雄岡山

神戸市西区にある雄岡山（おっこさん）、雌岡山（めっこさん）は、秀麗な神奈備（かなび）の山で、神々にちなむ伝説もあるのだが、ここにも弁慶話が伝えられている。弁慶がこの美しい二山を庭の築山（つきやま）にするため、持ち去ろうとしたというのだ。

自慢の鉄棒の前と後ろに山を下げて、さてどっこいしょと持ち上げようとする、鉄棒がぼきりと折れて落ち、地面に大穴をあけてしまった。それが、両山の間にある金棒池になったという。

何とも荒唐無稽（こうとうむけい）な話だが、ここでも、怪力でありながら何となくユーモラスな彼の人物像が描かれているようで、おかしい。雄岡・雌岡の一带も、「兵庫の貴重な景観」にあげられている。神が住む山々と、満々と水をたたえる池は、いつまでも残ってほしい風景である。

幻の弁慶岩



弁慶岩はどこに

弁慶岩があったのは、温泉町の千谷（ちだに）にある「おもしろ昆虫化石館」から、岸田川に沿って谷をさかのぼった岸田の村あたりである。狭い谷筋には、東西からけわしい尾根が迫っているが、川に沿って谷奥まで棚田が開墾されて、独特の風景を見せている。

弁慶岩がどこにあるのかは、事前にくら調べてもわからなかった。とにかく現地を探してみようというので訪れたのだが、村の人に尋ねても、「弁慶岩」を知る人はほとんどいなかった。ようやく知っている人に出会ったが、その答えは「圃場（ほじょう）整備のときにめいだ（こわした）と思う」というものであった。残念なことこの上ないが、もうほとんど忘れられた伝説だから、仕方のないことなのかもしれない。もう何十年か経てば、伝説があったことさえ知る人はいなくなるだろうか。

弁慶岩は、伝説とともに幻になってゆくのだろう。



小さな祠を見かけた

用語解説

【弁慶】べんけい

鎌倉時代前期の僧（?～1189）。源義経の従臣で、武蔵坊と号した。『平家物語』、『義経記』などで豪傑として描かれて伝説化した。それによれば、義経に従って数々の軍功を立て、衣川の戦いで戦死したとされる。その生涯、事跡などについては伝説的な部分が多い。

【書写山円教寺】しょしゃざんえんぎょうじ

姫路市書写にある天台宗の寺院。書写山と号する。康保3（996）年、性空上人が開基。伝説によれば性空は、九州で修行して法華経を修めた後、瑞雲（ずいうん）に導かれて書写山に庵（いおり）を結んだとされる。

10世紀後半に、国司藤原季孝（ふじわらのすえたか）の寄進により法華堂が建設されて以降、堂宇の造営が盛んとなり、講堂、常行堂などの諸堂が建立された。翌年、円教寺の寺号をもって花山法皇の勅願寺となった。その後は、平清盛による一切経の施入、後白河法皇の参籠、後醍醐天皇の行幸など、天皇、貴族の手厚い保護を受けた。1331年には落雷によって堂宇の大半を焼失したが、守護の赤松氏の保護の下に復興に努めて再興した。

現在、円教寺の国指定文化財は下の通り。

<重要文化財>

（建造物）

大講堂・鐘楼・金剛堂・食堂・常行堂（常行堂、中門及び楽屋、舞台からなる）
護法堂（乙天社及び若天社）2棟・壽量院

（仏像）

木造釈迦如来及び両脇侍（わきじ）像
木造四天王立像
木造阿弥陀如来坐像（常行堂本尊）

【播磨灘】はりまなだ

兵庫県の播磨地域に面する、瀬戸内海東部の海域。東を淡路島、西を小豆島（しょうどしま）、南を四国によって画されている。面積は約2500平方キロメートル。近畿、中国、四国、九州を結ぶ重要な航路がある。

【兵庫県レッドデータブック】ひょうごけんれっどでーたぶっく

兵庫県の健康生活部環境局自然環境保全課が編集した、県下において保全・保護の重要度が高い環境、生物を選定・収録した報告書。2003年に改訂版が刊行されている。選定されているのは、動植物種、植物群落、地形、地質、自然景観で、それぞれ基準を設定して重要度別に区分されている。

【山陽道】さんようどう

奈良時代に政府によって整備された、平城京から大宰府に至る道。古代では最大規模の街道で、幅6～9mの道路が直線的に設けられていた。平安京に遷都後は、起点が平安京となる。外国の使節が通行することが予想されたため、同様に整備された七街道の中で、唯一の大路に格付けされて最重要視された。途中には56駅が設けられていた。

江戸時代には、古代山陽道を踏襲して西国街道が整備され、現在の国道2号線も一部で重複しながら、これに沿って設けられている。

【神奈備】かんなび（神南備とも表記する）

古代、神が鎮座すると考えられた山。神奈備山。

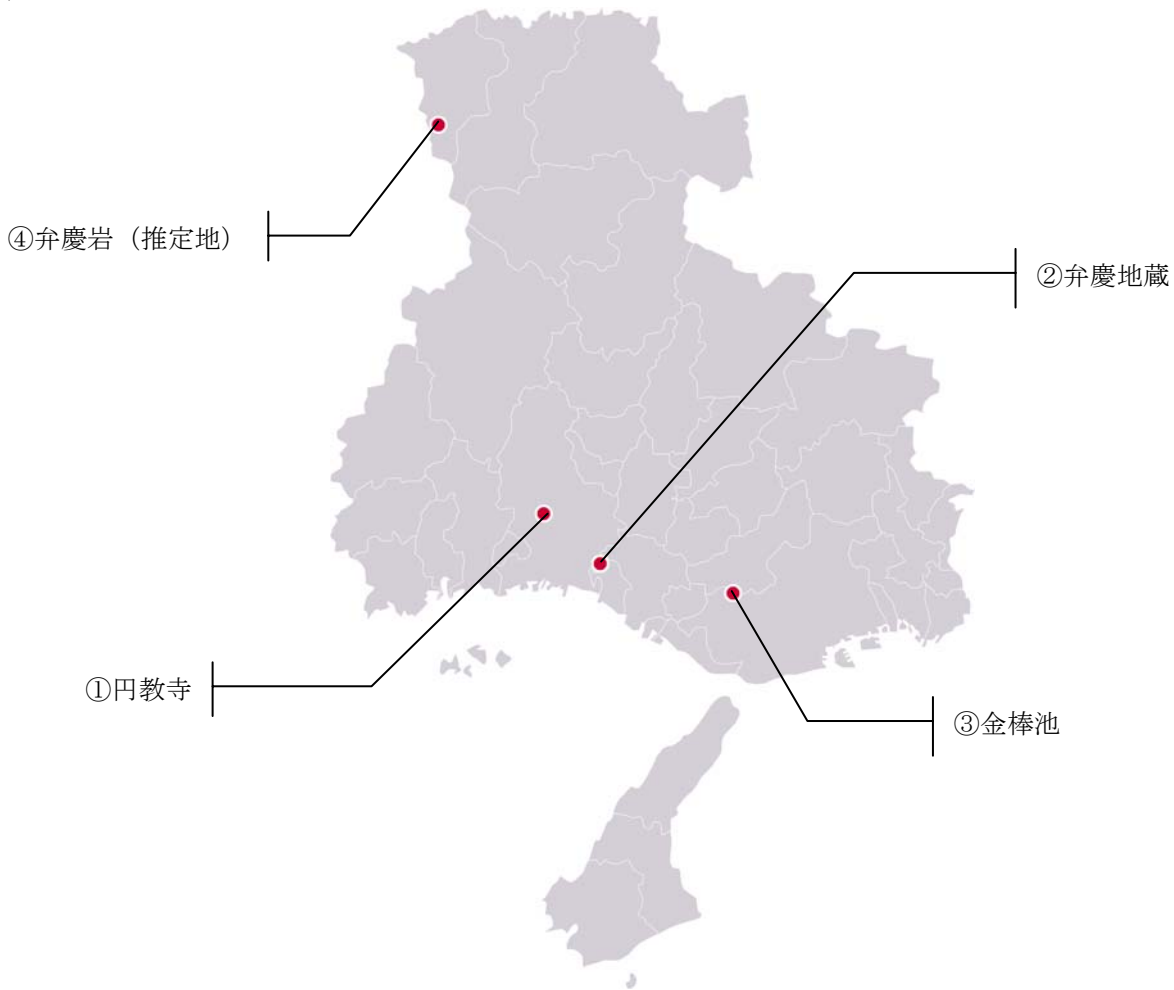
【おもしろ昆虫化石館】

美方郡新温泉町千谷に所在する、昆虫化石の博物館。岸田川上流の小又川付近に分布する、約300万年前の照来層群から発見された、多数の昆虫化石が展示されている。昆虫化石が出土する場所は少なく、貴重な資料が保存・展示されている。（毎週月曜休館、問い合わせ：0796-93-0888）

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	郷土の民話中播篇	1972	郷土の民話中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史・文化等	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本伝説大系第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



①円教寺	姫路市書写2968
②弁慶地蔵	姫路市別所町別所620付近 (旧西国街道沿い)
③金棒池	神戸市西区神出町古神
④弁慶岩 (推定地)	新温泉町岸田

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

和泉式部と桑の木 和泉式部と村人、ふれあいの物語



伝説 和泉式部と桑の木
和泉式部と村人、ふれあいの物語

紀行 和泉式部の足跡を訪ねる

- ・和泉式部という女性
- ・桑原の里
- ・山陽道に沿って
- ・西播磨の和泉式部

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

和泉式部と桑の木

和泉式部と村人、ふれあいの物語

丹波（たんば）のしずかな山里のお話です。

和泉式部（いずみしきぶ）という有名な歌人が、旅のとちゅうでこの村に立ち寄りました。京の都から、役人として丹後国（たんのくに）にいた、夫の元へ行くところでした。

ちょうどその時、ひどい嵐がやってきました。何日も大雨が降り続いて、川はあふれ、村にあった橋はみんな流されて、和泉式部は村から出ることができなくなってしまいました。困りましたがどうすることもできません。そのころは、ひとつの橋をかけるにも、何年もかかったのです。

親切な村の人たちは、式部に家を貸してくれました。それだけでなく、畑でとれた野菜やら、山でとれたいのししの肉やら、お米やら、かわるがわる食べ物も持ってきてくれました。それで、式部はなにひとつ不自由なく、安心して過ごすことができました。

日がたつにつれて、式部にも村のようすがわかってきました。もともと小さな山の村です。ただできえ十分でない田畑が大雨で荒れて、作物も思うようにできなくなっていました。それでも村人たちは、自分の食べる分を減らして、式部に持ってきてくれていたのです。

何とかして村を豊かにできないものか。式部は考えました。そして、村人を集めると、こんなふうに話しました。

「桑（くわ）の木を植えてみませんか。蚕（かいこ）を育てて、絹糸を作るのです。」

村の人たちは、これまで蚕など見たこともありません。

「わしらにできるんやろか。」

「お金がもうかるんやろか。」

「糸なんか、どないしてつくったらええんやろ。」

みんなが口々に話していると、村でいちばんの年寄りがこんなふうに言いました。

「初めてのことやけど、式部さんが言わはるんやからまちがいないやろ。みんなで力合わせて、頑張ろうやないか。」

次の日から、大人も子どもも力を合わせて山を開き、桑の木を植えてゆきました。三年がすぎるところ、山には立派な桑畑ができ、どの家も蚕を飼うようになっていました。村人たちはみんな、一生懸命に働いたので、繭（まゆ）もたくさんとれるようになってきました。

「うそみたいやのう。」

「みんなでよう頑張ったおかげや。」

「式部さんのおかげや。」

村の人たちは、暮らしが豊かになることを夢に見ながら、喜び合いました。繭からつむいだ糸で、きれいな布を織ることも覚えました。

やがてあの大雨で流された橋もできあがり、式部が丹後へ旅立つ日をむかえました。

桑原の 里に引くまゆ 拾い置きて 君が八千代の 衣糸にせん

こんな歌を残し、なごりをおしみながら、式部は村を去ってゆきました。

それからもみんなが力を合わせたおかげで、桑畑はよくしげりましたので、だれ言うことなく、この村は桑原と呼ばれるようになりました。

今でも桑原村のまんなかには、式部をしのぶ供養塔（くようとう）があって、村の人たちがいつもきれいな花をおそなえしています。

紀行「和泉式部の足跡を訪ねる」

和泉式部という女性

和泉式部（いずみしきぶ）は、平安時代中ごろ（10世紀末ごろから11世紀前半）に生きた女性であるが、生没年ははっきりしないようである。父は越前守（えちぜんのかみ）だった大江雅致（おおえのまさむね）、母は平保衡（たいらのやすひら）の娘である。

式部を有名にしているのは、何と言っても和歌であろう。中古三十六歌仙、女房三十六歌仙などの中にも選ばれていて、身近には小倉百人一首の「あらざらむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたびの あふこともがな」という歌を思い出す人も多いかもしれない。

最初の夫であった和泉守橘道貞（たちばなのみちさだ）との間には、後に小式部内侍（こしきぶのないし）と呼ばれる娘が生まれたがやがて別離し、その後は数多くの恋愛を重ねて、藤原道長（ふじわらのみちなが）からは「浮かれ女」と呼ばれたという。後に藤原保昌（ふじわらのやすまさ）と再婚して、夫が赴任した丹後（たんご）に下ったとされているが、晩年のことはほとんどわからないらしい。

和泉式部の伝説は、北海道から九州までの広い範囲に、数多く残されている。そのほとんどは史実とは異なるものだけれど、一方で、彼女の歌とともに、その伝説が多くの人から愛されたことは間違いないだろう。

桑原の里

桑原（くわはら）は、篠山市（ささやまし）の中心部から10km余り北にある。丹波市（たんばし）との境界に近い栗柄峠（くりからとうげ）の少し東から、曲がりくねった細い山道を通るか、さらに東の本郷から箱部峠（はこべとうげ）方向へ向かうと、このおだやかな山里に至る。

由良川（ゆらがわ）の最上流部にあたる友瀨川（ともぶちがわ）から、さらに分岐した細い川が、村の中を流れている。その左右の斜面に、ひな壇のように小さな田があり、尾根の上や斜面に沿って村の家々が並ぶ。和泉式部の供養塔は、村の北側に張り出した小さな尾根の上に建っている。



桑原の村から
和泉式部供養塔を見る



供養塔の麓から



木立の中にある
供養塔



和泉式部の供養塔

尾根の先から急な階段を登ると、小さなお堂がある。お堂には扉も壁もないが、奥には仏様が納められている。その奥に、たくさんのお地藏様と一緒に、和泉式部の供養塔だという小さな宝篋印塔（ほうきょういんとう）が並んでいた。

塔の前はきれいに掃き清められ、小さな花瓶には花が挿してあった。杉木立の間から木漏れ日さし込み、その向こうには棚田が見える。村の人たちが大切に祭ってきたのと同じように、式部の塔も、ここから村を守り続けてきたのだろう。

山陽道に沿って

山陽道沿いにも、和泉式部の伝説が点々と残されている。伊丹市（いたみし）の北園（きたぞの）には、式部の墓だという五輪塔があり、さらに明石（あかし）、加古川（かこがわ）、姫路、相生（あいおい）へと伝説の場所を訪ねることができる。

明石市魚住（うおずみ）の遍照寺（へんしょうじ）には、『小式部内侍禱（いのり）之松縁起』が伝わっている。それによれば、娘、小式部内侍の死を悼んで、書写山円教寺（しょしゃざんえんぎょうじ）に性空（しょうくう）上人を訪ねた和泉式部は、その帰途、長幡寺（ちょうはんじ）にこもって法華経（ほけきょう）をよむ。すると香の煙の中に、小式部内侍が現れたというのだ。そこで式部は、一条天皇から小式部内侍ゆかりの松を譲り受けて、長幡寺の近くに植え、寺の寂心上人が小式部の供養塔を建てたとされている。



遍照寺



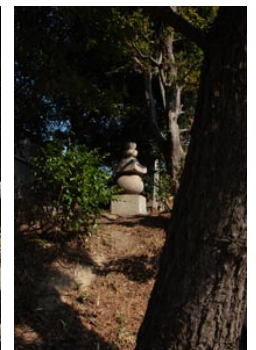
道標

この遍照寺から南へ400mほどの住宅地の中に、和泉式部が小式部を弔うために建てたという五輪塔が残されている。丘の上の住宅地の間にある小さな空間に、大人の背丈ほどの五輪塔が建っている。注意していないと見つけるのも難しいが、今でも花が手向けられ、大切にされている。



小式部内侍供養塔

「小式部内侍禱（いのり）の松」は遍照寺の北、旧西国街道に沿った場所にあったらしい。かつては海からも見える、東西35mにも枝を広げた巨大な松があったというが、今ではその松の木への道程を示す道標だけが残されている。2006年にこの取材をおこなった時には、残念なことに道路工事のために道標は一時的に撤去されていて、見るができなかった。



小式部内侍供養塔



西国街道の道標 ~ここから1kmほどのところに、祈りの松があったらしい~

さらに西へたどると、加古川市野口町坂元では和泉式部供養塔に出会う。旧西国街道に面して建つ宝篋印塔である。この塔は古くから和泉式部の墓だとされていたらしく、今も地元の方が毎日掃除をし、花を手向けて丁寧に祭っている。実際に建てられたのは室町時代のことで、当時の様式をよく残していることから、県指定文化財となっている。

日ざしの明るい通りで塔を撮影していると、学校帰りらしい中学生たちが不思議そうに眺めて通り過ぎて行くのだった。



説明板



和泉式部の供養塔

西播磨の和泉式部

書写山円教寺には、和泉式部の歌塚がある。伝説では、一条天皇の中宮彰子に仕えていた和泉式部が、彰子やほかの女房たちとともに性空上人を訪ねたが、上人は会ってくれない。そこで式部は寺の柱に、一首の和歌を書いて立ち去ろうとした。

くらきより くらき道にぞ 入りぬべき はるかに照らせ 山の端の月

この歌に感心した上人は、一行を呼び戻して丁重に教えを垂れたと伝えられている。性空上人は、式部が彰子に仕えるより早く亡くなっているから、この話は事実ではないだろうけれど、詠まれた歌は確かに存在する。

その歌塚は、円教寺奥の院の護法堂奥にひっそりと建っている。仏の救いを求める強い祈りを込めたこの歌を、もし性空上人が目にしていたら、伝説のようなことになっても不思議ではないだろう。書写山に近い姫路市青山には、和泉式部の腰掛け石もあるという。



円教寺奥の院



開山堂裏に立つ歌塚



石碑が立つ山裾

和泉式部
旧跡の石碑

さらに西へと道をたどると、相生市若狭野町雨内には、「和泉式部宿り木の栗」があった。旅の途中雨に降られた式部が、この地の栗の木の下で雨宿りして、

苔筵（こけむしろ） 敷島の道に 行きくれて
雨の内にし 宿る木のかけ

という歌を詠んだと伝えられている。

もちろん今はその木もなく、雨内の村の山すそに和泉式部旧跡という石碑が残るのみであるが、数十年前までは年に一度、この場所でお茶の接待がされていたと、石碑の傍に住む老婦人がくり返し語ってくれた。同じ雨内の教証寺には、和泉式部について書かれた古い文書もあるという。同様の話は相生市内的那波にある得乗寺にも伝わっており、この寺の境内の「枝垂れ栗」が、雨宿りの栗の木だったとされている。

伝説はさらに、この雨宿りがきっかけとなって、生き別れていた娘、小式部内侍と和泉式部とが再会したと伝えている。

和泉式部とは、どのような女性だったのだろうか。織り連ねられた数多くの伝説の向こうにもその姿は見えないが、この歌を読むと、ただ恋多き女だったわけではなかったのだろうと思えてくる。



雨内の村

世の中に 恋といふ色は なけれども ふかく身にしお ものにぞありける（後拾遺集）

用語解説

【和泉式部】いずみしきぶ

平安時代中期の女性歌人。生没年不詳だが、974年あるいは976年生という説がある。父は越前守大江雅致、母は越中守平保衡の娘。和泉式部の名は、最初の夫である和泉守橘道貞の任国と、父の官名に由来する。

道貞との間には、娘小式部内侍（こしきぶのないし）が生まれたが、やがて夫婦の間は破綻して別離。その後は為尊親王（ためたかしんのう）、敦道親王（あつみちしんのう）などとの恋の遍歴があったが、いずれも死別に終わっている。敦道親王との恋愛を物語風につづった『和泉式部日記』は有名であるが、式部本人の著述ではないとの説もある。

後には、藤原道長の娘で一条天皇の中宮であった彰子に仕えているが、この時、彰子の傍には、紫式部、赤染衛門などの歴史に残る人材がいた。

さらに藤原保昌と再婚し、保昌が丹後守に任ぜられると、共に丹後へ下ったとされる。和泉式部が5歳のころ、娘、小式部内侍が亡くなって、式部は悲しみに暮れた。保昌は1036年に亡くなったことがわかっているが、和泉式部晩年の消息はまったくわからない。

現在、残っている歌は1500首を超え、『拾遺和歌集』などの勅撰和歌集には276首もの歌が採録されている。特に恋歌や挽歌などの叙情的な和歌に、天分を発揮した。

【和泉式部伝説】いずみしきぶでんせつ

和泉式部の伝説は、東北から九州までの広い範囲に、数多く残っている。それは式部自身の恋多き生涯から多くの伝説が生まれ、それが中世、遊行の女性たちによって各地で語られたためであろう。またこうした女性遊行者が、「和泉式部」を名乗って、式部の伝説や古跡を残したという考えもある。

柳田国男は、式部伝説がこのように多いのは「これは式部の伝説を語り物にして歩く京都誓願寺に所属する女性たちが、中世に諸国をくまなくめぐったからである」と述べている。

このことはまた、世阿弥の作と伝えられている謡曲『誓願寺』で、和泉式部が「歌舞の菩薩（ぼさつ）」として描かれ、後に芸能の世界の人々に和泉式部信仰が生まれたことと無縁ではないだろう。式部の墓所のひとつは、誓願寺に近い、京都市の新京極通りにある。

【小式部内侍】こしきぶのないし

平安時代中期の女性歌人（999?～1025?）。父は橘道貞、母は和泉式部。一条天皇の中宮であった藤原彰子に仕えたが、若くして病没。小倉百人一首の「大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみもみず 天の橋立」の歌は有名。

当時、小式部内侍の歌は母の和泉式部が代作しているといううわさがあり、中納言藤原定頼が、歌合わせで歌を詠むことになった小式部に対して、「丹後国のお母さん（和泉式部は当時、夫の任国である丹後に下っていた）の所に、代作を頼む使者は出しましたか。使者は帰って来ましたか」などと質問をしたのに対して、その場でこの歌を詠んだという。

その主旨は「大江山を越えて生野（丹後の地名）へと向かう道のりは遠いので、母のいる天の橋立の地を踏んだこともありませんし、母からの手紙もまだ見ていません」という意味である。この当意即妙の歌は、小式部の名を大いにあげたとされる。

【長幡寺（長坂寺）・遍照寺】ちょうはんじ・へんしょうじ

伝承にある長幡寺は聖徳太子の創建で、二十八院をもつ大寺院とされ、現在明石市魚住町にある遍照寺は、その塔頭のひとつと伝えられる。長幡寺の正確な位置と規模は不明であるが、魚住町の長坂寺遺跡からは、奈良時代の瓦などが多数出土していることから、長幡寺にあたる説がある。長坂寺遺跡は古代山陽道に面しており、仮称邑美（おうみ）駅家もこの付近にあったと推定されている。

【山陽道】さんようどう

奈良時代に政府によって整備された、平城京から大宰府に至る道。古代では最大規模の街道で、幅6～9mの道路が直線的に設けられていた。平安京に遷都後は、起点が平安京となる。外国の使節が通行することが予想されたため、同様に整備された七街道の中で、唯一の大路に格付けされて最重要視された。途中には56駅が設けられていた。

江戸時代には、古代山陽道を踏襲して西国街道が整備され、現在の国道2号線も一部で重複しながら、これに沿って設けられている。

【和泉式部歌塚】いずみしきぶうたづか

書写山円教寺奥の院の、開山堂北側にある石製宝篋印塔（ほうきょういんとう）。和泉式部らが中宮彰子の供をして円教寺を訪れた際、性空上人は一旦これを拒絶したが、式部が詠んだ歌に感心して一行を迎え入れたという伝説にちなむものという。

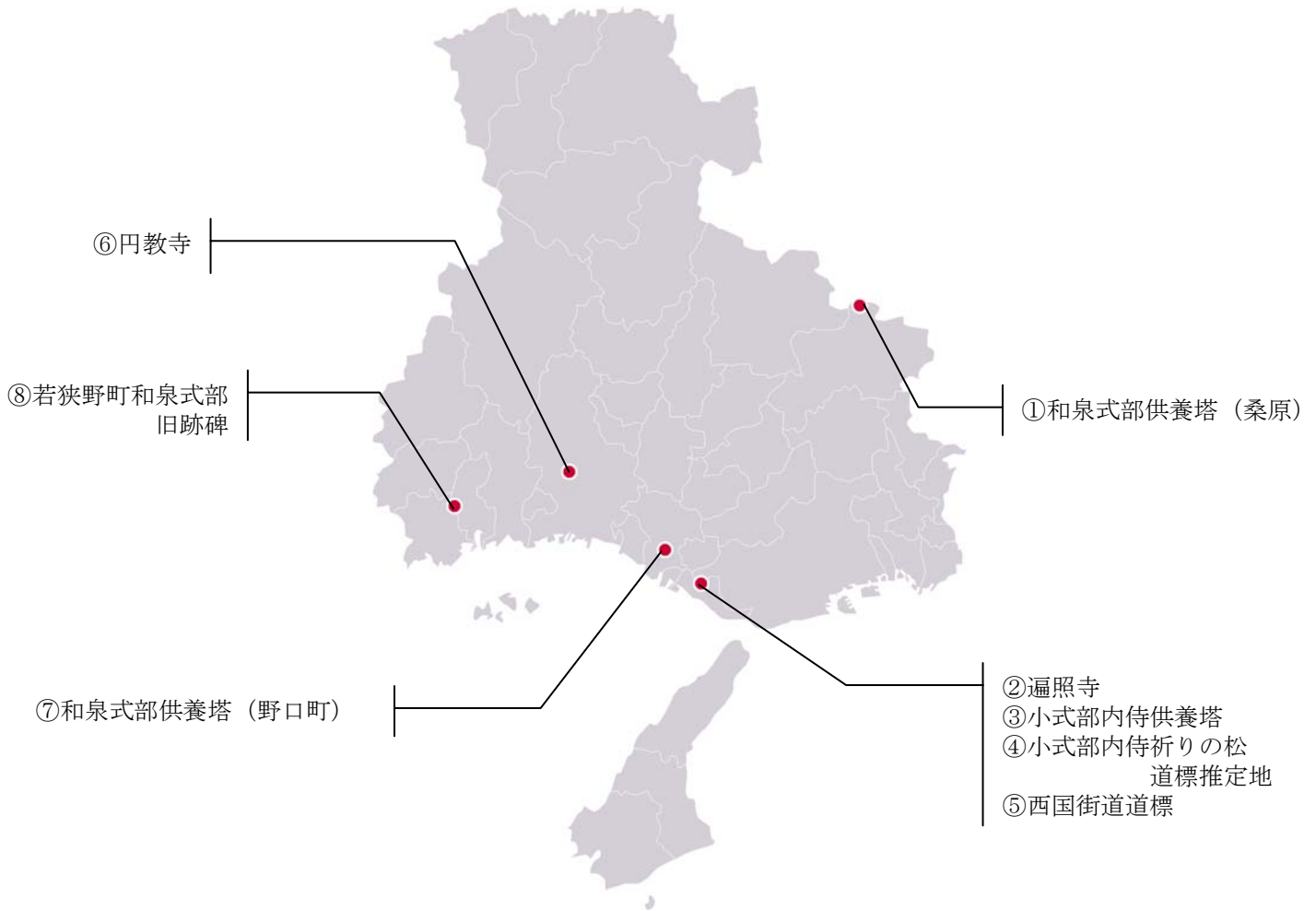
【和泉式部供養塔】いずみしきぶくようとう

加古川市野口町坂元所在。古くから和泉式部の墓として祭られている。旧山陽道沿いに立つ石製宝篋印塔（ほうきょういんとう）で、室町時代初期の製作と考えられている。高さ255cm。兵庫県指定文化財。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	丹波のむかしばなし第4集	2001	丹波のむかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	兵庫のふるさと散歩 2. 東播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	はりま伝説散歩	2002	橋川眞一編著	神戸新聞総合出版センター
	日本国内におけるシダレグリの遺伝資源(収録:『果樹研究所研究報告』第4号)	2005	壽和夫・澤村豊・齋藤寿広・田教臣	農業・生物系特定産業技術研究機構果樹研究所
その他	明石ぶらぶらみてある記	不詳	明石市観光振興課ほか	明石市観光振興課ほか

所在地リスト



①和泉式部供養塔 (桑原)	篠山市桑原
②遍照寺	明石市魚住町長坂寺513-8
③小式部内侍供養塔	明石市魚住町錦ヶ岡3丁目
④小式部内侍祈りの松道標推定地	明石市魚住町長坂寺 旧西国街道沿い
⑤西国街道道標	明石市魚住町金ヶ崎 旧西国街道沿い
⑥円教寺	姫路市書写2968
⑦和泉式部供養塔 (野口町)	加古川市野口町坂元508-2
⑧若狭野町和泉式部旧跡碑	相生市若狭野町雨内

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第2刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

法道仙人の鉢
空飛ぶ鉢と米俵
梶原の大銀杏
不思議な玉から育った銀杏



伝説 法道仙人の鉢
空飛ぶ鉢と米俵
梶原の大銀杏
不思議な玉から育った銀杏

紀行 神出鬼没 ～謎の法道仙人～
・法道仙人
・法華山一乗寺
・投松
・法道仙人の手形石
・米塚堂
・鴨神社と梶原の大イチョウ

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

法道仙人の鉢

空飛ぶ鉢と米俵

法道仙人（ほうどうせんにな）は、インドの人です。修行を積んで徳の高い仙人となり、お釈迦様（おしゃかさま）が法華経（ほけきょう）を説いた、霊鷲山（りょうじゅせん）という尊い山で暮らしていましたが、あるとき、雲に乗ってはるばる日本までやってきたそうです。

法道仙人が雲の上からながめておられますと、はるか下の方に八つに分かれた尾根（おね）と、谷間から五色の光がさす山が見えます。これは仏様の霊地（れいち）にちがいないと考えた仙人は、この山に住んで、法華経を読む日を過ごすようになりました。これが、法華山一乗寺（ほっけさんいちじょうじ）のはじまりだということです。

法道仙人は不思議な術が使えました。空っぽの鉢（はち）を、自由自在に飛ばすことができるのです。仙人は、いつも山に座ってお経を読みながら、鉢を飛ばして人々にお供え物を入れてもらうのでした。

仙人の鉢がやってくると、人々はわれ先にいろいろなお供え物を鉢に入れます。すると鉢はすうっと空を飛んで、仙人の元へと帰ってゆくのでした。高砂（たかさご）の生石神社（おうしこじんじゃ）の大神も、その鉢を招いては石の上に置き、お供え物をささげたといいます。

こうして仙人は、多くの人からしたわれ、仏の教えを広めてゆきました。

あるとき——それは大化（たいか）元年のことだったといひます——、瀬戸内（せとうち）の海を航海していた一その船に、仙人の鉢が飛んできました。けれどもこの船に積んであった米は、税として集められた米だったのです。

「これは、税として都へもってゆく米なのです。私が勝手に、差し上げるわけにはゆきません。」

藤井という名の船頭がそう言うと、鉢は空っぽのまま飛び去ってゆきました。ところが、その鉢に続くように、船に積んである米俵が、次々と飛んでゆくではありませんか。船頭はびっくりして、必死にあとを追いかけてました。

鉢と米俵は、まるで雁（かり）の群れのように空を飛んで、法華山までやってきました。あとを追いかけてきた船頭は、息を切らせて法道仙人の庵（いおり）にかけつくと、わけを話して、米俵を返してくれるようにたのみました。

法道仙人は笑って許し、もう一度米俵を飛ばして船に戻してやりました。ところがこのとき、どうしたわけか一俵だけが途中で落ちてしまいました。米俵が墮（お）ちたというので、そこは「米墮村（よねだむら）」と呼ばれるようになったそうです。

大化5（649）年、都の孝徳天皇（こうとくてんのう）が病気になったとき、天皇はこの不思議な話を思い出して、ぜひともこの病を治してもらいたいと考えました。都へ呼ばれた法道仙人は、みごとに天皇の病気を治してみせました。そしてその力におどろく朝廷（ちょうてい）の人々に、仏の尊さを説いたのでした。

すっかり感心した天皇は、法道仙人のために、法華山に大きなお寺を建てました。これが現在の法華山一乗寺のはじまりです。その後も長い間、法道仙人は法華山で仏法を説き続けましたが、あるとき雲に乗って、ひょうぜんとインドへ帰っていったということです。

梶原の大銀杏

不思議な玉から育った銀杏

丹波（たんば）には、法道仙人（ほうどうせんじん）のこんな話が伝わっています。

今から1200年ほど昔の話、法道仙人というえらいお坊さんが、仏教を広めるためにあちこちを旅していました。丹波国の、市島の梶原にやって来たときの話です。

仙人がお祈りをしていると、ひとりの童子が白い玉をもってあらわれました。

「私は、ここに住んでいますが、この玉を授ける者を待っていました。今日、やっとその方に会えて、こんなにうれしいことはありません。どうかこの玉を、ここにうめてください。」

そう言うと、童子は、西の方へ消えてゆきました。

法道仙人は「これは、鴨（かも）の大神のお告げにちがいない」と、さっそく村人を集めて、今の出来事を話し、お経を唱えながら玉をうめました。

「ここは、鴨の大神がおられるところにちがいません。どうかこの地をいつまでもお守りしてください。」

法道仙人は、そんなふうにしたのむと、また、教えを広める旅に出てゆきました。

その後、玉をうめた場所からは、イチョウの木が芽を出し、幹のなかほどから、太い根をのぼしてどんどん育ってゆきました。村人たちは、仙人の教え通り、この木を大切に守り育てたということです。

それから700年も後、丹波の黒井城（くろいじょう）が明智光秀（あけちみつひで）に攻め落とされた時のことです。

黒井城の家老、荻野丹後（おぎのたんご）は、奥方と生まれたばかりの赤ん坊を連れて、落ち延びました。しかし、奥方は乳の出が少なくなり、赤ん坊は日に日に弱ってゆきました。

「家来を戦いで死なせ、我が子までなくしては、何のために生きているのかわからない。」

荻野丹後は、近くの酒梨（さかなし）のお地蔵様に、一心にいのりました。

おいのりを始めて21日目の夜、夢にお地蔵様が現れてこう言いました。

「私のそばにあるイチョウは、梶原の大イチョウと兄弟だ。根をけずって湯で温めて飲めば、乳がよく出るようになるだろう。」

荻野丹後は、さっそくお地蔵様のそばにあったイチョウの根をけずり、奥方に飲ませました。するとお地蔵様のお告げ通り、奥方は乳がたくさん出るようになり、赤ん坊も元気に育ったということです。このうわさを聞いて、大勢の人がお参りし、イチョウの根をけずってゆくようになりました。

酒梨のイチョウも、梶原の大イチョウも、村の人たちに守られて、現在も青々とした葉をしげらせています。

紀行「神出鬼没 ～謎の法道仙人～」

法道仙人

法道仙人（ほうどうせんになん）はインド出身だということになっている。鉄の宝鉢を持っていたことから、空鉢仙人（からはちせんになん）とも呼ばれ、不思議な術を使う超能力の持ち主であった。

いろいろな寺の縁起などによると、推古天皇（すいこてんのう）のころに日本へ渡ってきたとされているから、6～7世紀の人物ということになるが、本当の事跡や没年、墓所などすべて不明で、伝わっているのはその名前と仙術にまつわる伝説ばかりである。つまり幻のような人なのである。むしろ実在かどうかさえわからない。第一、なぜ彼は「法道上人」や「僧法道」ではなく、「仙人」なのだろうか。

播磨国（はりまのくに）の山には、法道仙人を開山・開基と伝える寺が多い。ちょっと数えただけで十や二十は挙げられるだろう。実際、彼が開いたと伝える寺院は、県下に110か所以上あるという。また、彼が日本に渡るときに、共に渡ってきた「牛頭天王（ごずてんのう）」は、姫路市の広峰神社（ひろみねじんじゃ）に祭られ、その後、八坂神社（やさかじんじゃ）中の座に祭られたとされているから、播磨国がとりわけ仙人と関わりが深いことは間違いない。

伽藍（がらん）を構えた寺院だけでなく、あちこちにある不可思議な自然物が、法道仙人と結びつけて理解され伝えられていることは、仙人に対する素朴な信仰がこの地の人々にとっても身近であったことを示している。3

法華山一乗寺



日本真景
播磨・垂水名所図帖

その伝説の始まりは、法華山一乗寺（ほっけさんいちじょうじ）であった。法道仙人が日本にやってきたとき、最初に発見した「霊地」が一乗寺背後の法華山であり、寺伝では孝徳天皇（こうとくてんのう）の勅願により、650年に開基されたということになっている。だとすると、まさしく法道仙人来日後間もない時期ということになる。

法華山は、「八葉蓮華（はちようれんげ）の形をした霊山」と言われる。山頂は標高243mほどと、さして高くない山であるが、地図で見るとなるほど、谷が複雑に入り込んで、「八葉」に見えないこともない。もっと特徴的なのは、この山がまわりを満願寺川（まんがんじがわ）や法華山谷川（ほっけさんたにがわ）などの河川に囲まれ、周囲のどの山ともつながっていないということである。山中にありながら独立した山塊。そして入りくんだ谷。こんな景観が、「八葉蓮華」と称される元だったのである。

それにしても「八葉」の形は、空からでなくてはわからないと思うのだが、やはり仙人は、空を飛んだのだろうか。

一乗寺へはバスの便もあるし、加古川市（かがわし）や加西市（かさいし）側からの道も、十分に整備されている。バス停から北へのびる整備された参道を歩くと、すぐに、常緑樹のトンネルに覆われた階段がある。そこを登ると、常行堂がある広場になる。常行堂は聖武天皇の勅願で建てられたとされるが、何度か焼失して、現在の建物は明治時代に再建されたものである。

そこから、少し急な第二の階段を登ると、国宝三重の塔へと導かれる。平安時代末に建てられた塔は、ゆったりとした安定感がある優美なもので、平安から中世建築への移行期の姿をよくとどめている。

本堂や開山堂（かいさんどう）へはさらに階段を登るのだが、取材時（2006年）は本堂が改修工事のため、立ち入ることができないのは残念であった。秘仏を祭る本堂や、さらに奥にある開山堂は、森閑とした山岳寺院の雰囲気なたたえていて、厳粛な気持ちにさせられる場所である。2007年には工事も完了するということなので、再会の日を楽しみに待つことにしたい。



一乗寺(参道)



一乗寺(三重の塔)



播州名所巡覧図絵

■古法華の石仏



古法華公園案内図



古法華石仏

この一乗寺が創建された当時は、さらに北の笠松山（かさまつやま）のふもとにあったようだ。その場所にははっきりしないが、ふもとの古法華自然公園内には、7世紀後半に作られた古法華石仏（重要文化財）があることから、この山の周辺に飛鳥～奈良時代の寺院があったことは確かだとされている。里山の自然を残すこの公園は、散策路も整備され、秋の紅葉の美しさは格別である。

投松

一乗寺からそう遠くない加古川市志方町の大澤には、「法道仙人の投げ松（なげまつ）」が祭られている。県道高砂北条線を北上して、投松（こちらは「ねじまつ」と読む）の交差点を過ぎ、山陽道をくぐったすぐの所を右折すると、村を通り過ぎた所にお堂があって、その中に「投げ松」が鎮座している。

「投げ松」は、枯木である。が、どう見ても奇妙な松だ。幹も枝もうねうねと曲がりくねっている。曲がりすぎて、蛇のとぐろのようになった部分もある。この木が生きていたときには、ずいぶん奇妙に見えただろう。伝説では、法道仙人が放り投げた松ということになっているが、なるほどこのねじ曲がった幹や枝の理由を、放り投げられたせいにしたわけだ。

それにしてもかなりの巨木であったらしい。これほど曲がりくねったのは、この木だけが持つ性質だろうか。かなり以前に枯れたようだが、今も枝の断面から松やにが流れているのは驚きである。



投げ松

法道仙人の手形石



札馬神社

法道仙人の手形石は、投げ松から少し県道に戻った、札馬神社（さつまじんじゃ）の境内にある。この神社は山陽道建設のために現在の場所へ移転したが、その際に手形石も移されたようだ。

本殿前に無造作に置かれた石の一部に、まるでヒトデのような形の「手形」が彫り込まれている。石自体は凝灰岩の板石で、見たところどうやら古墳から掘り出した石棺のふたのようである。石棺にこんな彫り込みがされることはないから、後世のだれかが彫ったのだろうけれど、その目的がわからない。

手形石や投げ松の近くには、法道仙人が乗ってきた馬のひづめ跡や、法道仙人の石船などという物もあるそうだから、探してみるのもいいかもしれない。さらに南に下ると、法道仙人の鉢を招いて供物をささげたという、生石（おおしこ）の大神が祭られた生石神社（おうしこじんじゃ）もある。昔の人が残してくれた謎は、大抵迷宮入りであるが、空想の楽しさを与えてくれることは確かだ。



法道仙人の手形石



手形？



生石神社

日本真景
播磨・垂水名所図帖

米塚堂

高砂市（たかさごし）の米田町米田（よねだちょうよねだ）には、法道仙人が飛ばした米俵が墜ちたという場所に、米塚堂が建てられている。米田天神社（よねだてんじんじや）から少し南へ下った場所、「宮本武蔵生誕地」という巨大な石碑の近くにある、米塚と書かれた小さな堂と傍にある伝承を記した碑が、法道仙人の名残である。



武蔵生誕の地の石碑



米塚堂



米塚堂の碑

鴨神社と梶原の大銀杏

舞鶴道（まいづらどう）を北上して、丹波第一トンネルを抜けると、視界が一気に開けて氷上低地（ひかみていち）が一望できる。春日インターチェンジから出て、国道175号線をさらに北上すると、正面に見える鉢を伏せたようななだらかな山が小富士山（こふじさん）で、梶原（かじわら）の村はこの山の北側にある。

梶原の村はずれにある鴨神社（かもじんじや）は、10世紀に編集された延喜式（えんぎしき）に記録のある古い神社である。高い木が茂る神社の本殿から少し離れた、一の鳥居のわきに、大きなイチョウの木が立っている。



梶原の大銀杏



イチョウの木

イチョウの木と
鴨神社一の鳥居

本によっては樹齢1500年と書かれているが、イチョウは中国が原産地で、日本に伝わってきたのは奈良時代のこととされているから、この数字は少し大きすぎるように思う。幹周りが5.8mと周囲を圧倒する巨樹だが、その長寿のせいで傷みも激しく、大規模な治療が施されたとのことで、その治療のあとが痛々しい。けれども村の人たちに守られた木は、これからも静かに歴史を刻んでゆくことだろう。伝説もまた、この木とともに生き続けるに違いない。

用語解説

【仙人】せんにな

中国の神仙思想や道教の理想とする人間像。人間界を離れて山の中に住み、不老不死の法を修め、神通力を得てさまざまな術を有する人。また仏教では、世俗を離れて山林に住み、神通力をもつ修行者のことを指す。仏を最高の仙人という意味で、「大仙」、「金仙」ということがある。

【法道仙人】ほうどうせんにな

法華山一乗寺を開いたとされる、伝説上の仙人。他にも数多くの、近畿地方の山岳寺院を開いたとされる。法道仙人についての最も古い記録は、兵庫県加東市にある御嶽山清水寺に伝わる1181年のものである。

伝説によれば、法道仙人は天竺（てんじく＝インド）の靈鷲山（りょうじゅせん）に住む五百侍明仙の一人で、孝徳天皇のころ、紫雲に乗って日本に渡り、法華山一乗寺（ほっけさんいちじょうじ）を開いたという。千手大悲銅像（千手観音）と仏舎利（ぶっしゃり）、宝鉢を持って常に法華経を誦し、また、その鉢を里へ飛ばしては供物を受けたので、空鉢仙人とも呼ばれたとされる。室町時代初期に著された『峰相記（みねあいき）』には、播磨において法道仙人が開いた寺として、20か寺があげられている。

【峰相記】みねあいき

1348年ごろに著された中世前期の播磨地方の地誌。著者は不明である。播磨国峯相山鶏足寺（ぶしょうざんけいそくじ）に参詣した僧侶と、そこに住む老僧の問答形式で著されている。日本の仏教の教義にはじまり、播磨の霊場の縁起、各地の世情や地誌などが記されている。安倍晴明（あべのせいめい）と芦屋道満（あしやどうまん）の逸話、福泊築港、悪党蜂起の記述など、鎌倉時代末の播磨地域を知る上で重要な記録となっている。最古の写本は、太子町斑鳩寺（はんきゅうじ）に伝わる1511年の年記をもつもの。

【法華経】ほけきょう

妙法蓮華経の略称。釈迦の耆闍崛山（ぎしゃくつせん）における8年間の説法を集めたものとされる。この經典の靈驗功德は、どのような障害も克服できると信じられている。日本では606年に聖徳太子が講経して以来重視され、諸国に法華滅罪の寺（国分尼寺）が建立された。天台宗、日蓮宗などが、この經典を根本として成立。

【法華山一乗寺】ほっけさんいちじょうじ

兵庫県加西市にある天台宗の寺院。西国三十三箇所第26番、および播磨西国三十三箇所第33番札所である。山号は法華山、本尊は銅造聖観音立像。

開基は法道仙人とされる。寺伝によれば法道仙人は、大化5（649）年に孝徳天皇に召されてその病氣平癒を祈ったが、その靈験があったため、翌年天皇の勅願により堂宇が建立されたという。

この説話が史実であるとは考えにくい、本尊の銅造聖観音立像は白鳳期の作とされるため、寺の開基もこの時期だと言われている。北方2.5kmの笠松山山麓には、「古法華（ふるぼっけ）」の地名が残り、白鳳期の石仏も現存するため、一乗寺は本来この付近にあったと言われている。現在の位置に移った年代は、現存最古の建造物である三重塔（1171年建立）以前であろう。

1523年には、兵火によって堂宇を焼失したが、1562年に赤松義祐により再興。さらに火災を受けるが、1628年に姫路城主本多忠政の援助で本堂などが復興した。

国宝に指定されている三重塔は、この形式のものとしては日本国内屈指の古塔である。

下記のような国宝、重要文化財のほか、県指定文化財多数。

国宝：三重塔・聖徳太子及天台高僧画像

重要文化財：金堂（本堂）・護法堂・弁天堂・阿弥陀如来五尊画像・五大力吼画像・

聖観世音菩薩立像・木造法道仙人像・僧形座像・石造五輪塔

【古法華石仏】ふるぼっけせきぶつ

加西市西長町古法華に所在する、白鳳期（7世紀後半）の石仏。浮彫如来像および両脇侍（わきじ）が、この地域に産する流紋岩質溶結凝灰岩に刻まれており、日本の石仏中、最も古いものの一つとされる。過去に火災に遭っており、一部が剥落している。

縦102cm、横72cm、厚さ20cmの板石の表面に、高さ46cmの中尊と、蓮華座上に立つ脇侍を半肉彫りとし、中尊の上に天蓋、脇侍の上に三重の塔を刻んでいる。

この三尊石仏上が、鋳（しころ）葺きの屋根をかたどった石造の屋蓋に覆われていることから、これらは三尊石仏を奥壁とする石造厨子（ずし）として作られたと考えられており、その形式は法隆寺の玉虫厨子を想起させるという。1951年国指定重要文化財。

【石棺】せっかん

埋葬する遺体を納めるために作られた、石製の棺。石を組み合わせる場合と、一個の石をくりぬいて作る場合がある。日本での最古の例は縄文時代後期にさかのぼる。

古墳時代には、古墳に埋葬するためのさまざまな形式の石棺が製作された。その主要なものには、割竹形石棺、舟形石棺（ともに古墳時代前期）、長持形石棺（中期）、冢形石棺（後期）がある。

【生石神社・石の宝殿】 おうしこじんじゃ（「おおしこ」とも表記することがある）・いしのほうでん

『生石神社略記』によれば、崇神天皇（すじんてんのう）の代に創建したとされ、背後の宝殿山山腹にある石の宝殿を神体として祭る。

石の宝殿については、オオナムチの神とスクナヒコナの神が、出雲からこの地に来た際に、国土を鎮めるため、夜に間に石の宮殿を造営しようとしたが、阿賀の神の反乱を受けて造営が間に合わなかったという伝承（『生石神社略記』）、聖徳太子の時代に弓削大連（ゆげのおおむらじ＝物部守屋）が造ったという『播磨国風土記』の伝承などがある。古墳時代終末期の石棺や横口式石槨（せきかく）などとの関係を指摘する説、石棺の未製品とする説、火葬骨の骨蔵器外容器とする説、供養堂とする説などがあるが、製作年代については、7世紀代と考える人が多いようである。

【イチョウ】 いちょう

銀杏、公孫樹とも表記する。学名は*Ginkgo biloba*。

裸子植物イチョウ科に属するイチョウ類の中で、唯一の現存している種である。近縁の化石種は古生代から知られており、中生代のジュラ紀には世界的に分布していたが、現生のイチョウを除き、他の種はすべて絶滅した。広葉樹のように思われがちだが、針葉樹の仲間である。雌雄異株であるため、実は雌木にのみなる。

イチョウの語源は、葉がカモの足に似ることから、中国語で鴨をさす「ヤーチャウ」がなまったとされる。

実は銀杏（ぎんなん）と呼ばれ食用となるが、皮膚に触れるとかぶれなどを引き起こすことがある。また、食用とする種子の中には、神経伝達物質の生合成を阻害する成分が含まれ、けいれんなどを引き起こす恐れがあり、特に子供の場合には要注意とされる。大人の場合、1日あたりの摂食の目安は4粒程度とされるが、その一方で咳を鎮める効果があり、葉草として用いられることもある。

現在日本で見られるイチョウは、中国で生き残ったものが持ち込まれたもので、その時期は平安時代後期～鎌倉時代とされている。ヨーロッパには17世紀に持ち込まれ、現在では世界各地で栽培されている。

イチョウは大木となるが、大木では枝から垂れ下がった円錐形の突起を生じる場合があり、乳イチョウなどと呼ばれる。「乳が出るようになる」といった伝説も、こうしたところから生まれたのだろう。

【孝徳天皇】 こうとくてんのう

第36代の天皇（596?～654）。在位は645～654年。大化の改新による蘇我氏本家滅亡をうけて即位した。皇太子は中大兄皇子で、実質的権力は中大兄皇子が握っていたとされる。難波長柄豊碕宮遷都などをおこなったが、中大兄皇子は天皇の意に反して、皇后や百官を率いて大和飛鳥へ戻り、取り残されたまま難波宮で病死した。

【黒井城】くろいじょう

丹波市春日町と市島町の境にある、猪ノ口山（365m）山頂にある城。足利尊氏の北条攻めに加わった赤松貞範が、その功績によって春日町周辺を領有して築城した。

西曲輪（くるわ）、本丸、二の丸、三の丸、東曲輪が並ぶ連郭式の山城で、東西170m、南北40mを測る。周囲9kmにわたる山地には、出城や館なども残る。

赤松氏の後、赤井氏、荻野氏が領有した。天文23（1554）年に城主となった荻野直正（悪右衛門）は、勇将とうたわれ、丹後、但馬へも勢力を伸ばしたが、明智光秀に攻められ、4年間にわたる戦いの後に落城した。その後、光秀の城代として斉藤利三が入った際、この地で生まれた娘が、後に徳川家光の乳母となった春日の局（かすがのつばね）である。1989年、国指定史跡。

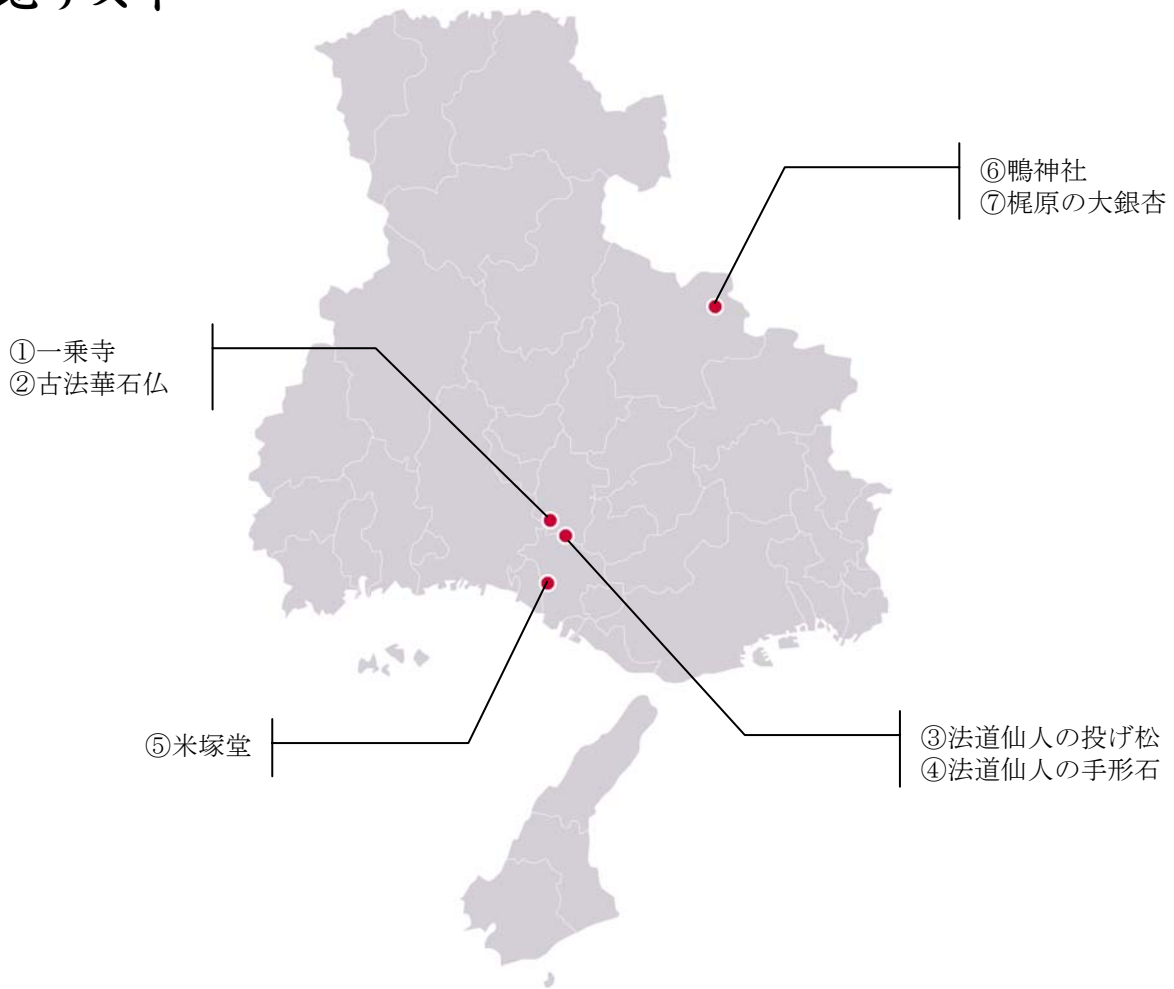
【明智光秀】あけちみつひで

戦国時代末～安土桃山時代の武将（1528?～1582）。美濃国守護の土岐氏（ときし）の一族とされるが、詳細は不明。織田信長に仕え、足利義昭の將軍擁立に関与した。信長の上洛後は、京都の公家・寺社などとの交渉役として活躍し、1571年には近江坂本城主となった。1575年から、信長による中国攻略にともなって丹波へ侵攻してこれを攻略。丹波一国の支配を認められた。1582年、京都の本願寺で信長を殺害したが、その11日後には羽柴秀吉と京都の山崎で戦って敗れ、敗走中に山城国小栗栖（おぐるす）で農民に殺害された。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	丹波のむかしばなし第4集	2001	丹波のむかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本の古代遺跡3 兵庫南部	1984	櫃本誠一・松下勝	保育社
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター
その他	拝観のしおり ※参拝者用資料	不詳	一乗寺	一乗寺
	史蹟播磨國石乃寶殿生石神社略記 ※参拝者用資料	不詳	生石神社	生石神社
	日本三奇 史跡石乃宝殿 ※参拝者用資料	不詳	生石神社	生石神社
	播磨古法華石佛 ※参拝者用資料	不詳	古法華石仏保存委員会	古法華石仏保存委員会

所在地リスト



①一乗寺	加西市坂本町821-17
②古法華石仏	加西市西長町字古法華
③法道仙人の投げ松	加古川市志方町大澤 投松
④法道仙人の手形石	加古川市志方町大澤 札馬
⑤米塚堂	高砂市米田町米田
⑥鴨神社	丹波市市島町梶原字カモ440
⑦梶原の大銀杏	丹波市市島町梶原

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

松王丸

清盛の夢と神戸の海に沈んだ少年



伝説 松王丸
清盛の夢と神戸の海に沈んだ少年

紀行 平氏伝説の旅
～大輪田泊と、福原京から煙島まで～

- ・大輪田泊と清盛の夢
- ・築島寺と松王丸の供養塔
- ・夢幻の福原京
- ・須磨の平氏
- ・絵島と煙島

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

松王丸

清盛の夢と神戸の海に沈んだ少年

平氏（へいし）が、たいへん栄えていたころの話です。平清盛（たいらのきよもり）は、兵庫に都を移して、中国の宋（そう）と貿易をしようと考えていました。そのためには、大きな港が必要でした。

そのころの兵庫の港——大輪田の泊（おおわだのとまり）と呼ばれていました——は、北風は六甲（ろっこう）の山並みにさえぎられ、南西の風は和田岬（わだみさき）にさえぎられていましたが、南東からの風は防ぐものがなく、この向きから大風がふくと、船が出入りすることもできませんでした。清盛は、ここをもっと安全な港にしようと考えたのです。

南東からの風や波を防ぐためには、港のおきに島を築いて防波堤にするしかありません。そのため、会下山（えげやま）の南にあった塩樋山（しおづちやま）を切りくずして、その土砂を海へ運ぶことになりました。

しかし、機械の力もない時代です。仕事はなかなかはかどりません。深い海に土砂をうめて、あと少しというところまでくるのですが、そのたびに潮に流されてしまいます。どうすれば工事がうまくゆくのか。清盛は陰陽博士（おんみょうはかせ）に占わせてみました。

「島を築くには、海中の竜神の怒りをしずめなくてはならない。そのためには、三十人の人柱を、海にしずめて竜神に供えろとよいだろう。」

これが占いの答えでした。

清盛はさっそく、生田（いくた）に関所を設けて、人柱にするために旅人をつかまえ始めました。つかまえられた人たちや家族の泣き声が、和田の松原にひびきわたったといいます。

清盛には、そば仕えの少年が何人かいました。その中のひとり、讃岐国（さぬきのくに）の武将の子、松王丸（まつおうまる）という十七歳の少年は、つかまえられた人たちの悲しみを見かねて、清盛に言いました。

「人柱などというむごいことは、おやめください。私が三十人の身代わりになりましょう。」

はじめ、清盛は聞き入れませんでした。けれども松王丸はあきらめず、何度も何度もくり返し、清盛にうったえました。

ついに、清盛も松王丸の申し出を聞き入れました。松王丸は、石の櫃（ひつ）に入れられ、白馬の背に乗せられて港へと運ばれました。そして、千人の僧侶の、読経（どきょう）する声がひびく中で、海の中へとしずんでいったのです。

人々は涙を流しながら、お経を書き写した大小さまざまの石を海へ投げ入れました。

こうして、波を防ぐための島は完成し、「築島（つきしま）」と呼ばれました。たくさんのお経をしずめたので、「経ヶ島（きょうがしま）」とも呼ばれます。

その後清盛が築島の完成を祝ったとき、西にそびえる高取山の山頂からわき上がった紫色の雲が、築島の上をおおい、美しい楽の音とともにたくさんの仏が現れました。その中に松王丸の姿もありました。やがて松王丸の姿は、如意輪観音（にょいりんかんのん）へと変わり、金色の光を放ったといいます。

清盛は、松王丸をとむらうために、この地に寺を建てました。それが、経島山来迎寺（きょうとうざんらいこうじ）のはじまりだそうです。その境内には、今でも松王丸の供養塔（くようとう）が残っています。

紀行「平氏伝説の旅 ～大輪田泊と、福原京から煙島まで～」

大輪田泊と清盛の夢

平氏（へいし）一門が隆盛を極めたころ—平氏にあらずんば人にあらずと言われたころ—、平清盛（たいらのきよもり）は、大輪田泊（おおわだのとまり）の大規模な修築を計画した。そのねらいは宋（そう）との貿易にあったのだろうが、同時に港に近い福原（ふくはら）への遷都まで企てたということは、今風に言うなら、港を中心とした国際貿易都市の建設こそが、清盛の夢だったのだろう。

その夢を実現させるのに必要だったのが、人柱としての松王丸（まつおうまる）だった。この伝説は、事実を映しているのだろうか。だとすると、あまりにも悲しすぎるけれど、この話を聞かされたなら、人々は少年の魂に報いるため懸命に働いただろう。泊の修築は、それほどまでに想像を絶する難工事だった。松王丸の伝説が事実なのかどうかは知るすべもないが、伝説が清盛の偉業とともに、神戸港の歴史を縁取っていることは間違いない。



六甲山から兵庫津を望む



摂津名所図会

築島寺と松王丸の供養塔

築島寺（つきしまでら）とは通称で、正式には経島山来迎寺（きょうとうざんらいこうじ）という寺号をもつ。縁起によると、寺院建立の目的が人柱となった松王丸の菩提（ぼだい）を弔うためであったことから、二条天皇の勅命によって、特に寺院建立の前にその号が与えられたのだという。



摂播記



神戸覧古

有馬街道（ありまかいどう、国道428号線）を下りてくると、JR線の下をくぐって国道2号線と交差する。さらにそのまま海へ向かうと、東はハーバーランド、西側には造船などの重工業の工場が建ち並んでいる。このあたりは、海へ向かって三角形に突き出した、半島のような地形になっている。その半島の西側の付け根に近い神戸市兵庫区の島上町（しまがみちょう）に築島寺がある。

阪神淡路大震災では大きな被害を受け、現在は鉄筋コンクリート造りの本堂に建て替えられているが、門を入ってすぐ右の境内には、松王丸を供養する石の塔が残っていた。白らかに明るい境内にひっそりと建つ古い塔は、まるで時の流れに取り残されたかのようなのであるが、今でも時折、この塔を訪れて熱心にお経をよんでゆく人がいる。その傍には、清盛の愛妾（あいしょう）だった妓王（ぎおう）、妓女（ぎじょ）という姉妹の小さな五輪塔が、ひっそりとたっている。



松王丸供養塔



妓王妓女の墓



築島寺



境内に建つ石塔

考えてみれば松王丸は、その後の平氏没落や、湊川（みなとがわ）の戦い、開国の激動、神戸大空襲、そして阪神淡路大震災など、この地で起きた災いや事件をことごとく見てきたのだ。そして今も港のどこかで、神戸の平安を念じているはずである。

夢幻の福原京

清盛の都は、彼の死とともに幻のように消え去って、かつての栄華を示すものは何一つ残っていない。住宅やビルが建ち並ぶ現在の神戸に残るのは、華やかだった過去をひっそりと伝える故地だけである。

■荒田八幡神社

神戸大学病院の正面あたりで有馬道から西へ折れると、荒田八幡神社（あらたはちまんじんじゃ）がある。神社の境内だけが、まわりの家々より3mばかり高く、周囲は石垣に囲まれている。ここが平清盛の異母弟、平頼盛（たいらのよりもり）の山荘があったとされる場所である。神社の横は公園になっていて、山荘をうかがわせるものは何もないけれど、かつてはこのあたりで笠懸流鏝馬（かさかけやぶさめ）がおこなわれたと記されているから、相当広い屋敷であったことだろう。



荒田八幡神社



荒田八幡神社

■平野祇園神社

荒田八幡神社から有馬道を北へたどると、間もなく六甲山の山すそである。ここが平野（ひらの）の交差点で、そこからさらに登ったところに、平野祇園神社（ひらのぎおんじんじゃ）がある。社伝によるとこの神社は、9世紀に姫路の広峰神社（ひろみねじんじゃ）から、京都の八坂神社（やさかじんじゃ）へ分霊する途中、その神輿（みこし）が泊まった場所に建てられたという。

急な階段を上り詰めた境内からは、尾根の間に切り取られた町並みと、その先の海が見える。平清盛は大和田泊を修築する前、この神社の裏山にあった潮音山上伽寺（ちょうおんざんじょうがじ）で、潮騒を聞きながら構想を練ったというが、今はその跡すら見ることはできない。



平野祇園神社から海を望む



平野祇園神社



平野祇園神社



平野祇園神社

平野の交差点付近は、ちょうど清盛の時代の遺跡である。平成5(1993)年に、平野祇園遺跡が発掘されて、貴族の館の庭園だったということがわかった。

ここでみつかったのは、石組みの池跡である。傍には広大な貴族の館があったのだろう。発掘調査では、大量のかわらけ（土師器の皿）や中国産の高級な陶磁器が出土したが、建物跡はまだ確認されていない。ことによるとこの場所で、清盛も曲水の宴（きょくすいのうたげ）を楽しんだかもしれない。

■雪見の御所

平野の交差点から西へ200mほど、商店が並ぶ通りを歩くと湊山小学校（みなとやましょうがっこう）がある。その一角に、「雪の御所」という石碑が建つ。かつてこの付近では瓦などが見つかっていて、清盛が住んだ雪の御所があった場所だと言われているが、ここにも往時をしるものはない。



雪見の御所石碑

■北野天満神社

観光客でにぎわう、中央区北野町の異人館街を抜け、急な坂と階段を上り詰めたところに北野天満神社（きたのてんまんじんじゃ）がある。この神社は、清盛が福原に都を移した際に、その鬼門方向を鎮護するため、京都の北野天満宮から勧請（かんじょう）した。神戸の中心街から、港までを一望できる眺望は素晴らしい。すぐ前には異人館の風見鶏が見え、神社の歴史と異国風の町並みが、不思議に調和した空間になっている。



北野天満神社参道



北野天満神社

北野天満神社から
神戸市の中心街を見る

■清盛塚

築島寺から、新川運河（しんかわうなが）に沿って500～600mほど西へ行った場所に、清盛塚がある。塚と呼ばれてはいるが、残されているのは高さが8.5mほどの13重の石塔である。清盛の死後、鎌倉時代に建てたものとされ、江戸時代の絵図にも登場している。

塔は、もとあった場所から10mほど北へ移動させられており、移動の際に地下部分も発掘されたが、墓ではないことが確認された。



清盛塔



清盛塔

本当に不思議なことだが、実は清盛の墓の場所はわかっていない。1181年に京で亡くなった清盛の遺骨は、福原へ持ち帰られたという。兵庫区の能福寺（のうふくじ）にはその廟所（びょうしょ）があるが、墓がどこ造られたのかはわからないのだ。夢幻に終わった福原京と同じく、清盛もまた幻のように消えたのである。



説明板

須磨の平氏

須磨（すま）は、平氏が再起をかけて戦った、一ノ谷の合戦がおこなわれた場所である。平敦盛（たいらのあつもり）と熊谷直実（くまがいなおさね）の一騎打ちは、『平家物語』の名場面のひとつとして知られているが、須磨のあたりには平氏にゆかりの場所が多い。

■須磨寺の敦盛塚

須磨寺には、敦盛の首塚がある。本堂前から書院の北を通って奥の院へと続く道の傍らにある、堂の中に祭られた小さな五輪塔がそれである。笛の名手であった敦盛にちなんで、かつてはここに笛を納めて、子供の健康を祈る風習もあったということだ。また、本堂の前には、敦盛の首を洗ったという池、そのわきには、その時義経が腰掛けたという松の枯れた株が残されている。



須磨寺の門



敦盛首塚の五輪塔



梵鐘の銘



敦盛首洗いの池



義経腰掛の松



敦盛首塚堂

■腕塚

長田区の新長田駅から、国道2号線を越えた所が腕塚町（うでづかちょう）である。一ノ谷の合戦で敗れた平忠度（たいらのただのり）が、源氏の武者に討たれたとき、切り落とされた腕を葬った場所だという。その腕塚は、駒ヶ林町（こまがばやしちょう）4丁目の住宅街にあった。人ひとり通れるだけの、細い路地の中ほどに、「腕塚堂」と記された堂と、十三重の石塔がある。また500mほど南西の野田町8丁目には、忠度の胴塚があつて、やはり十三重の石塔が祭られている。

平氏に関する旧跡や伝承地は、神戸市内には他にいくつも残されている。「おごる平氏」などと、悪評が流布されたこともある平氏だが、地元の人たちにとっては神戸のいしずえを築いた敬愛すべき一族であり、大切な歴史の一部として守り伝えられている。



腕塚堂への路地



腕塚堂道標



十三重の塔

絵島と煙島

福原を失い、戦いにも敗れた平氏は、四国目指して落ちてゆくことになる。その途上ということになるのだろうか、淡路（あわじ）にも平氏に関係する古跡が残っている。

淡路の北端、岩屋（いわや）の絵島（えじま）には、松王丸の供養塔が建てられている。そして南端の福良湾（ふくらわん）に浮かぶ煙島（けむりじま）には、敦盛の首塚がある。



福良湾と煙島



煙島



煙島曙光

福良漁港から、湾に沿って1kmほど南西へ向かうと、深緑の木々に覆われた、小さな島が見える。これが煙島である。岸からはほんの100mほどだろうか。島の周囲には粗い岩肌が見える。平氏一門が阿波に渡る前、福良湾で休んでいるときに、敦盛の首がもたらされたので茶毘（だび）に付した。その時に煙が立ち上ったことから、島の名がついたという。島の頂上には、敦盛の首塚がある。若くして散った敦盛は、落日の平氏の中でひとときわ光彩を放ち、敵味方なく惜しまれたのだろう。

用語解説

【大輪田泊】おおわだのとまり

奈良時代に、僧行基が築いたと伝えられる摂播五泊（河尻・大輪田・名寸隅（なぎすみ）・韓・室津）のひとつ。平安時代末に、平清盛が港の前面に経ヶ島を築造して、風波にも安全な港とした。中世以降は兵庫津と称される。古代から続く瀬戸内航路の重要な港であり、現在の神戸港の原型といえる。

【来迎寺（築島寺）】らいこうじ（つきしまでら）

神戸市兵庫区島上町にある浄土宗の寺院。経島山（きょうとうざん）と号する。大輪田泊築港との関連から、築島寺と呼ばれている。大輪田泊修築に際し、人柱となった松王丸の菩提を弔うため、平清盛が建立したと伝えられる。創建時の所在地は、兵庫区三川口町付近という説がある。創建時には七堂伽藍（がらん）を誇ったとされるが、1335年の湊川の戦いで兵火に遭ったのをはじめ、幾度かの火災を受けて現在地に移転したという。さらには1945年の神戸空襲で、堂宇一切を焼失し、戦後再建されて現在に至った。

境内に松王丸の供養塔、平清盛の愛妾（あいしょう）であったという妓王、妓女の墓が祭られている。

【平野祇園遺跡】ひらのぎおんいせき

神戸市兵庫区の平野交差点付近に広がる遺跡。1993年に発掘調査がおこなわれ、貴族の庭園と考えられる石組みの池跡が見つかった。周辺からは大量の土器をはじめ、瓦、中国産陶磁器類も出土したが、建物跡はまだ確認されていない。福原京の一部を形成していた、平氏一門の邸宅などと関連が深いと思われる。

【福原京】ふくはらきょう

平安時代末のわずかな期間、現在の神戸市兵庫区に置かれていた都。平清盛は、1180年6月にこの地へ遷都したが、実質的な都の造営はおこなわれず、同年11月に再び京都へ戻った。1183年に平氏が都落ちした際、福原は焼き払われた。

【北野天満神社】きたのてんまんじんじゃ

神戸市中央区北野町にある天満神社。福原遷都に際して平清盛の命により、新都の鬼門鎮護のために京都の北野天満宮を勧請（かんじょう）して、社殿を造営したのがはじまりとされる。

中世にはしばしば戦乱に巻き込まれ、湊川の戦いや、応仁の乱の際の兵庫津焼き打ちなどでも被害を受けたという。また織田信長による中国攻略の際には、毛利氏と結んだ荒木村重配下の花隈城に近かったため激戦に巻きこまれた。

江戸時代以降は北野村の鎮守として崇敬された。明治時代になり、神戸港周辺の外国人居留地が返還されると、神戸在住の外国人が北野町付近に館を構えるようになり、現在の異人館街が形成された。

【清盛塚】きよもりづか

神戸市兵庫区にある、「平清盛の墓」と考えられてきた石製十三重の塔。弘安9（1286）年の年号が刻まれており、鎌倉時代、北条貞時が諸国を巡行した際に建てたと伝えられている。塔は、かつて現在よりも11m南にあり、古くから清盛の墓として信仰の対象となってきた。1923年に道路拡張のため現在地に移転した際、塔周辺の発掘調査が実施されたが、墓の跡は発見されなかったため、供養のための石塔であったと考えられている。

【平清盛】たいらのきよもり

平安時代の武将（1118～1181）。保元の乱（1156）で後白河天皇の信頼を得、平治の乱（1159）では源義朝を討って平氏の権力を確立した。1167年には武士として初めて太政大臣に任ぜられ、娘徳子を高倉天皇の中宮とした。

やがて後白河法皇と対立すると、1179年には法皇を鳥羽に幽閉して、院政を停止させるに至る。清盛はさらに高倉天皇を退位させて、自らの孫である3歳の安徳天皇（1178～1185）を即位させた。これにより、清盛の完全独裁化による平氏政権が成立。平氏の知行国は全国の半分を超え、一門の公卿（くぎょう）16人、殿上人30人余。「平氏にあらずんば人にあらず」と言われる全盛時代となった。

しかし平氏への権力集中は、旧勢力との対立や地方武士の離反を招く要因となり、1180年には、後白河法皇の皇子以仁王（もちひとおう）を奉じた源頼政の反乱が発生した。この反乱は鎮圧され、以仁王と頼政は敗死したが、以仁王の令旨（りょうじ、皇子による命令文）は全国へ飛び火し、同年夏には、源頼朝が北条氏と結んで挙兵した。平氏軍が頼朝軍の鎮圧に失敗（富士川の戦）すると、近畿でも寺社勢力を中心に反平氏の動きが強まった。このため清盛は、興福寺などを中心とした南都を焼き討ちしたほか、近江、美濃などに派兵して源氏勢力を鎮圧した。しかし反平氏勢力の蜂起はおさまらず、1181年には平氏の基盤である西国でも諸豪族が挙兵。また平氏方であった東国の豪族が頼朝によって討たれるなど、反乱が深刻化することになった。清盛はこうした危機のさ中、熱病（マラリアともいわれる）にかかり、京都で没した。

清盛の墓は、京都、神戸など数か所にその伝承があるが、確定されていない。

【平敦盛】たいらのあつもり

平安時代の武将（1169～1184）。平経盛（つねもり）の子。一ノ谷の戦いで、源氏の熊谷直実と討たれた。横笛の名手といわれる。若くして悲劇的な死をとげたため、謡曲や歌舞伎などの題材となり著名である。敦盛にまつわる伝承は多く、「首塚」とされるものは須磨寺境内のものが代表的。

【平頼盛】たいらのよりもり

平安時代の武将（1131～1186）。平忠盛の五男。清盛の弟。通称は池殿、池大納言。平治の乱の時、生母の池禅尼が少年だった源頼朝の助命を清盛に嘆願した事により、平家滅亡後も本領を安堵（あんど）された。また、後白河法皇の信頼が厚く、法皇の処遇を巡って頼朝挙兵以前から兄・清盛とは不仲だったという。

高倉上皇（安徳天皇の父）の『巖島御幸記』に「申の刻に福原に着かせ給う云々、あした（あらたの誤りと思われる）という頼盛の家にて、笠懸流鏑馬（かさがけやぶさめ＝馬上で駆けながら矢で笠を的にしたものを射ること）など仕つらせ御覧ぜられる。」と記しているのが、荒田町にあった頼盛の山荘は、相当広い邸内であったろう。

【絵島・大和島】えしま・やまとしま

絵島は、岩屋港の東に浮かぶ島である。『枕草子』にも、「島は」と記されているほど、古くから知られた名勝であったようだ。砂岩が浸食されてできた奇観であるが、この岩盤はおよそ1500万年前に、砂や礫（れき）が水中に堆積してできたものである。

その奇観のためか、国産み神話の「おのころ島」を、この絵島にあてようとする説もある。古来より名勝として人々に親しまれており、月見の名所として『平家物語』に出てくるなど、風光明媚な場所として多くの文学にとりあげられている。

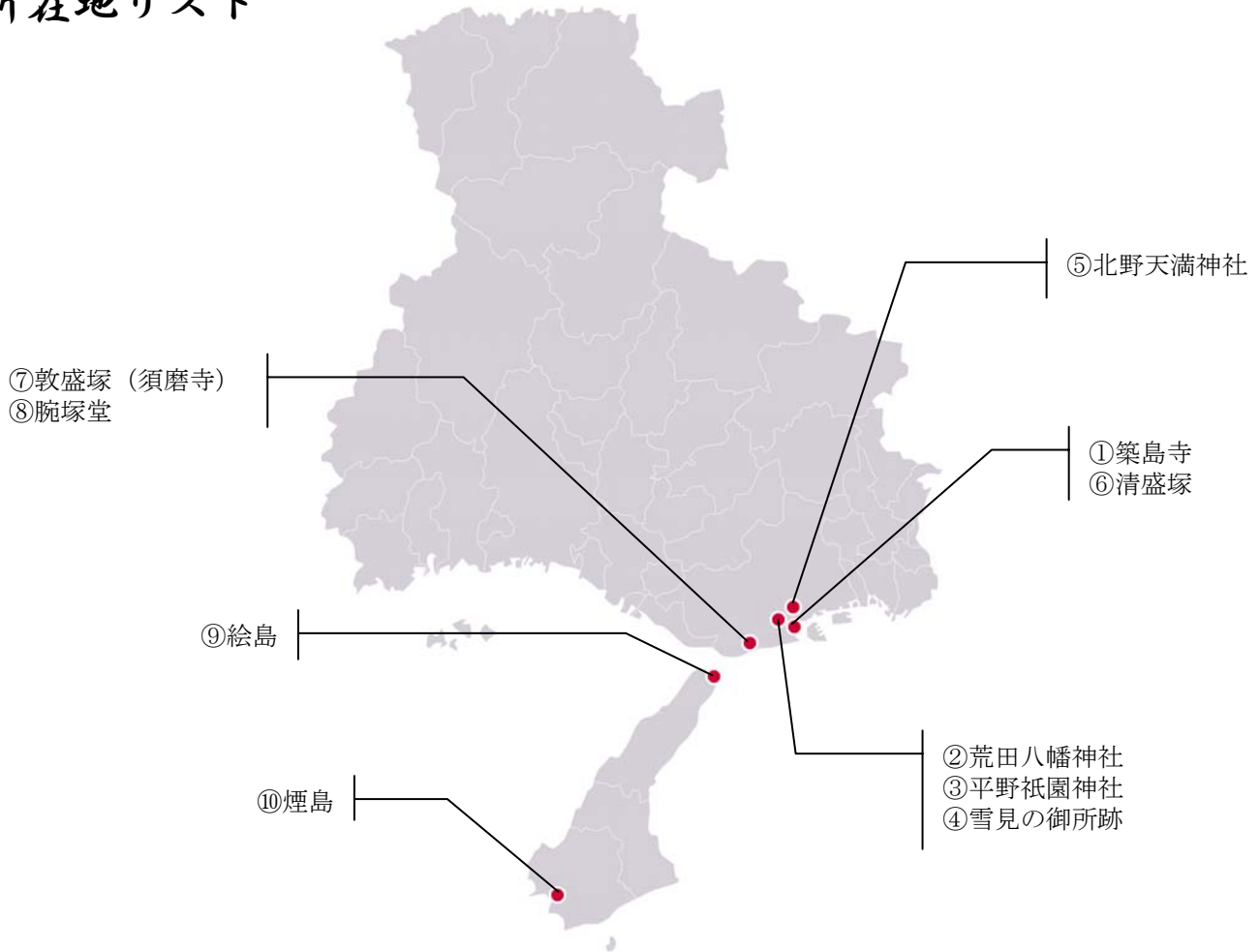
絵島の頂上には、平清盛が大輪田泊を修築した時に、人柱にされようとした人たちを助け、自らが人柱になった松王丸の供養塔といわれる宝篋印塔（ほうきょういんとう）が建っている。近年は、毎年、中秋の名月の夕べに、「絵島の月を愛でる会」がおこなわれてにぎわう。

絵島の南には、陸続きの小島があり、大和島と呼ばれている。山上にはイブキ群落があり、兵庫県の天然記念物に指定されている。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	兵庫のふるさと散歩1. 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典（上・下）	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
その他	築島寺 ※参拝者用資料	不詳	築島寺	築島寺

所在地リスト



①築島寺	神戸市兵庫区島上町42
②荒田八幡神社	神戸市兵庫区荒田町3-15
③平野祇園神社	神戸市兵庫区上祇園町12-1
④雪見の御所跡	神戸市兵庫区雪御所町2-1
⑤北野天満神社	神戸市中央区北野町3-12
⑥清盛塚	神戸市兵庫区切戸町1
⑦敦盛塚（須磨寺）	神戸市須磨区須磨寺町4-6-8
⑧腕塚堂	神戸市長田区駒ヶ林町4-6
⑨絵島	淡路市岩屋
⑩煙島	南あわじ市福良（福良湾南西部）

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

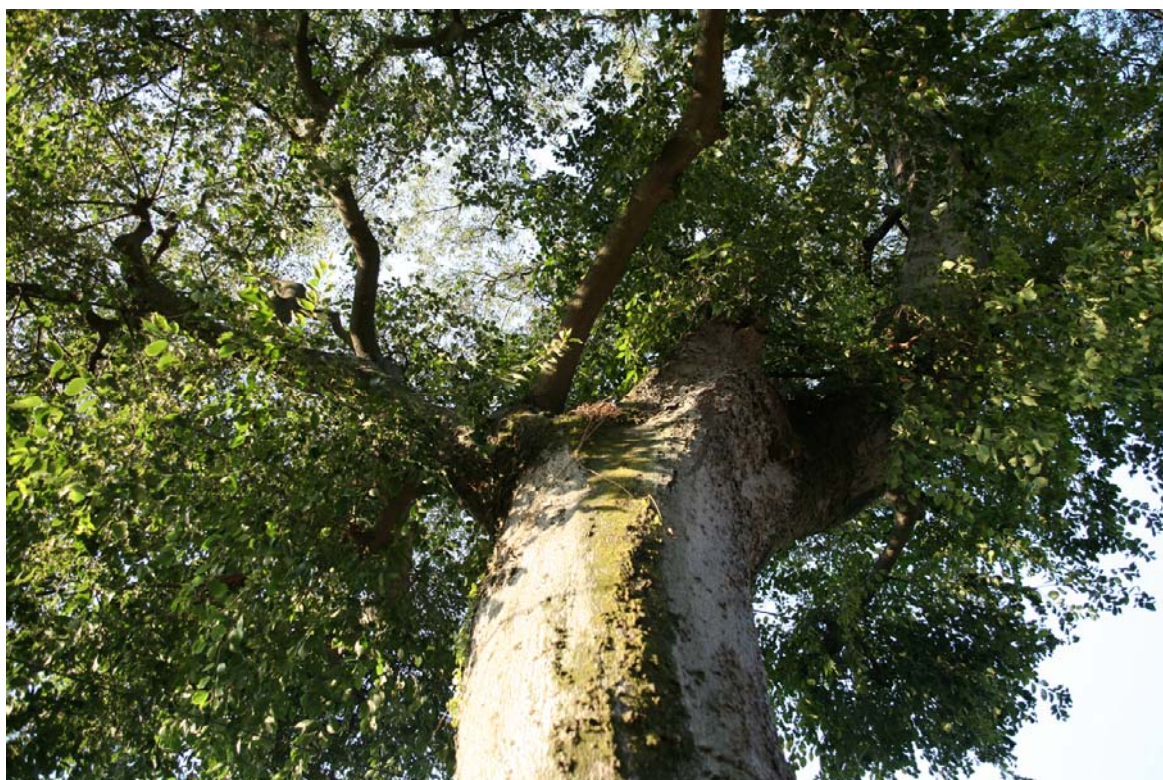
第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

白滝姫

泉に降る栗の花



伝説 白滝姫
泉に降る栗の花

紀行 山田の里と白滝姫の伝説を訪ねる

- ・白滝姫が歩いた道
- ・栗花落の森
- ・栗花落の井
- ・山田の里
- ・箱木千年家
- ・六條八幡神社
- ・成道寺
- ・無動寺・若王子神社
- ・下谷上農村歌舞伎舞台

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

白滝姫

泉に降る粟の花

昔、六甲山（ろっこうさん）の北にある山田の里に、左衛門（さえもん）という男が住んでいました。あるとき左衛門は都へ出て、御所の庭仕事にやとわれることになりました。

ある日、庭をはいていると、いつもは中が見えない御殿（ごてん）のすだれが上がっています。そっと近づいてのぞいてみると、そこにはたいそう美しいお姫さまが座っていました。このお姫さまは、右大臣藤原豊成（ふじわらのとよなり）の娘で白滝姫（しらたきひめ）といました。白滝姫は、そのころ都でいちばん美しいと評判だった中将姫（ちゅうじょうひめ）の妹でした。

左衛門は一目見るなり、すっかり白滝姫のことを好きになってしまいました。

「あんなお姫さんが、およめさんになってくれたら、ほんまに幸せやろなあ。」

それ以来左衛門の心は、白滝姫のことでいっぱいになってしまいました。右大臣の娘と左衛門とでは、あまりにも身分がちがいます。けれどもあきらめようと思えば思うほど、白滝姫を思う気持ちは強くなるのでした。

そしてとうとう左衛門は、せつない心を歌によんで姫に送ることにしました。

水無月の 稲葉（いなば）のつゆも こがるるに 雲井を落ちぬ 白滝の糸

しかし、姫からの返事には、こんな歌が書かれていたのです。

雲だにも かからぬ峰（みね）の 白滝を さのみな恋ひそ 山田男よ

雲もかからないほどの高い山のように、身分の高い私です。あきらめなさい。そんな意味でした。けれども左衛門はあきらめきれません。もう一度、歌を送りました。

水無月の 稲葉の末も こがるるに 山田に落ちよ 白滝の水

この歌を知った父の豊成には、左衛門がまことの心で白滝姫を思っていることがわかりました。話を聞いた天皇も、姫を左衛門のおよめさんにするようにすすめました。

こうして、左衛門は白滝姫をおよめさんにむかえ、姫といっしょによろこびいさんで山田の里へと帰ってゆきました。

京の都から山陽道（さんようどう）をたどり、ようやく神戸の平野についてひと休みしていると、里の人たちがひどい干ばつで困っているようすです。それを聞いた白滝姫が、手に持っていたつえで地面をつつくと、そこからはみるみるうちに清らかな水がわき始めましたので、里の人たちはたいへん喜びました。

烏原（からすはら）から急な坂を登り、長坂山をこえて、ふたりはようやく山田の里に着きました。

ちょうど梅雨に入ろうとする季節です。山田の里には、栗（くり）の花がさいていました。それにしても左衛門の家は、白滝姫がこれまでに見たこともないようなあばら屋です。夜になると、屋根のすきまから月の光がもれてくるほどでした。

左衛門は貧しいながらもけんめいに働き、白滝姫との間には男の子も生まれました。しかし白滝姫にとっては、なれない山里の暮らしです。体はしだいに弱り、とうとう病気にかかって、ある年の梅雨のころ、幼い子を残して死んでしまったのでした。

悲しみにうちひしがれた左衛門は、姫を手厚くほうむりました。するとその墓の前から、清らかな泉がわきだし、水面に栗の花が散り落ちたそうです。それから毎年、白滝姫が亡くなったころになると、泉には清水が満ちあふれて、決まって栗の花が散り落ちるのです。

そこで左衛門は姓を栗花落（つゆ）と改め、泉のわきにお堂を建てて姫を祭りました。やがてその泉も、栗花落の井戸と呼ばれるようになりました。

今でも左衛門の子孫が、この井戸を祭っています。そして、白滝姫がつえについて泉をわかせた所は栗花落（つゆ）の森と呼ばれ、神戸の都由乃町（つゆのちょう）で大切に守られています。

紀行「山田の里と白滝姫の伝説を訪ねる」

白滝姫が歩いた道

山田左衛門（やまださえもん）と白滝姫（しらたきひめ）が山田の里へ入るとき、都からどのような道をたどったのだろうか。もちろん伝説の話であるから、現実のとおりとは限らないが、奈良の都を出た二人は、山陽道（さんようどう）をたどって神戸までやってきた。現在の兵庫区から山田町へ向かうならば、有馬街道（ありまかいどう）を登って東の箕谷（みのたに）から入る道筋が中心であろうが、山陽道から有馬街道を登るなら、都由乃町（つゆのちょう）では少し行き過ぎている。二人がたどった道は、おそらく鳥原古道（からすはらこどう）と呼ばれる道であつたらう。

鳥原道は、都由乃町付近から石井川に沿って鳥原→鈴蘭台（すずらんだい）と山を登り、さらに長坂山の東を越えて山田里に入る。しかし道も十分に整わない古代のことである。急な坂は、二人の息を切らせたことだろう。その急坂を登る手前にゆかりの地があるということが、伝説にいつそうの現実味を与えてくれる。

栗花落の森

兵庫区都由乃町に、白滝姫を祭る栗花落の森（つゆのもり）がある。新湊川（しんみなとがわ）の石井橋から少し山手へ歩いたところにある、落ち着いた家並みの古い住宅街の間を抜ける道。車が通れないほどの細道をたどり、さらに細い路地へ折れると、家が並んだ一角に小さな祠（ほこら）があつて、2本のエノキの巨樹が、それを覆うようにそびえていた。

閑静な住宅地の中に祭られている祠は、質素だがきれいに掃き清められていて、心優しい白滝姫にふさわしく思える。かんばつに苦しむ人々を救おうと、白滝姫が湧かせた泉は、もう見る事ができないけれど、耳をすませば今も水音が聞こえるような場所である。



栗花落の森



白滝姫の祠



栗花落の井

栗花落の井（つゆのい）は、山田の里の原野地区にある。山田道から、車一台がかろうじて通れる道を入れてゆくと、柵（さく）に囲まれて一字のお堂がある。そのきれいに整備された小径をたどると、白滝姫の伝説を記した立て札があり、そのお堂の下が「栗花落の井」であった。

長方形の石組みがある井戸は、さほどの深さもない。しかし毎年梅雨のころになると必ず清水がわき出し、どんな日照りでも秋までかれることがないというのは、不思議な話である。この井戸は、主人公である山田左衛門尉真勝（やまださえものじょうさねかつ）の子孫（栗花落氏）によって整備され、今も大切に祭られているというから、子孫にとっても地元の人々にとっても、まさしく伝説が生きている場所である。

栗花落の井にわく水は、水路をめぐり、あたりの田を潤してきた。「白滝姫」という美しい名とともに、伝説は里人の間で息づいてきたのだろう。

山田の里

山田の里は、南に裏六甲のなだらかな山並み、北を丹生山（たんじょうさん）、帝釈山（たいしゃくさん）の険しい山塊にはさまれた小さな盆地である。風光明媚（ふうこうめいび）な山里は、しかしのどかなだけの場所ではなかった。

山田の里を東西に横切る山田道を西へ抜けると、そこはもう摂津（せつつ）と播磨（はりま）の国境である。こうした場所柄、中世から近世にかけては、何度か争いの舞台にもなったのである。一方で山田道を通じて多くの文化がもたらされ、すぐれた文化財がいくつも残されている。

箱木千年家

山田の里の西の端、吞吐ダム（のとだむ）のそばに残されているのが、箱木千年家（はこぎせんねんや）である。もとは山田川に沿った場所にあったのだが、ダム建築にともなって現在の場所に移された。現在、日本に残されている中では最古の民家とされている。箱木家は、山田地区でも有力な家柄であったそうだが、その重厚なたたずまいは過ぎ去った時間そのもののように思えてくる。



箱木千年家

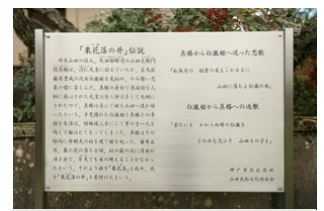
棟が高く、軒が低いのは、古い民家の特徴である。中は土間と板間の質素な造り。土間の一角はうまやになっていて、かつてはここに牛馬が繋がれていた。人も牛馬も、一つ屋根の下で暮らしていたのである。



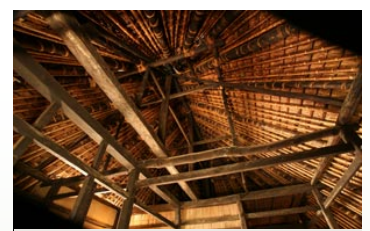
栗花落の井



栗花落の井



栗花落の井(説明板)

箱木千年家
(土間)箱木千年家
(屋根の構造)

六條八幡神社

山田の里には、寺社が不思議なほど多い。その中でまず訪ねたのが、六條八幡神社（ろくじょうはちまんじんじゃ）であった。ここは、旧山田村13か村の鎮守である。山田道から300mほど北に入った場所にあり、山すそから村を見守っている。拝殿・本殿よりも、三重の塔の落ち着いた風格に目を奪われた。社殿わきに、他を圧するようにそびえる巨大なイチョウも印象的である。



六條八幡神社(参道から)

六條八幡神社
(三重の塔)

六條八幡神社

成道寺

六條八幡神社から東へのびる道をたどると、成道寺（じょうどうじ）に着く。堂坊は新しいが、明治時代に廃寺となった安養寺（あんようじ）、福昌寺（ふくしょうじ）の石塔や仏像が集められている。また毎年8月16日には、施餓鬼会が催され、そのあと安養寺から伝わったという六斎太鼓念仏（ろくさいたいこねんぶつ）がおこなわれている。



成道寺(門)

成道寺
(五輪塔)

成道寺(全景)

無動寺・若王子神社

六條八幡神社から成道寺に向かう道を、中ほどで折れて山を登ると、無動寺（むどうじ）と若王子神社（わかおうじじんじゃ）に至る。小鳥のさえずりしか聞こえない森の中に、ひっそりと建つ寺社であるが、山登りやハイキングの人たちが、連れ立って参拝してゆく姿が思いのほか多い。

聖徳太子が開いたと伝えられる無動寺には、平安時代の仏像5体が残されていて、いずれも重要文化財に指定されている。その森のさらに奥に、若王子神社の社殿がある。森の中の社殿は落ち着いた風情で、こちらも重要文化財である。

無動寺から下ってきた細い道のわきに、「新兵衛石（しんべえいし）」と刻まれた一抱えほどの石がある。これは江戸時代中ごろ、かんばつにあって苦しんでいた山田村の庄屋（しょうや）の子新兵衛が、年貢の軽減を直訴し、これが聞き届けられたことを記念して残されたものだという。



若王子神社(拝殿)



若王子神社(鳥居)



若王子神社(拝殿)

下谷上農村歌舞伎舞台

山田の里の東端にある、天彦根神社（あまつひこねじんじゃ）の境内には、江戸時代に造られた農村歌舞伎舞台が残されている。かつては村祭りの時などに、農民自身が歌舞伎や演劇をおこなった舞台である。農民が、歌舞伎や芝居を楽しむことは禁じられていた時代のことだが、「神社に奉納する」形で楽しんだと言われている。まさに庶民の反骨、知恵と言うべきだろう。



下谷上農村歌舞伎舞台

下谷上農村歌舞伎舞台
(説明板)

よく保存された重厚な建物で、農民たちの力だけで、よくここまでのものを造り、また演じ続けられたものだと賛嘆させられる。楽しみを求める。その気持ちが、人々が生きる力になっていたのかもしれない。



農村歌舞伎



農村歌舞伎

用語解説

【烏原古道】からすはらこどう

現在の神戸市兵庫区と、北区山田町を結んでいた古街道。平清盛が丹生山（たんじょうさん）に参詣する際に通った道とも言われ、古代には重要な道路であったと考えられる。明治44年に刊行された『西撰大観』（仲彦三郎編）によれば、湊川、石井川沿いに烏原越えの道が示されているという。その経路の概略は、兵庫区から石井川沿いに菊水山の西を通り、小部、北五葉を抜け、長坂山の東を越えて山田、丹生神社に至るというものであったとされる。

現在は神戸電鉄がこの道と重複しているほか、ダムの建設、ニュータウン開発などによって、多くの部分が消滅、通行不能、あるいは位置不明となってしまった。

【山田道】やまだみち

現在の神戸市北区山田町の、中央を流れる山田川に沿って、東西にはしる街道。古代から山陽道の裏道として利用されていた。西宮市の生瀬から、有馬温泉、三木市までを結ぶ道を湯山街道（ゆのやまかいどう）というが、この湯山街道の西半にあたる、三木～有馬間の北回りの淡河道（おうごみち）であり、南回りが山田道であった。

山田道は古代から、都に通じる山間の動脈として利用されたため、さまざまな文化が流入し、周辺には数多くの文化財が残されている。

【山田庄】やまだのしょう

現在の神戸市北区山田を中心とした地域にあった荘園。平安時代には東大寺領であったが、後に平清盛が領有し、平氏滅亡後は源頼朝が接收されて、京都市内にあった若宮八幡宮に寄進された。

播磨国淡河庄（おうごしょう）と境界を接し、室町時代に至るまで境界争いが絶えなかった。

南北朝期には、南朝方の拠点となったため、北朝方の赤松氏との間で戦闘が繰り返された。また織田信長の中国地方攻略に伴い、三木城の合戦が起きると、別所長治は花熊城・丹生寺城・淡河城から三木城までの食糧運搬ルートを確保しようとしたため、羽柴秀吉は、この切断のために丹生寺城を攻略した。

【箱木千年家】はこぎせんねんや

神戸市北区山田町衝原にある中世民家。「箱木家住宅」が正式名称である。箱木家は、山田庄の地侍で、14～15世紀にはこの地域の中心的な一族であったとされる。住宅は、かつては山田川に臨む台地上にあり、江戸時代にはすでに千年家と呼ばれていた。

しかし1970年代におこなわれた呑吐（どんと）ダムの建設によって、住宅が水没することとなったため、解体、移築されたものである。

移築の際におこなわれた調査により、姫路市安富町の皆河千年家（みなごせんねんや）とともに、現存する日本最古の民家であることが確認された。また解体前の箱木家住宅が、中世に建てられた母屋と、江戸時代中期に改築されたはなれを、江戸時代末期に一棟につないだ建物であったことも明らかとなっている。移築後は母屋とはなれを分離して、建築当初の状況が再現されている。国指定重要文化財。

【六條八幡神社】ろくじょうはちまんじんじゃ

神戸市北区山田町中にある神社。祭神は応神天皇。山田庄十三村（藍那、西下、東下、中、福地、原野、上谷上、下谷上、小河、坂本、衝原、東小部、西小部）の総鎮守。境内には三重塔、薬師堂などがあり、かつての神仏習合の姿をとどめている。

伝承によれば、神宮皇后の行宮（あんぐう）であったとされ、10世紀に宝殿が造営されたという。12世紀前半に、源為義（みなもとのためよし）が山田庄の領主となり、京都の六条にあった若宮八幡宮を勧請（かんじょう）し、現在の六條八幡神社のもととなった。

三重塔は、15世紀中ごろに建てられたもので、檜皮葺（ひわだぶき）、高さ13.2mをはかる。室町時代の整美な建築として、国の重要文化財に指定されている。

【無動寺】むどうじ

神戸市北区山田町福地にある真言宗の寺院。若王山（にやくおうさん）と号する。現在の無動寺の位置には、かつて若王山福寺があったが、衰微して明治時代に廃寺となった。その福寺跡に、村の菩提寺であった無動寺が移転して現在に至っているという。寺伝によれば福寺は、聖徳太子が物部守屋（もののべのもりや）との戦いの勝利を念じて作らせた仏像を、本尊として創建されたという。その正確な創建年代は不明だが、現在無動寺に所蔵される仏像の製作年代から、平安時代後期には成立していたものと思われる。

所蔵される、大日如来坐像、釈迦如来坐像、阿弥陀如来坐像の三尊仏、不動明王坐像、十一面観音立像は、いずれも平安時代後期の仏像として、国の重要文化財に指定されている。

【若王子神社】にやくおうじじんじゃ

神戸市北区山田町福地にある神社。福地村の鎮守。勧請（かんじょう）は13世紀末ごろと考えられる。現在の建物は15世紀初めに再建されたもので、国の重要文化財。

かつては神社に隣接して、大日如来を本尊とする若王山福寺があったが、寺が衰微した後は若王子神社に大日堂が付随する形となった。さらに明治の神仏分離令によって、大日堂にあった本尊が、村の菩提寺であった無動寺に引き継がれて現在に至っている。

【農村歌舞伎】のうそんかぶき

農村部で演じられる歌舞伎。土地の人々によって演じられる、素人芝居である。

江戸時代になると農村部に歌舞伎が浸透し、職業的な劇団による歌舞伎の上演もおこなわれるようになったが、幕府は農民の遊興やこれにともなう金の消費を止めるため、遊芸、歌舞伎、浄瑠璃（じょうり）、踊りなどを厳しく禁じ、歌舞伎関係者が村に入ることも禁止した（地芝居禁止令：1799年）。

しかし村人自身が演じて、「神社に奉納する」という形式をとった農村歌舞伎は、容認せざるを得なかったようで、天保の改革などで厳しく取り締まられた時期はあったものの、江戸時代を通じて継続し、明治時代にも盛んであった。しかし昭和に入って戦時体制が強まると、地芝居そのものの継続ができず消滅していった。

戦後は高度経済成長にともなって、農村そのものが変質してゆき、農村歌舞伎は失われていった。しかし近年、郷土の文化が見直されはじめて、兵庫県下でも葛畑（かづらはた）の農村歌舞伎、播州歌舞伎や、都市から郊外に移り住んだ住民なども参加する形態も見られるようになり、十指に余る農村歌舞伎、子供歌舞伎などが復活、上演されている。

下谷上農村歌舞伎舞台は、江戸時代末に建てられたもので、代表的な農村歌舞伎舞台として国指定の重要有形民俗文化財に指定されている。また、山田地区周辺には、各村に農村歌舞伎舞台が残されている。

【藤原豊成】ふじわらのとよなり

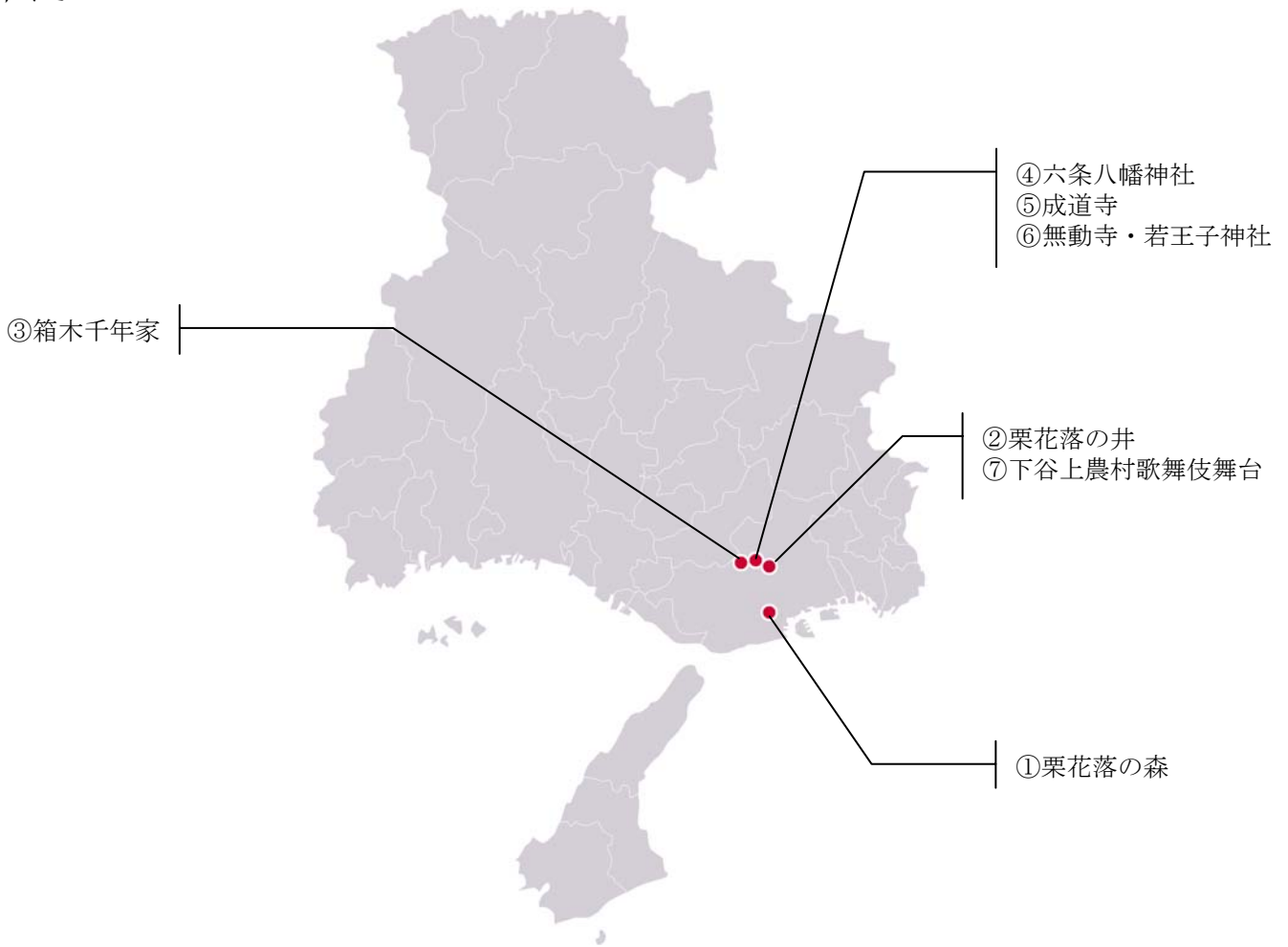
奈良時代の貴族（704～766）。難波大臣。737年におきた天然痘の流行で父と兄弟が急死したために、藤原氏の中心人物として浮上した。

749年に右大臣となったが、弟藤原仲麻呂と対立して政権の外に押し出され気味となり翌年の橘奈良麻呂の乱に連座して大宰府に流されることになった。しかしこれに抗議し、「病気」と称して難波にあった自分の別荘に籠ったため、大宰府行きは無期延期状態となり、そこで8年間の隠遁（いんとん）生活を送った。764年、仲麻呂が道鏡排斥に失敗して殺害された後（藤原仲麻呂の乱）、従一位右大臣として政権の中枢に復帰した。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫のむかしばなし積講	1978	船知慧	中央出版エージェント
	兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎・足立巻一	角川書店
	神戸の伝説散歩	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	兵庫のふるさと散歩 1. 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県の地名 ※日本歴史地名大系第29巻 I	1999	平凡社地方資料センター編	平凡社

所在地リスト



①栗花落の森	神戸市兵庫区都由乃町2
②栗花落の井	神戸市北区山田町原野
③箱木千年家	神戸市北区山田町衝原
④六条八幡神社	神戸市北区山田町中字宮ノ片57
⑤成道寺	神戸市北区山田町原野字天神26
⑥無動寺・若王子神社	神戸市北区山田町福地字新地101
⑦下谷上農村歌舞伎舞台	神戸市北区山田町下谷上宮前

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

ひれ墓（ひれはか） 悠久の流れを見下ろす墓



伝説 ひれ墓（ひれはか）
悠久の流れを見下ろす墓

紀行 褶墓と加古川下流の風景
・加古川下流の景観
・褶墓と日岡山古墳群
・竜山
・生石神社と石の宝殿

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

ひれ墓（ひれはか） 悠久の流れを見下ろす墓

1600年ほど前のことでしょうか。景行天皇（けいこうてんのう）は、播磨（はりま）に住む豪族（ごうぞく）の娘を妻にすることになりました。そのころは、結婚するときには男の人の方から、女の人のところへ出かけてゆかなければなりません。そこで天皇は旅のしたくをして、大和国（やまとのくに）から播磨国（はりまのくに）へと向かいました。

摂津国（せっつのくに）の高瀬（たかせ）という所まで来ると、舟で向こう岸へわたらなければなりません。天皇は、岸边にいたわたし守に「私を向こう岸へ渡してくれ」と言いました。ところがこれを聞いたわたし守は、「私はあなたの家来ではありません」とすまして言います。

「それはそうだが、どうにかわたしてくれ。」

「それなら、わたし賃をおはらいなさい。」

そこで天皇は、旅の時につけるかみかざりを舟に投げてやりました。その輝きで、舟の中はまぶしいほどになったそうです。こうして、景行天皇は舟に乗り、向こう岸へ着くことができたのでした。

天皇が明石まで来たころになって、娘ははじめて、天皇がやってくることを聞かされます。娘はすっかりおどろいてしまいました。いったいどうしてよいやらわかりません。困った娘は、海にうかぶ小島にかくれてしまいました。

一方天皇は、娘の住む加古（かこ）の松原（まつばら）までやってきましたが、娘の姿はどこにもありません。ちょうどその時、一匹の白い犬が、海に向かってはげしく吠えたたてました。

「あれはだれの犬か」と天皇がたずねると、家来のひとりが「娘が飼っている犬です」と答えました。

「それならば、娘はおきにうかぶあの島にいるにちがいない。」

島へわたった天皇は、優しい声で呼びかけます。

「この島にかくれている愛しい妻よ。どうか出てきておくれ。」

その声に、娘はようやく姿をあらわしました。船を連ねて島からもどった天皇は、加古の地に立派な宮を建て、結婚の儀式（ぎしき）をおこないました。

天皇と娘は、その宮で幸せに暮らしましたが、数年の後、娘は亡くなってしまいました。天皇は深く悲しみました。娘のなきがらをほうむるため、はるかに海を望む日岡（ひおか）の頂上に、立派な墓が造られました。

ところが娘のなきがらを墓へと運ぶために、船に乗せて川をわたっていたときのことで、とつぜん大きなつむじ風が吹いて船を転覆（てんぷく）させ、さかまく水は、そのなきがらを川底深くしずめてしまいました。天皇は悲しんで、娘のなきがらをさがさせましたが、見つかったのはくしを入れる箱と褶（ひれ）だけで、どんなにさがしても、なきがらは見つかりませんでした。

そこで、このくし箱と褶だけを墓にほうむったということです。そのためいつしか、この墓を「褶墓（ひれはか）」と呼ぶようになりました。

娘のことを思い出すたびに、天皇は娘が恋しく、また悲しくてなりません。

「これからは、娘のなきがらがしずんだこの川で取れるものは、食べるまい」と言って、その後、加古川でとれた魚を決してめし上がることはなかったということです。

景行天皇が娘を訪ねたときに立ち寄った場所は、今もいくつかの言い伝えがありますが、そのほとんどは長い年月の中で忘れられています。二人が暮らした宮の場所も、今ではどこかわからなくなっていました。

紀行「褶墓と加古川下流の風景」

加古川下流の景観



加古川の河口付近

加古川（かこがわ）に沿って海を目指すと、風景は幾度か大きく変わる。一度目は西脇市（にしわきし）あたり。それまで中国山地の山間を流れていた川が、一気に広々とした景色の中へ入ってゆく。広大な台地が広がる中流域である。次は小野市・三木市（みきし）と加古川市の市境あたり、東に正法寺山（しょうぼうじやま）、西からは坊主山（ぼうずやま）が迫り、平野がほとんどなくなる所である。ここから下は一気に視界が開け、流れも一段と穏やかな下流域に入る。

加古川の市街地を遠望するあたりからは、川幅が広がり、水量も豊かな大河の景観となってくる。河口付近こそ臨海工業地帯に囲まれてはいるが、夕日に染まる穏やかな瀬戸内海へ流れ込むあたりは、昔の面影を今にとどめていて「兵庫の貴重な景観」にも選ばれている。

かつてこの流れに沿って、さまざまな人と文化が往来した。



加古川下流の景観

褶墓と日岡山古墳群

加古川が、市街地に入るよりも少し上流の左岸に、独立丘陵の日岡山（ひおかやま）がある。『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では、景行天皇（けいこうてんのう、応神天皇（おうじんてんのう）という説もある）がこの丘の上に立ち、「この国、丘と原野いと広くして、この丘を見るに鹿兒（かこ）のごとし」と述べたという。つまり日岡こそは、加古という名の発祥の地なのである。



日岡山陵への階段



日岡山陵

日岡には古墳が数多く知られている。公園として整備された丘には、日岡山古墳群が広がっている。褶墓（ひれはか）を含め、合計5基の前方後円墳と3基の円墳からなる前期の古墳群と、およそ20基の円墳からなる後期の古墳群で、外観だけではあるが、いくつかは見学もできる。

褶墓は、この日岡山の頂上にある。

公園の駐車場から続く階段を上り詰めた頂上に、照葉樹林に覆われた古墳がひっそりと眠っている。

現在は、宮内庁指定の陵墓であるから、内部をうかがうことすらできない。測量図をもとに、全長80mの前方後円墳と言われているけれど、前方部は後世につけ足したものだという説もあるようだ。発掘調査をおこなうほかに、それを確かめるすべはないだろう。しかし、加古川下流に向かって見晴らしのきく頂上に立つと、むしろこの場所に、最も古い前方後円墳があるのは当然だろうと思える。加古川下流を支配する王であれば、いちばん目立つこの丘を墓所を選ぶだろう。風土記が語るように、大和の大王であった景行天皇が、妻問いに訪れたというのも、播磨地方の王が並々ならぬ力を保っていたことの証なのではないだろうか。「姫の遺体が川に沈んだ」という伝説の真偽はともかく、この古墳に葬られた人物が、加古川の水運なども深く関わっていたことも間違いないだろう。

褶墓の真実が明らかになる日は、まだまだ先のことだろう。それまでは、常緑の森に覆われて、川に沈んだ娘の伝説も秘やかに生き続けるに違いない。



加古川方面を望む

竜山

褶墓から加古川を下ると、右岸に竜山（たつやま）が見えてくる。高さ100mにも満たない低山だが、「竜山石」の産地としてその名はよく知られている。この山に産する石は、石棺を造るための材料として古墳時代から採掘されていた。竜山石の石棺は近畿一円で広く用いられていたから、ある意味「ブランド品」と言える。

古墳の石棺は、大きさといい形といい手ごろな石材であったせいか、中世以降あちこちで、ほかの目的に転用された。今、東播磨で一番目につくのは、棺材に刻まれた「石棺仏」である。加古川市・高砂市（たかさごし）から小野市・加西市（かさいし）にかけて、竜山石の石棺仏は点々と分布している。

よく考えてみると、墓をあばいて石棺をこわし、仏像を刻むのであるから、坊さんたちもずいぶん乱暴なことをしたものだ、リサイクルと言え言えないこともない。

竜山では、今も石材の採掘が続いている。1500年以上も続く「石の山」は、また、人々の暮らしに生き続けている山でもある。



竜山



竜山付近の石切り場



生石山から竜山を見る

生石神社と石の宝殿



生石神社



生石神社と石の宝殿

この石を産む山で、石をご神体としているのが生石神社（おうしこじんじゃ）である。竜山の北にある生石神社は、その名の通り「石を生み出す山」を祭っている。ご神体となっている「石の宝殿（いしのほうでん）」は、謎を秘めた石として知る人も多い。

『播磨国風土記』では、「原の南に作石あり。形、屋の如し。一中略一 伝へて言えらく、聖徳の王の御世、弓削の大連の造れる石なり」と伝えているが、この当時にはすでに、はっきりとしたことがわからなくなっていたのではないだろうか。

その形などから、7世紀ごろに墓として造られたのではないとも言われるが、これほど巨大なものを本当に動かせると思っていたのだろうか。古墳や石棺作りにたけた古代の石工たちが、そんなことがわからなかったとは思えない。しかし一方で、この巨石の根元は、明らかに切り離すことを目ざして、深くえぐられているのである。

墓か、それとも巨大な記念物か。どこかへ運ぶつもりだったのか。造らせたのはだれなのか。すべてが謎のまま、石は立ち続けている。

石の宝殿の裏山からの眺望は素晴らしい。実はこの山は、頂上まで続く巨大な1個の岩盤なのである。そこに刻まれた階段を、滑らないよう一歩ずつ確かめながら登ると、5分ほどで東屋のある頂上に至る。

頂上からは360度のパノラマである。竜山から西へ続く山塊と、石切場のようすが一目で見渡せるだけでなく、はるか北播磨の山地から加古川下流域の平野、瀬戸内海（せとないかい）までが視界に入る。宝殿を刻んだ石工たちが見た風景を思って、しばしの間立ちつくしていた。



石の宝殿



石の宝殿

用語解説

【加古川】かこがわ

兵庫県の南部を流れる一級河川。延長96km、流域面積1730平方キロメートルをはかる県下最大・最長の河川である。但馬・丹波・播磨の三国が接する丹波市青垣町の粟鹿山（あわがさん、標高962m）付近が源流で、途中小野市、加古川市などを流れ、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注ぐ。

加古川の水運は、古代から物流を担う経路であったと考えられ、特に日本海に注ぐ由良川水系へは峠を越えずに到達できることから、「加古川－由良川の道」とも呼ばれて、日本海側と瀬戸内側を結ぶ重要なルートとされている。

【兵庫の貴重な景観】ひょうごのきちょうなけいかん

兵庫県の健康生活部環境局自然環境保全課が選定した、『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』で選定された景観。ここでは景観を、「視覚的な美しさと緑や自然の質（生態系）を包含した概念」としてとらえており、景観資源的価値と自然的価値の両面から評価されるものを貴重な自然景観とし、A～Cランクで合計207か所が選定されている。

【日岡山】ひおかやま

加古川市日岡に所在する独立丘陵。加古川に面し、標高は51m前後である。山頂からふもとにかけて、日岡古墳群が広がっている。『播磨国風土記』によると日岡の語源は、景行天皇（応神天皇とする説もある）がこの丘に登ったとき、鹿が「比々（ヒヒ）」と鳴いたためだという。現在一帯は、公園としてさまざまな施設が整備されている。

【景行天皇】けいこうてんのう

第12代の天皇。記紀には、全国を征討した天皇として描かれており、皇子ヤマトタケルによる熊襲、蝦夷の征討などの記述がある。143歳まで生きたとされるなど、伝説的要素が強く、史実性は確かではない。

【応神天皇】おうじんてんのう

第15代の天皇。4世紀末から5世紀初頭ころとされる。記紀では、この時期に渡来人と新技術の伝来があり、大規模な開発がおこなわれたとしている。陵墓に比定されている誉田御廟山古墳（こんだごびょうやまこふん）は、全長425mをはかり、墳丘の長さで第2位、体積では第1位の古墳である。

【日岡古墳群】ひおかこふんぐん

日岡山山頂からふもとにかけて分布する古墳群。主として古墳時代前期～中期にかけて築造されたと推定されている。日岡山頂には、陵墓として管理されている褶墓古墳（日岡陵）がある。全長80mの前方後円墳で、公開されている測量図からは整った古式前方後円墳とされているが、明治時代初頭に修築した際、円墳であったものに前方部を付け加えたという説もある。古墳時代前期の加古川下流地域を考える上で、重要な古墳群である。

【照葉樹林】しょうようじゅりん

温帯に見られる常緑広葉樹林の一つ。森林を構成する木に、葉の表面の光沢が強い樹木が多いのでこの名がある。本来本州の南西部以南では、照葉樹林が極相林（きょくそうりん、その地域で自然の変遷に任せるとき、最終的に到達する森林の姿。その地域の環境に適合して、長期にわたって安定する）であるが、開発や植林を通じてまとまった照葉樹林はほとんどが消失し、一部の山地や寺社の鎮守の森などで断片的に見られるだけとなっている。

【陵墓・陵墓参考地】りょうぼ・りょうぼさんこうち

一般に、天皇・皇族の墓を総称して陵墓といい、皇族の墓所である可能性がある場所を陵墓参考地と呼ぶ。陵墓および陵墓参考地は宮内庁によって管理されており、研究者などが自由に立ち入って調査することができない。一部の古墳では、比定される天皇と古墳の年代に明らかな相違が見られ、当該天皇陵であることに疑義が出されている。考古学的には、古墳の名称はその古墳が所在する地名（字名など）を用いることが原則であり、〇〇天皇陵という呼称は用いない（例：仁徳天皇陵＝大仙（だいせん）古墳、応神天皇陵＝誉田御廟山（こんだごびょうやま）古墳など）が、「仁徳天皇陵古墳」といった使い方をする例もある。

【褶】ひれ

比礼・領巾とも書く。

古代、女性が着用したスカーフの一種。薄い細長い布で作られ、女性が首から肩にかけてめぐらせ、長く垂らした。装飾的な効果だけではなく、これを振ることで破邪の呪力があるとされていた。中世以降はしだいに使用されなくなった。

【竜山石】たつやまいし

兵庫県の播磨地方南部に産出する、流紋岩質溶結凝灰岩（りゅうもんがんしつようけつぎょうかいがん）。高砂市竜山（たかさごしたつやま、標高92.4m）付近を中心に採掘されていたため、「竜山石」と呼ばれる。古墳時代から、石棺（せっかん）用の石材として用いられている。加西市長（おさ）、高室（たかむろ）などでも近似の石材を産し、同様に利用された。

【石棺仏】せっかんぶつ

石棺の部材を利用して作られた石仏。石棺の蓋（ふた）のような板状の石材をそのまま利用して、浮き彫りで石仏をあらわしたものが多い。加古川市、高砂市、小野市、加西市など、加古川流域西部に多く分布する。13～16世紀に製作されたものが多いと考えられている。

【石棺】せっかん

埋葬する遺体を納めるために作られた、石製の棺。石を組み合わせて作る場合と、一個の石をくりぬいて作る場合がある。日本での最古の例は縄文時代後期にさかのぼる。

古墳時代には、古墳に埋葬するためのさまざまな形式の石棺が製作された。その主要なものには、割竹形石棺、舟形石棺（ともに古墳時代前期）、長持形石棺（中期）、家形石棺（後期）がある。

【生石神社・石の宝殿】おうしこじんじゃ（「おおしこ」とも表記することがある）・いしのほうでん

『生石神社略記』によれば、崇神天皇（すじんてんのう）の代に創建したとされ、背後の宝殿山山腹にある石の宝殿を神体として祭る。

石の宝殿については、オオナムチの神とスクナヒコナの神が、出雲からこの地に来た際に、国土を鎮めるため、夜に石の宮殿を造営しようとしたが、阿賀の神の反乱を受けて造営が間に合わなかったという伝承（『生石神社略記』）、聖徳太子の時代に弓削大連（ゆげのおおむらじ、物部守屋（もののべのもりや）のこと）が造ったという『播磨国風土記』の伝承などがある。古墳時代終末期の石棺や横口式石槨（せきかく）などとの関係を指摘する説、石棺の未製品とする説、火葬骨の骨蔵器外容器とする説、供養堂とする説などがあるが、製作年代については、7世紀代と考える人が多いようである。

【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

【聖徳の王】しょうとくのおおきみ

聖徳太子（574～622）のこと（『播磨国風土記』印南郡の記述）。

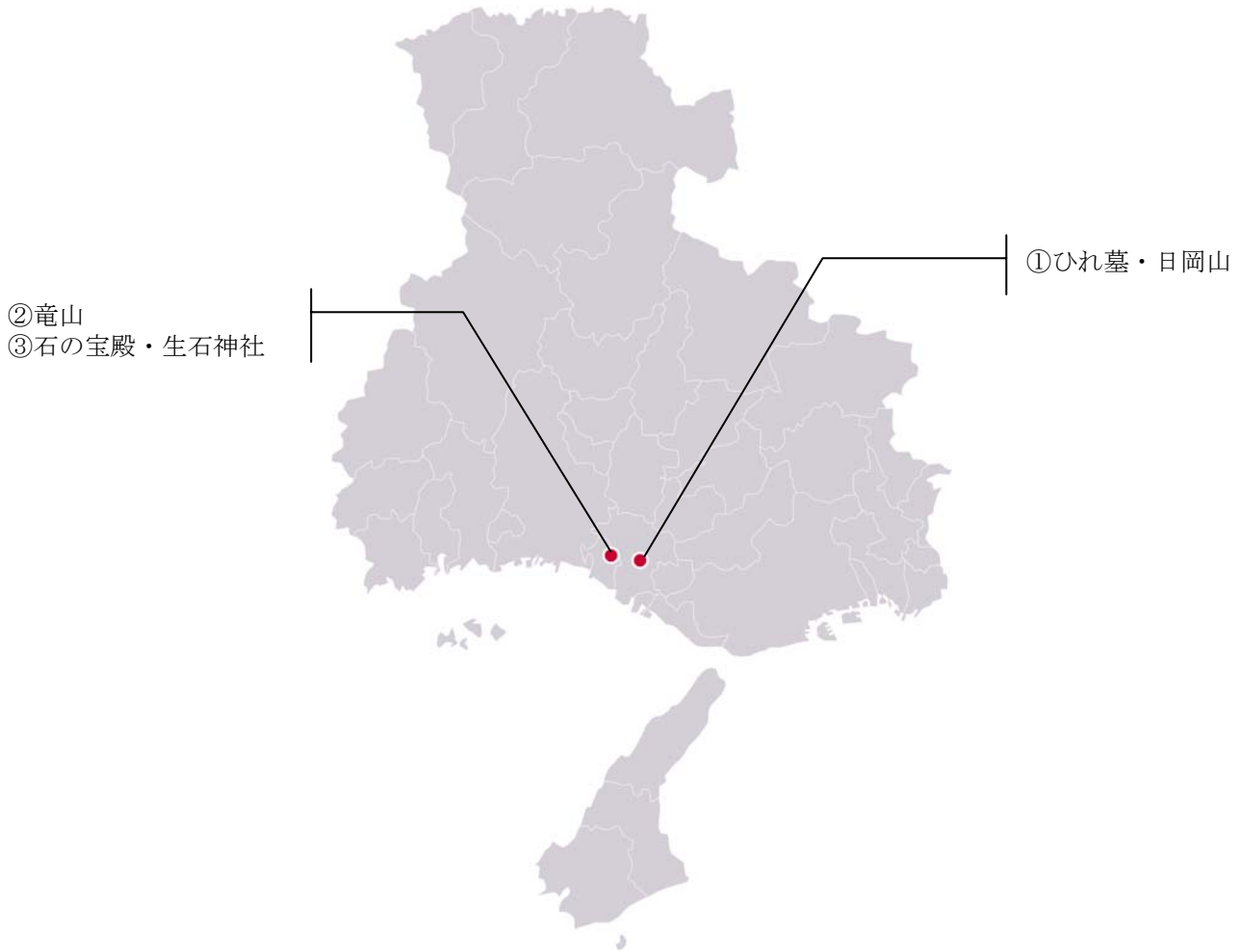
【弓削の大連】ゆげのおおむらじ

物部守屋（？～587）のこと。仏教を排斥して蘇我氏（そがし）と対立し、滅ぼされた。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩 1. 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	増補改訂国史大系 日本書紀前篇	1981	黒板勝美編	吉川弘文館
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本の古代遺跡3 兵庫南部	1984	櫃本誠一・松下勝	保育社
	加古川市史第1巻	1989	加古川市史編さん委員会	加古川市
その他	史蹟播磨國石乃寶殿生石神社略記 ※参拝者用資料	不詳	生石神社	生石神社
	日本三奇 史跡石乃宝殿 ※参拝者用資料	不詳	生石神社	生石神社

所在地リスト



①ひれ墓・日岡山	加古川市加古川町大野
②竜山	高砂市竜山
③石の宝殿・生石神社	高砂市阿弥陀町生石171

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

石の寝屋

明石の海に眠る真珠を求めて



伝説 石の寝屋

明石の海に眠る真珠を求めて

紀行 石の寝屋古墳とその周辺を訪ねる

- ・明石海峡を渡る
- ・石の寝屋古墳
- ・岩屋の浜から松帆の浦へ
- ・岩屋神社
- ・絵島
- ・岩屋城跡
- ・伊弉諾神宮
- ・岩屋台場群と松帆浦

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

石の寝屋

明石の海に眠る真珠を求めて

今から1500年も前のことです。そのころの淡路島（あわじしま）は、「御食国（みけつくに）」とも呼ばれて、天皇がめし上がるさまざまな食物を、朝廷（ちょうてい）にさしあげていました。

ある年の秋、允恭天皇（いんぎょうてんのう）という天皇が、淡路へ狩りにやってきました。そのころの淡路には、大きな鹿（しか）や猪（いのしし）、そして鴨（かも）や雁（かり）などのわたり鳥がたくさんいたのです。ところが一日中追いかけて、どんなに矢を射かけても、たった一つのえものもありません。不思議に思った天皇は、その理由を占わせてみました。

するとイザナギ神社の神様から、こんなお告げがあったのです。

「私が、えものをとれないようにしているのだ。赤石（あかし）の海の底にある真珠を取ってきて、私に祭ってくれたら、淡路島のえものを残らず取らせてあげよう。」

天皇はさっそく、淡路の海人（あま）を大勢集めて、赤石の海へもぐらせました。けれども海が深くて、だれ一人底までもぐることはできません。

「だれかもっと深くまでもぐれるものはないのか。」

「申し上げます。阿波国（あわのくに）の長村に、男狭磯（おさし）という海人（あま）がおります。この人は、他の海人の倍ももぐれるそうです。」

「では、すぐに使いを出せ。」

こうして、阿波の国から男狭磯が呼び寄せられました。男狭磯は、さっそく腰に長いなわを結んで、海にもぐってゆきました。

しばらくして浮かび上がってきた男狭磯は言いました。

「この海の底に、とても大きな光るアワビがある。だが深すぎて、とてももぐれそうにない。どうしたものか。」

「それこそ神様のおっしゃる真珠にちがいない。なんとか取れないものかな。」

「どうにかして神様を喜ばせてあげたいものだ。」

「だがさっきもぐったので、もう五十尋（ひろ）もあるぞ。これ以上はとても無理だ。」

船の上にいる人々は、口々に言いました。

男狭磯は迷いました。が、やがて決心したように海へ飛びこみました。なわはぐんぐんのびてゆきます。四十尋、五十尋……。やがて六十尋もこえようとしたところで、ぐいぐいとなわを引いて、男狭磯から合図がありました。

「それっ、引っ張れ！」

船の人たちは、必死になってなわをたぐり寄せましたが、ようやく海面についたとき、男狭磯は息が絶えてしまっていました。

けれども男狭磯のうでは、見たこともないほど大きなアワビがしっかりとだかれていて、その中から、桃の実ほどもあるみごとな真珠が見つかったのです。

天皇はさっそく、イザナギ神社に真珠をお祭りしました。すると、神様のお告げの通り、たくさんのえものをとることができました。けれども天皇は、男狭磯が死んでしまったのがくやまれてなりません。そのころ海人というのは、身分の低い人たちでしたが、天皇は男狭磯のために、赤石の海を見わたせる山の上に立派な墓を造り、ていねいにとむらいをしたそうです。石で造ったこのお墓は、だれ言うとなく「石の寝屋（ねや）」と呼ばれるようになりました。

紀行「石の寝屋古墳とその周辺を訪ねる」

明石海峡を渡る



岩屋港

明石港（あかしこう）からフェリーに揺られること20分あまり。明石海峡大橋（あかしかいきょうおおはし）のアーチを抜けると、岩屋（いわや）の浜とその背後にある緑の山が迫ってくる。常緑樹が繁る山は、里山の雑木林を見慣れた目にはまぶしい。それを眺める間に、漁港の突堤のわきを通過して、船は岩屋港に到着した。

岩屋港は、淡路（あわじ）と本州を結ぶ航路の拠点の一つとして、古くから栄えた港である。明石海峡大橋が開通した今でも、本州と淡路島をつなぐ港として、往来は少なくない。漁港特有の香りを感じながら、石の寝屋古墳（いしのねやこふん）を訪ねた。

石の寝屋古墳

少し変わった名前がつけられた古墳は、おそらくかなり昔から知られていたのだろう。伝説では、海人（あま）である阿波（あわ）の男狭磯（おさし）の墓だと伝えているけれども、「寝屋」という名前は男狭磯とはあまり関係がなさそうだから、ひょっとするとかつては、何か別のいわれがあったのかもしれない。

港から岩屋の町並みを西へたどった所にある、「石の寝屋古墳」という看板から、矢印のとおり細い坂道を登る。古墳は、淡路島を南北に貫く山地が、明石海峡に面する最北端の尾根の上にある。かつてはその山頂まで山道がのびていたそうだが、今は淡路縦貫道によって尾根が大きな切り通しになっていて、高速道路をまたいで橋が架けられている。

橋の手前までは車でも入れるが、ここからは徒歩で行かなければならない。橋を渡ったところからが、難行苦行の開始である。尾根までは延々と続く階段である。息を切らせながら登るにつれて、背後に明石海峡から大阪湾への雄大な風景が開けてくるのを振り返り、感嘆しながら上り詰めると、緩やかに起伏する尾根の上をたどる細い山道が待っている。

雑木や笹が、時折視界をさえぎる道を、ひたすらまっすぐに歩く。途中、道がわかりにくい所もあるが、方向を変えずに歩かねばならない。10分ほど歩いたところで、しだの間から顔を出している、ひと抱えほどの石が目についた。その右手から裏へまわると、石室がある。

石の寝屋古墳の横穴式石室は、すでに天井石が落下して、かろうじて石室の壁の一部を見られるのみである。石室の入り口は、明石海峡よりやや東、現在の岩屋港付近に向いているようだが、草木が繁茂した今では、ここからの眺望はほとんど望めない。

まだ発掘調査がされていないため、詳細は不明と言わざるを得ないが、古墳時代後期に造られたものであることは間違いない。伝説にあるような海人の墓であるのかどうかは、何とも言えないけれど、海峡付近の海に深い関わりを持っていた人が葬られているという推測は、うなずけるものがある。

巨大な橋が架かり、行き交う船の姿もずいぶん変わったであろう。その光景を見たら、墓の主は何と言うだろうか。

名寸隅（なぎすみ）の 舟瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の
浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ
海人娘女 ありとは聞けど 見に行かお よしのなけれ
ば ますらをの 心はなしに 手弱女の 思ひたわみて
たもほり 我れはぞ恋ふる 舟楫（かじ）をなみ

（笠金村（かさのかなむら） 『万葉集』 巻6 935）

石の寝屋古墳から
岩屋の町を望む石の寝屋古墳から
明石海峡を望む

岩屋の浜から松帆の浦へ

岩屋の浜から松帆の浦までの道沿いには、いくつもの文化財が点在している。

■石屋神社

港から十分ほど南へ歩くと、式内社の石屋神社（いわやじんじゃ）がある。海に向かって建つ本殿には、國常立尊（くにのとこたちのみこと）、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、伊弉冉尊（いざなみのみこと）といった、国産みの神が祭られている。絵島明神（えじまみょうじん）という別名のとおり、すぐ近くの海に絵島が浮かんでいる。

■絵島

海に浸食されたがけに、少し橙色（だいだいいろ）をおびた岩脈が露呈した絵島は、ちょっとした奇観である。国産み伝説にある「おのころ島」は、この絵島であるとも伝えているが、島の夕景は、それを真実ではないかと思わせてくれた。『枕草子（まくらのそうし）』にも「島は、八十島。浮島。たはれ島。絵島。松が浦島。豊浦の島。まがきの島」としてあげられている。



絵島



絵島(夕景)

絵島の南には大和島（やまとじま）という小島もあるが、こちらは、島内の特異な植生が天然記念物に指定されている。

千鳥なく 絵島の浦に 澄む月を
浪にうつして 見る今宵かな
(西行)

絵島
(淡路国名所図絵)絵島
(英文 日本の漁師の生活)

大和島

■岩屋城跡

絵島を見下ろす山の上には、岩屋城跡がある。戦国時代に、織田（おだ）・毛利（もうり）が戦ったときの拠点の一つでもあり、羽柴秀吉（はしばひでよし）の攻撃を受けて陥落した城である。今はただ深い森が、城跡を覆い、繁茂した草で、城跡までの道をたどることはできなかった。



岩屋城(港から)



岩屋城遠景

■伊弉諾神宮



伊弉諾神宮(参道)



伊弉諾神宮(門)



伊弉諾神宮(拜殿)



参拝



夫婦クス

伊弉諾尊、伊弉冉尊を祭る社はいくつもあるが、淡路市多賀（たが）にある伊弉諾神宮（いざなぎじんぐう）は、延喜式内社（えんぎしきないしゃ）であり、淡路国一宮でもある。縁結びの神社としても有名で、そのせいもあってか、境内には巨大な夫婦（めおと）クスがあり、県の天然記念物に指定されている。岩屋からは少し遠いが、訪ねてみたい宮である。

伊弉諾神宮
(淡路名所図絵)

岩屋台場群と松帆浦

江戸時代の終わり、岩屋の浜に沿っていくつもの台場が築かれた。台場というのは、大砲を設置した一種の要塞である。外国船を打ち払うために設けられたこれらの台場は、一発の弾を撃つこともなく開国を迎え、いまではそのほとんどが往時の姿をとどめていないが、もっとも北西にある松帆台場（まつほだいば）だけはよく保存されている。



松帆台場跡



松帆台場跡南の築港跡

現在は神戸製鋼所の用地内になっているが、ことわれば見学はできる。かつて13門の砲をそなえたという台場跡には、石垣や土塁が保存されている。台場の背後には、岩盤を深く掘り込んで築かれた、海への水路が設けられていたが、その存在を示す池が、現在も神戸製鋼所の門外に残されている。

松帆台場のあたりの浜が、有名な「松帆の浦（まつほのうら）」である。



松帆浦

松帆浦
(淡路国名所図絵)

来ぬ人を 松帆の浦の 夕風（ゆうなぎ）に 焼くや藻汐（もしお）の 身もこがれつつ

（藤原定家 『新勅撰和歌集』）

用語解説

【岩屋港】いわやこう

本州、淡路、四国連絡の要地として、江戸時代から港の工事がくり返しおこなわれたが、風波が厳しいため挫折も多かった。現在のような港ができたのは、昭和10（1935）年のことである。

岩屋港からは、淡路島の東岸を縦貫する国道28号線がのびており、明石海峡大橋開通後も、フェリーが本州との間を結んでいる。また岩屋漁港は淡路町の漁業産業の中核で、タイ、タコ、イカナゴなど、瀬戸内を代表する海産物が水揚げされている。

【御食国】みけつくに

日本古代から平安時代まで、天皇や皇族の食物のうち、海水産物を中心とした副食物を献上した国の総称。

【尋】ひろ

日本古来の長さの単位。1尋は約1.82m。

【石の寝屋古墳】いしのねやこふん

淡路市岩屋小字サセブの山頂に所在する。この山頂には合計8基の古墳があり、「石の寝屋」と呼ばれるのはそのうちの1号墳である。墳丘がほとんど流出して、横穴式石室が露出しているが、石室自体も崩壊して天井石はすべて落下している。北東方向に開口する石室は、現状で長さ5.3m、幅1.3m、高さ1.3mほどの規模とされている。

他の古墳は、1号墳から南西に離れた位置にある。正式の調査がなされていないため、詳細は不明であるが、2号墳からは6世紀後半の須恵器が採集されており、1号墳もこれと大差ない年代のものと推定できる。

『日本書紀』などの記述によるならば、允恭天皇（いんぎょうてんのう）は5世紀前半の人であり、古墳の年代とは100年以上の年代差があることになる。従って考古学的には、伝説を鵜呑（うの）みにするわけにはゆかないだろう。しかし古墳の数が少ない岩屋周辺にあつて、明石海峡を望む位置にあることから、これらの古墳が海と深い関わりをもつ人物を葬ったものであろうという推測は、許されるのではないだろうか。

【絵島・大和島】えしま・やまとしま

絵島は、岩屋港の東に浮かぶ島である。『枕草子』にも、「島は」と記されているほど、古くから知られた名勝であったようだ。砂岩が浸食されてできた奇観であるが、この岩盤はおよそ1500万年前に、砂や礫（れき）が水中に堆積してできたものである。

その奇観のためか、国産み神話の「おのころ島」を、この絵島にあてようとする説もある。古来より名勝として人々に親しまれており、月見の名所として『平家物語』に出てくるなど、風光明媚な場所として多くの文学にとりあげられている。

絵島の頂上には、平清盛が大輪田泊を修築した時に、人柱にされようとした人たちを助け、自らが人柱になった松王丸の供養塔といわれる宝篋印塔（ほうきょういんとう）が建っている。近年は、毎年、中秋の名月の夕べに、「絵島の月を愛でる会」がおこなわれてにぎわう。

絵島の南には、陸続きの小島があり、大和島と呼ばれている。山上にはイブキ群落があり、兵庫県の天然記念物に指定されている。

【岩屋城】いわやじょう

岩屋城は、慶長15（1610）年に淡路を領有した池田輝政が築城し、家臣の中村主殿助に守らせた。岩屋港付近を望む、標高31mの台地上にあり、徳川氏が大阪の豊臣方を包囲するための拠点であった。

慶長18（1613）年に、由良成山に新城が築かれる際に岩屋城は取り壊され、新城の資材とされたため、城としての生命はわずか3年であった。石垣の大部分は、後に岩屋港の築造などに用いられたという。

【伊弉諾神宮】いざなぎじんぐう

淡路市多賀に所在する延喜式内社で、淡路国一宮とされる。祭神は伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、伊弉冉尊（いざなみのみこと）。『日本書紀』では、伊弉諾尊は幽宮（かくりみや）を淡路に構え余生を過したとされ、社伝では本殿の下がその陵墓としている。例祭は4月20日から3日間おこなわれ、淡路の春を代表する祭りとして多くの人でにぎわう。1月15日の粥（かゆ）占神事や季節ごとの湯立神事など古代からの神事も継承されている。また縁結びの神様としても有名で、神社では数多くの人たちが結婚式を挙げる。

【岩屋台場群と松帆台場】いわやだいばぐんとまつほだいば

1853年のペリー来航以来、海防の強化を余儀なくされた幕府は、淡路島の防衛を徳島藩に命令。淡路の由良、洲本、岩屋などに台場が建設された。松帆から岩屋にかけての海岸線に、5か所の砲台（台場）が完成したのは、1863年ごろのこととされている。

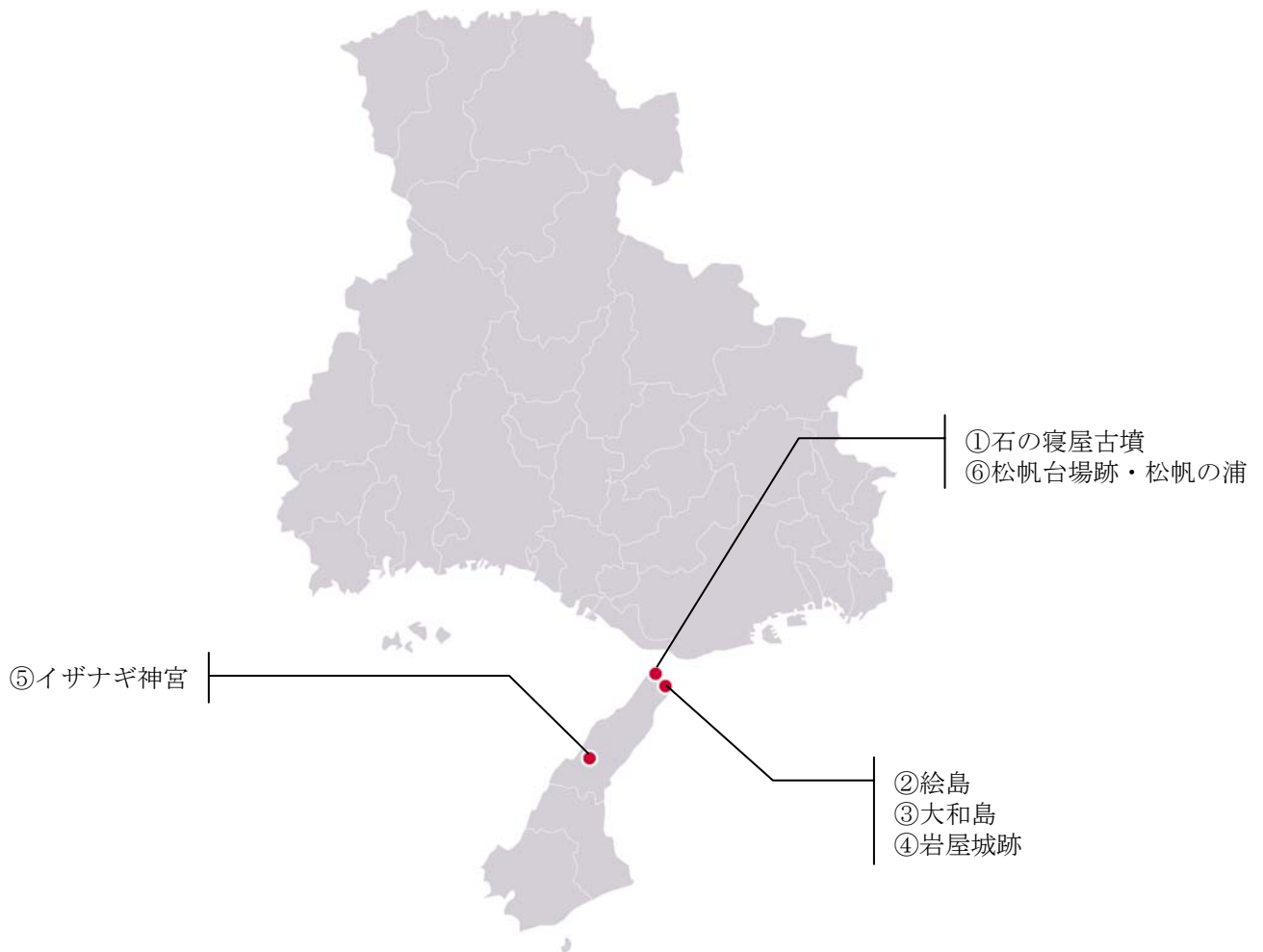
最大の台場は松帆に置かれた。M字形の台場が海に突出し、当時最新式の80ポンド砲4門を含む、13門の砲が備えられた。松帆台場の背後には、小型船が停泊するための港を設ける計画で開削がおこなわれたが、港口が風波によって破壊されることが度重なり、結局断念せざるを得なかった。このほかに、岩屋古城台場、龍松台場、拂川台場、松尾台場が置かれ、常時70人の兵が駐在したという。

1863年7月に、幕府の軍艦朝陽丸を誤って砲撃するという事件があったが、いずれの台場も実戦には使用されず、明治維新後に取り壊された。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	郷土の民話淡路篇	1972	郷土の民話淡路地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫のふるさと散歩 6. 淡路編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
歴史・文化等	日本思想体系1 古事記 ※枕草子・紫式部日記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	日本古典文学大系19（枕草子）	1958	池田亀鑑・岸上慎二・秋山 虔 校注	
	兵庫のふるさと散歩 6. 淡路編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県史 第3巻	1978	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	増補改訂国史大系 日本書紀前篇 ※允恭天皇14年の条	1981	黒板勝美編	吉川弘文館
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本の古代遺跡3 兵庫南部	1984	櫃本誠一・松下勝	保育社
	淡路町誌	2005	淡路町	淡路町

所在地リスト



①石の寝屋古墳	淡路市岩屋サセブ
②絵島	淡路市岩屋
③大和島	淡路市大和島
④岩屋城跡	淡路市岩屋
⑤イザナギ神宮	淡路市多賀740
⑥松帆台場跡・松帆の浦	淡路市岩屋宇松帆1825-41 ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

小野豆の隠里 茄子作らず・鶏飼わず



伝説 小野豆の隠里
茄子作らず・鶏飼わず

紀行 西播磨の山々と平家塚
・西播磨の山々と小野豆
・平家塚とジャンジャン穴
・富満の万勝院
・羅漢の石仏と感状山城

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

小野豆の隠里

茄子作らず・鶏飼わず

800年以上前、源氏（げんじ）と平氏（へいし）がはげしく戦った時のことです。

平清盛（たいらのきよもり）の弟、三位少将経盛（さんみのしょうしょうつねもり）は、名高い歌人であり、笛や管弦（かんげん）の名手としても知られた人でした。清盛が高い位に上りつめてからは、追捕使（ついぶし）として、治安に目を光らせることになりましたから、武勇の人でもあったのでしょう。

しかし、繁栄（はんえい）をきわめた平氏も、源氏との戦いがはじまると敗北をくり返すばかりです。再起をはかった一ノ谷（いちのたに）の戦いでも、激戦の末に敗れ去りました。このとき経盛は、三人の子、経正（つねまさ）、経俊（つねとし）、敦盛（あつもり）をなくします。

清盛が亡くなった後、一族を束ねる立場にもあった経盛は、さらに屋島（やしま）、壇ノ浦（だんのうら）と戦いぬきます。平氏の栄えと敗北のすべてを見た経盛の心中は、どんなものだったでしょう。老いた体にむち打って、経盛は最後の戦いにのぞみました。しかし奮戦（ふんせん）むなしく平氏は敗れ、一族の武将もあるものは討ち死にし、あるものは海へと身を投げたのです。経盛も矢傷を受け、入水（じゅすい）したと伝えられています。播磨（はりま）にはその後の経盛の伝説が残されている場所があります。

壇ノ浦の戦いに敗れた後、平経盛は、何人かの家来とともに、播磨国までのがれてきました。そして、上郡（かみごおり）の小野豆（おのず）という深い山里にかくれ住んだといひます。

源氏の追求は速くて、しつこいものでした。しかしさすがの源氏の兵たちも、山にかくされた小野豆の里をなかなか見つけることはできませんでした。兵たちがつかれ果てて休んでいるときです。川上から茄子（なす）と箸（はし）が流れてくるのが見えました。

「このようなものが流れ下るとは、川上に人がいるにちがいない。」

兵士たちは森をぬけ、けわしい谷をさかのぼって、ついに小野豆の里を見つけ出しました。けれども、経盛主従がかくれている場所がわかりません。その時です。とつぜん、鶏（にわとり）が鳴く声がひびきました。

その声をたよりに、兵たちはとうとう経盛主従を見つけ出してしまいました。

「私の命はかまわない。どうか家来たちの命は助けてやってくれ。」

経盛はそう言うと、自分はその場で切腹して果てたということです。

その後家来たちは許されて小野豆の地に永住し、村を見下ろす尾根の上に、経盛の墓が建てられました。今も村人たちは、平家塚と呼んで手厚くお祭りをしています。そして、経盛主従が見つかるもとなった茄子や鶏は、決して村では作ったり飼ったりしないと決めたそうです。

紀行「西播磨の山々と平家塚」

西播磨の山々と小野豆

播但国境付近を除けば、西播磨（にしはりま）にはさしたる高峰はない。千種川（ちくさがわ）の流域にある山々は、どれもたおやかな里山である。しかし里山であっても、幾重にも重なる尾根は、時に深山幽谷の姿をほうふつとさせ、また時には高原地帯のような景観を見せてくれる。



落人の里(説明板)

久しく開墾されてきた山では、思いもよらないところで小さな里に巡り会う。雑木林を抜け、急な谷を詰めた奥。よくこんな所を開墾したものだと、感嘆せずにはいられないような場所である。

それにしてもどこの里も穏やかである。都会の騒がしさを離れ、時間もゆっくりと流れているようだ。無論、都会の生活からはわからないような苦労も多かっただろうけれど。

小野豆（おのず）は、そうした山里のひとつである。



西播磨の山並み(平家塚から)

平家塚とジャンジャン穴

小野豆の村は、上郡町（かみごおりちょう）の東部に広がる300mほどの山地にある。県道姫路上郡線で、たつの市から椿峠（つばきとうげ）をこえると、ほどなく北側に宿の集落が見えて、その道のわきに、「小野豆平家塚」と書かれた小さな看板が立っている。



南無阿弥陀仏

案内の通りにたどると、道は里を離れてどんどん山奥へと入ってゆく。何度か急なカーブを回り、坂を上り詰めたところに、小野豆の村がある。初めてこの村を訪ねたとき、「隠れ里」という言葉が浮かんだ。今でこそ舗装道路があるが、わずかな杣道（そまみち）が通るだけだったころには、ふもととの往来でさえ大変な苦労だったことだろう。なるほど、源氏の兵士たちも、これほど奥に村があるとは思わなかったに違いない。

村を抜けて、さらに登った尾根の上に立つ大きな五輪塔が、平家塚である。こけむした塔の側面には、南無阿弥陀仏の文字が一つずつ刻まれている。このあたりからは、南西に眺望が開けている。到着したのはまだ早朝だったので、ゆったりと流れる霧がまるで雲海のように見える、素晴らしい光景を目にすることができた。

平家塚は今も村の人たちが大切に守り続けていて、毎年10月の第1日曜日には、平家祭りが催されている。

ジャンジャン穴へは、小野豆村の中ほどから家の間を抜けて、階段を登ること5分ばかり。整地された山腹に古墳の入り口のような石積みがあって、これがジャンジャン穴なのである。言い伝えによれば、平経盛（たいらのつねもり）と家来たちはこの穴に隠れ住んでいたという。ジャンジャン穴という名の由来は、穴の奥に向かって声をかけると、「ジャンジャン」と響くからだという。

この穴自体は2003年に、地元の方々によって復元されたということだから、元々どんな形であったのかはわからないが、落人たちが住むのであればこうした場所であったろう。



平家塚(碑)



平家塚



平家塚



ジャンジャン穴



ジャンジャン穴(入口)

富満の万勝院

万勝院（まんしょういん）がある富満（とどま）も、まるで隠れ里のような、下界を離れた別天地である。小野豆からは広い谷筋ひとつを隔てた北にある。尾根の上にある境内はボタンの花で有名で、季節には観光に訪れる人も多い名所である。



万勝院



万勝院(門)

万勝院
(奥の院)

奥の院はその下の谷にある。ボタンの花が植え込まれた境内とはうってかわって、杉木立に囲まれ、森閑とした空気に包まれている。厚くこげが育った地面に、紅葉したイチヨウやカエデが幾枚か散り、風の音と鳥の声だけが聞こえていた。



万勝院(奥の院)



夕日の鬼面と牡丹

羅漢の石仏と感状山城



石仏の窟

相生市（あいおいし）は、上郡町からは山一つ隔てた東にある。相生湾で5月におこなわれるペーロン祭が有名で、海に面した町の印象が強いけれども、県道姫路上郡線（旧山陽道）から北の市境の三濃山（みのうさん）までは、田園風景と里山が広がっている。

その三濃山から感状山（かんじょうさん）へとのびる尾根に抱かれるように、羅漢石仏群（らかんせきぶつぐん）がある。山腹にせり出した巨大な岩盤に覆われた岩窟（がんくつ）に、釈迦如来（しゃかにょらい）、普賢菩薩（ふげんぼさつ）、文殊菩薩（もんじゅぼさつ）のほか、十六羅漢（らかん）の像が並んでいる。室町時代に作られたと言われているが、詳細はわからないことが多いようだ。



石仏(左側)



石仏(中央)

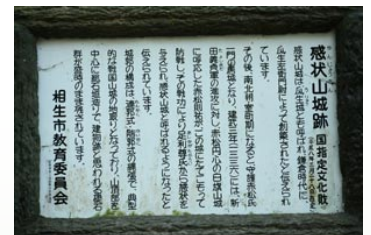


石仏(右側)

岩窟の前には、樹齢500年を越えていただろうと思える、巨大な杉の切り株があった。この石仏を刻んだ人が植えたのであろうか。今はその切り株の中に、二代目の若杉が育っている。

その東にある尾根の頂上付近が、赤松氏（あかまつし）の城、感状山城である。国史跡にも指定されている室町時代初期の山城で、平野を見下ろす険しい山であるが、今は登山路も整備されている。

この周辺一帯は、西播磨丘陵県立自然公園に指定されており、いろいろな施設も整えられている。歴史や伝説とともに、豊かな自然を訪ねることもできる。

感状山城
(遠景:南から)

説明板

用語解説

【平経盛】たいらのつねもり

平安時代末期の武将（1124～1185）。平忠盛の子、清盛の異母弟である。保元の乱の後、安芸、常陸、伊加などの国守を経て若狭守となる。以後、追捕使や朝廷の守護の任にもあたる。源氏との戦いがおこると、一門とともに西国へ落ち、1184年の一ノ谷の戦いで、息子の経正、経俊、敦盛らを失った。壇ノ浦の戦いで入水（じゅすい）。

【千種川】ちくさがわ

西播磨を流れる河川。兵庫、鳥取県境の三室山に源流をもち、西播磨西部を南流して瀬戸内海に注ぐ。全長67.6km、流域面積は752平方キロメートル。上流部の宍粟市千種町付近では、古代から製鉄がおこなわれ、河口の赤穂市では近世以降製塩業が発達した。環境省が定めた名水百選に選ばれた清流である。

【五輪塔】ごりんとう

墓、または故人を供養するために建てられた塔の一種。多くは石製。下から順に、基礎、塔身、笠（かさ）、受花（うけばな）、宝珠の五段に積み、それぞれが、地、水、火、風、空をあらわす。密教に由来し、平安時代中ごろから造られるようになった。

【万勝院】まんしょういん

上郡町の富満高原（とどまこうげん）にある真言宗の寺院。正式には大通宝山富満寺（おおつぼさんとどまじ）万勝院という。富満寺万勝院は、奈良時代行基によって創建されたと伝えられるが、嘉吉の乱で荒廃し、その後赤松氏によって復興された。江戸時代には池田輝政によって6院33坊が造られて、富満寺と称したが、明治時代に5院が廃され、万勝院のみが残ったという。空海にもゆかりの寺とされる。境内裏手の山の斜面にボタン園が設けられ、牡丹寺と呼ばれる。

【瓜生羅漢石仏群】うりゅうらかんせきぶつぐん

相生市矢野にある石仏群。羅漢山ふもとの岩陰（幅7.7m、高さ5m、奥行き4m）に、釈迦三尊像（釈迦如来、普賢菩薩、文殊菩薩）を中心として十六羅漢の石像が安置されている。伝説では、朝鮮の僧恵弁・恵聡（えべん・えそう、ともに『日本書紀』に記された飛鳥時代の渡来僧。恵弁は、蘇我馬子の仏教の師であったとされる）がここに隠れ住んで作ったというが、実際の製作年代は室町時代と推定されている。

【山陽道】さんようどう

奈良時代に政府によって整備された、平城京から大宰府に至る道。古代では最大規模の街道で、幅6～9mの道路が直線的に設けられていた。平安京に遷都後は、起点が平安京となる。外国の使節が通行することが予想されたため、同様に整備された七街道の中で、唯一の大路に格付けされて最重要視された。途中には56駅が設けられていた。

江戸時代には、古代山陽道を踏襲して西国街道が整備され、現在の国道2号線も一部で重複しながら、これに沿って設けられている。

【感状山城】かんじょうさんじょう

相生市森にある室町時代の城跡。14世紀初めに赤松則祐が築城した。標高240mの感状山頂を中心として、梯郭（ていかく）式縄張をもつ山城である。嘉吉（かきつ）の乱（1441）で廃城となったが、15世紀後半に赤松義村が再興した。

感状山城の名は、新田義貞の軍勢を50余日にわたり足止めをした功績により、赤松則祐が足利尊氏に感状を授かった事に由来する。中世山城の状態が良好に残されており、国指定史跡となっている。

【赤松氏】あかまつし

中世播磨の豪族。赤松は佐用荘内の地名。赤松則村（円心）が足利尊氏に属し、新田義貞との戦いに勝利して守護に任じられた。後には備前、美作の守護にもなり、幕府の四職（ししき、室町時代の武家の家格。三管・四職と総称する。三管とは管領に任じられる、斯波（しば）、細川、畠山の三家、四職とは侍所頭人に任じられる、赤松、一色、山名、京極の四家をいう）として室町幕府の重臣となった。

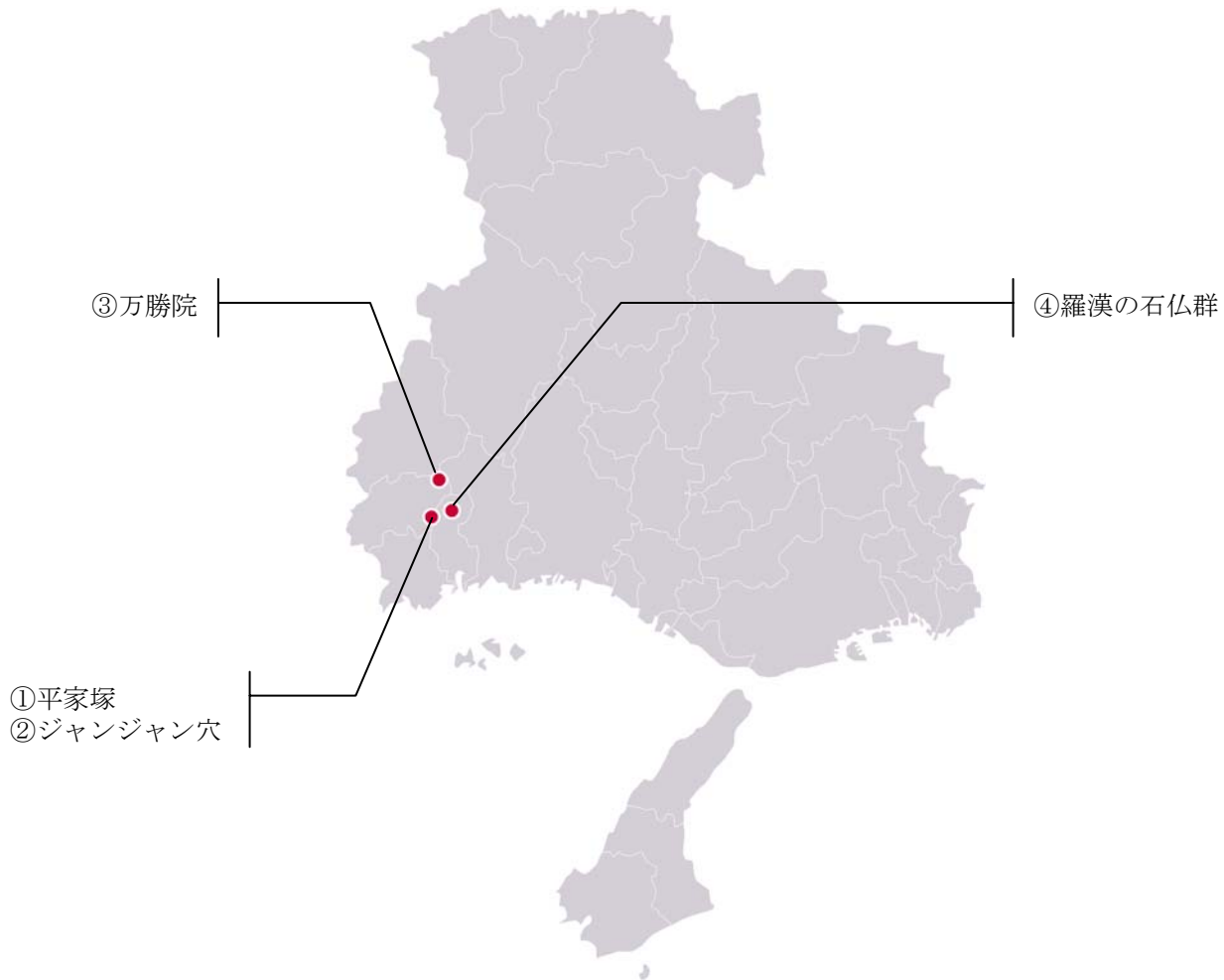
しかし1441年に赤松満祐（あかまつみつすけ）が將軍足利義教を殺し、幕府軍の攻撃を受けて一族は没落した（嘉吉（かきつ）の乱）。その後赤松政則が再興したが、家臣であった浦上氏、宇喜多氏に領国を奪われ、さらには関ヶ原の戦いで西軍に属した赤松則房が戦死。一族は断絶した。

赤松義則（1358～1427）は、室町時代の武将。赤松満祐は義則の嫡男、政則は玄孫にあたる。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史・文化等	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	増訂 日本仏家人名辞書	1979	鷲尾順敬	東京美術

所在地リスト



①平家塚	赤穂郡上郡町小野豆
②ジャンジャン穴	赤穂郡上郡町小野豆
③万勝院	赤穂郡上郡町大富2312 万勝院
④羅漢の石仏群	相生市野矢野町瓜生

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

不思議な壺の流れ子

大坪村の地名伝説



伝説 不思議な壺の流れ子
大坪村の地名伝説

紀行 大坪の流れ子

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

不思議な壺の流れ子 大坪村の地名伝説

佐用川（さようがわ）は、西播磨（はりま）を流れる清流、千種川（ちくさがわ）の上流にあたります。この佐用川には、いくつか不思議な伝説が残されていますが、これもそのひとつです。

その昔、佐用川に大きな洪水（こうずい）がおきました。あたり一面にあふれた水が、ごうごうと流れているとき、川上から大きな壺（つぼ）が流れてきて、ある川岸にとまりました。集まってきた里の人たちが不思議に思い、おそろおそろふたをあけてみますと、中から五、六歳ほどの男の子が出てきたのです。

人々はおどろきながらも、男の子を里へ連れ帰りました。そして「流れ子」と名付けて、たいそうかわいがって育てたのです。

流れ子はたいへんかしこい子に育ちました。里の人たちと一緒にあって、毎日かいがいしく働きます。それだけでなく、自分が乗ってきた壺で酒を造りましたが、それは、どんな病気の人でも一口飲めばたちまち治ってしまうという、不思議な酒でした。

流れ子のおかげで、村は豊かになり、たいそう栄えました。これはすべて、流れ子と壺のおかげだということで、人々は、村の名を「おおつぼ」と呼ぶことにしました。

そんなある年の水無月（みなづき）のころ、どこからともなく柿色（かきいろ）の着物を着た老人が、流れ子の家にやってきました。流れ子と老人は、昔から知っていた友達のように、大きな壺から酒をくみ、歌ったりおどったりしてにぎやかに一日を過ごしました。

ところがその日の夕方、とつぜん、雲がわきあがり、激しい嵐になりました。空は荒れくるい、山が大きな音をたててくずれ、村人たちは、息を殺して嵐が去るのを待ちました。やがて嵐が去ってみると、流れ子の家は、天にまい上がったのか、地中にうまったのか、あと形もなくなっていたのです。

こうして、流れ子の家も、大きな壺もなくなり、今では「おおつぼ（大坪）」という地名だけがのこっているということです。そしてそれ以来、大坪の人たちは柿色の着物をきらうようになったそうです。

紀行「大坪の流れ子」

JR姫新線（きしんせん）の佐用駅（さようえき）から、南へ500mほど下った佐用川左岸が、大坪（おおつぼ）である。佐用川は、今も清らかな流れを保っているが、大坪の地に、流れ子の伝説をうかがわせるものは何も残されていない。



大坪の遠景



佐用川の流れ

壺（つぼ）に乗って流れてきた子供。天変地異とともに消え去った流れ子は、どこからやって来て、どこに去って行ったのだろうか。いったいいつのころの出来事なのか、それすらも伝えていない、とても不思議な伝説だ。

この地を訪ねた折も、ただ流れにえさを求める鷺（さぎ）たちだけが印象に残った。流れ子の伝説を覚えている人も、今はほとんどないそうである。

用語解説

【佐用郡】さようぐん

播磨の北西部に位置し、宍粟郡、揖保郡、赤穂郡と岡山県の英田郡に囲まれた地域。『播磨国風土記』では「讃容郡」として記載されている。古くは「さよ」と呼ばれていた。

千種川上流に当たる佐用川流域の山間部では、古代から鉄を産出し、製鉄がおこなわれた地域と考えられる。中世には赤松氏が支配し、その後は山名氏、尼子氏、毛利氏などの支配を経て、羽柴秀吉が占領した。江戸時代には三日月藩（1万5000石）が置かれて、幕末まで継続。明治維新により姫路県、飾磨県を経て、明治9（1876）年に兵庫県に編入された。

2005年10月に、佐用・上月・南光・三日月の4町が合併して、現在の佐用町となった。現佐用郡は、佐用町一町で構成されている。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	日本伝説大系第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
歴史・文化等	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター

所在地リスト



①大坪

佐用郡佐用町大坪

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

鹿が壺

伊佐々王と不思議な穴の物語



伝説 鹿が壺
伊佐々王と不思議な穴の物語

紀行 鹿が壺から安志の里へ
～山間に息づいた「風土記の里」を訪ねる～

- ・ 姫路から北へ
- ・ 関の村と鹿が壺
- ・ 千年家
- ・ 安志姫神社
- ・ 塩野と六角古墳

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

鹿が壺

伊佐々王と不思議な穴の物語

今から1200年以上も昔のことです。現在の姫路市安富町（ひめじしやすとみちょう）の山のおくに、一頭の巨大な鹿（しか）が住んでいました。体の長さが六メートル、大きな角は七つに枝分かれています、背中にはササが生え、足には水かきがあるという怪物だったそうです。

もう何百年生きてはかわかりません。いつも数千頭もの鹿を従えた大鹿は、山を荒らし、里の人までおそうのでした。人々は、この大鹿を「伊佐々王（いざさおう）」と呼び、名前を聞いただけでふるえあがるほど恐れていました。

伊佐々王の暴れ方は、年を経るにつれてひどくなり、とうとう村の中でも大暴れするようになりましたので、里の人たちは散り散りににげるといったありさまになってしまいました。

この話を聞いた天皇は、播磨（はりま）の国中から兵士を集め、伊佐々王を退治するように命令しました。

伊佐々王と兵士たちの戦いははじまりました。兵士たちは勇敢（ゆうかん）に戦いましたが、伊佐々王はこれまでもまして暴れまわって、なかなかたおすことができません。それでも、兵士たちは木を切り、山を焼いてせめ立てたので、ついに伊佐々王も傷つき、つかれ果てて、谷のおくまで追いつめられました。

たくさんの兵士に囲まれた伊佐々王は、最後の力をふりしぼって大暴れに荒れくるきます。そのために、谷の大岩には次々と深い穴ができました。そしてとうとう、力つきると、「このあと、消ゆるなかれ！」とさけんで、岩の上に深く、自分の姿を残して死んでいったのでした。

伊佐々王が退治されると聞いて、人々は安心して里へもどってきました。そしてそれ以来、この地を「安志（あんじ）」と呼ぶようになったそうです。

大鹿が横たわった姿に見える岩の穴は、いつのころからか、人々に「鹿が壺（つぼ）」と呼ばれるようになりました。

岩場にあるたくさんの穴のうち、いちばん深いのが「底なしの壺」です。大きな丸い穴の中には、谷川のきれいな水がたまっているのですが、あまりに深いので底は暗くて見えません。それで「底なし」と呼ばれているのです。この「底なしの壺」に石を投げこむと、竜神の怒りにふれて、大嵐になるとも伝えられています。ある人が唐傘（からかさ）に石をくくりつけて放りこんだ時には、とつぜん大嵐になり、川があふれて大洪水（こうずい）がおこったそうです。そして「底なしの壺」に放りこんだはずの唐傘が、のちに網干（あぼし）の海底からぼっかり浮かび上がったので、「底なしの壺」は、網干の海につながっているのだという人もいます。

紀行「鹿が壺から安志の里へ～山間に息づいた「風土記の里」を訪ねる～」

姫路から北へ

姫路市の西部から国道29号線を北上すると、やがて道は林田川（はやしだがわ）を渡って、その西に沿うように続いてゆく。雑木林と植林された杉や檜（ひのき）が混じる里山が、何となく心の落ち着きを感じさせて、まるで故郷に帰ったような気持ちにさせてくれる道である。やがて山が川へ迫るところを巻くように、道がカーブする「狭戸（せぼと）」を通り過ぎると、『播磨国風土記（はりまのくにぶどき）』に記された安志里（あんじのさと）である。

「安志（あんじ）」の交差点で国道と分かれ、中国道をくぐって、林田川の源流へと続く道を行く。この付近では、林田川は清流である。6月にはゲンジボタルの群舞が見られ、蛍狩り（採集ではなく眺めて楽しむことをいう。念のため。）にはよい場所である。

谷が狭まり、道が山腹に取り付いた先に、安富ダムとダム湖がある。湖面を見下ろしながら、カーブする道を行くと、門柱のように立つ巨岩のわきを通る。その先が、関の村である。

関の村と鹿が壺



鹿が壺

関は、林田川最上流部の谷に沿った小さな村で、のどかさど、山村の清々しい空気があふれている。毎年7月24日ころには、村中でいっせいにタイマツに火をともして、火の安全、五穀豊穡（ごこくほうじょう）や無病息災などを祈願する、荘厳な伝統行事「まんど（関の火祭り）」がおこなわれるが、最近ではこれに合わせてしの笛のコンサートなども催されたようである。その関の村の奥に車を停めて、険しくなる道をたどると、鹿が壺である。

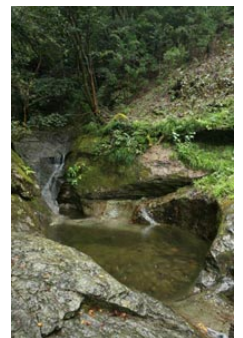
鹿が壺は、巨大な岩盤の上を走る流れが、気が遠くなるような年月をかけて刻んだものだ。急斜面の岩盤の所々にある階段状の場所で、流れ落ちてきた石がたまる。その石が激しい流れによって、くるくると回るように動き、硬い岩盤にぶつかってわずかずつ削りとしてゆき、やがて丸い穴がうがたれる。その繰り返しの結果、大小十数個の穴ができたのである。岩盤も削られるが、石も磨かれる。よく見てみると、小さな穴の中にも、必ず丸くなった石が入っている。

地学の世界では「ポットホール」と呼んで、必ずしも珍しい現象ではないそうだけれど、これほどたくさんのポットホールが集まっている場所は、そう多くないだろう。昔、この不思議な光景を見た人たちが、想像力をかきたてられたのもわかる気がする。

最大の穴が鹿ヶ壺（しかがつぼ）。「鹿が寝ている姿に似ている」という解説を読んで、その気になって見れば、確かに頭と、脚と、尾と、というふうにとどることができる。頭のちょうどよいあたりの岩に亀裂が走り、角のように見えるのがポイントであろう。それにしても、ずいぶん丸々と肥った鹿である。おそらく、いくつかのポットホールが順番に作られて、それがうまい具合につながった結果だと思われる。

それにしても、これを鹿に見立てた伝説は、『播磨国風土記』が編纂された奈良時代にはもう伝説になっていたのだから、それよりはるか前にできたものに違いない。今でもそれが鹿の姿に見えるということは、少なくとも千数百年もの間、穴の形はほとんど変わっていないということだから、こうした穴がうがたれるためには、さらに一けた、二けた長い年月がかかるに違いない。

その悠久な時間を知っているのは、安志の里の姫神様だけかもしれない。



鹿が壺(全景)



鹿が壺(案内板)

千年家

関の村から帰路をたどりながら、いくつか訪ねてみたいところがある。この千年家（せんねんや）もそのひとつ。皆河（みなご）の集落のはずれに、ぼつんと見える茅葺（かやぶき）屋根である。室町時代末に建てられたそうだから、およそ450年前ということになるろうか。民家としては日本でも屈指の古さで、国の重要文化財に指定されている。高い棟から長くのびた屋根と低い軒の曲線が、背景の山々と相まってとても美しい。土・日・祭日であれば内部も公開されている。

実はこの千年家にも伝説がある。この家の床下には「亀石（かめいし）」という大岩があって、いく度かの火難の折には、水を噴出して家を守ったというのだ。400年以上もの間、もっとも恐るべき火災を免れてきたことが、そんな伝説を生んだのだろうか。残念なことにその亀石を見ることはできなかったが。

皆河の千年家
(全景)

皆河の千年家

安志姫神社



安志姫神社(鳥居)



安志姫神社(境内)

安志集落から東へ少し行った、三森（みつもり）の集落に祭られているのが、安志の里を守る姫神様である。『播磨国風土記』の伝説によれば、昔、伊和大神（いわのおおかみ）が安志姫神を見初めて求婚したのに、安志姫がこれを断ったため、怒った大神は林田川の源流を石でせき止めて三方の里へ流れるようにし、そのせいで林田川は水が少ないのだとされている。

安志姫神社
(参道)

結婚を断られたくらいで、ずいぶんひどい仕打ちだが、この伊和大神という人は、佐用郡（さようぐん）でも佐用都姫（さよつひめ）神に稲作りの競争で負けて追い出されているし、どうも女性運はなかったようだ。

本殿へ続く階段はすっかりこけむしている。

この神社に祈願すると、お乳がよく出るようになるとも言われていて、境内にもご神木の「乳の木」が祭られている。里を守り、里人とともにあった姫神様らしい穏やかな空気が漂っていた。



狛犬



安志姫神社(拝殿と本殿)

塩野と六角古墳



塩野六角古墳(遠景)

1990年に発掘されるまでは、まったく無名の古墳であったが、六角形という特殊な形であることが判明して、脚光をあびた。7世紀中ごろに築かれたということで、葬られた人はわからないが、その時代を考えると、まさしく風土記の伝説を語り伝えていた世代だろう。古墳から長い石段を降りながら、ふとそんなことを考えた。

塩野六角古墳
(復元された石室)

塩野六角古墳からの眺望

用語解説

【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

【鹿が壺】しかがつぼ

地学上は甌穴（おうけつ、ポットホール）と呼ばれる。これは急傾斜の溪流の河床が岩盤であった場合、そのわずかな凹みにたまった礫（れき）や砂が、水流によって旋回することで岩盤をまるく浸食してできる。

甌穴自体は珍しいものではないが、鹿が壺の場合のように、多数の甌穴が群集する例はまれである。これは、基盤の岩石（流紋岩質溶結凝灰岩）が比較的均質、緻密で、谷の傾斜と同一方向の流理面があることが、甌穴の形成に適していたためとされている。

姫路市指定天然記念物。

【安志姫神社】あんじひめじんじゃ

『播磨国風土記』に記された安師里（あなしのさと）の、里名の起源となった安師比売神（あなしひめのかみ）を祭る神社。安師比売は、本来は在地の巫女神であろうが、安師の名は、大和国の安師坐兵主神（あなしにいますひょうずのかみ）を勧請（かんじょう）したためとされている。

安師坐兵主神は鋳業神であることから、安志姫神社を製鉄に関わる神社と考え、安師里が製鉄をおこなっていたという記述を目にすることがあるが、安富町一帯の地質からみて、安志里での鉄の産出は否定される。

一方奈良時代には、宍粟郡の柏野里（かしわののさと、山崎町・千種町）、比地里（ひじのさと、山崎町）、安師里（あなしのさと、安富町）には山部が置かれていたことが明らかになっている。山部は朝廷に直属する山部連（やまべのむらじ）に統率された部民で、その名の通り山の産物を朝廷に納めることを務めとしていた。

上記の里のうち、柏野里は風土記に「鉄を出す」と記されていることから、比地里、安師里などの山部も、その運搬などに関わった可能性は残されている。こうしたことから、本来は土地の巫女（みこ）神を祭っていた所へ、大和の鋳業神が勧請されて一体化した可能性が指摘されている。

【伊和大神】いわのおおかみ

宍粟市一宮町の伊和神社の祭神。大己貴神（おおなむちのかみ）、大国主神（おおくにぬしのかみ）、大名御魂神（おおなもちみたまのかみ）とも呼ばれ、『播磨国風土記』では、葦原志許乎命（あしはらしこおのみこと）とも記されている。

播磨国の「国造り」をおこなった神とされており、渡来人（神）のアメノヒボコ（天日槍・天日矛とも書く）との土地争いが伝えられている。

風土記には、宍粟郡から飾磨郡の伊和里（いわのさと）へ移り住んだ、伊和君（いわのきみ）という古代豪族の名が見えることから、この伊和氏が祖先を神格化した神と考えられている。

なお、伊和神社の社叢（しゃそう）は、「兵庫の貴重な景観」Bランクに選定されている。

【皆河の千年家】みなごのせんねんや

姫路市安富町皆河に所在する。正式な名称は古井家住宅。1967年重要文化財指定。千年家の名称は、安志藩の丸山政熙（まるやままさひろ）による『播州皆河邨千年家之記』（1836）が初出。それによると、秀吉が姫路城築城の際に、この家が無災の千年家と聞き、この家の垂木の一部を築城の材に用いたという伝承が残っている。

入母屋造り、草葺（ぶ）き屋根の家屋で、正面7間（13.9m）、側面4間（8.1m）の規模をもつ。現在の建物は、1970年の修理工事を経て、建築当初の状況に復元（一部推定復元）されている。

建築上は、畳敷きを全く念頭に置かない間取り寸法であること、正面の間取りが1室、背面の間取りが2室の3室構造となっていること（あるいは正面背面ともに1室の可能性もあるという）、土間と部屋の構造が同じであり、大黒柱をもつような上部構造ではないこと、柱間の寸法が不ぞろいであることなどから、室町時代後期ごろの建築と推定されている。

神戸市北区の箱木家住宅（箱木千年家）と並び、日本でわずか二棟残された最古の中世民家であり、民家建築の歴史を知る上で極めて重要な建築である。

【塩野六角古墳】しおのろっかくこふん

姫路市安富町塩野に所在する、古墳時代後期（終末期）の古墳。標高150～160mの東面する山腹に、単独で築造されている。1990～1991年におこなわれた発掘調査により、一辺の長さが3.8～4.4m、対辺長が6.8～7.3mの六角形を呈する古墳であることが明らかになった。前面の墳丘裾（ふんきゅうすそ）には列石がみられる。

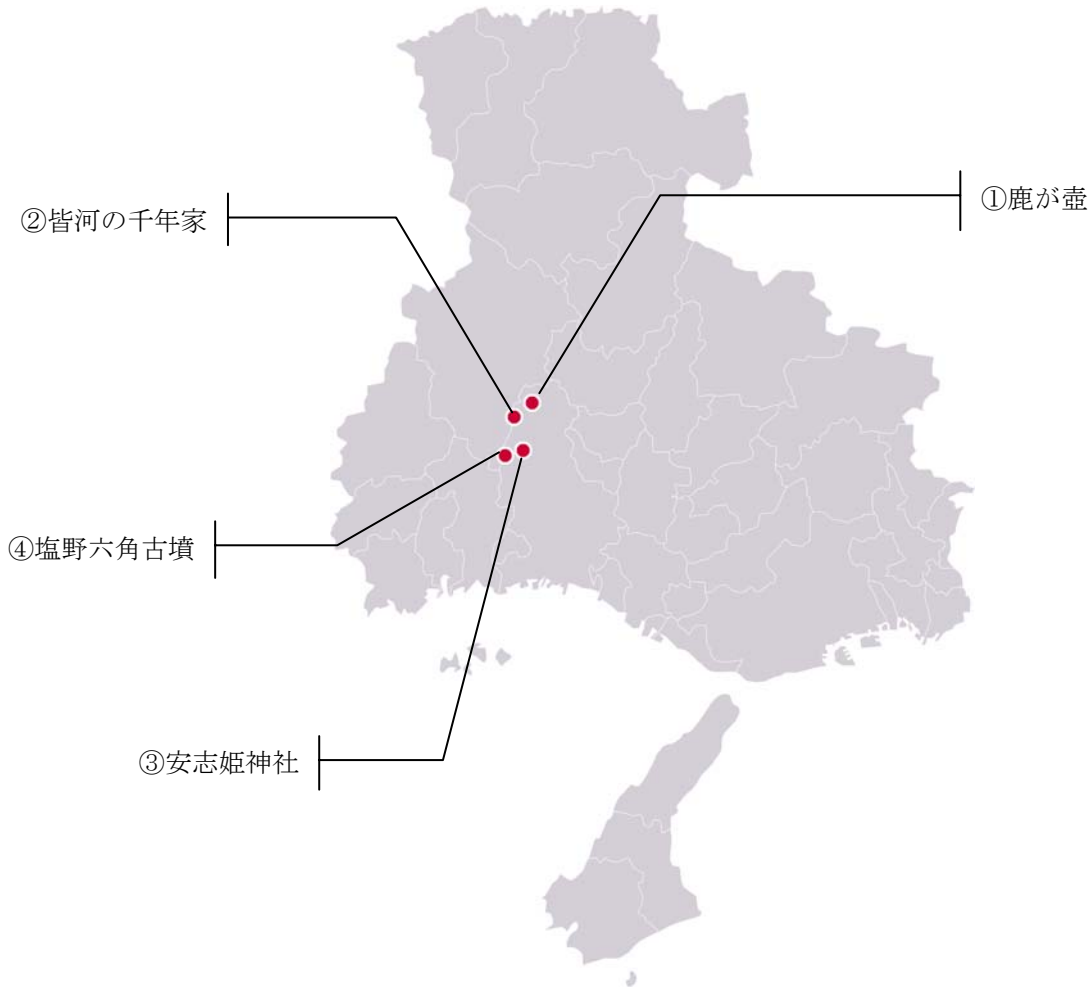
中心に、長さ4.4m、開口部幅1.1m、奥壁幅0.8m、高さ1.3mの横穴式石室が設けられている。石室内には礫（れき）を置いて棺台としているが、棺の跡などは見いだされていない。石室内からは、須恵器の長頸壺（ちょうけいぼ）と坏（つき）が出土し、その形から7世紀中ごろのものとされている。被葬者は不明であるが、『播磨国風土記』に登場する山部氏をあてる説がある。

六角形の古墳は、ほかに奈良県マルコ山古墳、岡山県奥池3号墳の2基が知られるのみである。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	安富町史 通史編	1994	安富町史編集委員会	安富町
その他	伊和神社御由緒略記 ※参拝者用資料		伊和神社	伊和神社

所在地リスト



①鹿が壺	姫路市安富町関775 より山へ入る
②皆河の千年家	姫路市安富町皆河236-1
③安志姫神社	姫路市安富町三森
④塩野六角古墳	姫路市安富町塩野岡ノ上664

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

夢野

夢占いの結末は…



伝説 夢野
夢占いの結末は…

紀行 夢野

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

夢野

夢占いの結末は…

はるかな昔、六甲山（ろっこうさん）のふもとに、夫婦の鹿が住んでいました。二頭の鹿は仲むつまじく暮らしていましたが、ある時、牡鹿（おじか）は淡路島（あわじしま）の野島（のじま）に出かけて、そこに住んでいた牝鹿（めじか）とすっかり仲良くなってしまいました。

それ以来、牡鹿は来る日も来る日も、海をわたって野島の牝鹿を訪れるようになりましたので、妻の牝鹿はさびしくてなりませんでした。

ある日、牡鹿は久しぶりに妻のところへやって来ました。

「実はね、昨日の夜、変な夢を見たのだよ。私の背中に雪が降り積もって、そこにススキがいくつも生えているんだ。これはいったいどういうことだろう。何かのお告げだろうか。」

妻の牝鹿は、牡鹿がいつも野島の牝鹿の所へ行くのをやめさせようと思って、ついこんなふうに言ってしまいました。

「それは、とても悪い夢ですわ。背中にススキが生えるというのは、猟師の矢がささるということです。それに雪が積もるといのは、肉を塩づけにされるというお告げです。

あなたがこれ以上野島にわたったら、きっと人間の船に出会って、射殺されてしまうにちがいありません。」

こんなふうには夢占いをしておけば、牡鹿はきっと自分のところにいてくれる。妻の牝鹿はそう思ったのでした。

牡鹿はちょっと気味悪く思ったので、しばらくの間は妻のところにはいましたが、やはり野島の牝鹿のことが忘れられません。ある日とうとう妻にかくれて、野島へ出かけてしまいました。

ところが赤石（あかし）の海を泳ぎ進んで、もうすぐ野島に着くという時になって、運悪く猟師が乗った船と行き会ってしまったのです。

「おう、鹿が海を泳いでいるぞ！」

猟師はそうさげふや、弓を構え、矢を射かけました。矢は牡鹿の背中につきささり、牝鹿の夢占いのとおり、牡鹿は射殺されてしまったのでした。

それ以来、夫婦の鹿が住んでいた野を、「夢野（ゆめの）」と呼ぶようになりました。人々は、牝鹿の夢占いが本当になってしまったのを、「夢占いというのは、良い方に占えば良いことがおこり、悪いように占えば、本当に悪いことがおこってしまうものだ。だから夢を悪く考えるものではない」と語り伝えたそうです。

牡鹿が射殺されたあたりの海は、今でも「鹿の瀬」と呼ばれています。またこの時流れた牡鹿の血が固まって、海の底に赤い石ができ、それが現在の「明石（赤石）」の地名のもとになったとも言われています。山陽電車の林崎駅（はやしぎえき）から南西一キロメートルほどの海岸から眺めると、いまでも海底の赤石が見えるということです。

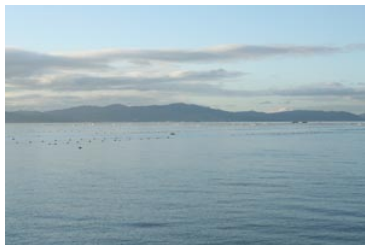
紀行「夢野」

神戸市兵庫区。夢野（ゆめの）は、鶴越（ひよどりごえ）の山すそにある。心に響く美しい地名であるが、今は住宅が建ち並び、自動車の群れが道路を行き交う市街地となって、1300年以上前、鹿が住んでいたという「野」は、どこにも見ることはできない。この地に住む人も、この物語を知らない人の方が多いのではないだろうか。

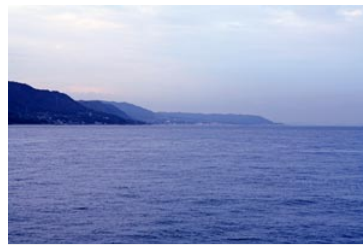
淡路（あわじ）の野島（のじま）。海岸沿いにはしる道路は防波堤に守られ、その向こうにはコンクリートブロックで固められた海岸がある。昔は海際まで山が迫り、砂浜が細く長くのびていた場所だったであろう。

都市がひろがるとともに、昔の風景が失われてゆくのは仕方のないことかもしれないけれど、時には立ち止まって、古い話に耳を傾けてみるのも悪くはないと思う。

鹿の瀬（しかのせ）と呼ばれる海だけが、往古と変わらない波音を残している。



鹿の瀬を望む



鹿の瀬付近



野島の海岸

用語解説

【夢野】ゆめの

神戸市兵庫区夢野町付近を中心とした地域。六甲山系の菊水山（458.8m）からのびる尾根のふもとにあたり、標高は50m前後である。

【野島】のじま

淡路市北西部の海岸に沿った地域。かつてこの付近には、現在よりも沖へ突出した「高く平らかなる野」があったと、江戸時代に編集された『淡路常磐草』に伝えられることから、『万葉集』などで詠まれた「野島の崎」は、この部分に相当するという考えがある。現在は浸食によって海岸線が後退してこのような地形は見られないが、伝説にいう鹿が上陸した野島海岸も、こうした場所が想定されていたかもしれない。

【鹿の瀬】しかのせ

播磨灘唯一かつ最大の瀬（海域で特に浅い部分）で、最も浅い部分の深度は2m程度とされる。海底は砂質～砂礫質（されきしつ）で、イカナゴの主要な産卵場となっているほか、タイ、マダコなどをはじめとする多様な魚類の好漁場（明石・淡路の入会漁場）となっている。また近年では、ノリの養殖も盛んである。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩1. 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県の地名 ※日本歴史地名大系第29巻 I	1999	平凡社地方資料センター編	平凡社
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



①野島の海岸	淡路市野島江崎 付近
--------	------------

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

処女塚

万葉集にも残る悲恋伝説



伝説 乙女塚
万葉集にも残る悲恋伝説

紀行 はかなく悲しい恋物語
・菟原のあたり
・処女塚
・東求女塚
・西求女塚
・万葉集から

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

処女塚

万葉集にも残る悲恋伝説

遠い昔、六甲山（ろっこうさん）のふもと、ちょうど現在の神戸市灘区（こうべしなだく）のあたりに、菟原（うばら）という村がありました。この村に、それは美しい娘が住んでいたということです。

顔や姿が美しいばかりでなく、娘は心もやさしく、機織（はたお）りがたいへんじょうずでした。人々はうわさを聞いて、ひと目でよいから娘を見たいものだと、訪ねてくるのでした。そうした人々の中に、二人の若者がおりました。一人は娘と同じ菟原の村に住む若者。もう一人は、海をわたった向こうの和泉国（いずみのくに）に住む若者でした。

「どうか私のおよめさんになってください。」

二人は熱心にたのみこむのでした。娘の両親も、どちらかがお婿（むこ）さんになってくれたらと思いましたが、娘の心はなかなか決まりません。二人があまりにすばらしい若者なので、どちらを選んだらいいのかわからなかったのです。迷い続けるうちに、娘はだんだんとやつれてゆきました。

一方で若者たちは、何とか娘をおよめさんにしたいと、ますますはげしく競争するようになっていました。そのようすを見ていると、このままでは刀を持ってきり合いを始めてしまいそうです。若者たちが競争すればするほど、娘の心はずんでゆく一方でした。そしてとうとう、娘は、近くを流れる生田川に身を投げようとするまどになってしまいました。

おどろいたのは両親です。

「かわいそうに。そんなに思いつめなくてもいいよ。私たちによい考えがあるからね。」

そういって娘をなぐさめた両親は、ふたりの若者を招いて言いました。

「お二人が、娘のことを思ってくださいる気持ちはよくわかりました。けれどもお二人ともご立派すぎて、どちらかを選ぶことができません。そこで考えたのですが、そこに流れている生田川の水鳥を早く射止めた方に、おむこさんになってもらおうと思います。」

どちらの若者も、弓のうでまえには自信がありましたから、この話は願ってもないことでした。弓比べの日をとりきめて、二人は帰ってゆきました。

いよいよ弓比べの日です。うわさがうわさと呼んで、生田川の河原にはたくさんの人が集まりました。りりしく着かざった二人の若者は、河原へ進み出ると、合図と同時に矢をつがえて、弓をひきしぼりました。人々はかたずを飲んで見つめます。娘は手をにぎりしめ、目を閉じました。

ひゅーっと空気を切りさく矢鳴りが、聞こえました。

「わああっ。」

「あたった！」

「見事だ！」

口々にさけぶ人々の声に、目を開いた娘は、立ち上がって川面を見つめました。そしてどうしたのか、川に向かって歩き始めたかと思うととつぜん走り出し、流れに身をおどらせたのです。

激しい流れにのまれて、娘の姿は二度とうかび上がってきませんでした。それを見た二人の若者も、娘のあとを追うように川に身を投げてしまいました。

残された水鳥をみると、二本の矢がつきささっていました。若者たちは、弓の腕前までまったくのごかくだったのです。弓比べでもおむこさんが決まらないと知って、娘は死ぬことを選んでしまったのです。

娘がほうむられた墓を、人々は処女塚（おとめづか）と呼びました。そして、処女塚を見守るように造られた二人の若者の墓は、東求女塚（ひがしもとめづか）、西求女塚（にしもとめづか）と呼ばれています。

紀行「はかなく悲しい恋物語」

菟原のあたり

今の神戸では、もう菟原（うばら）という地名を知る人も、ほとんどいないだろうけれど、菟原郡が地名から消えたのは1896（明治29）年のことだから、ほんの110年ほど前のことである。

現在の芦屋市（あしやし）から、神戸市中央区の生田川（いくたがわ）あたりまでが菟原郡にあたる。六甲山（ろっこうさん）が海に迫り、平地こそ狭いが、畿内と九州を結ぶ山陽道がそのすそ野を通る重要な地域でもあった。



菟原付近のようす(摂津名所図会から)

菟原の乙女の物語は、奈良時代にはすでに伝説になっていたようだが、現在語られる伝説は、平安時代に書かれた『大和物語（やまものがたり）』が元になっているそうだ。その物語があまりにも悲しく、胸に迫ることが、千年以上もの間語り伝えられた理由なのかもしれない。現代の菟原あたりは、もう「原」と呼ぶことも思いつかないような都市のまん中で、明るい、乾いた空気に包まれている。

伝説の舞台になった処女塚（おとめづか）、東求女塚（ひがしもとめづか）、西求女塚（にしもとめづか）は、2kmほどおいて等間隔に並んで、どれも古代の海岸線からたいへん近い場所に築かれている。この並びは陸上よりも、海上から見たほうがはるかによくわかったはずである。処女塚伝説を生み出したのは、海から三つの塚を眺めていた人だったのではないだろうか。

処女塚

処女塚は、阪神電車の石屋川駅（いしやがわえき）から、およそ300m西の海岸寄りにある。駅から石屋川に沿って下り、出会った広い道を西へたどれば迷うこともないだろう。大正年間に国の史跡となり、20年ほど前に公園として整備された。

周囲を住宅やビルに囲まれ、古墳の上だけが松の緑に覆われたオアシスになっている。墳丘はきちんと整備されていて散策することができ、東側には田辺福麻呂（たなべのさきまろ）の歌碑も建てられている。

処女塚は、古墳時代前期の早い時期に築造された、前方後方墳であるから、それから奈良時代までの400年ほどの間に伝説ができたことになる。墓の主のことが忘れ去られ、いつの間にか乙女の伝説に変わってゆくのに、いったいどれほどの時間がかかったのだろう。



処女塚古墳

東求女塚

阪神電車をさらに東へ乗り継ぎ、住吉駅から東へ歩くと、5分ほどで東求女塚である。元は前方後円墳だったが、明治時代に土取りで破壊されてしまい、後円部だけが公園として残るものの、古墳の面影はほとんどない。埋葬部も消え去り、少数の出土品が伝わるだけである。グラウンドのように整備された広場のまん中に、石垣で円く囲まれた高まりがあり、そこにぽつんと立つ石碑だけが、この場所の由来を知るよすがとなっている。

前方部には幼稚園がある。幼い子らの歓声を聞きながら、墓の主は苦笑いしているかもしれない。



東求女塚古墳

西求女塚

東求女塚に比べて、西求女塚は恵まれていたといえるだろう。阪神電車の西灘駅（にしなだえき）から、およそ150m南東にあるこの古墳は、1986年から13回にわたって発掘調査がおこなわれている。

1993年には多数の副葬品が出土して、古墳時代のごく初期に造られたものだということがわかった。三つの古墳の中では、最も古い古墳なのである。

緑の木に取り囲まれた墳丘は、きれいに整備されている。前方後円墳に見えるように整備されているが、前方後方墳だということがわかったのは最近のことである。



西求女塚古墳

万葉集から

『万葉集』では、3人の歌人が処女塚伝説を詠んでいる。中でも高橋虫麻呂（たかはしのむしまろ）は、伝説の筋書きがおよそわかる長歌を残している。



伝説を語る(播州名所巡覧図絵)



乙女塚と求女塚(兵庫名所図巻)

葦屋の 菟原処女の 八年児の 片生ひの時ゆ 振分髪に 髪たくまでに 並びある 家にも見えず
 虚ゆふの 隠りてをれば 見てしかと いぶせむ時の 垣ほなす 人の誂ふ時 千沼壮士 菟原壮士の
 伏せ屋焼く 進し競ひ 相結婚ひ しける時は 焼太刀の柄おし然り 白檀弓 鞆取り負ひて 水に入り
 火にも入らむと 立ち向かひ 競ひし時に 我妹子が 母に語らく 倭文たまき 賤しき我が故
 ますらをの 争ふ見れば 生けりとも あふべくあれや ししくしろ 黄泉に待たむと 隠沼の 下延
 へ置きて うち嘆き 妹が去ぬれば 千沼壮士 その夜夢に見 取り続き 追ひ行きければ 後れたる
 菟原壮しい 天仰ぎ 叫びおらび 地に伏し 牙喫みたけびて もころ男に 負けてはあらじと かき
 佩の 小劔取り佩き ところづら 尋め行きければ 親族どち い行き集ひ 永き代に 標にせむと
 遠き代に 語り継がむと 処女墓 中に造り置き 壮士墓 こなたかなたに 造り置ける 故縁聞きて
 知らねども 新喪のごとも 哭泣きつるかも

(あしのやの うないおとめの やとせごの かたおいのときゆ をはなりに かみたくまでに ならびいる いえにもみえ
 ず うつゆうの こもりておれば みてしかと いぶせむときの かきほなす ひとのとうとき ちぬおとこ うはらおとこ
 の ふせやたく すすしきおい あいよばい しけるときは やきだちの たがみおしねり しらまゆみ ゆきとりおいて
 みずにいり ひにもいらんと たちむかい きおいしときに わぎもこが ははにかたらく しつたまき いやしきわがゆえ
 ますらおの あらそうみれば いけりとも あうべくあれや ししくしろ よみにまたんと こもりぬの したはえおきて
 うちなげき いもがいぬれば ちぬおとこ そのよゆめにみ とりつづき おいゆきければ おくれたる うばらおとこい
 あめあおぎ さげびおらび つちにふし きかみたけびて もころおに まけてはあらじと かきはきの おだちとりはき
 ところづら とめゆきければ やからどち いゆきつどい ながきよに するしにせむと とおきよに かたりつがむと お
 とめづか なかにつくりおき おとこづか このもかのもに つくりおける ゆえよしききて しらねども にいものごとも
 ねなきつるかも)

何とも悲しい響きの歌である。かがり火の下、この歌を朗々と歌う声を聞いたなら、誰しも涙を流したことだろう。ほかに、田辺福麻呂（たなべのさきまろ）、大伴家持（おおとものやかもち）などがそれぞれ長歌と反歌を詠んでいる。はかなく悲しい伝説は、万葉人の心にも響いたのである。

用語解説

【処女塚古墳】おとめづかこふん

神戸市東灘区御影塚町にある、古墳時代前期の前方後方墳。石屋川によって形成された、海岸線に近い砂堆（さいたい）上にある。全長70m、後方部幅39m、前方部幅32mと推定されている。

墳丘の整備に伴う発掘調査によって、葺石（ふきいし）の存在などが確認されているが、墳丘は全般に破壊が進んでいるという。後方部中央の埋葬施設は調査されていないが、通常の竪穴式（たてあなしき）石室ではないと考えられている。また、くびれ部に近い前方部で、箱式石棺1基がみついているが、これは古墳築造年代より新しい埋葬である。

出土した土器には、鼓形器台（つつみがたきだい）などの山陰系土器が含まれており、西求女塚古墳と共通する要素として注目される。古墳の築造年代は、4世紀中ごろと推定されている。

【東求女塚古墳】ひがしもとめづかこふん

神戸市東灘区住吉宮町に所在する、古墳時代前期の前方後円墳。住吉川右岸の海岸線に近い平地にある。墳丘の破壊が著しいが、全長約80m、後円部直径47m、前方部幅42mと推定されている。

明治初年までは墳丘が残されていたが、壁土採取のために掘削され、その際に三角縁神獣鏡、内行花文鏡、画文帯神獣鏡などの銅鏡6面、車輪石、鉄刀、勾玉（まがたま）、人骨などが出土した。また1900年ごろにも、2面の鏡片が出土している。こうした破壊の際に、後円部より石材が出土していることから、埋葬施設は竪穴（たてあな）式石室であったと推定されている。

さらにその後、阪神電車による前方部の土取りがおこなわれ、後円部もしだいに削平を受けて、ほとんど痕跡をとどめないまでになった。1982年に前方部の一部が発掘調査され、かつて周濠（しゅうごう）が存在したこと、墳丘に葺石があったことなどが明らかになった。

東求女塚古墳が築造されたのは、出土遺物や前方部の形態などから、4世紀後半でもやや新しい時期とされている。

【西求女塚古墳】にしもとめづかこふん

神戸市灘区都通にある、古墳時代前期の前方後方墳。海岸線に近い平地にある。全長98m、後方部幅50m、前方部端幅48mとされている（発掘調査による復元案による）。

1986年から2001年にかけて、13次にわたって実施された発掘調査によって、その内容が明らかにされた。

西求女塚古墳では、後方部中央に竪穴式（たてあなしき）石室が設けられており、三角縁神獣鏡7面、浮彫式帯鏡2面、画文帯神獣鏡2面、画像鏡1点と、剣、槍（やり）、鏃（やじり）、斧（おの）、ヤスなどの鉄製品などが出土した。また出土した土器の大部分は、山陰系の大型壺（つぼ）、鼓形器台（つつみがたきだい）などによって占められており、西求女塚古墳が山陰地方と深い関連を持つことが明らかになった。

これらの成果から、西求女塚古墳の築造年代は、定型化された大型古墳の出現によって画される古墳時代の初頭、3世紀の中ごろに相当し、古墳としては最古の一群に属すると考えられている。古墳の成立過程や、成立期の近畿・中国地方の政治的関係などを知る上で、極めて重要な位置にある古墳である。

【菟原郡】うばらぐん

摂津国にあった郡のひとつ。現在の芦屋市・神戸市東灘区・神戸市灘区・神戸市中央区東部にあたる。兵庫県成立時にも郡名は存在したが、1896年に武庫郡に編入されて消滅した。

【大和物語】やまものがたり

平安時代前期に成立した歌物語。作者は不明。2巻からなり、前半は和歌を中心とした物語、後半は伝説・説話的性質をもつ。

【万葉集の処女塚伝説】まんようしゅうのおとめづかでんせつ

『万葉集』で、処女塚伝説に関連した歌を詠んでいる歌人、および歌は下記のとおり。

■高橋虫麻呂（たかはしのむしまろ）の歌

葦屋の 菟原処女の 八年児の 片生ひの時ゆ 振分髪に 髪たくまでに 並びるる 家にも見えず 虚ゆふの
隠りてをれば 見てしかと いぶせむ時の 垣ほなす 人の誂ふ時 千沼壮士 菟原壮士の 伏せ屋焼く 進し競
ひ 相結婚ひ しける時は 焼太刀の柄おし燃り 白檀弓 鞆取り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立ち向か
ひ 競ひし時に 我妹子が 母に語らく 倭文たまき 賤しき我が故 ますらをの 争ふ見れば 生けりとも あ
ふべくあれや ししくしろ 黄泉に待たむと 隠沼の 下延へ置きて うち嘆き 妹が去ぬれば 千沼壮士 その
夜夢に見 取り続き 追ひ行きければ 後れたる 菟原壮士い 天仰ぎ 叫びおらび 地に伏し 牙喫みたげびて
もころ男に 負けてはあらじと かき佩の 小劔取り佩き ところづら 尋め行きければ 親族どち い行き集ひ
永き代に 標にせむと 遠き代に 語り継がむと 処女墓 中に造り置き 壮士墓 こなたかなたに 造り置ける
故縁聞きて 知らねども 新喪のごとも 哭泣きつるかも (巻9-1809)

(反歌)

葦屋の 菟原処女の 奥津城を 行き来と見れば 哭のみし泣かゆ (巻9-1810)

墓の上の 木の枝なびけり 聞きしごと 血沼壮士にし 依りにけらしも (巻9-1811)

■田辺福麻呂（たなべのさきまろ）の歌

(葦屋の処女の墓を過ぎし時作れる歌一首併びに短歌)

古の ますら壮士の 相競ひ 妻問しけむ 葦屋の 菟原処女の 奥津城を わが立ち見れば 永き世の 語にし
つつ 後人の 偲びにせむと 玉ほこの 道の辺近く 磐構へ 作れる塚を 天雲の 退部の限 この道を行く
人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ 或人は 哭にも泣きつつ 語り継ぎ 偲ひ継ぎ来し 処女らが 奥津城ど
ころ 吾さへに 見れば悲しも 古思へば (巻9-1801)

(反歌)

古の 小竹田壮士の 妻問ひし 菟原処女の 奥津城ぞこれ (巻9-1802)

語りつぐ からにもここだ 恋しきを 直目に見けむ 古壮士 (巻9-1803)

■大伴家持（おおとものやかもち）の歌

(処女墓の歌に追ひて同ふる一首併に短歌)

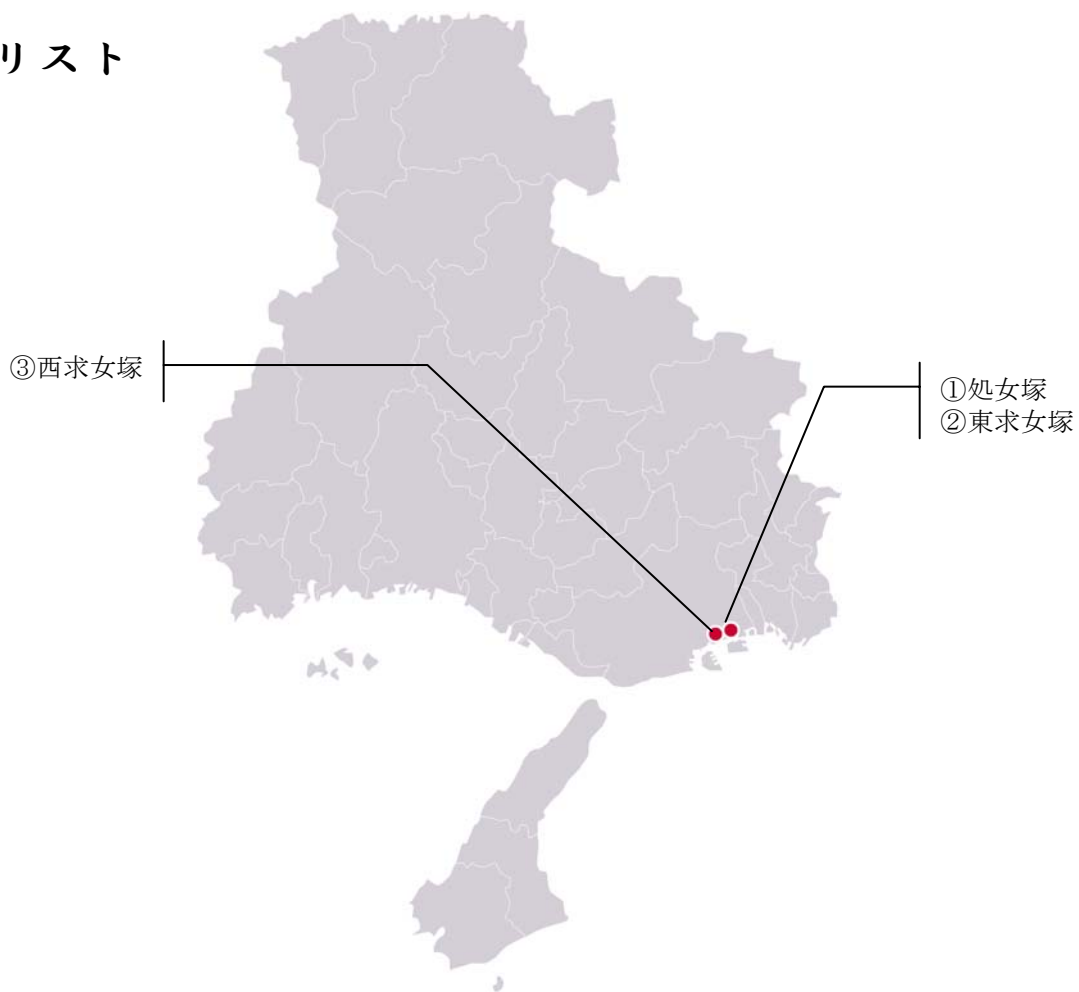
古に ありけるわざの くすばしき 事と言ひ継ぐ 血沼壮士 菟原壮士の うつせみの 名を争ふと たまきは
る 命も捨てて 相争ひに 妻問しける をとめらし 聞けば悲しき 春花の にほえさかえて 秋の葉の にほ
ひに照れる 惜しき 身の壮すら 丈夫の 語いたはしみ 父母に 啓し別れて 家離り 海辺に出で立ち 朝暮
に 満ち来る潮の八重波に なびく玉藻の 節の間も 惜しき命を 露霜の 過ぎましにけれ 奥墓を ここと定
めて 後の世の 聞き継ぐ人も いや遠に しのひにせよと 黄楊小櫛 しか刺しけらし 生ひてなびけり (巻
19-4211)

処女らが 後のしるしと 黄楊小櫛 更り生ひて なびきけらしも (巻19-4212)

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	新訓万葉集 (岩波文庫)	1927	佐佐木信綱編	岩波書店
	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	兵庫のむかしばなし釈講	1978	船知慧	中央出版エージェンツ
	兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎・足立巻一	角川書店
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本の古代遺跡3 兵庫南部	1984	櫃本誠一・松下勝	保育社
	新修神戸市史歴史編 I	1989	新修神戸市史編集委員会	神戸市
	兵庫県史 考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	西求女塚古墳発掘調査報告書	2004	安田滋編	神戸市教育委員会文化財課

所在地リスト



①処女塚	神戸市東灘区御影塚町2-10
②東求女塚	神戸市東灘区住吉宮町1-9
③西求女塚	神戸市灘区都通3-6 1

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

鼻の助太郎

いにしへの超ラッキー男



伝説 鼻の助太郎
いにしへの超ラッキー男

紀行 鼻の助太郎と丹波篠山
・助太郎話
・助太郎屋敷跡
・丹波焼と和田寺
・篠山の町並みと篠山城
・雲部車塚

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

鼻の助太郎

いにしえの超ラッキー男

昔、丹波篠山（たんばささやま）の真南条（まなんじょう）村に、助太郎（すけたろう）という働き者の木挽（こび）きがおりました。木挽きですから、毎日山で木を切るのが仕事でした。

ある日山へ行ってから、なたを忘れてきたことに気がつきました。なたを取りに家へもどってみると、およめさんがぼたもちを作って食べています。助太郎がこっそりのぞいているのを知らず、「残りはまたあとで食べよう」と、おし入れにしまいました。

その日の夕ご飯のとき、およめさんはぼたもちをかくしたまま、出してくれません。そこで助太郎は、わざと鼻をひくひくさせながらおし入れに近づき、「なんだかうまそうなおいがるぞ」と言って、ぼたもちを取り出しました。

びっくりするおよめさんに、助太郎は、「今日、山で天狗（てんぐ）に、何でもかぎ当てる術を教えてもらうたんや」と言いました。もちろんうそに決まっていますが、およめさんは、すっかり信じこんで、近所の人たちにも話してしまいました。

しばらくして、となり村の長者の家から使いが来ました。

「長者の娘さんの、金のかんざしと銀のくしがのうなったんじゃ。助太郎さんの鼻でかぎあててもらえんやろうか。」

さあえらいことになったと、助太郎は思いました。どうしたらよいかと思案していると、夜になって、長者の家ではたらく女の人がやってきました。

「どうしたんじゃ。」

「はあ、私はかんざしとくしがほしなって、盗んでしまいましたんや。蔵の北側にある石の下にかくしてあります。どうか私のことは、言わんといてください。」

女の人は泣きながらたのみました。

助太郎は、「人のものを盗むのは悪いこっちゃ。そやけど、正直に言うたんやから、あんたのことは言わんとく」と答えました。

あくる日、助太郎は長者の家へ行って、たちまちかんざしとくしを見つけましたので、長者はたいへん喜んで、たくさんのお礼をくれました。

助太郎のうわさは、とうとう都まで伝わって、殿様（とのさま）の耳にも入りました。ある日、助太郎の所へ殿様の使いがやってきました。

「家宝の刀がなくなって困っております。何とかさがしてはもらえませんか。」

助太郎は弱りました。けれども殿様のたのみではことわるわけにはゆきません。仕方なくしたくをして、出かけてゆきましたが、どうすればよいかわかりません。都に上るとちゅうの小さなお宮さんで、助太郎は手を合わせて、「どうかお助けください」と一心にいのりました。

助太郎がお宮さんのおかげでひと休みしていると、三人の侍が通りかかりました。侍たちが、何かひそひそと話しているのを、助太郎が思わず聞き耳をたててみると、「刀は、屋敷の梨（なし）の木の根本に埋めてある。いくら助太郎でもわかるまい」という声が聞こえてきます。

助太郎は大喜びです。思わずお宮さんにお礼を言って、都に向かいました。

殿様のお屋敷について助太郎が、たちまち刀をさがしあてたのはもちろんです。殿様は大喜びして、たくさんのおほうびをくれました。

こうして真南条に帰った助太郎は、大きな屋敷を建てて暮らしたということです。その屋敷あとは、今でも真南条の村に残っています。

紀行「鼻の助太郎と丹波篠山」

助太郎話

兵庫の伝説の中でも、助太郎（すけたろう）はちょっと変わった印象の話である。いろいろな本に取り上げられているが、内容が昔話的で、土地に根ざした伝説らしい泥臭さがない。どの土地にもありそうな話なのである。登場人物が人のよい木挽きや長者様、殿様など、昔話の定番だし、助太郎以外はどこの人なのかはっきりしないことも昔話的である。どこかから持ち込まれた話が、定着したのではないかとも思う。

ところが一方で、舞台になった真南条（まなんじょう）の村には、ちゃんと助太郎の屋敷跡が残されている。これはどういうことなのだろうか。

あるいはそれだけ、助太郎の人物像が愛されたからかもしれない。「鼻かぎの術」を簡単に信じ込んでしまう素直なお嫁さんもそうであるが、かんざしを盗んだ女の人を、論しながらも守ってやるなど、話の中でだれも傷ついたりだまされたりしていない。助太郎の人のよさだけで、幸運は向こうから転がり込んでくるのだ。山里の素朴な人情にあふれた物語が、篠山（ささやま）の人たちの心に共鳴した結果が、助太郎屋敷をつくりだすことになったのではないだろうか。

この物語には屋敷跡以外に訪ねる場所がない。けれども、篠山に残された歴史をめぐれば、物語を生んだ風土がわかるかもしれない。

助太郎屋敷跡

その助太郎屋敷跡は、真南条下にある。国道372号線を北東へ向かい、舞鶴道（まいづるどう）の高架をくぐったすぐ先の三叉路（さんさろ）を村の中へ進むと、100mほど先の田んぼの中に、1mほどの高さがある四角い壇が見える。その一方は浅い池になっていて、壇の上には小さな祠（ほこら）と灯籠（とうろう）が置かれている。

一見すると小型の古墳のようで、壇の裾にある、「助太郎屋敷跡」という古びた木の立て札がなければ間違っただけで間違いそうである。壇の面積は10m四方くらいだろうか。大きなお屋敷が建っていたような面積とはとても言えないが、なぜこんな狭い場所が「屋敷跡」と言われるようになったのか、明らかに人工的に整えられたこの壇は、そもそも何だったのか、結局わからずじまいである。



助太郎屋敷跡の遠景



道から見た屋敷跡



屋敷跡の祠

丹波焼と和田寺

真南条の村から、武庫川（むこがわ）の流れを渡って西へ向かうと、今田町（こんだちょう）の上小野原（かみおのはら）の交差点がある。このあたりから南北にのびる谷筋が、丹波焼（たんばやき）のふるさと四斗谷（しとだに）から立杭（たちくい）の谷である。南へ道をたどると、両側には窯元が軒を連ね、焼物を求める観光客の姿も多い。



立杭の里 北の山から



山中で見つけた石仏

丹波焼は、800年ほど前の鎌倉時代から生産が始まった。壺（つぼ）、甕（かめ）、すり鉢など、庶民の日用器を中心に生産を続け、近世には江戸の町でも大量の丹波焼すり鉢が売られていたという。焼き締めや、赤土部、灰釉（かいゆう）など、素朴な陶器は、時代を超えて人々に愛されている。



和田寺遠景



和田寺



本堂前の石仏

この立杭の北端にあるのが、和田寺（わでんじ）である。寺伝では7世紀に法道仙人（ほうどうせんじん）が開いたとされ、最盛期には数十の伽藍（がらん）が建ち並ぶ大寺であったそうだが、幾度かの兵火に焼かれ、現在の位置に移ったという。伽藍こそ新しいが、静かな参道や境内は心を落ち着かせてくれる。

篠山の町並みと篠山城



南の外堀からの眺め

国史跡篠山城は、慶長14（1609）年に徳川氏によって築城された。大坂城にたてこもる豊臣氏の周辺を押さえるため、数多くの大名に号令して、わずか半年で築城されたという。

現在、篠山城には、往時の建物は残されていない。明治維新でほとんどの建造物が取り壊され、残された大書院も失火によって焼失。現在の大書院は2000年に再建されたものである。城の北側は駐車場などが整備されて、便利ではあるが城の景観は少し損なわれているかもしれない。



内堀と石垣



城跡から見た町並み



石垣に残る記号



石垣に残る記号

城の風情を味わうには、むしろ外堀をめぐる西側の道を通って、城の南へ回ったほうが良いだろう。堀の西には、「お徒士町武家屋敷群（おかちまちぶけやしきぐん）」が残り、幕末の城下の雰囲気は今も残している。通りには安間家史料館（あんまけしりょうかん）もあり、江戸時代の武士の生活をしのばせる調度や武具が展示されている。馬出しなどを見ながら桜並木の堀際を歩くと、水面に精美的な石垣が映える。

篠山城の東には、「河原町妻入商家群（かわらまちつまいりしょうかぐん）」が残されている。篠山築城の際に造られたという白壁の家々は、美しく調和しあっている。夕暮れにともる明かりも工夫されていて、独特の雰囲気をを見せてくれる。



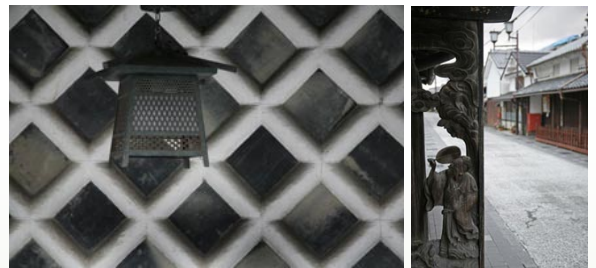
明りがともった河原町の商家群



妻入りの商家

妻入とは、切妻造りの建物の、妻の側に入出口があること。したがって間口が狭く、奥行き長い建物が多い。千本格子の窓やうだつ、袖壁（そでかべ）など古い商家の姿は、時代劇の中に入り込んだような錯覚を起こさせてくれる。町並みの中には、丹波古陶館（たんばこうとうかん）、能楽資料館があり、土産品店、骨董品店も多い。

この河原町の裏山が、焼物で有名な王子山（おうじやま）、東は亀岡（かめおか）を経て京都へ続く街道への出口となる京口である。



雲部車塚

篠山の城下から、亀岡へ抜ける街道を東へ7～8km行った所に、丹波最大の古墳、雲部車塚（くもべくるまづか）がある。全長140mをはかる前方後円墳で、満々と水をたたえた濠（ほり）を巡らせている。篠山のような山間の盆地に、これほどの大古墳が造られたのは、単に篠山盆地の生産力が高かっただけではなく、摂津から丹波を抜けて但馬まで行く道筋にあたっていたことも理由のひとつだろう。

現在は陵墓参考地として、調査はおろか立ち入ることも許されていないが、明治29（1896）年に後円部が発掘された際には、石室の中に納められた長持形石棺と甲冑（かっちゅう）などが見つかった。その際の様子は精密なスケッチに残され、出土品は一部が京都大学に保管されている。

残念なことに、あるいは幸いにも、その際には石棺は開けられていない。したがって何が中に納められているのか、どのような人物が葬られているのかはわからないままである。しかしそのおかげで、おそらく石棺の中身は腐朽劣化を免れ、今も眠っている。間違いなく未来へ引き継がれる遺産になることだろう。

5世紀に造られたこの古墳の謎解きは、とても気になるけれど未来に託すことにして、しばしその威容に打たれてみよう。



雲部車塚



説明板

用語解説

【丹波焼】たんばやき

篠山市今田町周辺で生産された陶器。丹波立杭焼、または立杭焼とも称し、瀬戸、常滑（とこなめ）、信楽（しがらき）、備前、越前とともに日本六古窯の一つに数えられ、その起源は平安時代末にさかのぼる。

丹波焼は、古墳時代から続く須恵器生産の上に、常滑焼など東海系陶器の影響を強く受けて成立したが、室町時代にはその影響から脱して独自性を確立した。近世に入ると施釉陶器（せゆうとうき）の生産が始まり、釉薬や化粧土に独特の技法が用いられたほか、鮮やかな色絵陶器も生産されるようになった。太平洋戦争後は、近代的な工場による陶磁器生産に圧迫されたが、その苦境を乗り越えて現在に至っている。

中世には壺（つぼ）、甕（かめ）、すり鉢などの日用器を主に生産し、この伝統は近世にも引き継がれて徳利など庶民生活に関わる焼物を生産したほか、高級品としての茶器の生産もおこなわれるようになった。1978年「丹波立杭焼」の名称で国の伝統的工芸品指定。

【和田寺】わでんじ

篠山市今田町にある天台宗の寺院。二老山（にろうさん）と号する。今田町のほぼ中央に位置しており、646年に法道仙人が和田寺山頂に建立した堂に始まるとされる。1184年に堂宇をすべて焼失、再建されたが山頂での寺院維持が困難となったため、ふもとに移転して本堂が再建された。1392年より寺号を現在の二老山和田寺とした。

【篠山城】ささやまじょう

篠山市北新町にある近世の平山城。1609年、徳川家康の実子松平康重が家康の命を受けて築城を開始し、15か国20大名を動員して、わずか6か月で完成したという。

全体の平面は方形で、輪郭式（りんかくしき）と梯郭式（ていかくしき）を融合した形式となっている。本丸、二の丸、三の丸は石垣と土塁で囲み、二の丸と三の丸の間には内堀がめぐり、三の丸の外側に外堀がめぐり、北、東、南には馬出（うまだし）が設けられている。天守閣は当初から建設されなかった。

初代城主は松平康重。以後8代にわたって松平氏が藩主をつとめ、その後は青山氏6代が藩主となって明治維新を迎えた。

明治維新後に大書院を除くすべての建物が取り壊され、大書院も1944年に焼失、2000年に復元された。国指定史跡。

【安間家史料館】あんまけしりょうかん

安間家資料館は、天保元（1830）年以降に建てられた武家屋敷で、代々安間家の住宅として使用されてきたものである。安間家は、禄高（ろくだか）12石3人扶持（天保8年ころ）の徒士（かち）であった。住宅は、入母屋造り、茅葺（かやぶ）きで間口6間半×3間半、奥行4間×2間半の曲屋であり、建築当初の形をよく残している。1994年に篠山市の指定文化財となり、内部には安間家に残された古文書や日常に用いられた食器類や家具を始め、その後寄贈を受けた篠山藩ゆかりの武具や資料を中心に展示している。

【うだつ】うだつ

民家で、妻の壁面を屋根より高く造った部分。また、建物の外側に張り出して設けた防火用の袖壁（そでかべ）。

【袖壁】そでかべ

建物から外部へ突出させる幅の狭い壁。目隠し・防火・防音などのために用いられる。

【王子山焼】おうじやまやき

文政元（1818）年から、明治2（1869）年まで、篠山市王子山で焼かれた陶磁器。篠山焼とも呼ばれる。当初は篠山藩主青山忠裕により始められた「お庭焼」であったが、後には地元の商人が運営を引き継いだ。

主に磁器を生産し、青磁、染付、白磁などが焼かれている。製品には花器、鉢、文房具、水差し、徳利、皿、置物などがある。

文政11（1928）年に、欽古堂亀祐（きんこどうかめすけ）を招いて指導を受け、亀祐自身の作品も残された。

【雲部車塚古墳】くもべくるまづかこふん

篠山市東本庄にある古墳時代中期の前方後円墳。全長142mをはかり、盾形の周濠（しゅうごう）をめぐらせる。明治29（1896）年に、当時の雲部村の人々によって後円部の石室が発掘され、その内容が精密に記録された。それによれば、石室は割石積みの堅穴式（たてあなしき）石室で、長さ5.2m、幅1.5m、高さ1.5mとされている。石室内には長持形石棺が置かれており、周囲の壁に設けられたL字形金具に掛けられたような状況で、槍や刀剣類が副葬されていたという。

この際には石棺の蓋（ふた）は開けられなかったが、石室内の副葬品として、刀34本、剣8本、鉾（ほこ）2本、鎧（よろい）鉢4点、鎧胴5点、鎌（やじり）107点が記録された。その一部は、現在京都大学に保管されている。

雲部車塚は、畿内から但馬、丹後へ抜ける交通の要衝に位置する大規模な前方後円墳であり、畿内政権と深い関係をもつ王の墓と考えられる。その後陵墓参考地に指定され、現在は宮内庁の管理下に置かれているため、新たな調査はおこなえない状況であるが、1896年の記録によって大型前方後円墳の埋葬状況を知ることができる、極めて重要な古墳である。

【長持形石棺】ながもちがたせっかん

古墳時代中期に盛行した石棺。底石の上に側石と小口石をはめ込み、かまぼこ形の蓋（ふた）をのせる。蓋石の各辺や側石の両端に1～2個の突起（縄かけ突起）を作り出す。加古川下流の竜山（たつやま）に産する石材で作られた例が多く、近畿地方中央部の大型古墳の埋葬施設に使用されているため、「王者の石棺」とされる。

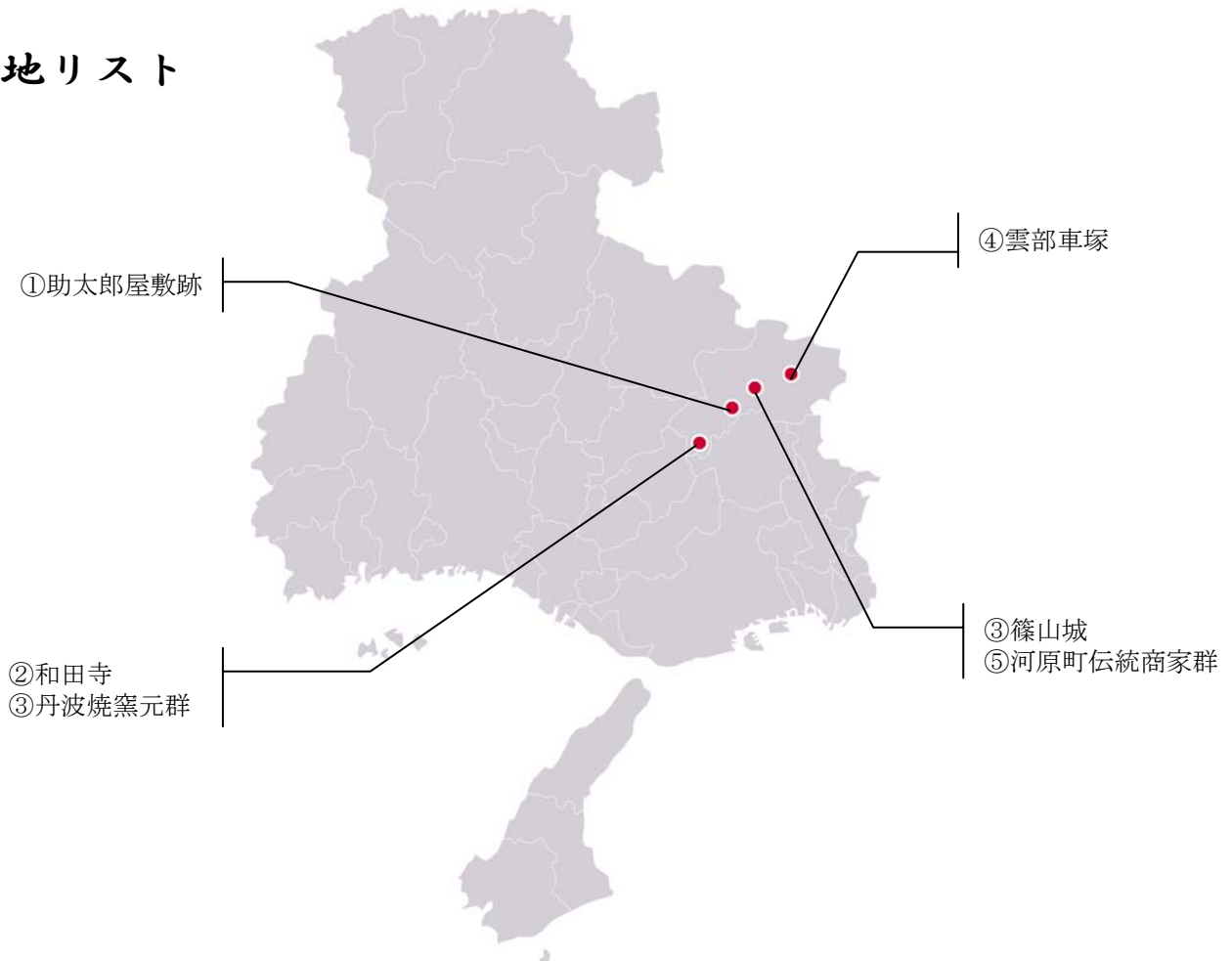
【陵墓・陵墓参考地】りょうぼ・りょうぼさんこうち

一般に、天皇・皇族の墓を総称して陵墓といい、皇族の墓所である可能性がある場所を陵墓参考地と呼ぶ。陵墓および陵墓参考地は宮内庁によって管理されており、研究者などが自由に立ち入って調査することができない。一部の古墳では、比定される天皇と古墳の年代に明らかな相違が見られ、当該天皇陵であることに疑義が出されている。考古学的には、古墳の名称はその古墳が所在する地名（字名など）を用いることが原則であり、〇〇天皇陵という呼称は用いない（例：仁徳天皇陵＝大仙（だいせん）古墳、応神天皇陵＝誉田御廟山（こんだごびょうやま）古墳など）が、「仁徳天皇陵古墳」といった用い方をする例もある。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	丹波のむかしばなし第3集	2000	丹波のむかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会
歴史・文化等	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本の古代遺跡2 兵庫北部	1984	櫃本誠一・松下勝	保育社
	やきもののふるさと丹波	2005	兵庫陶芸美術館編	兵庫陶芸美術館

所在地リスト



①助太郎屋敷跡	篠山市真南条下928 付近
②和田寺	篠山市今田町下小野原69
③丹波焼窯元群	篠山市今田町上立杭周辺
④篠山城	篠山市北新町1-1ほか
⑤河原町伝統商家群	篠山市河原町周辺
⑥雲部車塚	篠山市東本荘 東

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日

参考サイト

三省堂大辞林 (WEB版) / 大辞林第二版 松村明 三省堂編修所
<http://dic.yahoo.co.jp/guide/jj02/>

ひょうごこどものひろば / 兵庫県庁公式サイト内 (県政情報・統計)
http://web.pref.hyogo.jp/ac02/kids_top.html

丹波市の文化財図鑑 / 丹波市教育委員会
<http://edu.city.tamba.hyogo.jp/bunka/bunnkazai/roku/hbunkazai.html>

姫路市安富町地域情報 / 姫路市役所公式サイト内
<http://www.city.himeji.hyogo.jp/yasutomi/>

改訂兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003 / 兵庫県庁公式サイト内 (兵庫県健康生活部環境局自然環境保全課)
<http://www.kankyo.pref.hyogo.jp/JPN/apr/hyogoshizen/reddata/index.htm>

宮内庁ホームページ
<http://www.kunaicho.go.jp/>

神戸市史跡地図 東灘区 / 神戸市文書館ホームページ
<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/06/014/map/higashinada.html>

相生市の文化財 / 相生市役所公式サイト内
http://www.city.aioi.hyogo.jp/sight_seeing/bunka/bunkazai/bunkazai.html

尼崎の文化財 / 尼崎市役所公式サイト内
<http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/bunkazai/>

みどころ 探索の道標 / 篠山市役所公式サイト内
<http://www.city.sasayama.hyogo.jp/midoko.html>

二老山和田寺 / 和田寺ホームページ
<http://www.wadenji.com/>

ウォーク万葉 / 日本ユニシス制作サイト
<http://www.unisys.co.jp/KANSAI/manyo/>

万葉集検索システム / 山口大学教育学部表現情報処理コース卒業生等によるサイト
http://infws00.inf.edu.yamaguchi-u.ac.jp/MANYOU/manyou_kensaku.html

須磨寺 / 須磨寺ホームページ
<http://www.sumadera.or.jp/>

三木市の自然「地学編」 / 三木市教育委員会・三木市中学校理科研修部会
<http://educa.miki.ed.jp/nature/>

明石観光協会ホームページ
<http://www.yokoso-akashi.jp/>

参考書籍 (全編)

文献名	刊行年	著者名	発行者
新版日本史辞典	1996	朝尾直弘・宇野俊一・田中琢 編	角川書店
兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
国史大辞典 (全15巻)	1991	国史大辞典編集委員会	吉川弘文館
広辞苑第五版	1998	新村出編	岩波書店
日本考古学用語辞典	1992	斉藤忠編	学生社